
パーソナル・リアリティ / 自分だけの現実

こやマンボウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーソナル・リアリティ/自分だけの現実

【Nコード】

N6064J

【作者名】

こやマンボウ

【あらすじ】

【現在のあらすじ】

「ラピュタ」（↑伝説の空中要塞）と「巨神兵」（↑超巨大生物兵器）を用い、九州を占領した反乱軍に対し、軍は「ダモクレス」（↑人工の空中要塞）による「フレイヤ」（↑核爆弾的なモノ）投下も辞さない覚悟を決める。無尽蔵に生み出される「ロボット」（↑「ラピュタ」のアレ）の防衛ラインに、「MS」（↑宇宙から）、「KMF」（↑戦力というよりも民間人護衛用）、「IS」（↑特

攻部隊。だって、「絶対防御」あるし」といった機動兵器達が突撃を始める！（↑でかいのは落とされる）

【「世界観」一覧 現70種】

Angel Beats！/BLEACH/「C」 THE M
ONEY OF SOUL AND POSSIBILITY C
ONTROL/Decoration Disorder Dis
connection/Death Note/Fate/ONE
PEACE/X-MEN/アキカン！/アクセルワールド/アス
ラクライン/いちばんうしろの大魔王！/犬夜叉/IS インフィ
ニット・ストラトス/宇宙戦艦ヤマト/うみねこのなく頃に/ウル
トラマンティガ/おおかみかくし/おまもりひまり/怪盗クイーン
/学園アリス/風の谷のナウシカ/刀語/神様ドオルズ/仮面ライ
ダーカブト/仮面ライダー龍騎/空の境界/喰霊/傷物語/起動戦
士ガンダム00/黒神/ゲゲゲの鬼太郎/結界師/これはゾンビで
すか？/金色のガッシュベル！/コードギアス/戯言シリーズ/灼
眼のシャナ/新世紀エヴァンゲリオン/シーキューブ/スターウォ
ーズ/スパイダーマン/絶対可憐チルドレン/ゼロの使い魔！/全
死大戦/ターミネーター/ダンス・イン・ザ・ヴァンパイア/ツバ
サ/テニスの王子様/デュラララ！/天空の城・ラピュタ/電腦コ
イル/とある科学の超電磁砲/とある魔術の禁書目録/ドラえもん
/ドラゴンクライシス！/ドラゴンボール/鋼の錬金術師/人間シ
リーズ/ハヤテのごとく！/ハリー・ポッター/バカとテストと召
還獣/化物語/ひぐらしのなく頃に/フリージング/ポケットモン
スター/魔法先生ネギま！/無限航路/夢喰いメリー/ルパン三世

抜粋（前書き）

本編（予定）より、一部抜粋。

抜粋

その象徴たる右腕を構える彼に、俺は投げ掛ける。

「そんなものは所詮幻想だ。現実を否定して幻想に身を委ねる気か？」

「幻想とか現実とか、そんな区別は関係ねんだよ」

いつの間にかツンツン頭になってしまった彼は、俺に自分の正義を語る。

「誰が何と言おうと、俺は俺の幻想を守り抜く」

「上条当麻」(*とある魔術の禁書目録)に侵された彼は、その右腕を以って俺の前に立ちはだかる。

「だから、てめえのふざけた幻想は、俺がぶち壊す！」

それは守るための一撃。

確かに、彼は大切な物を守るためにそこに立っている。

だけど。

そんなものは、俺は認めない。

そんな「台詞」を、俺は認めない。

「それは、お前の言葉じゃないだろ！」

「上条当麻」という名の夢を。

「上条当麻」という名の憧れを。

「上条当麻」という名の幻想を。

俺は、ぶち壊す。

「お前は、『上条当麻』ではない！」

抜粋（後書き）

あんまりにも本編に入らないので、ここに一部を抜粋しました。

プロローグ（前書き）

注意

この小説は最強モノではありません。ですが、最弱からスタートもしません。

この小説には、原作の世界観、登場人物等は登場しません。ですが、一部に限り最終部分で登場します。

この小説は、原作に独自の解釈、変更を加えています。

この小説は、物語の視点の問題で、矛盾が数多く発生していますが、それらは全て使用ですので、ご了承下さい。

この小説は、「感想」での作品への要望については、積極的に取り入れる方針です。

ブローグ

その部屋は創作物で溢れていた。

ゲーム、漫画、小説、e t c , e t c ……。

そして、その中央のベッドの中に居座るこの部屋の主は、唯ひたすらにP Cを操作する。

P Cに蓄積されていくのは、データであり、世界でもある。

最後の仕上げを終えた主は、ふう、とため息をつく。

後は計画を実行に移すだけ。

そうすれば、この世界から抜け出すことができる。

主はそのために今日までの全ての時間を費やしてきた。

その間、同士はできた。

協力者もできた。

だが、仲間といえる存在など皆無。

孤独の戦いだけがそこにあった。

だが、それも今日で終わる。

世界を抜け出し、己の中に埋没する。

そのための生きてきた、と言っても過言ではない。

だから、躊躇する間もなく。

開始のベルを鳴らした。

「ゲーム、スタート」

『声音を認証。 パーソナル・リアリティ／自分だけの現実 の展開を開始します。 展開完全終了までの予測時間、後、10年3ヶ月25日18時間45分52秒……』

プロローグ（後書き）

何のことやらさっぱりだったと思います。

この「プロローグ」は「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」全体としてのプロローグで、次話の「プロローブ」は「第一部」のプロローグです。

プロローグ（前書き）

《なぜなぜに？》

このコーナーでは、本編では明かされない疑問にお答えしていきます。

↳「感想」で聞いてくれたら、ここで答えるかもよ？

ブローグ

派手な爆発音が森中に響く。

相手はかなりの攻撃力の持ち主とみた。

俺は、木の枝の上を跳ねるようにして、音の発信源を目指す。さっきの音に驚いて逃げ出した野生動物達を避けながら、滑るように足を動かす。

再び、爆音。

今度はかなり近い。その証拠に、土煙がたっている。

目標はすぐ近くとふんで、傍にあった木に登る。

一回のジャンプで10メートルほど飛躍し、木の上部に立つ。

土煙の中、今回の対戦相手を見つけた。

同じく、向こうもこちらの存在に気づいたようだ。

相手が構える。胸の前で両手首を合わせて手を開き、腰付近に両手を持っていく、独特の構え。

「か・め・は・め……」

相手が気を集中させ終わる前に、自分の足に意識と魔力を集中させる。

「波！」

放たれた「かめはめ波」(*ドラゴンボール)は、真っ直ぐにこちらに向かってきた。

と同時に、「瞬動術」(*魔法先生ネギま！)。

爆音。

「よっしゃ！」

ガッツポーズを取る相手。

が、自分の背中に手が置かれていることに気づいた。

「いつの間に……」

驚く相手に、俺は冷静に告げる。

「確かに、『かめはめ波』は極めれば星を破壊するほどの威力のビームだが、基本は直線。連続使用も不可能という弱点がある。

『エーミッター解放』(*魔法先生ネギま！)」

俺が呟くと同時に、背中に押し付けた右手から、無数の光の矢が飛び出す。

「つぐ……」

相手は力なく地面に倒れた。

「遅延呪文」^{ディレイ・スベル}（＊魔法先生ネギま！）により発動を遅らせていた
零距离射程の「魔法の射手」^{サギタ マギカ}（＊魔法先生ネギま！）により、相手
は完全にダウンしたようだった。

西暦、22××年。ゲーム機は進化し、ついにバーチャル・リア
リティの世界で五感を完全に再現して、遊べるようになった。

専用の「カプセル」に入って遊ぶわけだが、そのカプセルには、
使用者に人口栄養剤を投与できる機能がついている。これは、何時
間も続けてゲームをしたい、という利用者達の要望に合わせて作ら
れた物だ。これにより、最高で6ヶ月はゲームをし続けても死なな
くなった。だが、筋肉の衰えに対処する機能はないので、実際にそ
んなことをすれば結局のところ、死ぬか廃人になってしまうのがオ
チだ。それに、「カプセル」の自動機能で、長期間のバーチャル・
プレイを行えば、自動的に現実に戻される仕組みになっている。
他にも「カプセル」には様々な安全対策が行われており、先進国で
は一家に一台的なので普及されていた。

そんな中、「カプセル」を用いたゲームで今最も人気なのは、バ
ーチャル世界で戦う「パーソナル・リアリティ/自分だけの現実」
というロール・プレイング・ゲームだ。このゲームは、まず最初に
「世界観」を選ぶことから始まる。予め向こうが用意した世界設定
から好きなものを選んで、それを「自分だけの現実」とするのだ。
一度選んだ「世界観」は変更不可能で、ゲーム中、各プレイヤーの

能力はその「世界観」によって構成される。つまり、「ドラゴンボール」の「世界観」を選べば「かめはめ波」が撃て、「仮面ライダー」の「世界観」を選べば「変身」できる、というわけだ。もちろん、最初から能力全開というわけではなく、自分のレベルに合わせて使える技や能力値が変化する。

俺が選んだ「世界観」は「魔法先生ネギま!」。講談社コミックスで赤松健が手掛けた漫画だ。

俺の高校のクラスメイト達も皆このゲームにはまっており、放課後はすぐに家に帰ってロゲインしている。

ちなみに、最高レベルが100なのに対し、俺のレベルは43。これはかなりの高成績に入る。通常レベルは25とされており、40を超えるとやり込みのレベルが半端なくなる。でも、それでもまだ40で、ラスボスの設定が100ときたもんだから、このゲームのゲームバランス酷いものである。そのため、ストーリーを進む者より、各自で対戦を楽しむ者の方が多いのだ。俺も日々、対戦で遊んでいる。

これは、そんな俺らの物語。

プロローグ（後書き）

長い作品になると思いますが、末永くお付き合い下さい。

世界観一覧（あいうえお順）（前書き）

注意

ここはかなり重度のネタバレを含みます。

最新話まで読んでから読むことをお勧めします。

この見方は以下の通り ←

「世界観名」

使用者

その「世界観」の使用者の名前

保有能力

その「世界観」に関わる武器・技等の名前

初期設定

■ ■ ■ ……。

補正効果

幽霊（幽霊限定）が視える。

作品紹介

高校入学を機に1人暮らしを始めることにした夏目智春。彼は3年前から自称：守護霊で幼馴染の少女・水無神操緒に取り憑かれていた。

智春の兄・夏目直貴が暮らしていたオンボロ屋敷・鳴桜邸に引越した日、鳴桜邸に2人の美少女がやって来た。直貴から託されたという銀色のトランクを届けにきた黒のスーツの美女・黒崎朱湊、そしてその晩、トランクを奪いに鳴桜邸へ忍び込んだ巫女装束の美少女・嵩月奏。この銀色のトランク「イクストラクタ」を手にした事を契機に、智春は世界の隠された真実と向かい合う。第一生徒会会長・佐伯玲士郎は言った。神は人間を見放し、この世界は1度滅び、「悪魔」の力を借りる事でやり直した「二巡目の世界」なのだという事を。

いずれ劣らぬ強烈なクセの持ち主である美少女達に囲まれた智春の受難の日々と波瀾に満ちたハイスクールパンク。

「犬夜叉」

使用者

不明（賞金稼ぎと思われる）

保有能力

「風の傷」

「鉄碎牙」

初期設定

使用者は最初、「鉄碎牙」を所有してはいないため、条件を満たして初めて手に入れることとなる。使用者が完全に妖になった場合、
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ……。

補正効果

月に一度「世界観」の使用が不可能となる。

霊の類が視える。

肉体が丈夫（爪で戦えるほど）。

五感がいい（時には犬のように、時には妖のように）。

作品紹介

戦国時代の日本、あらゆる願いを叶えるという宝玉・四魂の玉を巡り人間と妖怪の争いが続いていた。四魂の玉を守る巫女・桔梗は、半妖・犬夜叉に恋心を抱いていた。しかし、罨にはまり、お互いに裏切ってしまう。玉を奪った犬夜叉を最後の力で封印し、自分もまた力尽きる。遺言により、四魂の玉は桔梗の亡骸と共に燃やされ、四魂の玉はこの世から消え去った。

そして500年後の現代、神社の娘・日暮かごめは15歳の誕生日に神社の祠にある古びた井戸から戦国時代へとタイムスリップしてしまう。そこは犬夜叉と桔梗の争いから50年が経過した時代で

あった。桔梗の生まれ変わりであるかごめの体内から再び四魂の玉が現れ、犬夜叉は蘇る。そして玉を巡って妖怪たちが動き出す。戦いの中で四魂の玉はとんでもないハプニングにより無数のかけらに飛び散ってしまった。四魂のかけらを集めるために旅することになった犬夜叉とかごめ。最初は嫌々だったが、2人は次第に惹かれ合っていく。その旅の中で、50年前、犬夜叉と桔梗を罠にかけた張本人・奈落の存在が明らかに。二人は奈落を追う中で、旅の中で出会った子狐妖怪七宝、奈落に呪いをかけられた法師弥勒、妖怪退治屋珊瑚の仲間と共に、宿敵奈落を倒すため、玉の因縁を断ち切るために戦っていく。

【か行】

「仮面ライダーカブト」

使用者 羽河 卓司
はねかわ たくじ

保有能力

「cast off」
「clock up」
「マスクドアーマー」
「マスクドフォーム」
「ライダーキック」
「ライダーフォーム」

寒かん
藤子とうこ

保有能カ

「**喰霊解放**」

「白叡」

初期設定

使用者は最初から「殺生石」を所持し、「白叢」を呼べる。又、条件を満たせば「白叢」を譲渡できる。その際、「殺生石」も一緒に譲渡しなくてはならない。もし「殺生石」の力に飲み

補正効果

霊の類が視える。

作品介绍

式村剣輔は霊が視えること以外は普通の男子高校生だったが、ある日巨大な霊獣を使役して悪霊を屠る少女・土宮神楽と出会ったことから機密機関「対策室」に入り、妖怪や悪霊と奮闘することになる。

「黒神」

使用者

神崎拳 かんざきけん

保有能カ

「サウザンド」

「超新星儀」

「テラ」

「方陣障壁」

初期設定

使用者は誰かと契約をしない限り、「イクシード」が使えないため、基本の攻撃は「サウザンド」によるものとなってしまふ。使用者が「ルート」か「サブ」かは不明であり、「テラ」を使い切

補正効果

ボクシング（戦闘で使用可能レベル）ができる。

作品介绍

母親を事故で亡くした主人公の伊吹慶太は、ある夜、上位元神霊であるク口と出会う。しかし、ク口を抹殺しようとする謎の男に襲われ、左腕を吹き飛ばされてしまう。ク口は慶太を死なせないために、自分の左腕と交換し、契約を結ぶ。そして、慶太とク口を取り巻く状況は急変していく……。

の地に建つ私立烏森学園に集まってくる妖を退治している。良守はかつて自らの失策により、時音が妖の攻撃から自分をかばい大怪我を負ってしまったことを後悔し、二度と時音や自分の周りの人々が傷つかないようにするため、強くなることを心に誓うのであった。

やがて良守と時音は、妖犬の斑尾の旧友・鋼夜との戦い、夜行に所属する少年・志々尾ししお 限との出会いと妖の組織・黒芒楼との対決、良守の兄・墨村正守との葛藤、人の心を喰らう魔物・邪煉じゃれんに対して封魔師・金剛毅こんごう たけしと共闘、戦闘用の妖・黒兜くろかぶととの死闘、など様々な出来事を通して成長していく。そんな中、烏森に現れた巫女・サキによつてある予言がもたらされる。「恐れよ…血の臭い纏いし災いの神…この地に舞い降りん」。

今、裏会を中心に何かがおきようとしていた……。

【さ行】

「灼眼のシャナ」

使用者

華焰かえん 香奈かな

保有能力

「炎弾」

「自在法」

「存在の力」

「封絶」

使用者は最初から「贄殿遮那」と黒衣「夜笠」を所持。「紅世の王」との契約を複数行うには高レベルになる必要がある。

不老（故に■■■■■■■■■■……）。

メロンパンが好物。

御崎市で平凡な日常を過ごしていた高校生の坂井悠二は“燐子”（りんね）と呼ばれる怪物の出現と共に非日常の世界に巻き込まれ、名も無き少女と出逢った。その名も無き少女は、人知れず人を喰らう異世界人“紅世の徒”を探し討滅するフレイムヘイズの1人。彼女は、悠二が自覚のないまま死んでいることを告げ、訳あつて“紅世の徒”から狙われるようになった悠二を護る様になる。そんな彼女に悠二は、彼女の太刀『にえとののしやな贗殿遮那』から「シャナ」という名前をつける。2人は反発しながらも、少しずつ惹かれ合っていく。

近藤 美紀

保有能力

- 「王権を果たす完全人形」
- 「教会区《奈落》」
- 「クーンズベリの死の屋敷《アベニュー14番地》」
- 「剣殺交叉」
- 「五番機構・刺式佇立態《ヴラド・ツェペシュの杭》」
- 「『雑で豪放な食材の断ち方』、乱切りにしましょう」
- 「十九番機構・抉式螺旋態《人体穿孔機》」
- 「十四番機構・搔式獸掌態《猫の手》」
- 「術法・藍蠱」
- 「箱型の恐禍」
- 「八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》」
- 「『編執狂的な碎片の刻み方』、微塵切りにしましょう」
- 「『ミンチ用のお肉の処理法』、何度も叩き潰しましょう」

初期設定

使用者はデフォルトで「箱型の恐禍」なので、一辺一メートルほどの黒い立方体の拷問用具に変形が可能であり、重い（近藤は自分の体重が重いことを気にしている）。又、持ち主を求める性質から、契約ができる。

補正効果

自然治癒。

作品紹介

ある日、高校生の夜知春亮のもとに、旅先の父親から謎の黒い立方体が届く。それはヒトになるまで《負の思念》を取り込んだ呪われた道具だった。黒い立方体ことフィアは夜知家に居候しながら、おなじく夜知家の世話になっている村正このはや春亮に教わり、呪いを解くために善行を重ねることとなる。そして彼らは、呪われた道具が関係する事件に次々と巻き込まれていく。

「ゼロの使い魔」

使用者

さいとう かずき
斉藤一樹

所有能力

「神の左手・ガンダールヴ」

初期設定

「神の左手・ガンダールヴ」を最初から持っているが、「魔法」は「解禁」でないと使えない。そのため、「使い魔召還」は「解禁」状態でのみ可能である。

補正効果

主従関係を結ぶと、結んだ相手に恋をする。

作品紹介

平凡な高校生・平賀才人はある日突然、異世界ハルケギニアに召喚されてしまう。彼をこの世界に召喚したのは、トリスティン魔法学院の生徒でありながら魔法の才能がまるで無い「ゼロのルイズ」こと、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールだった。

失敗とはいえ、召喚の儀式によって呼び出された才人は、「使い魔」としてルイズと契約のキスを交わす。すると、才人の左手には使い魔の証である契約のルーンが浮かび上がった。こうして、ルイズと「犬」扱いされる才人との奇妙な同居生活と冒険が始まった。

【た行】

「電腦コイル」

使用者

不明（「トーキュー特区」上層部関係者と思われる）

保有能力

「キュウちゃん」

「サッチー」

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

202X年「2」。「電腦メガネ」と呼ばれる眼鏡型のウェアラブルコンピュータが全世界に普及して11年。「電腦」と呼ばれる技術を使ったペットや道具が存在し、インターネットも「電腦メガネ」を使って見る時代。

ヤサコこと小此木優子は、金沢市から大黒市に引っ越してきた。引っ越し早々に、ヤサコは謎の電腦生物イリーガルに遭遇する。電腦ペットのデンスケは、イリーガルからヤサコを守ろうとして古い空間に迷い込んでしまう。それを救ったのが「電腦探偵」を名乗るフミエだった。これをきっかけに、ヤサコは電腦探偵局に入会する。その夜、ヤサコは自分の幼い頃の絵日記に「4423」の文字と鍵穴のような絵を見つける。さらに、夢の中の鳥居が連なる階段で「僕は4423、君の兄だ」という声を聞く。翌日、ヤサコは転入した大黒市第三小学校でフミエと同じクラスになる。ところがその日の放課後、彼女らは市が導入している電腦空間のウイルス駆除ソフト「サッチー」に追われる。そしてそのどさくさのなか、デンスケが謎の少女に誘拐されかける。コイル電腦探偵局の主であるメガバあは、その少女の調査をフミエらに指示する。どのようにして少女を捜し出するか、思案にくれるふたりのまえに、もう1人の転校生として現れる少女。彼女こそが件の謎の少女、イサコこと天沢勇子だった。

イサコに対し、ヤサコは友達になろうと声をかけるが、イサコはこれを拒絶する。クラスメイトの悪童ダイチは、自らが立ち上げた組織、大黒黒客倶楽部にイサコを勧誘するも無視され、腹いせに罠

を仕掛けるが、振り返ちにあう。イサコは黒客を完全に制圧し、自分の目的のために利用し始める。一方でヤサコは、フミエから生物部部长ハラケンを紹介される。ハラケンは、幼馴染のカンナを失った原因であるかもしれないイリーガルについて研究していた。ヤサコとフミエは、その研究を手伝うことにする。

やがて、イサコの捜し求めていたものが何であつたのか明らかになったかのようにも見えた。しかし実は、イサコも……。

「とある科学の超電磁砲」

使用者

いとうき ひまり
寿 緋麻里

保有能力

「一方通行」

「空間移動能力」

「幻想殺し」

「超電磁砲」

「発電能力」

「表層融解」

初期設定

使用者は「発電能力者」としてデフォルトされる。同時に複数の「超能力」を使うことは、「多重能力者」、もしくは「多才能力者」にならないと不可能である。

補正効果

。常に体から微弱な電磁波が放出されている（動物に好かれない）

作品紹介

総人口230万人の8割が学生の学園都市、そこでは学生全員を対象にした超能力開発実験が行われており、全ての学生はレベル0（無能力者）からレベル5（超能力者）の6段階に分けられ、様々な能力を開花させている。学園都市でも7人しか居ないレベル5の1人であり、電撃を操るその能力から「超電磁砲^{レールガン}」の通称を持つ御坂美琴は、学園都市で起こる様々な事件を解決していく。

「とある魔術の禁書目録」

使用者

路^{ふき} 当麻^{とつま}

保有能力

「駆動鎧」

「吸血殺し」

「幻想殺し」

初期設定

「幻想殺し」が常に発動しているため、呪いなどの概念的攻撃

を受けない。

補正効果

不幸（「幻想殺し」のせい。だが、落は何らかの方法でそれを封じている様子）。

攻撃に「幻想殺し」を当てることだけに特化した反射神経を持つ。

作品紹介

超能力が科学によって解明された世界。能力開発を時間割り（カリキュラム）に組み込む巨大な学園都市。その街に住む高校生・上条当麻のもとに、純白のシスターが現れた。彼女は禁書目録と名乗^{インデックス}り、魔術師に追われていると語る。こうして上条当麻は、科学と魔術の交差する世界へと足を踏み入れてゆく。

「ドラえもん」

使用者

不明

保有能力

「どこでもドア」

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

ドジばかりの少年「野比のび太」。お正月をのんびりと過ごしていると、机の引出しから、のび太の子孫「セワシ」と未来のロボット「ドラえもん」が現れる。

未来の野比家では、のび太が残した借金がセワシの代まで及んで困っているという。悲惨な未来を変えるために、セワシが世話係として連れてきたドラえもんが暮らす事になるのび太。

ドラえもんはポケットからひみつ道具を取り出しのび太を助けてくれる。のび太は道具に頼りがちになりながらも、時には反省し学んでいき、少しずつ未来はより良い方向へと進んでいく。

「ドラゴンボール」

使用者

不明（山下は一度会ったことを忘れている）

保有能力

「かめはめ波」

「ドラゴンボール」

初期設定

使用者はデフォルトで「サイヤ人」であるため、負ければ負けるほど強くなる。

補正効果

満月の光を浴びると大猿になる（しつぽが生えている場合のみ）。

作品紹介

地球の人里離れた山奥に住む尻尾の生えた少年・孫悟空。ある日、彼は西の都からやって来た少女ブルマと出会い、7つ集めると神龍^{シェンロン}が現れどんな願いでも一つだけ叶えてくれるというドラゴンボールの存在、そして育ての親孫悟飯の形見として大切に持っていた球がその1つ「四星球」（スーシンチュウ）であることを知り、ブルマと共に残りのドラゴンボールを探す旅に出る。

【な行】

【は行】

「ハリー・ポッター」

使用者

不明（「バッファローズ」の一員）

保有能力

「破れぬ誓い」

初期設定

不明

補正効果

一番最初に殺されそうになった相手を返り討ちにし、互いに繋がりを持つ。

作品紹介

孤児でいじめられっ子のハリー・ポッター少年は、11歳の誕生日に自分が魔法使いであることを知る。ホグワーツ魔法魔術学校へ入学し、いままで知らなかった魔法界に触れ、亡き両親の知人をはじめとした多くの人々との出会いを通じて成長する。そして、両親を殺害したヴォルデモート卿と自分との不思議な因縁を知り、対決していくこととなる。

「ポケットモンスター」

使用者

松山 健一 まつやま けんいち

保有能力

「テレポート」

「なんでもなおし」

「ネコ騙し」

「未来予知」

「モンスターボール」

初期設定

「ポケモン」自体は存在せず、その能力は全て使用者が使用する。

補正効果

なし。

作品紹介

不思議な生き物、ポケットモンスター（ポケモン）と人間が互いに助け合って生きている世界。この世界ではポケモン同士を戦わせる「ポケモンバトル」が盛んに行われており、多くの少年少女たちが最強のトレーナーを目指して旅をしていた。

マサラタウンに住む少年・サトシもポケモンマスターに憧れる1人。彼は10歳の誕生日に、町に住むポケモン研究家のオーキド博士からポケモンを貰って旅立つことになっていた。しかしサトシはその旅立ちの朝に大寝坊、慌てて研究所に向かったもののヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメの3匹は全てライバル達に持って行かれた後

だった。そんなサトシに博士が差し出したのは、ねずみポケモン・ピカチュウ。かわいい容姿のピカチュウにサトシは一目ぼれ。こうしてサトシの旅は始まったが、相棒のピカチュウはサトシに対して心を開こうとしなかった。

対立しながらの旅を始める1人と1匹であったが、ふとしたことから起きたオニスズメの大群との戦いを通してうち解け、唯一無二のパートナーとなる。そして多くの人やポケモンとの出会いと別れを繰り返しながら、サトシや仲間達の冒険の日々は続いていく。

【ま行】

「魔法先生ネギま！」

使用者

山下 やました 宏治 こうじ

保有能力

「紅き焰」

「アーティファクト」

「居合い拳」

「雷の暴風」

「いどのえにつき」

「桜華崩拳」

「オソウジダイスキ」

「開放」
「弓歩沖拳」
「風よ」
「加速」
「感掛法」
「気合防御」
「鬼神の童謡」
「豪殺居合い拳」
「コチヒノオウギ」
「最強防護」
「七首・十六串呂」
「獣化」
「術式封印」
「瞬動術」
「白き雷」
「精霊囃」
「世界図絵」
「千里眼」
「対物・魔法障壁」
「戦いの歌」
「遅延呪文」
「力の王笏」
「杖よ」
「天狗之隠蓑」
「念話」
「パクティオーカード」
「ハマノツルギ」
「光よ」
「風花施風風障壁」
「風精召喚」

「風陣結界」
「魔法の射手」
「魔法無効化能力」
「まほネット」
「無極而太極斬」
「無音めくり術」
「燃える天空」
「闇の魔法」
「四つ身分身 朧十字」
「読み上げ耳」

初期設定

使用者はデフォルトで「魔法発動体」となる長い杖（2メートル以上）を所持している。「パクティオー」による仮契約は誰とでも可能であるが、本契約については不明である。「始動キー」は正しく設定するまでは使用不可能である。そのため、設定するまでは「始動キー」なしで魔法を行使する。「始動キー」を設定するということは、「世界観」を自 ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ……

補正効果

霊の類が視える。

くしゃみで「武装解除」が暴発し、周囲の女性を脱がす（山下は今だ未経験）。

作品紹介

舞台は普通と変わらない現実の世界。しかし、その世界には迷信と信じられていた魔法が密かに存在していた。

イギリスのウェールズにある、魔法使い達の村。その村のメルデアナ魔法学校を首席で卒業した、10歳の天才少年がいた。少年の名はネギ・スプリングフィールド（通称ネギ）。彼の目標は「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になって、行方不明になっている父親のナギ・スプリングフィールドを探す事である。

魔法学校を卒業した後、ネギは「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になる為の修行として与えられた課題が日本の学校で教師をやる事だと知る。2003年2月、1人日本に向かったネギが辿り着いた先は巨大な学園都市「麻帆良学園」。その内の麻帆良学園本校女子中等学校でネギは自分の正体を隠したまま教育実習生として、2年A組の代理教師を務める事となる。2年A組で31人の女子中学生を相手にするネギだが、ほとんどの生徒には可愛がられ、時に振り回されたりするし、教師としても魔法使いとしてもまだ未熟なネギも学校で騒動を起こしてしまったりで、修行は思う様に上手く進まない。

そんな中、着任初日に2年A組の生徒である神楽坂明日菜に自分の正体がバレたのをきっかけに、ネギの正体を知る生徒が増えてきてしまう。そして、修行に進めていく中で次々とネギの前に敵や困難が立ち塞がっていく。ネギが1人で危険に立ち向かおうとする中、正体を知る生徒達はネギへの協力者となろうとするが・・・。

【や行】

【ら行】

「ルパン三世」

使用者

不明（賞金稼ぎの一員と思われる）。

保有能力

不明

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

怪盗ルパンの孫で大泥棒のルパン三世が仲間次元大介、峰不二子、石川五エ門や、ルパン三世逮捕に執念を燃やす銭形警部と活躍を繰り広げる。

【わ行】

「ワンピース」

使用者

不明

保有能力

「海楼石」

「監獄弾」

初期設定

不明

補正効果

不明

作品紹介

かつてこの世の全てを手に入れた海賊王ゴールド・ロジャーが遺した「ひとつなぎの大秘宝」^{ワンピース}をめぐり、幾多の海賊たちが覇権を賭けて争う大海賊時代。

そんな時代に生まれ、幼い頃の命の恩人である海賊赤髪のシャンクスに憧れる少年モンキー・D・ルフィは、「ゴムゴムの実」という悪魔の実を食べてゴム人間となり、その副作用で泳げない体になりながらも、海賊王を目指して仲間と共に冒険と戦いを繰り返していく。

世界観一覧（あいうえお順）（後書き）

世界観一覧です。

用語集 あゝさ行（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 背中に手を置かれたら、全身を「気」で覆うなりしたらよいのではないのでしょうか？

A 「パーソナル・リアリティ」での特殊攻撃、つまりコマンドの使用に必要な「気」、つまりMPゲージがゼロになったため、何も出来なかったのでしょうか。

↳それまでの戦いでEXを使い切っちゃったのかな？

用語集 あゝさ行

【あ行】

「紅き焰」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：1000 MP：30 習得レベル：40（解禁）

熾烈な炎を発生させ、敵を焼き払い破壊する魔法。「白き雷」の炎バージョン。基本は手の平から放つ。

「アドベンチャーワールド」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の冒険世界。

「アーティファクト」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：200（カード状態）

「パクティオカード」によって呼び出される魔法具のこと。

「居合い拳」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：100 MP：5 習得レベル：40（解禁）

刀の居合い抜きならぬ、拳の居合い抜き。ポケットを刀の鞘代わりにして、目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出す。

魔力によつて達人でも見切れぬ極限の速度まで拳速を加速すること、射程10メートルの風圧による攻撃が可能になる。撃ち出されるのが「気弾」ではなくただの「拳圧」であるため、察知が著しく困難。正確には「無音拳」。だが、初速を得るために1〜2メートルが必要のため、接近戦では使えない。

また、あくまで「拳圧」による攻撃であるため攻撃力は低い。文献にしか載っておらず、実際に使用するバ力はいない。

「雷の暴風」

世界観：魔法先生ネギま！

威力：30000 MP：130 習得レベル：4

強力な旋風を発生させ、竜巻の要領で中心の推進力を上げ、その中央を稲妻を走らせる、直線的な攻撃魔法。

ゼロ距離で放てば相手の体は消し飛ぶ（バグキャラなどの一部を除いて）ほどの威力を持ち、決め手としても悪くはない。但し、詠唱時間を考えると、もう少し詠唱時間の長くても、より強力な魔法を使った方がラスボスレベルには有効と思われる。もちろん、「雷

の暴風」でも十分通用するが。魔力消費を考えれば、序盤はこれが決めてとなるのは確実であると思われる。

「一方通行」

世界観：「とある魔術の禁書目録」

威力：なし M P：50（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

運動量・熱量・光・電気量など、体表面に触れたあらゆるベクトル（向き）を任意に操作（変換）する能力。

デフォルトでは重力や酸素などの生きるのに必要な力を除いた全てのベクトルを「反射（ベクトルの反転）」するよう、無意識下で設定している。また、足元のベクトルを操作することで高速移動や飛行を可能にしたり、相手に触れて血流を操作するなど、応用力も高い。（「幻想殺し」など特殊例を除き）核兵器を打ち込まれても無傷のまままでいられるとされ、不意打ちなどでも反射で全く効果がない。

山下の「魔法障壁」を軽く破る「超電磁砲」を、軽くあしらうことが出来る（もちろんそれ相応のレベルに至っているのが条件）。原作では「一方通行」というコードネームの人物が「ベクトル変換」を行っており、「一方通行」＝「ベクトル変換」ではないのだが、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の中では「一方通行」のことをベクトル変換能力としている。

「いどのえにつき」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：250

「アーティファクト」の一つ。本のアーティファクトで、対象となる人物の名前を呼んでから開くと、その人物の表層意識を読むことができる。

有効範囲は半径5パス（約 7.4 m）である。対象者に質問するとその質問に対する回答が現れる。また名前を呼ばずに開くと使用者本人の表層意識が現れることになる。複数の相手に縮刷版を一冊ずつ割り当て、リアルタイムで思考をトレースすることも可能（こちらは文章のみ。また呼び出しの呪文は「アデアット」ではなく複数形の「アデアント」になる）。

いずれも日付が示されることから、読者も劇中の日時をうかがい知ることができる。戦闘支援や尋問においては、名前さえ判れば敵の思考や情報を引き出す事が出来る（ただしロボットなどの無生物には通用しない）。能力の強力さから「マスターピース」と称される程の「アーティファクト」。

前述の通り、相手の名前が判っていれば相手の動きを先読みすることが出来るが、名前が判らない相手には使えない、絵日記を見るために相手から視線を外す必要があるのが弱点。相手の名前を見破る魔法具「鬼神の童謡」と文字を読み上げる魔法具「読み上げ耳」でその弱点を補強することができる。

「インフレックス」

「ジャポン帝国」との交戦で、軍隊を持つことを余儀なくされた「トーキョー特区」が、自国の警察組織を強化したもの。

「ウエイトルーム」

「バトルワールド」で戦闘を終えた者と、「アドベンチャーワールド」で体力がゼロになった者が運ばれてくる。ここでは能力を使うことはできず、もちろん戦闘も不可。ロード中の待機場所。

「演操者」

世界観：「アスラクライン」

「機巧魔神」を召喚し「演操」することの出来る人間。体内にナノマシンが注入されており、そのナノマシンによって「機巧魔神」を操る。

「炎弾」

世界観：「灼眼のシャナ」

威力：1000 MP：5 習得レベル：1

初歩的な攻撃の「自在法」。

「存在の力」は熱エネルギーを持たず、物も燃やさないが、最も単純な破壊のイメージである「熱量」を「存在の力」に具現化させることで、物理的な意味での炎同様に熱を持ち物を燃やすようになる。「炎弾」はその代表例であり、炎の性質を発現させた「存在の力」を砲弾のように撃ち出す。通常ならば着弾後に炸裂するだけだが、器用な者であれば、着弾後に変形させたり任意に爆発させたり

と言った遠隔操作も可能。

「桜華崩拳」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：装填される「光の矢」×10 MP：装填される「光の矢」×1 習得レベル：20

「魔法の射手」で破壊属性の「光の矢」を崩拳に合わせて撃つ。一発で岩をぶち壊すことができる。

「王権を果たす完全人形」

世界観：「シーキューブ」

威力：なし MP：5（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

人の姿を模したものなら、なんでも操ることができる。

「オソウジディスク」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：250

「アーティファクト」の一つ。全体武装解除ができる魔法の筈。飛行用を使用。

【か行】

「解禁」

「リミッター」を解除するための合言葉。

「開放」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：1 習得レベル：20

「遅延呪文」を発動させる。

「海楼石」

世界観：「ONE PEACE」

悪魔の力を封じる特別な石。その効力ゆえ、「有力者」の「力」を基本ほとんど封じることができる。

「弓步冲拳」

世界観「魔法先生ネギま！」

威力：50 MP：5 習得レベル：20

鋭い踏み込みと同時に、踏み込み足と同じ方の腕でパンチを繰り出す。無詠唱の魔法と組み合わせることで威力を上げたりすることも可能だが、それ単体でもそれなりの効果を発揮する。

「案山子」

世界観：「神様ドォルズ」

最低耐久力：5000（種類によって違う）

「神様」として祀られている人形。人を数人乗せて飛行できるほど巨大。

単独で動くことはないが、資格を持つ者が「案山子」に魂を入れて操ることができる。瞬間移動や物体の通過、種類によっては電撃や光線の発射など様々なことが出来るが、操る者の資質によっては使えない能力もある。「神様の媒介物・抜け殻」と言われているが、起源や正体、本当に神であるかなどは全て不明。

「風の傷」

世界観：「犬夜叉」

威力：100 MP：5 習得レベル：1

「鉄碎牙」を用いた初心者用の技。強力な殺人疾風が敵を襲う。奥義を使うのにこの技を連動的に使用する必要がある、単体としてより、奥義のための技として使われる。又、単体としてなら出は早い、高レベルの戦いになると殺傷能力はほとんどないに等しい。

「風よ」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：30 MP：1 習得レベル：1

風を身に纏って体を保護する。

「加速」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：10 習得レベル：5

文字通り、飛行している箒を加速させる呪文。箒や杖の飛行に呪文が使われることはあまりないが、言葉の魔力を付与することでより高い効率で加速が行える。

「カプセル」

擬似感覚入力デバイス。中に六ヶ月間いたとしても、人口栄養剤の投与で死ぬことはない。これを使って「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」をプレイする。

「神のお告げ」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内で困ったことがあつたら質問すればよい、とのこと。

「神の左手・ガンダールヴ」

世界観：「ゼロの使い魔」

威力：なし M P：0（常時展開型） 習得レベル：1

あらゆる武器や兵器を自在に扱える能力。

証のルーンが左手に刻まれることから「神の左手」と呼ばれる。また「神の盾」とも呼ばれるが、これは「虚無」を発動させる為に長い詠唱を行う間、無防備になる主を守ることが「ガンダールヴ」の役割だからである。そのため、主が側に居ないと全力を発揮できない。

「かめはめ波」

世界観：「ドラゴンボール」

威力：レベル×1000 MP：レベル×8 習得レベル：1

体内の潜在エネルギーを凝縮させ一気に放出させる技。

基本的には対象に向けて一直線に放つビームとしての性質を持っているが、鍛錬を積みめば、軌道を操ったり、連続で撃つたり、手の代わりに足からでも撃つことが出来る。

「プロローグ」で山下が「連続使用不可能」と言っているが、それは相手がそのレベルまで達していない、ということ踏まえている。

「喰霊開放」

世界観：「喰霊」

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：1

「白叢」を自身の体内から呼び出す。但し、「殺生石」がないと使用不可能。

「感掛法」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：30（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

気と魔力を融合して身の内と外に纏い、強大な力を得る高難度技法。

肉体の外部の気である陽の気、「魔力」と、肉体の内部の気である陰の気、「気」という相反する二気をそれぞれ、左手、右手に溜めて使用する。発動すると、肉体強化、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞、耐熱、耐寒、耐毒等の作用が働く、超便利技だが、体力と精神力を同時にすり減らすため、消耗が激しい。

「監獄弾」

世界観：「ONE PEACE」

対悪魔用兵器。「海楼石」が仕組まれた網で「有力者」を捕縛する。

「気合防御」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：10000000 MP：2000 習得レベル：8
0（解禁）

大呪文を喰らってもまったく平気。極限の気に練り込められて鍛え抜かれた鋼の肉体でのみ可能。

魔神すら倒す一撃を体内から喰らっても、なんとか戦い続けることができる。山下が習得レベルに達していないのに使っていたのは、配信で入手したためである。

「機巧魔神」

世界観：「アスラクライン」

最低耐久力：10000（種類によって違う）

模造品の悪魔。悪魔に対抗するために彼等の秘技を盗み出し、人間の手で生み出された、機械製悪魔と言うべき魔神（機神）。身長は4メートル前後。

召還に応じて「演操者」の影を介して出現し、「演操者」の命令に従って動く。機体ごとに特性があり、それぞれ強力な特殊能力を有している。召還時や特殊能力使用時には各機ごとに異なる呪文を紡ぐ。「演操者」の技量によっては、腕だけを出して能力を行使するなど、完全に呼び出さずともわずかながら能力が使える。

「演操者」側には決められた召還呪文は存在しない。「演操者」は術式を既にインストールされていて、後はそれを発動させるだけで良いので、基本的に「呼ぶ」意味を有していればどんな詠唱詞でもよい。「演操者」の死亡、あるいは「副葬処女」（「機巧魔神」に封印された生贄）の消滅により（「機巧魔神」は「副葬処女」の魂を削ってエネルギーに変える）その機能を停止させ、操者不在の人形となり果てる。

「鬼神の童謡」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：20

指に填めて使う魔法具。相手が自分の存在を認識した状態で名前を問うと、相手の名前を見破ることができる。

見破った名前は、使用者の意思に合わせて、空中に「鬼神の童謡」が描く。

「cast off」

世界観：「仮面ライダーカブト」

威力：なし MP：100 習得レベル：20

「マスクドフォーム」から「ライダーフォーム」へと2段変身する工程。

これは昆虫の脱皮に相当する。

「キュウちゃん」

世界観：「電腦コイル」

耐久力：300

セキリュティプログラムが視覚化された際に、バレーボール大の球体に見えることからついた名称。

複数機が宙を浮遊しながら巡回し、親機である「サッチー」の探索範囲を拡げる他、自らもビームを放ち、小規模なバグを初期化したり、データの破損を修復する。正面はマークを模したようなデザインになっている。

「駆動鎧」

世界観：「とある魔術の禁書目録」

耐久力：500

いわゆるパワードスーツだが現実の物とは厳密には異なる。

着込むタイプで、使用者の身体能力を強化する。いくつかのバリエーションがあるが、基本的に武器などが内蔵され、兵器として運用される。使用される技術は現在の3、4世代上のもので、現在の一般的な武器ではびくともしない。

「空間移動能力」

世界観：「とある科学の禁書目録」

威力：なし MP：10 習得レベル：40（解禁）

11次元絶対座標を介して、触れた物質や自分自身を移転させる能力。能力者の総称は「空間移動能力者」。比較的貴重な能力。

移転させた物体は「出現先にある空間を押しつけて」出現するため、飛ばした物質の強度とは無関係に切断、あるいは貫通などの事象を引き起こす（そのため、相手の占有している空間に武器を移転させて攻撃するなど、テレポーターの主要な攻撃手段となっている）。

汎用性に優れる能力だが、11次元絶対座標の演算が複雑なため、その時の精神状態などが大きく影響する。

「玖吼理」

世界観：「神様ドルズ」

耐久力：10000

頭部からツインテールの様に2本の腕が生えており、右腕のナイフや頭部から放たれる光線を武器とする、コケシの様な形をした「案山子」。

「？鐵」

世界観：「アスラクライン」

耐久力：80000

漆黒の魔神。「機巧魔神」の中でも高いクラスの性能を誇る。その能力は、重力制御能力。

「黒の拳撃」（*アスラクライン）

威力：2000 MP：50 習得レベル：10

「機巧魔神」の「？鐵」の能力。

高重力エネルギーを持った球体を生み出して敵を攻撃する。その際、腕の軌道に攻撃が乗る。空間を歪曲させて防御壁を構成することもできる。その力は光の速度を凌駕し、核は無限重力の状態となっている事になり、時の流れすら変えられる事ができる。

「clock up」

世界観：「仮面ライダーカブト」

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：20

「ライダーフォーム」が、自らのタキオン粒子を操作し、自分の時間の流れを操作することで行う超高速の特殊移動方法。が、時間に制限があり、自動的に解除される。

「クーンズベリの死の屋敷《アベニュー14番地》」

世界観：「シーキューブ」

真の姿は呪われた家。中に何でも入れることができ、取り出した物は何でも強化される。

「結界術」

世界観：「結界師」

威力：なし MP：5（常時消費型） 習得レベル：1

空間支配術のことであり、使用者を結界師と呼ぶ。支配した空間を結界と呼ぶことから、「結界術」と呼ぶ。

道具を使えば結界を張れる術者は多くいるが、空間の理を変化させたり、一から空間を作り出したりできる術者は稀である。

「教会区《奈落》」

世界観：「シーキューブ」

威力：300（常時攻撃型） MP：30（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

相手に告解させることで記憶を奪ったり。闇を操り触手のように操ることができる。

近藤は局地的に大量に闇を放出することで、空を飛んでいた。

「剣殺交叉」

世界観：「シーキューブ」

威力：なし MP：100 習得レベル：5

相手の攻撃を分析し法則化することで敵の動きを予測して、相手の武器の構造上最も弱いポイントにカウンターを叩き込む。これにより相手の武器を一撃の下に破壊することが可能。

「幻想殺し」

世界観：とある科学の超電磁砲・とある魔術の禁書目録

とある科学の超電磁砲

威力：なし　MP：50（直接攻撃にのみ有効）　習得レベル：40（解禁）

とある魔術の禁書目録

威力：なし　MP：0（常時展開型）　習得レベル：1

右手に宿る、触れるだけで全ての異能の力（顕現した超能力や魔術）を消滅させる（生物が持つ、魔術的な生命力、地脈は例外）。空気に触れている事が空間に作用して運氣を下げていらいしい等と、絶大な効果に反比例して欠点盛りだくさんの困った超能力。

核を破壊しない限り、半永久的に生産・再生するタイプの異能であるため、使用者は永遠に不幸なままである。

「第一部／二章／六話」で少女？が「豪殺居合い拳」を無効化していたが、これが「幻想殺し」を用いていた場合、拳速の速度を落とせても、それまでに加速された拳圧による風圧によって、少女？はダメージを受けることになる。そのため、少女？の使用した無効化能力は「幻想殺し」ではない、と推測できる。

「豪殺居合い拳」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力2800　MP：50　習得レベル：40（解禁）

「感掛法」用いた「居合い拳」。

大砲クラスの一撃を放つ。だが、予備動作が大きく、避けられやすい。

「第一部／二章／六話」では、その弱点を「居合い拳」を用いることでカバー！。

「コチヒノウギ」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：250

「アーティファクト」の一つ。「東風の檜扇」。3分以内に受けた、即死以外の怪我を完治させる。

使用するには触れられる距離まで接近しなければならない。完全治癒は一日一回だけ。セットである。又、「コチヒノウギ」と対になる「南風の末広」である「ハエノスエヒロ」（30分以内に発生した怪我以外の異常を治療することができる）がある。

「五番機構・刺式佇立態《ヴラド・ツエペシュの杭》」

世界観：「シーキューブ」

大きな杭。投擲武器として使用。

ヴラド・ツエペシュはドラキュラのモデルとなった人物。

【さ行】

「最強防護」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：50000 MP：200 習得レベル：38

「魔法障壁」を十数枚展開して攻撃を防ぐ技。

これ以上の「魔法障壁」を瞬時に展開することは理論上不可能なため、「最強」と名づけられている。そのため、何でも「防護」できるわけではなく、しばしば破られることはある（破られても衝撃緩和は働くので、展開するに越したことはない）。

「サウザンド」

世界観：「黒神」

最低耐久力：500

使用者の純粋な「テラ」を触媒にして作動する戦闘装身具。

「サッチー」

世界観：「電脳コイル」

耐久力：3000

正式名称「サーチマトン」。空間管理室が導入した強力な違法電脳体駆除ソフト。

視覚化された姿は、赤く丸みを帯びた形で巨大（高さ2・5から

3メートル)、顔は日本の郵政省のマスコットキャラクター(?)に似ている。腹部(にあたる部分)に「キュウちゃん」を4機収納することができる。「ボクサッチー、ヨロシクネ」と音声を発しながら滑るように移動する。

収納した「キュウちゃん」から駆除対象に向けてビームを放ち、命中した電脳物質のデータを初期化する。あまり高度な識別機能を持っておらず、わずかにバグを持っている電脳ペットや、「ちよつとお茶目な電脳ツール」も駆除対象と認識して攻撃する。自らを壁から壁へ「郵」の字の文様の陣を通し転送でき、距離を無視して駆除対象に近づくことができる。

郵政局の管轄なので、管理外ドメインである、民家や学校(文部局の管轄)、病院、公園の敷地内、神社などの鳥居のある敷地(文化局の管轄)には許可なく侵入や認識ができないようになっていて、標的を感じできる範囲は半径20メートル程度だが、「キュウちゃん」によって探査範囲を広げている。「ポチ」、「タマ」、「ミケ」、「チビ」、「コロ」などがある。

「「雑で豪放な食材の断ち方」、乱切りにしましょう」

世界観：「シーキューブ」

威力：10(4、5回連続して攻撃) MP：5 習得レベル：40(解禁)

人間を乱切りにした斬りつけ四、五回分が纏めて一度に現れる。

「自在法」

世界観：「灼眼のシャナ」

威力：なし M P：不明（種類によって違う） 習得レベル：5

「存在の力」を操ることで、この世では起こり得ない不思議を現出させる術とそれに付随する紋様をそれぞれ「自在法」、「自在式」という。

「自在法」はこの世の「存在の力」の流れに直接干渉するため、「存在の力」を感知できる者は発動時の違和感を察知することが出来る。効果の大きい「自在法」ほど生じる違和感も大きく、「存在の力」を察知できない人間の感覚にも影響を与える場合がある。

「七首・十六串呂」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：400

「アーティファクト」の一つ。本体は、柄頭に房飾りがついた、一口のヒ首^{ふり}。

名称通り、最大で十六口まで分裂させることが可能（本体以外は全て房飾りがない）。十六口にはそれぞれ異なる歌の順に平仮名の番号がつけられていて、番号と本数を指定して出現させることもできる（例：「ろ・は・二刀」）

それぞれのヒ首は、従者が念じるままに飛翔させることができる。またそれらを用いて捕縛結界を発生させるなどの応用も可能。

「ジャポン国」

実世界の日本の上に重なるように存在している国。国内に国際技術開発特区である「トーキュー特区」を保有する。

「ジャポン帝国」

「ジャポン国」のかつての名称。三度の世界大戦を「トーキュー特区」の開発した戦闘道具を売りさばいて世界大国となった。

「獣化」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：10（常時消費型） 習得レベル：40（解禁）

自らの体に流れる妖怪側の血を目覚めさせることで、肉体が変化して視界から消えるほどの速度・大地を砕くほどの力などを得たりする。「変化」とも言われる。

「十九番機構・袂式螺旋態《人体穿孔機》」

世界観：「シーキューブ」

全長178・7センチの巨大なドリル。槍のように使うことが多い。

「十四番機構・搔式獣掌態《猫の手》」

世界観：「シーキューブ」

猫の爪を模した五本のカギヅメがついた大きな孫の手状の拷問具。

「術式封印」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：15 習得レベル：8

恣意的なキーワードを設定しているため、「条件発動」であって、「遅延呪文」ではない。

「術法・藍蠱」

世界観：「シーキューブ」

威力：なし M P：5000 習得レベル：40（解禁）

概念的に「閉じた」空間内で生き物を殺すことで、それを蠱毒として使役できる。

この蠱毒は、元になった生き物に似た姿をしているが、全身が藍色の水銀のような金属質のものに変化しており、身体能力なども跳ね上がっている。

「瞬動術」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：20 習得レベル：30

超高速移動。「入り」で高速に入り、「抜き」で高速から抜ける。地面に足がついていないと、使えない。又、一度「入り」に入ると、方向転換することができないのが、弱点である。達人達の戦いでは必須テクニックとなっている。

山下は「瞬動」と略している。

「白き雷」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：1000 MP：30 習得レベル：8

掌から迸る熾烈な電撃で敵を殺傷する魔法。物質に対しての破壊力はさほどでもないが、人間や動物に対しては極めて攻撃性の高い本格的な戦闘用魔法。

「精霊囚」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：8（常時消費型） 習得レベル：38

風の中位精霊を自身の代わりとし、**囿**として使う。「精霊召喚」の応用で、この「精霊囿」は「風の中位精霊」によるもの。詳しくは「風精召喚」の項で。

「世界観」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」で使用する世界観のこと。

「世界図絵」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：250

「アーティファクト」の一つ。その正体は、従者の質問に答える形で魔法に関する情報を提示できる魔法書である。

その情報量は図書館一館分にも匹敵するうえ、「まほネット」に接続することで情報の自動更新も行う。しかし、自動更新という能力ゆえ、記載されていた古くとも貴重な技術や知識に関する記述が消滅してしまう弱点もある。

実質極めて情報量の多い辞書であるため、本を読む力も必要である。

「千里眼」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：3（常時消費タイプ） 習得レベル：40
（解禁）

ESP（超感性知覚）の一種で、肉眼では捉えられない対象、場所、および現在起こっている出来事を眼で見るかのように知覚する。

「存在の力」

世界観：「灼眼のシャナ」

この世に存在するための根源的なエネルギー。人間や動物・物質など、この世のあらゆる個体が持つており、この世の時空に過去・現在・未来に渡って広がっている。これが失われるとその個体は「最初からこの世に存在していなかった」ことになり、所有物や関わった人間の記憶や写真など、あらゆる「存在した証」も失われる。

「存在の力」の量が多い人間ほど、周囲に強い影響力（存在感）を持つことになる。

用語集 あゝさ行（後書き）

機会があれば増やします。

用語集 たゝは行（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「用語集」の中のオリジナル設定は、ちゃんと覚えておいた方がい いのでしょうか？

A 今のところ、その必要は大してありません。
ゝ第二部から必要かも？

用語集 たは行

【た行】

「対物・魔法障壁」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：800 MP：40 習得レベル：1

魔法使いは、物理的な損害から身を守るために、自らの周りに魔法障壁をめくらしているのが普通である。

「戦いの歌」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：10（常時消費型） 習得レベル：10

自身への魔力供給を行い、身体強化を行う。

「遅延呪文」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：3 習得レベル：8

「果報は、寝て待て」と言われるように、呪術やまじないの効果というものは、術の行使の直後に生ずるものではないのが普通である。が、術の行使の直後に効力を発生させるということは、術の効力をより術者の意に適った状況で発現させるものであるため、呪術やまじないよりも高度になる。

「遅延呪文」はその意味で、より術者の意に適った形で術の効力を発現させるものであり、さらに高度になる。その上には、「条件発動」といったものもある。

「力の王笏」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：250

「アーティファクト」の一つ。このステッキ自体が一機のネットワーク・コンピュータ（「まほネット」にも接続可能なもの）であり、「千人長七部衆」が率いる電子精霊群を統制し、操ることができる。精霊とは契約の力で結びつけられており、魔法陣内で呪文を詠唱することで電子精霊との交信が開始される。なおこの際、魔法陣内に居る他の人間も同時にダイブすることになる。初使用時には七部衆から命名を求められることになるが、「データの軽さが信条」であるため、文字入力とは四文字制限（濁点・半濁点含む）である。そのためつけられた名前が、「しらたき」、「だいこ」、「ねぎ」、「ちくわふ」、「こんにゃ」、「はんぺ」、「きんちゃ」である。

電子精霊との交信は念話によって行われるが、精霊から送られてくる視覚情報などを受け取りやすいよう、肉体的に眠りながら使用することになる（覚醒中でも交信すること自体は可能で、「聴覚情報のみ」というように受け取る内容を選別することもできる）。使用者は、電子精霊と交信することで電子空間内にダイブしたような感覚を得ることができ、「力の王笏」が構成したユーザー・インターフェースを用いてサイバーバトルを行ったり、様々なオプション機能を用いることができる。

電腦戦自体は、七部衆への指示とキーボード入力、そしてステッキを振りかざすアクションとで行われる。基本的には七部衆が用意したソフトウェアを用いることになる。呪文詠唱の際に他者が魔法陣内に入っていた場合、その他者も電子精霊との交信に巻き込まれてしまい、眠りの状態に入るようである。電子空間では、その者達に小型のステッキを分け与えることも可能で、サイバーバトルや変身の機能を（プログラミングの知識が相手に無くても）用いさせることができる。

なお七部衆は現実世界でも活動が可能で（ただし近くでパソコン・携帯などの電子機器が作動している必要がある）、食事もできる。

「杖よ」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：1 習得レベル：1

魔法発動体である杖への呼びかけの言葉。

「鉄碎牙」

世界観：「犬夜叉」

耐久力：30000

普段はただの錆び刀だが妖力によって巨大な牙のような刀に変化する。

人間を慈しみ守る心がなければ扱えないと言われている。邪悪な妖怪には結界が働き、触れることができない。この結界は戦闘中でも有効。人間は触ることはできるが変化はしない。

その力は「一振りで百の妖怪をなぎ倒す」といわれ、「風の傷」、「爆流破」という技を持つほか、斬った妖怪の能力を奪い取る力もあり、結界破りの「赤い鉄砕牙」、金剛槍を無数に放つ「金剛槍破」、敵の妖力を吸い取ったり妖穴を切る「竜鱗の鉄砕牙」という形態を持つ。

「テレポート」

世界観：「ポケットモンスター」

威力：なし MP：10 習得レベル：10

瞬間移動。移動先を頭に思い浮かべるだけで、理論上はどこにでも移動可能。

「テラ」

世界観：「黒神」

全ての生命に等しく与えられている世界の容量。その量は運と比例したりしなかったり。

「天狗之隠蓑」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：400

「アーティファクト」の一つ。全体が黒くて長いボロ布。身体に被ると、布の内部に身体が隠遁され表面も背景に同化するという、まさに忍者の使う隠れ蓑のような品。他人を中に入れて移動することも可能であり、主に非戦闘員を連れて移動するのに活用する。又、中には和風の家が備わっている。

「トーキュー特区」

周囲を特殊な森で護られ、独自の発展を遂げた「ジャポン国」内の独立学術都市。

「どこでもドア」

世界観：「ドラえもん」

耐久力：200

片開き戸を模した道具。目的地を音声や思念などで入力した上で扉を開くと、その先が目的地になる。

ドアに内蔵されている宇宙地図の範囲で、また10光年以内の距離しか移動できないという制限がある。10光年を超えた距離のある目的地を指定して扉を開くと、「どこでもドア」としての機能は働かず、ただのドアとして機能する。次元を超えることはできず、また過去や未来との移動はできない。

扉の上には空間歪曲装置があり、扉の下には空間歪曲装置、連鎖ユニットがある。柱にはコンピューターが、扉には時差修正装置、空間座標決定機、宇宙地図、世界地図、バッテリーがある。ドアノブには行き先受信ノブ。また、プライベートロックというボタンスイッチが付いており、マイクロホン、意志読み取りセンサー、コンピューターも内蔵されている。ドアには鍵をかけることもできる。

「ドラゴンボール」

世界観：「ドラゴンボール」

耐久力：4000000

7つ集めて、合言葉を唱えると、どんな願いでも叶えてくれる。オレンジ色の半透明の球で、中には赤い星が入っており、神秘的な輝きを放ちながらにぶく光っている。特殊な電波を放っており、その位置を特定できるが、特殊なケースに入っていたり、生物の体内に飲み込まれていたりすると、感知できない。「ドラゴンボール」が近くに2つ以上あるとき、共鳴して強く光る。

強度は極めて高い。多少傷が付いていても能力に変化はなく、また穴が開いたり傷が付いても願いを叶えて四散し、再び珠に戻る際には傷も無くなり新品同様になる。半透明の大理石に似た固い天然

の樹脂のような材質で、手触りは天然ゴムに似ている。

【な行】

「なんでもなおし」

世界観：ポケットモンスター

毒、麻痺、昏睡、火傷、錯乱を直す万能薬。なんとまさかの600円で売っている。

「贄殿遮那」

世界観：「灼眼のシャナ」

耐久力：300000

大太刀型の宝具。

「自在法」も含め、刀に直接加えられる敵意によるあらゆる力の干渉を受け付けない最高に頑丈な刀。ただし、使い手への干渉までは無効化しない。元々は人間の刀匠と異世界の王により作られた刀。

「ネコ騙し」

世界観：「ポケットモンスター」

威力：500 MP：20 習得レベル：15

威力よりも、絶対先制と絶対怯ませることに力点を置いた技。奇襲攻撃として、最初に一回だけ使うことができる。

「念話」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：6 習得レベル：38

超感覚知覚の一種。霊的なものを媒介とし、この媒体を相互に発する、または捉えることによって成立する。

これは常人の意思疎通が音声（という空気の媒体）や文字（の姿を伝達する光線）という媒体を通じて行われるのと同じ。相互の心にある意思や意図を直接的に感じ取るというよりも、音声や文字とは異なった媒体で会話する行為である、と言った方が適切である。

【は行】

「パクティオカード」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：200

魔法使いとその従者が「パクティオー」（魔方陣の中で唇と唇のキスをすることで成立）という契約の儀式を行った証として出現する。主人用と、従者用がある。

呪文によつて定めた時間（コンマ秒単位）、魔法使いが従者に対して自らの魔力を送り込む。これにより、従者が一般人であつても身体能力が向上させられるなどの効果がある。又、遠方の従者を魔法使いの元へと転移させることができる。魔法使い自身の魔力はおよそ必要としない。ただし限界距離はせいぜい5～10kmと短い。また従者の意志や状況に関係なく召喚してしまうため、強制転移魔法の一種とも言える。

「箱型の恐禍」

世界観：「シーキューブ」

耐久力：30000

一辺一メートルほどの黒い立方体の拷問用具。中には無数の鉄片が組み合わさつていて、32の機構に変形が可能。呪いにより人化する。

立方体の形の物を媒介として、すべてで32個の機構を顕現させることができる。使用の際は使う形態の名前をいうと、自分の似姿としての立方体が変形する。機構から延びる小さな立方体の角どうしを接合してひも状にしたもの（「立方鎖」と表現されている）で機構を操っている。それぞれの形態には名前がある。

近藤の基本設定がこれであるため、近藤自身も「箱型の恐禍」として拷問危惧になることができる。又、「箱型の恐禍」はかなり重

量があるため、近藤の体重もかなりある。

「間流結界術」

世界観：「結界師

威力：なし M P：5（常時消費型） 習得レベル：1

「結界術」の一部を分かりやすくまとめたもの。基本は直方体に空間を支配するという非常にシンプルな能力。

結界の固さや粘度をコントロールするほかに特定の対象のみ結界の出入りを許可、禁止するなど結界内の理を変えることで多彩な応用が効く。

発動にはいくつかのステップがあり、「方囲」で標的を指定、「定礎」で位置を指定した上で、「結」により結界を生成する、という三段階がある（方囲と定礎は省略される事もある）。一度発生した結界は、「滅」で内部の物を押し潰す事も、「解」で何もせずに解除する事もできる。接近戦には向いていない。

「八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》」

世界観：「シーキューブ」

進行ルートに在るものを碎きながら進む車輪。

「発電能力」

世界観：「とある科学の超電磁砲」

威力：なし M P：0（常時消費型） 習得レベル：1

総じて電気、磁力（電磁波）等を操る能力。能力者の総称は「電撃使い」。

単純に電気を操るだけではなく、電子機器の直接的な操作、微弱的な電磁波の発散とその感知など汎用性が高い。

「バッファローズ」

反政府組織。

「バトルワールド」

対戦者同士が同意の上にバトルする対戦専用の世界。

「ハマノツルギ」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：1000

「アーティファクト」の一つ。漢字表記は「破魔の剣」。

普段はスチール製のハリセンだが、本来の姿は、身の丈以上の長さを持つ片刃の大剣。どちらの形態でも魔法無効化能力と同じ効力を持つが、対象を叩くことで召喚された魔物を一撃で送り返したり、

他者にかけられた魔法を解除したりすることもできる。

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」

「世界観」に則って仮想現実内を生きるゲーム。

「光よ」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：1 習得レベル：1

小さな明かりを灯す基礎魔法。占術や念力に次いで教わる初等魔法。

暗がりです突然明かりを灯すと、目眩ましとしても使える。

「白叡」

世界観：「喰霊」

耐久力：100000

狗神と呼ばれる霊獣。白い毛並みで狗の頭に龍のような長い首を持ち、身体に至る所が鎖で巻かれている。

調伏された「九尾」の「殺生石」が複数集まって生まれた「殺生石」の集合体で、一般の悪霊に比べ圧倒的な妖力を持つ。だが、その力に目をつけた者たちによって捕らえられ「悪霊によって悪霊を喰らう呪われた最終兵器」として体内に封印された。これを喰霊計

画と呼び、それ以降は封印した家系に代々引き継がれた。

封印した者の魂と繋がっているため白叡自身が傷付くと術者も影響を受ける。また、腹が減ると封印を破ろうと暴れるため維持するためにエサ（霊体）を定期的に与える必要がある。宿主の魂を食い続け、また、悪霊との戦いの最終兵器である為、術者は歴代の最凶の敵と戦うことになる。故にその家系の人間は短命が多い。その核^{コア}となっているのは「殺生石」であり、「殺生石」を失えば消滅するとされているが、過去数百年、その所在は確認されていない。

「表層融解」

世界観：「とある科学の超電磁砲」

威力：なし M P：20 習得レベル：40（解禁）

触れた物体の表層を融解することができる。力を途中で抜くことによって、融解した表層を固定し、形状を思い通りに変えることが可能。

「風花施風風障壁」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：2500 M P：80 習得レベル：10

数分間持続する竜巻を発生させ、外部から身を守る呪文。

竜巻周辺は、激しい気流が流れており危険だが、その内部は、竜巻の目のように静かである。

「封絶」

世界観：「灼眼のシャナ」

威力：なし MP：20 習得レベル：10

現代では最もポピュラーで初歩的な「自在法」の一つ。

「結界」のようなもの。封絶を「張る」と、地面に封絶の作用を生む火線の「自在式」が出現し、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成され、内部の空間はこの世の流れから非物理的に切り離される（「因果孤立空間」という）。内部では原則「紅世」に関わる者以外のもものは停止し、外部では「存在の力」を感知する能力がない限り、「封絶」を張られた空間の存在を認識できなくなり、また「存在の力」を感知する能力を持った者にも内部の様子は掴み辛くなる。また、外部と内部は物理的には繋がっているため、出入りは自由に行けるが、「存在の力」を感知できない者にとって「封絶」の内部は「存在しない空間」であるため、無意識のうちに避けて行動するようになる。

「封絶」の内部で破壊された物体や生物は、その「封絶」を解くまでは「存在の力」を用いることで、「封絶」発動前の状態にまで修復することができる。

「バーチャル・リアリティ／自分だけの現実」の中では「有力者」を「紅世」に関する者として捉えているため、「有力者」はこの中でも動ける。

「風精召喚」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし　MP：15　習得レベル：3

風の中位精霊による「精霊召喚」。一種の死神でもある。

「風陣結界」（＊魔法先生ネギま！）

耐久力：800　MP：20　習得レベル：18

気流を利用した中規模の魔法障壁を展開させる。炎、冷氣、毒ガス、エコーなど、空気を媒体にした攻撃等から身を守るのに適している。

これは、空気を利用した魔法の中でも、固体の衝突を防ぎきれ「風楯」や「風化風障壁」よりも基本的な魔法である。

「第一部／一章／四話」で、風で作った中位精霊から身を守るのに利用したのは、適切な処置である。

「副葬処女」

世界観：「アスラクライン」

耐久力：1

「機巧魔神」を動かすための「贅」として「機巧魔神」の中枢部に収められている少女の呼称。

「機巧魔神」はこの少女らの魂の質量を削って「演操者」の願いを叶え続ける。「機巧魔神」は「副葬処女」の魂で動くため彼女達の意にそぐわない場合、「演操者」の命令でも動かないことがある。魂を削られた「副葬処女」はそのたび感情をすり減らし、全ての感

情を無くしたとき消滅する。また、当然ながら封印されている「機巧魔神」の中枢部が破壊されれば死んでしまう。

彼女たちは、「演操者」の脳の一部を媒介として「射影体」と呼ばれる疑似感覚的情報入出力デバイスを投影し、「演操者」とコミユニケーションをとる。これは一種の幽霊のような立体映像であり、通常その姿は「悪魔」か「演操者」、あるいは電子的に視力を増幅したものでなければ見ることはできない（稀に写真やビデオには写ってしまう事がある）。「声を聞くのはもっと簡単」との事である。いずれにせよ一般人には知覚できないが、稀に知覚できる者もいるらしい。

「「編執狂的な碎片の刻み方」、微塵切りにしましょう」

世界観：「シーキューブ」

威力：5（約千回連続して攻撃） MP：200 習得レベル：40（解禁）

縦横無尽に刃がブレて現れて、人間を微塵切りにした動作が一度に現れる。千切り以上の威力を持つ。

予想不可能な刃の斬撃が複数表れるので、対戦相手はこれを受け止めたり、受け流すことが困難。しかし、千回連続で攻撃しないと、その威力を発揮しきれない。そのため、回避不能効果を重点的に使用する。

「方陣障壁」

世界観：「黒神」

耐久力：50000

「サウザンド」の一つ。前方に魔方陣のバリアを張り、敵の攻撃から味方を守る。

「ポートゲート」

「ワープ航法」を利用するための装置。世界に10箇所ある。

用語集 たゝは行（後書き）

これを見て、わけが分からなくなった人は確認して下さい。まだ未
完成なので、さっさと完成させます

用語集 まゝわ行（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「一覧」の内容に関して、間違いはないのでしょうか？

A 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の設定上、いくらか拡大解釈、又は縮小解釈、あるいは定義の変更などがあります。
ゝといっても、さほどないけどね。

用語集 まゝわ行

【ま行】

「マスクドフォーム」

世界観：「仮面ライダーカブト」

「ヒビロノカネ」という、太古日本で様々な用途に使用されたと言われる伝説の合金で製造された「マスクドアーマー」が全身を覆った姿の第一形態。主に防御に重点がおかれている。

「マスクドアーマー」

世界観：「仮面ライダーカブト」

耐久力：8000

鎧。「マスクドフォーム」時に身に纏っている。

「魔法の射手」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：矢一本×5 M P：5 習得レベル：1

魔法学校で唯一教える戦闘呪文。「光の矢」や「氷の矢」など様々な種類があり、その属性によって効力も違い、応用性も高い。

一発だけならかなり出が早く、又、拳に乗せて撃つことができる。さらに、ある程度誘導も可能で、発動から発射までの一定時間、光球状態で滞空させておくことも可能である。だが、一発だと戦士には避けられ、魔法使いには「障壁」で防がれるため、通常17発とか29発とか撃つ。

翳した手の手前に、放つ矢の分だけの魔力溜まり（これが待機状態の光球となる）が円を描いて出現し、そこからビームのように矢が出現（正確には転化）する。

「収束」型 「魔法の矢」を一点に収束させ、攻撃力に任せて一点突破を狙う。その分、回避されやすくなる。

「連弾」型 「魔法の矢」を何本も連続で放ち、回避不能にさせる。

「風の矢」 捕縛属性の矢。空気を用いて敵を拘束する。拘束した際、空気の縄が硬化し、石のように見える。攻撃力が低い。

「光の矢」 攻撃属性の矢。アブノーマルな一矢。

「魔法無効化能力」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：20 習得レベル：3

放出系魔法や召喚系魔法等の自身を対象とした攻撃（召喚したゴ

ーレムの攻撃も自分を対象としたと認識する）を無効化できる。

幻術のように一定空間自体に作用する空間系魔法の無効化は、自身を対象としていないので、無効化できない。また、惚れ薬も攻撃（害意）がないので無効化は出来ないようである。「召喚」や「強制転移魔法」は、空間系魔法に分類されているため無効化できない。「第一部／四章／八話」では、謎の襲撃者に「一方通行」の力で拳を防御、又は手に触れられることで「血流の逆流現象」が起こることを危惧したために使われた。

「まほネット」

世界観：「魔法先生ネギま！」

魔法界のコンピューターネットワーク。

「蜜」

世界観：「おおかみかくし」

威力：なし M P：0（常時展開型） 習得レベル：1

「有力者」にのみ感じることで、性的興奮を誘発する。

「未来予知」

世界観：

威力：1000 MP：50 習得レベル：18

未来を予知して、未来の相手に向かって「神通力」を送る。外れることが、しばしばある。

「「ミンチ用のお肉の処理法」、何度も叩き潰しましょう」

世界観：「シーキューブ」

威力：500 MP：30 習得レベル：3

人間が振るう腰の入った長柄ハンマーでの一撃数十人分を一つに纏めた衝撃に匹敵する威力がある。

「無極而太極斬」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし MP：40 習得レベル：40（解禁）

「気」と「魔力」を切る技。無極にして太極有り。

太極図では動によって陽が生成される。動は極まって静になり、静は陰を生じ、静は極まって動になる。動と静は太極図の根本である。太極図では陰と陽の両者が共に存在し、そして合わさることにより、水、火、木、金、土の五気が生まれると考えられている。五気が組み合わせることによって四季が生まれる。五行は陰陽から生まれ、陰陽は太極から生まれ、太極は常に無極である。

つまりは、無極↓太極↓両儀という流れ。

「無音めくり術」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：30 習得レベル：40（解禁）

相手のスカートなどを一瞬にしてめくってしまふ。相手がこれを事前に察知することは不可能。

さらに上は、「無音脱がし術」がある。

「無制限対戦」

「レベル」に関係なく、コンピューターが無差別に選り出した相手と戦うシステム。

「燃える天空」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：45000 M P：200 習得レベル：40（解禁）

一定空間内に超高温の炎を発生させる広範囲焚焼殲滅魔法。弱した手の手前の空間に発生する。

「モンスターボール」

世界観：「ポケットモンスター」

耐久力：300

「ぼんぐり」と呼ばれる木の実の中身をくり貫き、特殊な装置と「キャプチャーネット」と呼ばれる捕獲網を仕込んだ物。

相手の質量、体積は関係無いが、「キャプチャーネット」が破られると捕獲不可能となる。開閉スイッチを操作して中のものを出し入れする。中央にあるボタンを押すことで、小型化することが可能。「第一部／六章／二話」では生き物ではなくバリケードを収納していた。また、「第一部／六章／四話」で近藤が言っている通り、「モンスターボール」の開閉場所を操ることで相手との間合いをとることに役立つ。

【や行】

「破れぬ誓い」

世界観：「ハリー・ポッター」

威力：なし MP：500 習得レベル：40（解禁）

2人が跪くように向かい合って座り（別に3人でもかまわない）、手を握り合う。それから「結び手」と呼ばれる保証人が、握り合っ

た手の上に杖の先を置く。2人が口頭で約束を交わし、互いが合意することに、杖先から細い舌のような眩しい炎が飛び出し、灼熱した赤い紐のように2人に巻きつく。この巻きつきが完了すると誓いが成立する。

この誓いを破った者は死ぬ。

「闇の魔法」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：なし M P：30（常時消費型） 習得レベル：60

敵に仇成す攻撃魔術を敢えて自らの肉体に取り込み、零体にまで融合する、術者の肉体と魂を喰らわせて、それを代償に常人の倍する力を得ようという狂気の技。

「童姿の闇の魔王」、「悪しき音信」、「禍音の使徒」、「闇の福音」と呼ばれたある吸血鬼の真祖が生み出した禁術である。

「光は闇を生み出せないが、闇は光を生み出せる。闇は光に対立するものではない。闇は諸々の事情をその内に抱いていた源であり、絶対な包容力を持つ。そして、この絶大な包容力こそ、善悪、優劣、自他あらゆる対立を取り込む力となる」といった考えからきており、善も悪も、強さも弱さも、全てをありのままに受け入れ、飲み込む力が、「闇の魔法」である。

「有力者」

独自の世界観に則り、現実には縛られず、異能の力を有する者。俗に、「世界観」を展開させることのできる者のことを言う。

「四つ身分身 朧十字」

世界観：「魔法先生ネギま！」

威力：1500 MP：40 習得レベル：40（解禁）

気配、密度、攻撃の重みまで、本体と同等の分身を四つ作り、対象の左右前後から同時に掌底をすれ違い様に叩き込む。技の軌跡が十字を描いている。

「読み上げ耳」

世界観：「魔法先生ネギま！」

耐久力：50

文章を読み上げる魔法具。耳が悪い人のために作られた物で、たいてい貴重ではない。

【ら行】

「ライダーキック」

世界観：「仮面ライダーカブト」

威力：2000 MP：100 習得レベル：10

波動に変換したタキオン粒子を脚に集中して放つ。

「ライダーフォーム」

世界観：「仮面ライダーカブト」

「cast off」を経て変身する第二形態。「clock up」及び必殺技が使用可能になる。

「リミッター」

レベル40以上のプレイヤーに与えられる機能。通常のプレイヤーは、「世界観」による能力発動は、その「世界観」の主人公的人物が理論上可能なものに限られる。だが、レベル40に達した者は、脇役や敵役の能力も制限付きで使用する事ができる。その制限、というのが「リミッター」である。「リミッター」を「解禁」している間は、気力と体力が同時に削られる。それ自体別に構わないのだが、一々「解禁」と口にするのが面倒くさい。一対一の戦いでは、その間に攻められかねないという弱点があるが、そこを突かれることはほとんどない。

「レベル」

「有力者」のもつ力の強さを示したもの。1〜100まであり、一般的な「レベル」は20代。「解禁」可能となると使える技の量が一気に増えるので、レベル40というのは一種の壁となっている。

【わ行】

「ワープ航法」

「トキュー特区」が周囲を覆う森を通らずに外へ移動するために作り出した空間移動の方法。

用語集 まゝわ行（後書き）

これを見て、わけが分からなくなった人は確認して下さい。まだ未
完成なので、さっさと完成させます

ジャポン暦（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「気」とか、不思議な世界設定とかは「一覧」のどちらに含まれるのでしょうか？

A 「技一覧」に含まれます。

↳ そのうちいつしよこたになって、「あかさたな」で区切ることになるけどね。

ジャポン暦

ジャポン暦

- 120	ジャポン国内に独立国が多数出現
- 20	各国が独自に大国への大使派遣開始
- 3	ジャポン国内統一開始
- 1	ジャポン国内統一終了
0	ジャポン帝国成立
1000	トーキュー特区成立
1015	トーキュー特区への留学開始
1880	第一次世界大戦 ジャポンは未戦闘
1945	第二次世界大戦 ジャポンは未戦闘
2120	第三次世界大戦 ジャポンは未戦闘
2200	トーキュー特区がワープ航法確立
2221	トーキュー特区が国際技術開発特区に指定
2230	ジャポン国内、トーキュー特区内にそれぞれ一箇所ず

つ、ポートゲート設置

2240 世界主要都市8箇所にポートゲート設置

2260 民主主義国家ジャポン成立

2280 復古の乱

2281 復古の乱鎮圧

現在に至る

ジャポン暦（後書き）

話が進めば、ここも更新します

一章 事の起り / 一話 レベルを上げよう(前書き)

《なぜなに?》

A 年表とか作っていますけど、ちゃんと活躍するのでしょうか?

Q ちゃんと活躍します。が、最初は確かに出番はありません。
ゝというか、第二部まで出番なしかも?

一章 事の起り / 一話 レベルを上げよう

子供は学校に行く。

これは、いつの時代でもそうなのであろう。

現に西暦22××年の今でも、こうして未成年の僕らは、毎日学校までの徒歩で登下校している。

2100年代当初は、通学は一週間に一回になり、授業は基本ネットを使った通信教育だった。が、その後青少年の犯罪が大幅に増加したため、また、セキュリティシステムが強化され、交通事故の心配、通学途中の誘拐の恐れがなくなり、人間としてのコミュニケーション能力を鍛える、という名目で学校制は復活した。

学校制が復活したおかげで、子供は親の目から離れられる空間と時間を得、親は常に子供の世話をする、という重労働から解放された。そのため、学校制の復活は大きな問題もなく、すんなり社会に受け入れられたのだ。

こうして、俺達は今日も学校に通っている。

「まったく、なんで今更学校なんだろう？ 科学万能の時代、科学万能の23世紀なのに」

俺の隣を歩く高田一史^{たかた かずし}が愚痴る。

「まあまあ。そんなこと言っても、未成年の俺らには何の力もないわけだし」

俺、山下宏治やました こうじは、科学技術が行き届いたまっすぐな学校までの道を歩きながら答えた。

「でもさ、本当に、なんで学校にわざわざ歩いてまで行くんだ？」

ネット使えば授業ぐらい出来るのに」

「だから、ほら、あれだよ。」

『生物は無機物からは何も得られない。有機物である我々人類が何かを学ぶことが出来るとしたら、それは同じ有機物からでしかない』ってやつだよ。で、誰の言葉だっけ？」

一歩進むだけで10メートル移動できる科学技術様々の特殊な道路の上を進む。学校制は復活したものの、学校自体の数は大幅に減少した。その分子供の数も減少しているのだが、学校までの道のりが長くなってしまった。そのため、帰宅後に友人と遊ぼうというときは、大抵リアルではなくバーチャルの世界で行う。

「近藤美紗緒こんどう みさおだよ。この前試験に出たろ」

現代史の成績のいい一志は答える。

「そうだったっけ？」

「そうだ。で、昨日はどうだったんだ？」

「ん？」

「『パーソナル・リアリティ』だよ。あの後、『無制限対戦』でやってたんだろ」

「無制限対戦」とは、レベルに関係なく、コンピューターがランダムに選んだ相手と対戦できるシステムだ。

昨日、一志達といつもの通り「能力制限チーム対戦」という、強制的に一定レベルに能力を統一された状態でプレイするモードで遊んだ後、一人だけ残ってレベルアップのために「無制限対戦」に口グインしたのだ。

「ああ、ちゃんと勝ったぞ。」

相手は『ドラゴンボール』使いだっただけ、まだ軌道を操れるほどじゃなくてさ、勝負は一瞬だった」

「で、『^{マギア}闇の魔法^{エレベア}』（*魔法先生ネギま！）は手に入った？」

対戦の成績で経験値が貯まり、能力値の上昇や、技の獲得、レベルアップをすることができる。

「闇の魔法」は使用者の体力と気力を同時に大幅に削り、使用中に負けると、一週間使用不可能になる最上級魔法だ。

「いや、まだまだよ。そんなに簡単にアレは手に入らないよ」

「そうか。手に入ったら見せてくれ。使って弱つてるところを叩いて、一気にレベルを上げる」

「お前な……」

クラスメイトは25人。21世紀のころと比べたら、少なめの人数だ。

教室に入って自分の席につく。

暫く友人と他愛もない会話をして、ホームルームまでの時間を潰す。

会話すること自体は、リアルもバーチャルも変わりはない。違うのは、突っ込みに武器や魔法が使われないことだけだ。

「なあ、今日皆で1対3やらね？」

友人の松山健一^{まつやまけんいち}が提案した。

「1対3って、もちろん俺が1なんだよな？」

「当ったり前だろ」

「でも、何で突然」

最後の一人、羽河卓司^{はねかわたくじ}が聞いた。

「レベルが高い奴と戦った方が経験値が多くもらえるだろ。それに、複数人を相手にしても多くもらえる。もう少しレベルを上げときた

いんだよ」

もう少しすると、「パーソナル・リアリティ」で初のランキング戦が行われる。それに向けての調整がしたいのだろう。

「よし。じゃあ、そうしよう」

決定と同時に、ホームルームを知らせるのチャイムが鳴った。

一章 事の起り / 一話 レベルを上げよう(後書き)

本編です。次回はバトルなので、楽しみにしてください。

一章 事の起り / 二話 これが、バトルだ（前書き）

《なぜなに？》

Q 「闇の魔法」は、チートの布石ですか？ それと、この主人公はチートなのですか？

A 違います。チートではありません。一章・二章目辺りはそう見えるかもしれませんが、違います。

ゝだって、主人公まだ限界レベルの半分もいってないしね。

一章 事の起り / 二話 これが、バトルだ

「3、2……」

ゲーム開始を知らせる音声が始めた。

両足に意識と魔力を集中する。

3人との距離は約10メートル。

——まずは一気に距離を詰めて、一人潰す！

「……1、スタート！」

重心を前に倒す。

つま先に力を込めて、「瞬動術」。

「残念」

「っな……」

体が後方に押し返された。

——決して強い力じゃない。だが、完璧に出鼻を挫かれた。

目の前を確認する。目前に迫っているのは健一の右腕。けんいち

健一の「世界観」は「ポケットモンスター」だ。ポケモンが使う

技を、自分の体から繰り出している。

おそらく技は「ネコ騙し」（*ポケットモンスター）。威力は低いが、絶対先制。また、必ず怯ますことができる。初回限定の奇襲技だ。

押し戻された体をそのまま、「瞬動術」で後方に飛ばした。

——まずは体制を立て直す。そのためには、あいつらと距離を開ける必要がある。

「change beetle」

再び「瞬動術」に入ろうと思ったとき、電子音と共に前方から何かの塊が複数飛んできた。

常時展開している「対物・魔法障壁」アンチマテリアルド（*魔法先生ネギま！）でダメージを緩和する。

卓司たくしが「マスクドフォーム」（*仮面ライダーカブト）から「ライダーフォーム」（*仮面ライダーカブト）へと「cast off」（*仮面ライダーカブト）したのだ。さっき飛んできたのは、「cast off」したときに脱ぎ捨てた「マスクドアーマー」（*仮面ライダーカブト）だ。フォームを変えることで、耐久性が下がる代わりに、攻撃性、俊敏性が極端に上がるのが、卓司の「世界観」、「仮面ライダーカブト」特徴だ。

障壁が消滅したのを確認する。「cast off」によって飛ばされる「マスクドアーマー」はそのスピードにより、かなりの威力を所持することになるのだ。直に受ければ、レベル差20といえ

どもただではすまない。

前方に集中する。おそらく卓司は、「clock up」（*仮面ライダーカブト）して一時的に超高速に入り、事実上卓司の現在の最大攻撃「ライダーキック」（*仮面ライダーカブト）をこちらが反応する前に決めるつもりだ。

対処法はある。

「clock up」は制限時間があるものの、常時超高速に動くことが可能であるのに対し、「瞬動」は一瞬しか高速で移動できない分、いくらでも行うことができる。そして、「ライダーキック」は大技の為、そう何度も使える技じゃない。

「ライダーキック」をヒット直前に「瞬動」でかわすことが出来たら、攻撃呪文をその背中に叩き込んでやればいい。

それに、こちらは「ライダーキック」を受けたからといって、一撃でやられるわけではないのに対し、向こうはこれを外せば後がない、という精神的余裕が違う。

卓司に動きはない。

と、次の瞬間、卓司の体が消えた。

だが、衝撃はない。

訝しんでいると、背後に風圧を感じた。

「『デフレクシオ風盾』（*魔法先生ネギま！）……」

とつさに障壁を展開する。

「ライダーキック」

電子音と共に卓司の必殺の一撃が、障壁を貫通して俺の背中を直撃せんと迫る。

だが、障壁を突破した為に、わずかに直撃が遅くなる。

そのわずかな隙に、俺は「瞬動術」にはいった。

「つく……」

「ライダーキック」を紙一重で避け、そのまま卓司ではなくすぐ後ろにいた健一に体当たりをした。

「うわ！」

耐久性の低い健一はこの一撃でノックアウト。

そして、卓司に右手を向ける。

「『魔法の射手、サギタ マギカ セリエス フルゲ連弾・雷の17矢』！」

雷を纏う魔法の矢が卓司を至近距離から襲う。

「『結』！」

ギカ突如卓司を庇うように直方体の結界が足元から現れ、「魔法の射サギタマ

手」を防ぎ、俺を別の結界で覆う。

「『結』！」

さらに、卓司の下から結界を立ち上げることによって、卓司を上空に戦闘離脱させた。

一志の「世界観」は「結界師」だ。自分一人だけの力で空間を一から作り上げる能力。といっても、一志が使えるのは「間流結界術」(*結界師)という使いやすく整理された「結界術」(*結界師)の一つの方式だけだが。

それでも、位置さえ分かればどこでも結界を作り、圧縮することによって内部の者を潰すことができる、理論上は厄介な技だ。

俺は『パクティオーカード』(*魔法先生ネギま!)を取り出した。

「『アデアット』(*魔法先生ネギま!)」

一言呪文を唱えると、あら不思議、カードが身の丈以上の片刃の大剣に早代わり。「ハマノツルギ」(*魔法先生ネギま!)。つまり「破魔の剣」。魔法攻撃、気弾攻撃を完全無効化し、召還された者を強制的に送り戻す力を持っている。

「ハマノツルギ」で結界を切り、周囲に意識を集中させる。

健一を倒した以上、さっきのような奇襲はもう使えない。さきほどは、健一が卓司と共に「レポート」(*ポケットモンスター)で背後に回ること、俺の裏をかいた。

だが、一志の能力ではそんなことはできない。又、この剣がある限り、一志は攻撃手段がないのと同様だ。となると、必然的に卓司が攻めてくることになる。

卓司の気配を探っていると、突如、頭痛を感じた。

頭を抑えて、膝をつく。

と同時に、体の関節が動かなくなる。

——まずい。

気づいたときには、卓司の「ライダーキック」を受けて、体力が減るのを実感していた。

——そういうことか。

なぜ、「テレポート」で健一自身も俺の背後に飛んだのか。

なぜ、卓司の「ライダーキック」が外れた後、「clock u^p」せずに逃げたのか。

全ては、確実に、最大限の力で俺にダメージを当てるためだ。

吹き飛ばす体に意識を戻しながら推測する。

この頭痛は、健一の「未来予知」（*ポケットモンスター）だ。「未来予知」は、未来を予知して、その未来に向かって攻撃をする。そのため、俺に近づく必要があったのだ。距離が離れれば離れるほ

ど、未来への干渉は難しくなるから。

そして、関節が動かないのは、一志のせいだ。おそらく、体の主な関節に小さい結界を張って、空中に俺の体を縫いつけたのだ。

そうして、完全に体勢を崩された俺に、卓司は「ライダーキック」を最大出力で打ち込んだのだ。

「『アベアット』（＊魔法先生ネギま！）」

現状を把握した俺は、「ハマノツルギ」を「パクティオーカード」に戻す。

「『アデアット』」

今度は、傷を癒す「東風の檜扇」である「コチノヒオウギ」（＊魔法先生ネギま！）を取り出して、体力を回復する。

「卓司、今ので決めなかったのが、敗因となりそうだな」

体力全開で呪文を詠唱する。

ト・シュンボライオン デイアーコネットホ・テユヲホス
「契約に従い、我に従え炎の霸王」

一定の空間内に超高温の炎を発生させる高等魔法。

エビゲネツカス カタルセオリス ギネー ロンファイア
「来れ浄火の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよソドムを焼きし」
レウサントーンビュール・カイティネン

相手は二度の最大攻撃で気力はほとんど残っていない。

「ハ・エベフレボス・ハマルトール・エイス・タナユ
火と硫黄、罪ありし者を死の塵に」

レベル差20以上もあるわけで、当然逃げれるはずもなく。

「ウーラニヤ・フロゴシス
燃える天空」（*魔法先生ネギま！）！」

卓司と一志が真っ黒くろ焦げになったかどうかを確認する間もなく、ゲームはあっけなく力押しで終了した。

一章 事の起り / 二話 これが、バトルだ（後書き）

バトルでした。結構時間かけてしまいました。

一章 事の起り / 三話 ランキング戦（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「ポケットモンスター」の「特性」って、どうなるのですか？
それと、バージョンによって「物理」か「特殊」が変わると思いますが、その辺りは？

A 「特性」は「解禁」で手に入り、一つの「技」としてカウントされます。「物理」と「特殊」の区分けは初期のバージョンが基本です。

「最近どーなってるか分かんないんだよね。」

一章 事の起り / 三話 ランキング戦

「あんな技、喰らったら負けるに決まってるだろ！」

一志が俺に怒鳴る。
かずし

「いやー、つい本気になっちゃった」

頭を掻きながら、俺は答える。

先ほどの対戦から数分後、俺達は「ウエイトルーム」に集まっていた。

「パーソナル・リアリティ」の世界は、主に三つに分かれている。

一つ目は、さっき俺達が戦っていた「バトルワールド」。対戦者同士が同意の上にバトルする対戦専用の世界。

二つ目は、このゲームの主軸ともいえる「アドベンチャーワールド」。文字通り、冒険の世界だ。町あり、山あり、ダンジヨあり、ラスボスあり。このゲームはレベルを上げて、ラスボスを倒すのが本来の流れだけど、それに従う必要はない。実際、「アドベンチャーワールド」は現実世界の丸写しのような世界だ。八百屋があれば、交番もある。ご近所付き合いもあれば、仲違い中のやな奴もいる。違うのは、全員が何らかの力を持っているということだけだ。「パーソナル・リアリティ」内の人は、大抵そこにいる。

三つ目は、今俺達がいる「ウエイトルーム」。この場所は、「バトルワールド」で戦闘を終えた者と、「アドベンチャーワールド」

で体力がゼロになった者が運ばれてくる。ここでは能力を使うことはできず、もちろん戦闘も不可。「ウエイトルーム」は、ロード中の待機場所といったところだ。

「それはそうとして、この後どうする？」

卓司^{たくし}が聞いた。

「そうだな。もう夜も遅いし、今日は帰ろう。」

そろそろ内の家では夕食の時間だし。あまり遅くて、接続を切られても困るしな」

俺がそう答えると、解散の流れになった。

数日後、俺達は「ウエイトルーム」に集まっていた。

集まっているのは俺達4人だけではない。俺と同じ高校の生徒も、現実のご近所さんも、会ったことも見たこともない人も大勢いる。

これから、「パーソナル・リアリティ」で初のランキング戦が行われる。

ここに集まっている人のほとんどが、そのランキング戦に出場する。中には、観戦目的の者とか、唯単にロードを待っているだけの者もいるけど。

「お待たせしました」

脳内に直接声が響く。

「これより、『パーソナル・リアリティ』内でのランキング戦を行います。」

当初の予定通り、一回戦は『バトルワールド』においてバトルロイヤルを行い、参加者を100名に絞ります。この段階で戦闘不能になった者には、ランキングが与えられませんので、ご注意ください。安全のため、一回戦が五時間以上続いた場合は、一時中断とさせていただきます。体力、気力の変化を記録し、翌日、その状態から再戦とさせていただきます。

二回戦からは、トーナメント式を採用します。このとき、各順位決定のため、体力、気力の消耗率が順位決定の資料となる場合もありますので、ご了承下さい。

今回行うランキング戦による順位は一時的なもので、予定では、ランキング戦を二ヶ月に一回の調子で一年間行い、それを正式なランキングとします。その後もランキング戦は同様に行い、その結果に伴ってランキングを変動させます。

それでは、時間です」

一章 事の起り / 三話 ランキング戦（後書き）

そろそろ、物語の本筋に入れそうです。
気長にお待ち下さい。

一章 事の起り / 四話 一回戦（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 主人公の実力は一体どのくらいなのですか？

A 同じ学校に通う生徒で相手になる人はいません。それどころか、同じ町の中でも敵う相手はいません。ですが、上には上がいます。ゝレベル的には上の中の下といったところかな？

一章 事の起り / 四話 一回戦

「移動します」

アナウンスと同時に、空間転移する。

一瞬何も見えなくなり、すぐに視界が開ける。

見えてきたのは、形がまちまちのコンクリートの塊。

「一回戦、展開世界、『二十世紀末の大都市』」

足がコンクリートを踏みしめる。濁った空気を吸い込む。

「開始です」

周囲に目を走らせる。誰もいない。

まずは近くのビルに侵入する。

自動ドアはなく、手動ドアを手で押し開けて入る。エレベーターではなく、階段を使って屋上を目指す。

まずは視界の確保。だからといって、跳ぶわけにはいかない。途中で迎撃されれば即座にノックアウトもありえるのだ。存在をしなければ、無駄な戦闘は省ける。このゲームはバトルロイヤル。無駄な力は使わず、温存するに限る。

ビルの屋上に着いた。

「二十世紀末の大都市」は、一応ビル群ではあるが、大きさが整っていない。また、所々に木製の家屋も見受けられる。区画整理が行われているのは中心だけで、その周りには大小様々なビルをただ寄せ集めただけのようだ。

深呼吸。

——やはり、空気が汚い。

わざわざこんなところまで再現しなくてもいいと思うのだが。

所々で煙が上がっている。誰かが戦闘しているのだろう。

俺はもう一度周囲に目をやる。

一志達は今頃どうしているのだろう。この旧東京にいるのは確かなのだが。

マップを開く。目の前に旧東京の地図が浮かび上がった。今回の範囲は旧東京の東京都内。端まで行くと、ワープして反対側に飛ばされる。

「あ、そうか」

俺はマップを畳んだ。

いつもなら、一志^{かずし}達は仲間申請してあるのでマップ上に位置が示される。だが今回はランキング戦。仲間申請は意味をなさない。

空を見上げる。この「パーソナル・リアリティ」の世界は、一応宇宙まで再現されているそうだ。一体誰がそこまで行くんだ、とか思っけど、まあ、別に困ることはないし。

ふと、足元に注意を向ける。

「『八番機構・碎式円環態《フランク王国の車輪刑》』（*シーキューブ）、禍動」

突如、足元から車輪が飛び出した。

コンクリートの床を粉碎しながら現れたそれは、そのまま俺に向かって襲い掛かる。

「カントウス ベラークス『戦いの歌』！！」

自分の体に魔力を供給する。

「ふん！」

右手を前に出し、車輪を止める。

——しまった！ とつさに自分の手で止めちまった！

「『十四番機構・搔式獣掌態《猫の手》』（*シーキューブ）、禍動」

車輪が変形する。

現れたのは、猫の爪を模したら5本のカギヅメがついた大きな孫の

手。

「『魔法マジカの射手マギカ、光ウチの一矢ルクス』！！」

破壊属性の「光の矢」を放つ。

「光の矢」は孫の手の中心に当たって、粉碎する。

「『十九番機構・袂式螺旋態《人体穿孔機》』（*C3）、禍動」

居場所の分からない相手は臆せず攻撃を続ける。

現れたのは、全長178センチの巨大なドリル。それが、槍のように飛んでくる。

——まずい。相手は少なくともレベル30代。

体を前に倒す。

「瞬動術」。

ドリルを交わし、その背後に回る。

「つく、『五番機構・刺式佇立態《ヴラド・ツエペシュの杭》』（*シーキューブ）、禍動」

正体不明の敵は、少したじろぎながら、現れた巨大な杭を俺に飛ばす。

杭が俺に届くよりも早く、俺は最初の車輪が現れた床の穴から中

に飛び込んだ。

「風の精霊」ウンデキムビルトウス・アエリアウレスクルム・フアクティイニミクナブデント 11人、縛鎖となりて敵を捕まえろ、
「魔法の射手、戒」サギタ マギカ アエール・カブトゥーラエ
めの風矢』（＊魔法先生ネギま！）！！」

捕縛属性の「風の矢」を周囲に11本放つ。

——対象の位置は掴めていないが、近くにいれば捕まえられ
る。それが無理でも、何らかの反応はあるはず。

土煙が晴れてくる。

うつすらと対象のシルエットが浮かび上がった。

——居る！

「風の矢」11本をそのシルエットに軌道変更。

すぐさま、「風の矢」がシルエットの人物を捕らえた。

「悪いけど、このままリタイヤしてもらっよ」

俺は呪文詠唱を始める。

「『解禁』！」

捕らわれの誰かさんが「リミッター」を解除した。

「っなに！」

「リミッター」は、レベル40以上のプレイヤーに与えられる機能だ。通常のプレイヤーは、「世界観」による能力発動は、その「世界観」の主人公的人物が理論上可能なものに限られる。だが、レベル40に達した者は、脇役や敵役の能力も制限付きで使用することが出来る。その制限、というのが「リミッター」なのだ。「リミッター」を「解禁」している間は、気力と体力が同時に削られる。それ自体別に構わないのだが、一々「解禁」と口にするのが面倒くさい。一対一の戦いでは、その間に攻められかねない。

11本の「風の矢」は一度は対象に巻きついたが、次の瞬間木っ端微塵に粉碎された。

「『術法・藍蠱』（*シーキューブ）」

全身が藍色の水銀のような金属質のが突如現れる。

「殺れ」

蠱毒達が鋼鉄の体で襲ってくる。

「光の矢」を撃って応戦するが、相手にはそれぞれ意思があり、なかなか仕留められない。

「つく、エウオカーウアルキュロアトルナルナーガヲデアーロアトラザーゲネント『風精召喚』剣を執る戦友、迎え撃て（*魔法先生ネギマ！）！」

風の中位精霊による自分のコピー。意思を持つ藍蠱に対して、回避行動が可能なコピーを向かわせる。

「サウエレンティ・パーフェクション・ドール『王権を果たす完全人形』（*シーキューブ）」

シルエットの人物がぼそりと呟く。

と、同時にコピーが方向転換して、こっちに向かって来た。

「『王権を果たす完全人形』は、人型の物なら何でも操ることができる」

「ご丁寧に説明してくれるが、そんなことに耳を貸している暇はない。」

「『リームス・アエリアリス風陣結界』（*魔法先生ネギま！）」

魔法陣を描いて結界を張り、攻撃を防御する。

「『ウエンデ風よ』（*魔法先生ネギま！）」

風を身に纏い、次の攻撃に備え体を保護する。

相手が悪い。レベル40以上となると、真つ向勝負をせずに、回避するに限る。

「『ウエルタートゥルテンベスウエスリースーピス逆巻け、春の風、我らに風に加護を、フランス・パリエウステンティ・ウエルテンティス風花旋風風障壁』（*魔法先生ネギま！）」

続いて、竜巻のような風の障壁を作る。

「逃げるだけ？ それでも男？」

挑発を受ける。

——言ってくれるね。それなら。

「『解禁』」

「リミッター」を解除する。

「やっと本気？」

「楓忍法、『四つ身分身 朧十字』（*魔法先生ネギま！）……！」

コピーではない、自分の分身を4人作り、四方同時攻撃。

相手はこちらの攻撃に備え、構える。

「秘技・『無音めくり術』（*魔法先生ネギま！）」

「つな、なんて破廉恥な！」

分身攻撃はフェイク。

本当の狙いは、相手のスカートをめくること。

スカートの端を押さえながら、相手の女の子が叫ぶ。

土煙の中、魔力供給によって得られた視力で確認したのは、相手が女の子で、スカートを履いていたということ。これだけだと変態のようだが、戦闘において精神錯乱は重要なキーだ。

「まあ、『男』だし」

「そういう意味じゃないわよ」

一章 事の起り / 四話 一回戦（後書き）

遅くなりなした。

そろそろ本筋に入らないとまずいかも。

一章 事の起こり / 五話 VS「シーキューブ」(前書き)

《なぜなぜに?》

Q 主人公がスカート捲りをしていますが、電子世界でもパンツは履いているのですか?

A 履いています。電子世界、つまり仮想現実内に入るときに、「カプセル」の中のスキャナーによって全身をスキャンされ、そのときの体調から体格、服装等がデータとして持ち込まれます。

↓だから仮想現実内の人間は変な格好していないんだよ。

一章 事の起り / 五話 VS「シーキューブ」

少女と対面する。

今だ、スカートの裾を持って俺を警戒する少女に向かって提案する。

「戦うのは止めにしないか？」

「っふ、ふざけないでよ！」

きつと俺を睨む。

気の強さと、長い黒髪がキャラを成り立たせている。たぶん。

「そうか？ でも、俺らが戦ったら消耗が激しいと思うぞ。勝っても負けてもな」

俺は余裕っぷりを演出しながら語る。

「『リミッター』持つてゐるってことは、レベル40以上ってことだろ。ここで潰しあってもお互いにメリットはないと思うぞ」

「スカート捲るような奴に言われても、説得力ないんだけど」

「は、は、は……ふん！」

俺は「ハマノツルギ」をその首筋に当てる。

「つく……」

「現状認識は大切だよ。せっかく手を引こつて言ってるんだ。素直に受け入れるべきだと思うけどね」

威嚇程度に魔方陣も張っておく。

「共に意義のある選択をしようじゃないか」

黒髪少女は俯く。

そして、ぼそりと呟いた。

「つぶ、馬鹿ね」

「つく、やられた」

俺は呟きながら再度、竜巻による「風障壁」を張る。

相手の「世界観」に関してまったく知識がなかったことが失態の原因だ。

本来ならここで相手の「世界観」を調べたいところだが、あいにく、そんな暇は与えてくれないようだ。それなら、起きた事から想像するしかない。

数秒前の出来事を思い返す。

「ハマノツルギ」を彼女の首筋にしっかり当てていた。そして、突如右腕に力が入らなくなった、否、正確には痺れたのだ。おそらくこれは相手の能力。

突如襲った重度の痺れに手を放してしまい、防備用の結界も、威嚇用の魔方陣も、「ハマノツルギ」のマジック・キャンセル能力でかき消してしまった。その間に黒髪女は自身の髪を伸ばして、俺に絡み付けてきた。こちらが髪の毛に視界と新鮮な酸素を奪われている間に（酸素を吸う行為を行わないと、急激に能力が下がる設定がある）、自身はより髪を伸ばして距離をとっていた。

「風障壁」の上にさらに、10ほどの魔方陣を展開して、「最強^{クワティース}テ・アイギス防護」（＊魔法先生ネギま！）を張る。

——これでどんな能力だとしても、少しは時間が稼げるはずだ。

右手を目頭の上に持っていていき、とんと叩く。

すると、目の前にパーソナル・コンピュータ（俺達は端末と呼んでいる）の画面が広がった。同時に浮かび上がったキーボードを打つ。

「機構」、「禍動」、「王権を果たす完全人形」……

……、でた。

「シーキューブ」。負の思念を取り込んだ道具は呪われた道具と呼ばれ、呪いを持つようになる。それが酷くなると、道具が人にな

ったりする、らしい。興味ないけど。どうやら最初に攻撃してきたのは変形する謎の物体は、32の拷問処刑道具に変身できる「箱形キョウボウの恐禍」の能力のようだ。

——つまり、基本は物理攻撃だが、呪いを使うことにより遠距離攻撃、最悪の場合は障壁を無視して直接ダメージを受ける可能性もある、ということか。

直接遣り合うのは危険。かといって距離をとっても同じ。

接近戦は向こうの十八番。遠距離戦では未知の呪いで狙い撃ち。

さきほどの「箱形の恐禍」の攻撃を思い出す。あれが彼女の基本攻撃。そして、調べたところによると、その他の「解禁」による攻撃も、基本的に打撃系。だけど、こつちにはまだアレがある。

「こらー、出てきなさい！」

竜巻の外から怒鳴り声が聞こえる。

時間を確認。そろそろ「風障壁」が消える。

両足に魔力を集中させる。

アルティス・スベチーアリス ノク テイクルス シネカントウ・クラウイネウエシダト
「特殊術式「夜に咲く花」、無詠唱用発動鍵設定、キーワード「風精の主」！――」

「遅延呪文」の詠唱。

ケントウホト・ウーヌス スピーリトホス・カシキス イニミクサギテント
「光の精霊101柱、集い来たりて敵を射て、魔法の射手、集束・」

ゲンティア・ルークム
光の101矢』！！」

101本の「光の矢」を集束させる。

『ディラティオー・エフェクトゥス
術式封印！！』」

来るべきに時に備えて、「光の矢」を封印。

風障壁が薄くなっていく。

——…限界か。

「やっとこの竜巻、晴れてきたわね。いいかげん男らしく、いや、
違ったわね。紳士らしく正々堂々勝負しなさい。こっちから行くか
ら」

——待つてました！

俺は腰を落として、次の体勢に備える。

「再現、『ミンチ用のお肉の処理法』、何度も叩き潰しましょう
(＊シーキューブ)。行くわよ」

目の前の竜巻が晴れる。

まだ残っている薄い風の幕を切れ裂いて、彼女は突っ込んできた。

左手にルービックキューブ。右手に……包丁？

柄の長いハンマーと槍が合体したような姿で、先端には牛包丁が

ついている。

それを、彼女はただ振り下ろした。

「……………」

——重い。だが、それだけだ。障壁で緩和すれば何ら問題はない。

「どうした？ 全然効いてないぞ」

「再現、『「雑で豪放な食材の断ち方」、乱切りにしましょう』」
*シーキューブ）

彼女がぽつりと呟く。

すると、突如、衝撃が急激に大きくなった。

「な……………」

障壁が突破されるのを感じる。

とつさに後ろに飛び退いた。

足元を見ると、ぽっかり床が粉碎している。

「っち」

——いや、「っち」って。これ、当たったらまじでヤバそうなんですけど。

彼女は包丁もどきを持ち上げると、再び振り降ろす体勢にはいつた。

「っげ、『解禁』、『気合防御』（*魔法先生ネギま!）!」

気を体内に直接練り込み、防御力を瞬時に極限まで上げる。

「これでどう? って、なに素手で止めてるのよ!」

——そんなこと言われても。

「気合防御」は一種の裏技的技だ。すぐに効果を失う。

「『^{ルクス}光よ』（*魔法先生ネギま!）」

「きゃっ」

目くらましに光を発する。

後ろに下がりながら、目標を見失った包丁もどきの一撃を回避。

「っなら」

彼女は包丁もどきを横に振る。

「再現、『編執狂的な碎片の刻み方』、微塵切りにしましょう」
（*シーキューブ）」

縦横無尽に刃がブレて現れ、それぞれが暫撃を繰り出す。その数、
ざっと1000。

——って1000?!

「まじかよ。『獣化』（*魔法先生ネギま!）!」

自らの体に流れる妖怪側の血を目覚めさせることで、肉体を変化させて攻撃力、防御力、素早さ、等の身体能力を格段に上昇させる。

「つく……」

「あら、さっきまでの威厳はどうしたの？ 反撃でもしてみなさいよ。できるものならね」

暫撃の重みで、腰が落ちそうになる。

「……そうだね。『精霊^{デコイ}匣』（*魔法先生ネギま!）!」

1000の暫撃に襲われていた俺の体が消失する。

「え?」

「こっちだ」

彼女の背後に回る。

「つく、『三十番機構・開式鋭形態《花卉剣ベラゼツラ》』（*シリキューブ）」

左手に持っていたルービックキューブを、槍のような細い長剣に変形させる。そして、俺を振り返らずに、長剣を後ろに突き刺す。

「はずれ」

俺の体が消失する。

「小賢しい。これならどうよ！ 『解禁』、『教会区《奈落》』」
*シーキューブ）

彼女の体から黒い靄が染み出す。そして、周囲に広がった。

「消えろ」

彼女の真上にいた風の中位精霊による俺の複製を、触れただけで消滅させる。

それでも靄の広がり止まらない。どんどん周囲は彼女の出した闇に飲み込まれていく。

確かに、これではいくら複製を作って接近戦で攪乱させようとしても、すぐに消されてしまい、本体の位置がばれてしまう。

彼女は完全に自分のフィールドを作り出している。自分に絶対的に有利な状況を作り出している。

——今しかない。一撃で決める。

「瞬動術」で闇の中に突っ込む。

彼女はまだこちらの接近に気付いていない。だが、彼女の闇は確実に俺の「最強防護」を侵食していく。

「来たわね。って、うぐっ……」

「瞬動術」で彼女にタックルをくるわす。「瞬動術」は点から点へ高速で移動する行為。その間に障害物があれば、高速で衝突する。

不意打ちを受けた彼女は、防御に気が全然回されていない。

「最強防護」が完全に消滅した。闇が俺を侵食しにかかる。

その前に。

「《風精の主》、『解放』！」

拳を前に突き出す。

「『桜華崩拳』（*魔法先生ネギま！）！」

「魔法の射手」は拳にのせて撃つことができる。

崩拳に合わせて101本の「光の矢」を彼女の体に叩き込んだ。

「……っぐ」

彼女の体が真っ直ぐ吹っ飛ぶ。途中にあった建物に激突し、崩壊させても止まることはなく、彼女は飛び続け、3つのビルを倒壊させて、ようやく止まった。

「瞬動術」で近づいて、彼女を見下げる。

今は効いたはずだ。だが、これだけではレベル40を倒しきることではない。ここで追撃すれば、彼女を倒すことができるだろうが。

「何よ。情けなんかかけないでさっさとやりなさい。これはランキング戦なんだから」

これが現実だったら感動的シーンにでも発展しそうな状況だが、これはゲームなのでそんな風にはならない。

——でもまあ、格好付けるのも悪くはない。

いくつか候補をあげる。

「俺はお前を殺さない」。

——うーん。今までの関係が薄いので、あんまり重みがないな。

次。

「だから言つたろ。戦うのは止めにしないかつと」。

——微妙だな。ひねりもなんもない。

次。

「……………」。

ただ見下げる。

.....。

「.....」

「.....」

.....。

.....。.....

なんか、沈黙。

そうこうしている間い、彼女の方は少し回復したようで、右腕をこっちに向けて呟いた。

「『クーンズベリの死の屋敷』アベニュー14番地」(★C3)「

右腕から飛び出したのは長くて太いきの柱。

それを俺に向かって投げつける。

ひらりと格好よく交わすために、体を傾ける。

そして、目の前が真っ暗になった。

一章 事の起り / 五話 VS 「シーキューブ」(後書き)

前回に引き続き、対「シーキューブ」編でした。
なんとか本編に入れそうです。

期末テストがあつたので、久しぶりの更新となりました。
お待たせしてすいません。

次回からはようやく本編の入り口です。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 主人公が戦いの中でネットをしていましたが、そんなことが可能なのですか？

A 可能です。「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」のゲームはバーチャルゲームの一つであり、仮想現実人間を飛ばしているのは「カプセル」本体です。感覚としては、ウィンドウを二つ開いている感じになります。

〜といっても、実際そんなことする人はそうそういないと思うけどね〜。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 やました
宏治 こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃
「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御
「瞬動術」 による移動

備考 主人公

高校二年生

高田 たかた
一志 かずし

レベル 25

世界観 「結界師」

得意技 「結界」 による攻撃&防御

備考 宏治の友達

まつやま
松山 健一 けんいち

レベル 19

世界観 「ポケットモンスター」

得意技 特になし

備考 宏治の友達

はねかわ
羽河 卓司 たくじ

レベル 23

世界観 「仮面ライダーカブト」

得意技 「ライダーキック」による攻撃

「clock up」による移動

備考 宏治の友達

次章予告

一度は願う、現実からの逃行。

それは、彼らとて例外ではない。

望みが叶えられた時、その者が支払う対価とは？

次章、「現状」。

それはもう、遊戯ではない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

「次章予告」ですが、必ずしもその内容通りになるとは限りません。

また、「次章予告」は物語の全てを把握している作者からの視点で構成されており、その内容が次章のみで理解、判明するとは限りません。

「次章予告」の中に隠されるヒントを使って、布石を探してみてください。

すでに各所に最終話への布石が散りばめられています。

二章 現状 / 一話 転移（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「現状報告」には全てが書かれるのですか？

A いいえ。ネタバレにならない程度です。
ゝそりゃそうよねゝ。

二章 現状 / 一話 転移

——視覚を奪われた。

「——！」

見えない攻撃に備えて、体を硬くする。

「……………」

だが、攻撃はこなかった。

だからといって、油断はしない。

もしかしたら、こちらの視覚を奪っている間に大型攻撃の準備をしているかもしれない。

探知用の魔法を使おうとしたら、闇が晴れた。

鳥のさえずりが聞こえる。人々の活気付いた声が聞こえる。

周りを見渡すと、そこはさっきまでの場所と違っていた。

「……………市場？」

そこは、歴史の教科書でしか見たことのない、中世の市場だった。布で周りを覆っただけの粗末なテントが並び、人々が行き来している。

「幻術か？」

おそらく、幻術の類を掛けられているとみるのが妥当であろう。

一先ず周囲を確認しようと、歩き出した。

と、誰かに肩を掴まれた。

——来た。

振り返ると同時に、拳を握る。

「おいっ、君。そのポケットに何を隠しも——うっ……」

鋭い踏み込みと同時に、踏み込み足と同じ方の腕でパンチを繰り出し、「弓步冲拳」（＊魔法先生ネギま！）を放った。

「——あれ？」

足元にうずくまる人物が男性であることを確認する。

——間違えた。

途端に、悲鳴が上がった。

そこでやつと回りを見渡す。

俺の周りには、何故か人だかりができており、皆が俺を見て怯えていた。

「ひつ、人殺し！」

誰かが叫ぶと同時に、人々が血相を変えて逃げ始める。

「つつつ……」

足元の男性がうめき声を上げた。

そして、何故か偶々近くにいた少年に、首に掛けていたペンダントを渡した。

「これを、娘に……」

「……」

状況を理解できずに突っ立っていたら、突然、その少年が吼えた。

「来い、『？^{くろがね}鐵』（*アスラクライン）！」

——なっ……

突如伸びる少年の影。

そして、そこから巨大な真っ黒の鎧武者が姿を現し始めた。

「『闇より深き深淵よりい出し、其は、科学の光が落とす影』」

前半は少女の声で、後半は機械の声で、呪文を詠唱しながら現れる。

4メートル前後の巨大な「アスラ・マキナ機構魔神」（*アスラクライン）、「ベリアルドール？鐵」。生贄の「副葬処女」（*アスラクライン）の魂を糧に、「ハンドラー演操者」（*アスラクライン）の願いを叶える人類の最終兵器。

「演操者」である少年の影を媒介に、「？鐵」はその姿を現した。

「おおおおおおおおおー！」

雄たけびを上げる少年。

それに呼応して、「？鐵」は拳を振り上げた。

「『黒の拳撃』（*アスラクライン）！」

数枚の魔法陣が現れ、「？鐵」の拳に力を与える。

その力は重力制御。「黒の拳撃」は重力球を纏った一撃。

——させるか、よっ！

拳が振り落とされる前に、「瞬動術」で、「？鐵」の背後に回る。

「——！」

少年の顔に焦りが現れた。

——いける。

「機構魔神」の弱点は、司令塔である「演操者」本体。「演操者」を倒せば「機構魔神」は制御を失う。

「『桜華崩け——』」

「『教会区《奈落》』！」

拳を振るう前に、俺の周りを闇が覆った。

——これは、あの女の！

——ここで来たか！

戦闘に備えて呪文詠唱を始めようとすると、いつの間にか後にいたあの「シーキューブ」使いに頭を叩かれた。

「何やってんの！ さっさと逃げるわよ！ 『教会区《奈落》』！」

今度は闇をジェット噴射のように細く、大量に放出して空中に飛び上がる。何故か俺の首根っこを捕まえて。

「おいっ、ちょっと放せ。つか、何なんだよ！ これはお前の幻術か何かじゃねえのかよ！」

「はあ！？ 何言ってるの？ あんた、本気でそんなこと思ったの？ ばっかじゃない！」

空中で言い合う俺達二人。

そして、しだいに高度が下がり始める。

「おいっ、落ちてるぞ！　って、おいっ！」

——こいつ、空中で俺を放しやがった。

「『オソウジダイスキ』（*魔法先生ネギま！）！」

「アーティファクト」で、魔法の箒を呼び出す。

と、俺が跨った箒に、上空から髪長女が降って来た。

「よっと。乗せてもらっわよ」

「意味分かんねえけど。って、お前重くね？」

髪長女が乗ってから、急に箒の調子が悪くなった。

「黙ってなさい」

二章 現状 / 一話 転移（後書き）

前回に引き続き、対「シーキューブ」編でした。
なんとか本編に入れそうです。

期末テストがあったので、久しぶりの更新となりました。
お待たせしてすみません。

次回からはようやく本編の入り口です。

二章 現状 / 二話 状況確認（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 幻術はどのように働くのですか？

A 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内の場合、予め定められた映像等が流れ込みます。

「まあ、今はそうではないっぽいけど。」

二章 現状 / 二話 状況確認

ロング少女と町？を脱出し、人がいない川辺まで移動した。

移動しながら分かったことがある。

まず、これはこの女の攻撃ではない。

そして、この町は、外に向かっていくにつれて、発展が遅れている。

それだけならどこの町でも普通なのだが、この町はその差が段違いなのだ。

ESP（超感性知覚）の一種、「千里眼」（＊魔法先生ネギま！）で確認したところによると、町の中心は俺達の住む23世紀の世界と同じレベルに発達しているようだ。だが、俺達がさきほどまでの場所は、中世ヨーロッパ並の設備しかない。

調べ進めていけば、魔法に関するあらゆる問いへの答えを開示してくれ、「まほネット」（＊魔法先生ネギま！）に接続して情報の自動更新も行う魔法学体系、「世界図絵」オルビス・センスアリウム・ピクトウス（＊魔法先生ネギま！）によると、この町は「トーキュー」といつて、約2000平方キロメートルの広さを持つ（東京都のほぼ同じ広さ）、独立学術都市らしい。学ぼうとする意思と意欲を持つ者なら、例え死神でも受け入れる、というのがスローガンだ。建前上は、どんな権力にも屈しない、ということになっている。

中心約500メートル周囲は、学術都市の名に相応しい学術施設

と、権力に屈しないための独立武装組織、「インフレックス」の軍事施設があり、「千里眼」で確認した通り、23世紀と同等の科学技術を有し、「中枢区」となっている。

さらに外500メートル周囲は一般市民の住居地と市場が広がっており、大抵の国民はここに住んでおり、「生活区」となっている。

そして、それより外の地域は、まだ人の手の加えられていない大自然が残る、「自然保護区」になっている。今俺達がいるのが、「生活区」と「自然保護区」の境目である。

ももとの位置が「生活区」の中でも外れに位置していたため、すぐに人目のない「自然保護区」に行けたというわけである。

余談だが、俺の顔が全国指名手配犯として載っていた。

これらの情報を、ロング少女に伝える。

「一体どうなってるんだ？ これも『バトルロイヤル』の続きなのか？ どうみても『アドベンチャーワールド』なのだが」

「分からないわ。だからあんたと一緒にいるのよ。ネットの中で迷子なんて嫌だからね」

「迷子って、どういうことだ？」

「ログアウトできないのよ。この世界に来てから」

ロング少女が「故障かしら？」と呟く。

ログアウトができない、つまり、現実世界に帰れない、ということだ。

それだけ聞くと、人生終わったかのように聞こえるが、それほど大したことではない。「戻れない、戻れない」、と言っている世界は所詮仮初の世界で、数字の羅列によるプログラムなのだから、「カプセル」から本人を引きずり出せば、強制終了だ。引きずりだす人がいなくても、「カプセル」の中で、生存するだけなら6ヶ月はもつ。もちろん、筋肉の衰えは著しいが、23世紀は筋肉がなくても生きていける。

「スリープモードは、——駄目か」

端末を広げてみるが、結果確認するまでもなかった。

「これは、まずいかもな。たぶん、再起動もできそうにない。となると、もしこの状況で体力が0になると、いろいろ不都合が起こるかも」

「もし私達の体とのリンクがおかしくなっているのなら、電子空間と現実の狭間に取り残されることになるわね」

「アドベンチャーワールド」で体力が0になると、「アドベンチャーワールド」から一度退出して、ログを新たに作って、別人としてログインしなくてはならないのだ。死者は基本的に蘇らない設定なのだ。

「とにかく、このままでは埒が明かないわ。今は『ランキング戦』のことを忘れて、行動を共にしておきましょう。そして、何か気づいたら、互いに報告し合うこと」

ロング少女が方針を決めていく。

「ん？ 何？」

「いや、案外あっさりしてるんだな、と思って」

さつさと殺せ、みたいなことを言っていた人間とは思えない結論ではある。

「ところで、自己紹介といかないか？　すぐに復旧するとは思っけど、折角なんだし」

俺はそう言っで名前を名乗る。

「そうね。変態に名乗る名前はない、と言いたいけど、まあ、いいわ。
近藤美紀こんどう みきよ」

二章 現状 / 二話 状況確認（後書き）

遂にロング少女の名前が分かりました。いろいろと固有名词が出てきたので、その辺りは、また纏めておきます。

二章 現状 / 三話 指名手配犯じゃないんだって (前書き)

《なぜなに?》

Q ロン毛の少女とはいっ仲間になったのですか？

A 飛行中、打ち解けました。

ゝ本当はちゃんとした話があったんだけど、間違えて消しちゃった(笑)

二章 現状 / 三話 指名手配犯じゃないんだって

「で、殺人犯さんは、これからどうしようと考えてるの？　ちなみに私は寢床の確保を優先しておきたいのだけど」

こんどう
近藤が俺に言った。

「いや、殺人犯じゃないから。って、寢床がいるのか？　どうせすぐに復旧するだろ」

「ここ数年、リンク切れは起こっていなかったわ。それがここにきての突然のリンク切れ。時間が掛かる可能性も考えておくのが妥当よ」

「パーソナル・リアリティ」は、脳からの電気信号を筋肉ではなく、ネットを介して「パーソナル・リアリティ」内の各キャラクターの行動プログラムに伝達する。10年ほど前、まだ「カプセル」による情報処理スピードが遅かった頃、アクセス数の上昇に耐えられずにしょっちゅうリンクが切れていた。が、リンク切れが起こるのは一瞬のことで、大した影響はなかった。

「確かにそうだが……。寢床ならあるぞ。『アデアット』」

俺は「天狗之隠蓑」テングノカクレミノ（＊魔法先生ネギま！）を取り出して、近藤に説明する。「天狗之隠蓑」は全体が黒くて長いボロ布で、被ると表面も背景に同化する代物だ。これは中に和風の家が備わっており、戦闘用より移動用として用いられることが多い。

「そう。じゃあ、そのボロ布は私が使うとして、あの何でも調べら

れるっていう本でもつと調べてもらえない？

この国、えーと、『トーキュー』だっけ？ 『トーキュー』の情勢とか、その他もろもろ」

「何で？」

「備えあれば憂いなしよ」

俺達が今いるこの「アドベンチャーワールド」はいつも俺達が使っている「アドベンチャーワールド」とは違うようだ。

この世界の総合面積は地球一個分にもおよぶ。というか、形が地球そのものだ。形だけは。

「トーキュー」は現実日本の東京都と同じ場所に存在する。どんな権力にも屈しない独立学術都市で、現実日本の位置に存在する民主主義国家「ジャポン」の中立武装組織の一つでもある。「ジャポン」の首都は現実日本の京都に位置し、噂では琵琶湖（「ジャポン」では「ビワン湖」と呼ばれている）の底に「ジャポン」の最新兵器が眠っているとかいらないとか。最近政治家の汚職とかが激しくて、国を変えようとする武装組織が出て来てて、数は少ないがゲリラ戦でがんばっているとか。そんな「ジャポン」に外国が興味津々だとういう。

「なんか、やけに現実味のある世界ね」

奔洞が俺の後ろから「世界図絵」を見ながら言う。

「そうだな」

俺は相槌をつく。

「でも、何でその革命者達捕まっていないの？」

俺は「世界図絵」を操作する。

「えーと、何か、『トーキュー』って、世界的にも有名な独立学術都市で、『ジャポン』の都市なんだけど、どっちかっていうと、『トーキュー』っていう国の周りに『ジャポン』があるような感じがしい」

「それで？」

「『トーキュー』の独立学術都市としてのスローガンが『例え死神でも受け入れる』って言っただろ。『トーキュー』で学問関連に携われば、例え犯罪者でも『トーキュー』が匿ってくれるってことになっっているらしい」

——これって、結構無茶苦茶じゃない？

「へえ。じゃあ、あんたもそこに匿ってもらえばいいんじゃない？」

「だから違っって」

「じゃあ何でその『世界図絵』にあんたの顔が犯罪者として載ってるの？」

近藤が「世界図絵」を指さす。

「さあ？ サイバーテロ？」

「誰があんたを嵌めるっていうのよ。本当に心当たりはないの？」

「心当たりって……。確かにコーチさんって呼ばれる人に拳を一発ぶち込んだけど、それで死ぬってことはないと思うけど……」

「体が弱かったとか？」

近藤に言われて、何かそんな気がしてきた。

「……………」

「いくらヴァーチャルだからと言って人殺しはよくないわよねー。ご愁傷様ね。そのコーチさんの息子、やっと結婚相手が見つかったっていうのに。ああ、涙が止まらない……………」

近藤がハンカチで目を覆う。

——いや、娘だったような……

「止めてくれ。もういいよ、犯罪者でも何でも」

「ついでに言つとくと、あんたの首、賞金かかってるわよ」

「え！？」

俺は急いで「世界図絵」で確認する。

「——まじかよ」

「まじよ」

「いつそのこと、『トーキョー』の学校にでも入らせてもらおうかな……って、ちょっと待て。これって消せるんじゃないか？『アデアット』」

俺は「力の王笏」スケフトルムルトウアーレ（＊魔法先生ネギま！）という魔法のステッキを呼び出す。

「力の王笏」はそれ自体がネットに接続することができ、「千人長七部衆」（＊魔法先生ネギま！）が率いる電子精霊群を統制し、操ることができる。

ユヒル・ヌールム・ゼフィルムピリトゥス・マグナス・ウーヌムスピリトゥスエレクトロニタツトル・スベル・アクアエゾ・エレクトリウム・グノー
「広漠の無、それは零。大いなる霊、それは奇。電子の霊よ、水面を漂え。」「我こそは電子の王」（＊魔法先生ネギま！）

呪文を詠唱し、電子精霊との交信を開始する。なおこの際、魔方阵内に居る他の人間も同時にネットの中にダイブする。

「え？　ちょっと！　何これ！」

近藤が叫んだ。

ネット世界に意識だけダイブする。

「仕事だ。俺の賞金首っていう情報を、改ざんしてくれ」

目の前に現れた電子精霊の一匹（電子精霊は鼠のような姿をしている）、「しらたき」（＊魔法先生ネギま！）に命令する。

「な、何それ？　かわいいじゃない」

「お褒めにあずかり光栄です」

しらたきが頭を下げる。

「はい、仕事」

俺はしらたきに行動を開始させる。

電子精霊自体が優秀なソフトウェアを所持しており、俺自身が何もしなくても高度な情報処理と電脳戦ができる。というか、俺はそこまでパソコンが触れるわけではない。

「へえー。あんたの『世界観』って便利ね」

近藤が感心して言う。

「逆にお前の『世界観』の方が不便なんだと思つぞ。あんなのでどうやって勝ち上がったんだ？」

「道具に変身して闇討ちしてたの」

「闇討ちって」

突然、警報装置が鳴り響いた。

「CAUTION!!」の文字が、俺達の周りを回る。

「どうしたの？」

近藤が俺ではなくしらたきに聞いた。

「敵自動巡回プログラムに我々の存在を気づかれました。データ量大きいからー」

しらたきがあたふたする。

他の七部衆達（だいこ・ねぎ・ちくわふ・こんにゃ・はんぺ・きんちゃ）も同様にあたふた。

「防御結界プログラムを展開しろ！」

俺の指示にしらたきが頭を下げる。

「すみません。まだオプションのインストール終わってないんで無理ス」

——忘れてた!!

「ねえ、どうしたの？」

近藤が事態が理解できずに聞いてくる。

「オプションプログラム機能のインストールには数分掛かるんだ。完全に忘れてた」

「って、これ使うの初めてってこと？」

「ああ。って、来た！」

攻撃が飛んでくる。

「マグロ！？」

無駄データの奔流、DOSアタックが俺達に降りかかる。

「うち、『解禁』、『ちう特製緊急防壁』バケットフィルタリング（＊魔法先生ネギま！）
！」

「力の王笏」を翳して、防御結界を始動させる。

「ぐうつ……くくく……」

「やった、持ち堪えました！」

しらたきが喜びの声を上げる。

「いや、全然よくない。俺の持ち球あれしかないんだぞ」

「大体何でいきなり攻撃されてるのよ！ やっぱあんたが犯罪者だからじゃないの！」

近藤が叫ぶ。

「攻撃の気配はありません」

しらたきが言った。

「撤退したのか？ それとも今のは威嚇だったのか？」

「どっちでもいいわよ。ここだと私の力が使えないわ。さっさと出ましょう」

「俺の手配書はどうするんだよ！」

「そんなの私の知ったことじゃないわよ」

俺と近藤が言い合っていると、ストロボ（ストロボスコープの略）の充電音みたいな唸りが聞こえてきた。

目を凝らすと、バレーボールほどの大きさの球体物質が遠くの方に浮いているのが分かる。バレーボールと決定的に違うのは、それが金属でできているかのように鈍く光り、さらに武器を有していることだ。違法電脳体を索敵する巡視用球体。

「『キュウちゃん』（*電脳コイル）！」

「え？ 何？ 『キュウちゃん』って？」

近藤が聞くが、今は答えている暇はない。

「しらたき、インストールはまだなのか！」

「すみません。後少しなんです」

俺は「っち」と舌打ちをすると、キーボード（目の前に浮かんでいる）を叩いて、ステッキをもう一本召喚する。そして、それを近藤に投げた。

「それ持つて。簡単な思考なら電子精霊が受け取ってデジタル化してくれる」

「それで何しろって？」

「自分の身を守ってくれ」

「はあ？ あんたの責任でしょうが！ って、きゃあ！」

閃光が迸った。

「キユウちゃん」がビームを飛ばしたきたのだ。

近藤はステッキ振りかざしてビームを止める。

「死ぬかと思っただわ」

近藤が「はあ」とため息をつく。

俺も同様にため息をつく。

と、デジタルで打ち込んだ音声で愛嬌を振りまく声が聞こえてきた。

「ボクサッチー、ヨロシクネ」

まじかよ。「サッチー」(* 電脳コイル)のお出ました。

二章 現状 / 三話 指名手配犯じゃないんだって (後書き)

ひさしぶりの更新になりました。

まことに勝手ながら、「エチュード」を「トークュー」に変えさせてもらいました。

二章 現状 / 四話 追われて（前書き）

《なぜなに？》

Q 主人公に電腦知識はないのですか？

A 一般レベルしかありません。
　　ゝただの凡人なのだよ。

二章 現状 / 四話 追われて

「サッチー」。正式名称「サーチマトン」。空間管理室が作り出した、強力な違法電脳体駆除ソフト。視覚化された姿は、赤く丸みを帯びた形で巨大（高さ2・5から3メートル）。その巨大さが、ソフトの強力さを表している。又、腹部（にあたる部分）に「キュウちゃん」を4機収納することができる。

「ねえ、ここから早く出たほうがいいと思っただけど」

近藤^{こんどう}が後ずさりしながら言う。

「確かに、そうだな」

俺は賛成して、ここから出る準備をする。

「……………」

「どうしたのよ」

黙ってしまった俺に、近藤が尋ねる。

「……………戻り方が分からない」

「はあ！？ あんた、何言ってるの！ 自分の『世界観』でしょ」

「原作には戻るシーンがなかったんだよ！」

「サッチー」が滑るように近づいてくる。

俺達は後退しながら、「力の王笏」を振りかざす。

「ねえ、もしあのビームに当たったら、どうなるの？」

「データが初期化されて、二度と元には戻らない」

「それって、戻るってことではないの？」

「戻るだろうな。でも、電脳体が消されるわけだから、それはつまり、電脳の体と現実の体が分離してしまうわけであり、電脳の体が分離すると……」

「ストップ！ 訳分かんないから、いいわ。ようは、あれに当たったらマズイってことね」

近藤が最低限のことだけ確認する。

「ああ、そうだ」

「で、攻撃方法は何かないの？」

「これくらいしか。『解禁』、『DOSアタック』」

マグロの群れを、今度はこちらが「サッチー」に向けて送り出す。

「キュウちゃん」が、親機である「サッチー」を守るために、ビームを繰り出した。

その間に、俺達はできるだけウイルス駆除ソフトから離れる。

さつき確認したところによると、俺達の本体は、あの川辺で眠っている。ここは完全な電脳の世界だが、容は現実世界（ホームドメイン）の現実世界ではない）だ。だったら、空間管理室の管理外である民家や学校、病院、公園、神社などに逃げ込めばいい。

俺達は、自然保護区に向かって走った。おそらくそこも管理外のはず。

「キユウちゃん」のビームを、即席の障壁でかわしながら（距離ができていたので、威力が低まっている）、森へと向かう。

——森の中に入りきる必要はない。たぶん……。

ある程度走ったとき、ふと、ウィルス駆除ソフトの動きが止まった。そして、俺達を探すようにきよろきよろ辺りを見回す。

管轄外地域に入ったのだ。

「サッチー」達には、管轄外地域にいるこちらの姿は見えていない。

暫くすると、奴らは巡回に戻るべく、もと来た道を戻り始めた。

「はあー」

俺達はため息をついて、その場に腰を下ろす。

「案外、自然保護区ってでかいんだな。まだ森には入ってないのに」

「別にいいじゃないの」

近藤が息をきらしながら言う。

—— 電脳体でも疲れるものなのか。

俺はそんなことを思いながら息を整えた。

呼吸が元に戻ってくると、安心感が湧き上がる。

が、安心したのもつかの間、突如、激しい視界のブレと、ノイズ音が俺達を襲った。

「な、何これ？」

近藤の質問に答える間もなく、俺達の意識は薄れていった。

二章 現状 / 四話 追われて（後書き）

後一話か二話ぐらい、この章は続きます。

二章 現状 / 五話 敵? (前書き)

《なぜなぜに?》

Q 二人はどうやって電子世界から脱出してきたのですか?

A 一定以上の衝撃が本体である身体に与えられると、安全のため自動で戻ってこれるように設定してあったようです。

↳そういう設定にしてたけど、忘れてたんだよ、主人公は。

二章 現状 / 五話 敵？

頭をどつかれた。

痛い。誇張表現なしで痛い。

「つくうー」

頭を押さえながら、眼を覚ます。

「起きなさい」

女子の声がする。

近藤こんどうの声ではない。

俺は眼を開けた。

まず、自分の足元を確認する。電脳空間なら、足が触れている部分から歪みが生じているはずだ。

——よし、戻って来ている。

顔を上げると、頭を再度殴られた。

「いてー」

「黙りなさい。そっちの方は起きた？」

「はい。起きました」

別の女子の声がする。

「そう。じゃあ、お前」

女子？は俺の頭を押さえつけたままだ。

「『有力者』？」

俺は、地面を見つめながら、沈黙を守ることにした。

こういう場合は、こちらの情報は何も与えないに限る。

質問を聞くことで、現状を把握するのだ。

「じゃあ、そっちはどう？」

近藤も俺にならって沈黙を守る。

「まあ、いいわ」

女子？はあっけなく追求を止めた。

「『有力者』？、と聞かれて答える訳がないよね。私達は『革命団』
(仮)よ」

「革命団」(仮)と名乗る女子？はそこで、俺達の反応を待った。

反応が何もないのを見て、女子？は口を開いた。

「そうね、『革命団』と言っただけで、本物がどうかなんて分からないものね。頭がいいわね。山下君」

男が俺の名前を言うのと、近藤が飛び上がるのと同じだった。

「しまっ……」

女子？の声で状況を瞬時に想像する。

近藤は脱出した。

本当ならもう少し話を聞きたかったのだが、仕方がない。

「おっ……」

「瞬動術」で女子？の手から離れる。

やっと自由になった頭を上げて、二人（推定）と対峙した。

「やっぱり、『有力者』だったわね」

女子？が俺達を見て確信する。

「だったら？」

近藤が挑発を掛けながら、俺と反対側に、女子二人を挟んで着地する。

「あなた達を守ってあげるわ」

「はあ？ 何言ってるの。こっちは、あんたらに殴られた恨みがあるんだからね！」

近藤が女子？に向かって走り出した。

——おいおい。

——あいつ、そんなに短気だったのか。

「山下！ こいつらを捕らえて、聞き出すわよ！」

「了解」

——まったく。

——相手の力も分かってないのに、飛び出すなよな。

俺は溜めていた魔力を、そして、気を一気に開放させる。

「『解禁』、『感掛法』（*魔法先生ネギま！）」

シユンタクシミアンティケイメイ
「気と魔力の合一」。

左手に「魔力」、右手に「気」を溜めて融合し、体の内外に纏って強大な力を得る高難度の究極技法。発動すると、肉体強化、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞、耐熱、耐寒、耐毒等の作用が働く、超便利技だ。

魔力は精神力を、気は体力を消耗させるので、「感掛法」は消耗が激しい。だが、得体の知れない敵にぶつかるには最適と言えよう。

俺はポケットに両手をつっ込んで、自然体で構える。

「『解禁』、『教会区』《奈落》！」

近藤が毎度お馴染みの闇を女子？に向かって噴出した。

それに合わせて俺も、女子？を攻撃する。

「『解禁』、『居合い拳』（*魔法先生ネギま!）」

できるだけ、小さな声でぼそつとつぶやく。

「どうしたの？ 来なっ……」

少女？の言葉が止まった。

お腹を右手で押さえて、ダメージを確かめる。

「確かに今のは物理攻撃だった。けど、視認できない。気弾攻撃？」

俺はそれには答えず、再度攻撃する。

右手首に一発、左手と、左肘にそれぞれ一発、右足首と左太腿に一発づつ、そして腹部に再度一発。

少女？は見えない攻撃に顔を歪め、ただダメージを受け続ける。

だが、倒れない。

関節部分を何度か狙ったにも関わらず、顔を歪めるだけで、バランスが崩れない。

「なるほど、刀の『居合い抜き』ならぬ、拳の『居合い抜き』ね」

少女？が技の正体に気づいた。

「ポケットを鞆代わりにして目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出しているわけね。しかも、魔力によって極限の速度にまで拳速を加速していて、撃つ出されるのが『気弾』ではなくただの『拳圧』とは。察知が難しくて困るわ」

少女？は「居合い拳」をその体に受けながら、淡々と言っている。

「でも、その程度なら大したダメージにはならないわね」

「なら、受けてみるか？」

挑発に乗り、俺は全開で「居合い拳」に入った。

二章 現状 / 五話 敵? (後書き)

新たなキャラが登場しました。この少女?、最初の予定ではしぐいおじ様になる予定だったんですよ。

二章 現状 / 六話 一方的な力（前書き）

《なぜなに？》

Q 革命団（仮）と名乗ったのは何故ですか？

A 相手が何者か分からなかったために用心したからです。
　　でもその名で予測はつくと思うよね？

二章 現状 / 六話 一方的な力

ポケットに両手をつっ込む。

今度は予備動作を大きく。

「豪殺居合い拳」(＊魔法先生ネギま！)。

大砲クラスの一撃を、真正面の少女？に放つ。

「こ、これは……」

少女？がとつさに横に飛びのいて、攻撃を回避する。

腰を屈める。「瞬動術」。

「えっ……」

背後に回って、「豪殺居合い拳」を放つ。

「なっ……」

腰を捻って、回避。

そこに、普通の「居合い拳」を放つ。

「つく……」

先ほど同様、ダメージはないようだ。だが、足止めさえできれば。

——潰せる。

「これは、まずいかもね」

少女？が呟いた。

「豪殺居合い拳」はその名の通り、当たればそれでアウト、一撃必殺級の一撃。だが、予備動作が大きく、避けられやすい。そこを見えない打撃である「居合い拳」を併用することで、弱点を補強する。

足止めは出来た。放つならここ。

「豪殺居合い拳」！

足が止まった少女？に放つ。

少女？は回避行動を見せない。

「豪殺居合い拳」が迫る。

少女は右手を下から上に、「豪殺居合い拳」が迫ると同時に、振り上げた！

「っな、なに！」

「豪殺居合い拳」が消滅する。

——こんな芸当ができるのは……。

「……無効化能力。右手で消したってことは、『イマジンプレイカー幻想殺し』（*とある魔術の禁書目録）か！　だが、しかし……」

「そう、『幻想殺し』は　異能の力しか打ち消せない。君の攻撃はただの拳圧よね」

俺は後ろに下がって、呪文を詠唱する。

「『サギタ　マギカ　ゲンティア・魔法の射手、光の101矢』！」

101本の「光の矢」を、少女？に向かって四方八方から放つ。

「面倒ね」

少女？は、襲い掛かる「光の矢」を、あるものは避け、あるものは潰していく。

その間に「瞬動術」で接近する。

無詠唱で「桜花崩拳」を叩き込む。

「だから、魔力付与のパンチじゃ、普通のパンチになるっ……！」

「桜花崩拳」を右手で受け止めた少女？が、驚きの声を上げる。

「魔力を無効化してもこの威力。なかなかやるわね」

「だったら、倒れてくれない？」

相変わらず平然と受け止める少女？に向かって、俺は言った。

「それは無理ね。君と私とでは、能力の差がありすぎるわ。私の前では、ほとんどの能力が脅威にならない」

右足を踏み込み、肩から当たりにいく。

「だったら、」

後ろに下がった少女？に対して、俺もいったん退く。

「これなら、どう？」

俺は「感掛法」によつて強化された肉体を使つて、近くにあつた人間大の岩を持ち上げて、少女？に向かって投げた。

「無効化つていうのは、物理攻撃には効かないものだからな」

「残念」

少女？は飛んできた岩に触れて、破壊した。

「私の前では、どんな攻撃も無力よ」

今度は少女？がこちらに接近してくる。

無造作に突き出された右手。

俺は触れないように、その右手を避ける。

——まずい。

「瞬動術」で後方に飛んで、距離をとった。

少女？はどうやらこちらの攻撃を何でも無力化できるようだ。それだけでなく、純粹体術も、物理攻撃も無力化している。

——その能力を喰らったら、どんな影響を受けるのか？

「テレパス念話」（＊魔法先生ネギま！）をこんどつ近藤に繋ぐ。

「近藤、ここは退こう。あれは勝てそうにない」

「はあ？ 何言ってるの！ こっちはあとちよつとなんだからって、やってやるうじゃないの、『八番機構・碎式円環態』《フランク王国の車輪刑》、稼動！」

近藤は少女？との交戦を止める気はないようだ。

少女？の後ろの方で大車輪が動き回っているのが見えた。

彼女達をだいぶ移動して戦っていたようだ。

「いいの？ 足を止めて」

少女？がこっちに向かって来た。

「つぐ……」

突如、頭を強烈な頭痛が襲う。

あまりにも痛みに、体が浮きそうになる。

俺はその場に座り込んだ。

「へえ、結構耐えられたわね」

頭痛が止む。

俺は、はあはあと息を切らしながら、少女？の顔を見上げた。

「こ、これが、耐えてるに入るのか？」

「感掛法」がなければ、一体どれほどの痛みになるのか？

「ええ。そうよ。まあ、でも、これで終わりよ」

少女？は懷から取り出したナイフを、俺の背中に振り下ろした。

二章 現状 / 六話 一方的な力（後書き）

なんか最近、バトルばかりになっていきますね。なんとかして「学園」までは辿り着くつもりです。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 技名を言わずに技を行使していますが、可能なのですか？

A 可能です。一定以上の技の行使を行うと、それまでのデータから「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」が自動で技を発動させます。

～できる技とできない技があるよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 やました
宏治 こうじ

レベル 4 4

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃

「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御

「瞬動術」 による移動

備考 主人公

高校二年生

近藤 こんどう
美紀 みき

レベル 4 2

世界観 「シーキューブ」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

切れ気味体質？

高田一志、松山健一、羽河卓司は行方不明

次章予告

たとえ何も分からなくても、その身の危険は理解できる。

たとえ何も出来なくても、その身の保身は必要である。

なぜなら、命は一つなのだから。

次章、「入隊」。

少年は、己の牙を抜かれたことを、まだ知らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

二章が終わりました。これからも頑張っ
て続けていきます。

三章 入隊 / 一話 復活、できるよな？（前書き）

《なぜなに？》

Q 前回の続きですが、その、「データ」というのはどんなものですか？

A 技名を口にする直前の脳の電波の発信、呼吸の仕方、肺の膨らみ、筋肉の弛緩等です。

「肺や筋肉というのは、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内に作られたアバターの物だよ。

三章 入隊 / 一話 復活、できるよな？

B A D E N D

転生初日冤罪編

死亡エンドNo14

その後、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」は復旧せず、現実と仮想現実の狭間に取り残された山下は、二度と目を開けることはなかった……

やり直す

終わる

↑

攻略のヒント……どこで選択を間違えたか、考えてみよう

近藤と手を組んでよかったのか？

安易に攻撃を繰り返して（第一部／二章／一話）よかったのか？

謎の敵の話を聞かなくてよかったのか？

そもそも「ランキング戦」に参加してよかったのか？

セーブポイントに戻ってやり直してみよう

きつと攻略の糸口が掴めるハズだ！

——勝手に終わらすなーッ！！

——せめて「やり直す」だろッ！！

叫んだ。

「BAD END」機能。危機的状況になると偶に現れるおまけ能力だ。これは、「魔法先生ネギま！」の「世界観」を選んだ俺だけのもの。

これが出てくるということは、俺はまだ死んではない、ということになる。状況打開策が思い付いていない、という意味にもなりうるが。

目の前には「BAD END」の文字が浮かんでいるだけ。周りは真っ暗で、おそらく何も設定されていない。

おそらく、俺の体（仮想現実の方）が目を覚ませば元に戻るのだろう。

自分の体を見てみようと思はすが、体が見えない。いや、ないのだ。体も、腕も、首もこの世界では最初から設定されていない。唯一視覚と意識だけが残っているのだ。

一度、考えてみたことがあった。

「バーチャル・リアリティ」のゲームは、脳とコンピューターを繋いで遊ぶ。肉体に届くはずの脳からの電気信号を変換し、コンピューター上のネットワークに取り込む。だったら、「カプセル」に入って電気信号を送りながら、こちら側（脳）に電気信号が帰って来なければ、俺達はどのようなのだろう？、と。

外部から見れば、意識不明の重体、内部から見れば、無の中に無として放り出された状態。

視覚が残れば世界の監視者、聴覚が残れば幽霊同様。五感が残ってもその証拠となる電気信号が返されなければ植物人間。

まあ、そんなことは天文的確率で起こることがないのだが。仮に起きたとしても、すぐに対応がなされるだろうし。

それより今は現状把握。

この様子だと、おそらく肉体がそれなりのダメージを受けているのだろう。

——派手に喰らったからな！。

俺は背中を摩る、って背中ないし。

それにしても、問題はあの能力。「幻想殺し」じゃないとすると、一体何なんだ？

復活（たぶんできる）の時に備えて、俺は少女？の対策を練る。

魔法攻撃は無効。おそらく気弾攻撃を同様無効。

純粹物理攻撃も脅威にならず。だが、攻略の鍵はある。

俺は対策法を頭の中で纏めながら、復活（まだ死んでないよね？）の時を待った。

目を覚ましたのは、時間の感覚がなくなった頃だった。

まず最初に目に入っただのは、立派な大黒柱だった。

——って、大黒柱？ 白い壁の保健室じゃないのか？

というか。

「俺んちじゃねえか！」

正確には「天狗之隠蓑」の家だが。

確かに「天狗之隠蓑」出しっぱなしにしてたような（第一部／二章／三話）。

「あ、起きた？」

近藤^{こんどう}が大して心配していなさそうに、というより、昼寝していたみたいに言った。

——俺、刺されたんだけどな……。

三章 入隊 / 一話 復活、できるよな？（後書き）

今回はあまり話が進みませんでした（いつもそうか……）。

三章 入隊 / 二話 目覚めの悪い復活（前書き）

《なぜなに？》

Q 「B A D E N D」機能は、主人公の不死身フラグですか？

A いいえ。ゲームオーバー寸前で発動するだけです。

「主人公はチートじゃないよ。」

三章 入隊 / 二話 目覚めの悪い復活

刺された背中を今度こそ摩る。

傷跡がない。

体を起こして近藤こんどうと向き合う。

「なあ、あれからどれくらい経った？」

「丸二日」

丸二日？

——うそだろ。

——それだけの間、昏睡状態にありながら、俺は少女一人を悲しませることができないのか……。まあ、所詮ゲームだし。

——っじゃなくて。

「二日間もあつたのに、『パーソナル・リアリティ/自分だけの現実』はまだ復旧していないのか？」

「ええ……」

俺は現状を分析する。

「カプセル」の利用は、使用者が未成年の場合、その保護者の要

請に従ってネットワークの接続を切ることができる。うちの親なら、丸一日「カプセル」を利用した段階で、接続を切られるだろう。それが、丸二日とは……。

こっちの世界の俺は、少女？に完敗。謎の組織に捕まって、身動き取れない。

「近藤、この中には彼女達はいないのか？」

「ええ。抵抗しても抑え込むことは可能だからって、外で見張ってるわ」

——まったく、なめられたものだ。

だが、それが幸いでもある。

「『アデアット』」

「世界図絵」を呼び出し、この世界の事情を、今度は入念にチェックする。

「そうそう、あんたに調べてほしいことがあったのよ」

そう言って、近藤は「調べ物リスト」を俺に手渡す。

「何これ？」

「あんたが眠って役立たずな間に、あいつらとの会話で意味が分からなかった単語、知識全集よ」

いくつかの項目に目が留まる。

「そう言えば、『有力者』って叫ばれたような気がするな」

「アスラクライン」との対決を思い出し呟いた。

「はあ？ だったらなんでそのとき調べてないのよ。こういうものは、即実行でしょ」

「そんなこと言っても、あのときはよく状況が分からなかったし。っていうか、俺はあいつを倒しているいる状況を知ろうと……」

「はいはい。言い訳は結構。大体、あんた倒せてないじゃない」

「お前が邪魔したからだろ」

「助けてあげたのよ。だったらあんたは、あの黒い変な玉を防げたの？」

「いや、その後で分かったことだし。それともあれか？ お前はあれが飛んでくると初めから分かっていたと」

「ええ。そうよ。あなたの『世界観』が『魔法先生ネギま！』だってことも、十七歳だってことも、本名をそのままハンドルネームにしているってことも、最近成績が伸び悩んでいるってことも知ってるわよ」

「そうかよ……って、はあ!？」

近藤の発言に、「世界図絵」を操作していた手が止まる。

「何でそんなこと知ってるんだ？ お前、俺の知り合いか？」

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」で使う自分のアバターは、自分の好みに合わせて外見を作り変えることができる。だが、この作り変えには、一万もの設定事項があり、大抵の人間は自身のデータ（誰もが細かい情報が記載されたパーソナルデータを持っている）から、自分と同じアバターを作るが。

「違うわよ。実は、あなたが寝ている間に……」

「心を覗いたのか！」

「『告解』（*シーキューブ）させてもらったわ」

――？

後で「告解」も調べておくことにする。

三章 入隊 / 二話 目覚めの悪い復活（後書き）

少し遅くなりました。

次は、この世界の歴史とか、そういう話になるので、バトルはちょっとお預けになります。

三章 入隊 / 三話 本当の意味での現状確認（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」内で睡眠中は、肉体はどうなるのですか？

A 肉体も寝ています。肉体が寝るように、「カプセル」が脳の代わりに、体に信号を送ります。

↳ 副作用とかはないよ。

三章 入隊 / 三話 本当の意味での現状確認

ジャポン国は極東の島国で発展が遅く、当初、統一政府というものがなかった。

だが、「有力者」の出現で情勢は大きく変わった。

それまでも「有力者」の存在は確認されていたが、この頃ある国家が海の向こうの大国から「有力者」に関する文献を仕入れ、「有力者」を貴重な戦力として活用するようになる。そして、2年という驚くべき早さで統一、国名をジャポン帝国とし、ジャポン暦を採用、この年をジャポン暦0年とする。

その後いろいろあつて（詳細は以後）、ジャポン暦1000年、トーキュー特区成立。

その後もいろいろあつて（詳細は以後）、ジャポン暦1880年、第一次世界大戦勃発。だが、ジャポン国は中立を保ち、軍用品の開発、輸出により国益を上げる。

ジャポン暦1945年、第二次世界大戦勃発。前回同様、ジャポン国は戦闘には参加せず、兵器を売って国益上昇。

ジャポン暦2120年、第三次世界大戦勃発。終戦時に「世界平和協定」が結ばれ、形式上世界は平和になった。

ジャポン暦2260年、これまで帝国を名乗っていたジャポン帝国が、時代の流れに逆らえず、民主主義国家ジャポンとして再始動。

ジャポン暦2280年、かつての帝国主義はが反乱を起こす。これを「復古の乱」とし、翌年鎮圧。

そして、現在に至る。

「で、『トーキュー特区』って何なの？」

「ちよつと待ってくれ。えつと……、これだ」

天然の魔力妨害岩が多量にあり、魔物、魔獣、が存在する太古の森が周囲に広がる「トーキュー特区」は、長年の間外部からの進入を許さず、戦に巻き込まれることがなかったため、発展の全てを学問に注いできた。そのため、ジャポン暦980年にその存在が確認されるまで空想の国家だと思われていた。

「トーキュー特区」側に戦闘実践はないものの、使用兵器の差にジャポン帝国は侵略を断念。「特区」とし外部の資源、また、国内の全研究データの提供と引き換えに、ジャポン帝国の傘下に入ること、帝国側からの留学の許可、技術の提供などをとりつけることに成功。

ジャポン暦2200年に「ワープ航法」を確立させ、「トーキュー

「特区」への移動のためジャポン国内に二箇所、世界の主要都市8箇所、計10箇所に「ポートゲート」を設置。

現在、世界唯一の独立学術都市であり、学問の最先端を進む特区であるが、周囲の「自然保護区」から発せられる強力な魔力磁場のため、現地に住む人以外は磁場に対する耐性がなく、「特区」に入ってもすぐに体調を壊してしまう。今のところこの磁場を取り除く方法は発見されておらず、そのため、外部からの留学生等はほとんどいない。磁場に対する耐性がないのはジャポン国内の人間も同じであり、「特区」はほぼ独立国家となっており、自治権、自衛権が与えられている。

「へえー。なるほどね。で、『有力者』って何なの？」

「えーと……、『独自の世界法則にのっとり、現実には縛られず、異能の力を発揮できる者』らしい」

「『独自の世界観』っね。まるっきり『パーソナル・リアリティ／自分だけの世界』の『世界観』じゃない」

「確かにそうだな。それじゃあ、『告解』って……」

キリスト教の幾つかの教派において、罪の赦しを得るのに必要な儀礼や、告白といった行為をいう。

「ってことは、お前、俺が寝ている間に一体何を聞き出したんだ！」

「さあね？ でも、まさかあんたの趣味がそんなマニアックなものだったなんて。これはちょっとね……」

「忘れる！ お前が聞いたことは全て幻聴だ！ 夢を見ていたのだ！ そうだ！ そうに決まっている。そうだとやってくれ……」

三章 入隊 / 三話 本当の意味での現状確認（後書き）

今回は戦いの要素がありませんでした。最近、戦う話がありませんが、戦うときはがんがん戦うので、ご期待ください。

三章 入隊 / 四話 続、現状確認（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「ジャポン暦」と西暦のずれはどのくらいですか？

A 「ジャポン暦」の方が西暦より数百年単位で未来です。
正確には決めてないけど。

三章 入隊 / 四話 続、現状確認

「お、やっと起きたわね」

近藤こんどうと二人でぎゃーぎゃー言っていると、少女？が「天狗之隠蓑」の中に入ってきた。

俺はさつと構えるが、少女？は手を振って、戦闘意欲がないことを示す。

隣の近藤が構えていないのを確認してから、俺は自然体に戻って、少女？と向き合う。

少女？は、見た目普通の女の子だった。年は俺達と同じか、一つ上ぐらい（アバターだから、実際の年齢は分からないけど）。耳に掛かるか掛からないかの境目でカットされた髪が印象的。

ふと、背中を刺されたときのことを思い出した。

——痛みを感じる暇さえなかったんだよね……

となると、レベルとしては少なくとも40以上。

「で、保護される気にはなった？」

そつえば、そんなことを言っていた気がする。

近藤から聞いた話じゃ、相手側にこちらへの戦闘意思はない様子。「天狗之隠蓑」に監禁されてはいるが。

「保護つて、どうして私達が『保護』されなくちゃいけないの？」

あくまで強気の近藤。まあ、所詮ゲームの話だしね。

「あなたが『有力者』だから。このままだとあなた達、捕まって政府のいいようにされるわ」

「『捕まる』って、私達が？」

「そう」

近藤は「はあ？ 何で私が？」とご不満なお様子。

そりゃあ、コーチさん（で合ってたっけ？）を殺した（実感がまったくない）のは俺だけど。

「まったく。町の外に出ているものだから、私達に助けを求めに来たものだと思ってたのに。もしかして何も知らないの？ 無知？ ていうか馬鹿？」

——なんだ、なんだ？ 何故悪口に発展する？

近藤が動かないか、隣に目をやりながら、俺が近藤の代わりに答える。

「俺達、記憶喪失なんだ」

「……………」

じつと見つめてくる近藤が痛い……。

だが、相手がコンピューターのプログラムなのか、現実存在する人間の人格なのか分からない以上、これは最適の処置だと言える。

コンピューターなら、状況説明を、人なら笑い飛ばして（？）くれるだろう。

「誰かに忘却魔法でも喰らった、ってこと？ あ、いい、答えなくて。よし、説明してあげる」

「——はあ……」

「このジャポン国が昔、いつてもつい30年ほど前まで帝国国家だったのは知ってるわよね？」

「一応は……」

「で、民主国家になったわけだけど、帝国時代が名残惜しい人達がいたわけ。で、『復古の乱』という内乱が起こる。『有力者』達を両方戦闘に参加させ、ジャポン国は崩壊寸前。で、焦った政府は『有力者』の能力を敵味方問わず、一時的に封じることにしたの。帝国派の主戦力は『有力者』だったので、戦線は後退。政府側は『トーカーキー特区』が開発した兵器を手に、次々に帝国派を倒していった。そして、内乱は鎮圧。けど、政府は『有力者』に対して恐怖を覚えた」

少女？は淡々と説明する。

「『復古の乱』は鎮圧したものの、一時は戦線が『キューシュ』から首都の近くの『ビワン湖』にまで及んだ。だから、政府は『有力者』を管理することにした。それが、『ジャポンアカデミー』。政府は『ジャポンアカデミー』に『有力者』を集め、そこにいない『有力者』を探している」

「見つかったらどうなるんだ？」

話をずっと聞いているだけにするつもりだったが、なんとなく口を挟む。

「『ジャポンアカデミー』に入るように勧められる。断ったら、殺されるわ」

殺されるって、またオーバーな。

顔に出たらしく、「分かってないわね」っと少女？がため息をつく。

「今まで何人の『有力者』が殺されたと思ってる？ 先の大戦で、何人の『有力者』が生き残れたと思ってる？ 1%よ、たった1%。政府は先の大戦鎮圧後、徹底的に『有力者』狩りを行った。生き残る方法の一つ、政府に従うこと」

「分かった？」と少女？は俺を見つめた。

正直、情報不足で（「ジャポンアカデミー」って何だよ）何とも言えなかったが、ここは雰囲気任せて曖昧に頷く。

「で、仲間になったら、政府の追っ手から守ってくれる、と」

「ええ、そうよ」

「でも一体どういう組織なんだ？」

少女？は少し間を置いて答える。

「かつての反政府勢力の意思を継ぐ、現在唯一の反政府組織、『バツファローズ』。こここのところの反政府行動は全て私達の仕業よ」

——自慢げに言われてもなあ……。

——でも、まあ、悪い組織じゃないんなら。

と、軽い気持ちで近藤を見る。

——ん？

——「バツファローズ」？

近藤は考え込んでいる様子で、「うーん？」と唸っている。

「少し、時間をくれないか？」

テレビでお決まりの台詞を言って、一度少女？に退出してもらおう。

「何をそんなに考えているんだ？」

少女？がいなくなってから、俺は近藤に聞いた。

「私達の現状」

「現状って、捕まってるんだろ？」

「そつちじゃなくって」と、近藤は手を振る。

「現実の話。『カプセル』の中で眠っている私達の体の話よ」

「それが、どうかしたか？」

「どうもこうも。心配じゃないの？ 精神が元に戻れていないのよ、今の私達」

「まあ、確かにそうだけど、ここにいたらそんな実感ないしな」

「信じられない」と近藤は呟く。

「おかしいと思わない？ もう二日以上経っているのよ。その間、『ログアウト』できるようになった形跡は一切なし。うちの家庭だったら、とくに『強制終了』させられているはずなのよ」

近藤の言葉に、俺は頷く。

「確かに、言われてみればそうだな。俺だって『強制終了』されていていいはずだ。変だな……」

右目のすぐ横の部分を軽く叩いて、メニュー画面を呼び出す。

自身のゲージは表示されるが、終了画面がメニューから消えている。

「でも、まあ、『カプセル』の中に閉じ込められているんだとしても、数ヶ月はもつし」

「何言ってるのよ。学校の勉強はどうするのよ！」

確かにそうだ。言われるまで気づかなかったが。

宿題は山のように溜まることだろうし、授業についていけなくなる。

「早く戻らなくちゃまずいじゃんって、あれ？」

メニュー画面を確認しながら、新しいコマンドが増えていることに気づいた。

「『神のお告げ』？ 何だこれ」

見るからに、現状を説明してくれそうなコマンド名。

というか、こいつの存在で今の現状が人為的だということになるんじゃないか？

コマンドに手を伸ばす。

「あ、こらっ、訳も分からないものに触るんじゃないっ……」

突然、意識が遠のいていく。

何回目だろうか？ 肉体（アバターの方）とのリンクが途切れる

のは……。

——それにしても、「神のお告げ」。他にもっといい名前があったらうに。

三章 入隊 / 四話 続、現状確認（後書き）

三章はこんな調子で続きます。バトルはもうすこしお預けになりそうです。

三章 入隊 / 五話 神のお告げ（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「痛みを感じる暇がなかった」「レベル40以上」と判断した根拠は何ですか？

A 今までレベル40以下の相手に、一瞬で負けたことがなかったからです。

→主人公、ちゃんと負けたことあるよ。

三章 入隊 / 五話 神のお告げ

目を開くと、そこは「ウェイトルーム」だった。

暫くして、近藤も「ウェイトルーム」にとんできた。

見渡すと、他にも何人かの人間が見える。ただのロード待ちか、それとも「神のお告げ」を求めた者か？

「まったく、どうなってるのよ！ でも、まあ、この様子だと帰れそうね」

近藤は安心したようだ。

さっきまでの世界は「アドベンチャーワールド」だったのだろう。

「ウェイトルーム」へ帰還できたということは、「パーソナル・リアリティ／自分だけの世界」の本体とのアクセスはできている、ということだ。だったら、ログアウトもできるはず。さっきまでの、まあ、トラブルに巻き込まれたとも思っておこう。所詮は人が作ったプログラム。ミスはあって然るべきだろう。

と、楽観的に考えていたら、脳内に直接声が響いた。

「皆さん、お久しぶりです」

これは、「ランキング戦」のときに案内役をしていた電子音声。

——だとしたらこの状況は……。だが、何故？

「まことに勝手ながら、皆様を『アドベンチャーワールド』に強制転移させてもらっていました」

「やっぱり……」と隣で近藤が呟く。

「ご存知だと思われますが、現在、あなた方はこの仮想現実の中に閉じ込められております。もちろん、こちら側から皆様を解放することはできません。ですが、皆様は『トーナメント』に出場しようというような方々です。この『アドベンチャーワールド』はこれまでになかったもの。現実の地球をモチーフに、その上に仮想現実を拡げております。『トーナメント』に出場するようなあなた方なら、この仮想現実の中でも生きることができるようでしょう。これは、私どもからのプレゼントです。現実とは違う、まさにパラレルワールドというべき世界。皆様が夢にまで見た世界だと思います。思う存分、新たな世界で活動なされることを期待します。」

これはもはやゲームではなく、現実です。あなた方の現実です。現実世界の方ではこちらから、ゲームを止めることができないようにように、させてもらっています。何も心配することなく、新たな世界を堪能できます。

ですが、それが本望ではない方もいるでしょう。その方々のために、特別に脱出方法も用意させていただきました。『アドベンチャーワールド』に存在する七つの『聖地』を掌握し、このコマンドを開いてくだされば、全員を強制的に現実世界へ帰還させるよういでございます。

ただ、皆様に一つ肝に銘じていただきたいのは、これを現実とするため、『アドベンチャーワールド』で生命活動停止となられても、

『ウエイトルーム』に来ていただくだけで、復活することはできません。また、現実に戻還することもできません」

周りを見渡すと、皆それぞれ喜びの笑みを浮かべていた。

隣の近藤を見る。

じっと考え込む様子。

俺も両手を放り上げて素直に喜ぶことができない。

——だって、これって……。

「何か質問があるときは、『神のお告げ』をお聞きください」

それを合図に周りから歓声上がる。

そして、次々に「アドベンチャーワールド」に帰還していく。

残ったのが俺と近藤だけになってから、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の応答プログラム（いや、ここは「神」とでもいおうか）に、聞いた。

「『戻れない』というのはどういうことだ？」

「これをご覧下さい」

目の前に現実世界の電子新聞の画像が立ち上がる。

5000人以上が意識不明！

ここ数日の間に日本全国で確認されていた「カプセル」（＊家庭用バーチャルゲーム機）の使用者が現実に戻ってこない件について、五日、その開発会社である株式会社ソニーから状況説明が行われた。

それによると、脳と「カプセル」との信号交換システムにおいて、二日、トラブルが発生。会社側からのシステムへの干渉が一部不可能となる。すぐに使用者の強制終了を行ったが、その頃行われていた「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の「トーナメント」に参加していた使用者の強制終了が間に合わず、システムは完全に故障。使用者を「カプセル」から出すことが不可能となる。無理やり「カプセル」から引きずりだした場合、脳への影響が心配され、会社側は現状維持を保っている。何者かにハッキングを受けた可能性が指摘されており、海外からのサイバーテロとする意見もあがっている。今のところ犯行声明はあがっていないが、警察は史上最大の人質事件として、調査を進める模様。海外から専門家を呼んで、対策を練るつもりである、と説明した。

「カプセル」の安全装置は、「カプセル」内で六ヶ月過ごしても生命活動を維持することができるようになっていく。しかし、復帰後の使用者の社会的遅れ、身体的衰えはかなり大きなものにな……
…（以下省略）

近藤と顔を見合わせる。

「それでは、新たな現実をお楽しみください」

無理やり「アドベンチャーワールド」に戻されるのを感じる。

意識が遠のく。

——大変なことになってしまった……

三章 入隊 / 五話 神のお告げ（後書き）

そろそろ三章は終わりです。

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「無理やりアドベンチャーワールドに戻されるのを感じる」とありますが、一体どうやって感じるのですか？

A そのとき、ゲームというロード中という状態になっています。脳と体を繋ぐ「カプセル」の機能が一時的に低下し、脳と体が直接繋がり、「カプセル」内にいることを実感するからです。

「ほんと、ほんとに一瞬だけだね。普通の人は分からないよ。」

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始

——さあ、そろそろ真面目に考えようか。

「天狗之隠蓑」に戻って、近藤と「少し考えよう」という話をした。

さて、現状を整理しよう。

何者かに「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」を乗っ取られた、らしい。

今「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」をプレイしているのは、「トーナメント」に出ていた人間で、その数5000人、らしい。

今いる「アドベンチャーワールド」から抜け出したかったら、七つある「聖地」を掌握する必要がある、らしい。

「聖地」を七つ掌握して一人がログアウトしたら、他全員も強制的にログアウトさせられる、らしい。

……。

さて、どこまでが本当で、どこまでが虚言か？

どこまでが現実で、どこまでが空想か？

誰が僕らの意思の偶像で、誰がNPCか？
ノンプレイヤーキャラクター

あの電子新聞の記事は本当か？

本当なら、今「パーソナル・リアリティ／自分だけの世界」を操っているのはまったくの部外者ということになる。ならばその理由は？　そもそも、企業が全力挙げてやつと制御できていたものをそう簡単に横取りできるのか（まあ、やれる奴はやれるんだろうが…）？

「聖地」の設定は本当か？

本当だとしても、地球と同じだけの広さのあるこの世界から、七つの特定の地域を絞り（「聖地」なんて呼ばれる場所はいっぱいあるが、それが本物かどうかは分からない）、掌握するなんて、ほぼ不可能だ。それに、もしそれを成し遂げてしまうと、他の人間も強制終了。となれば、残留派との衝突は必須。で、そこで戦闘不能にでもなれば、ゲームからは追放されるのに、現実には戻れない、というゲームと現実との間に板ばさみ。

「アドベンチャーワールド」で聞かされた設定も怪しいものだ。嘘の情報、嘘の証言であることも否めない。

そうなってくると、近藤だって怪しいものだ。そもそもレベル40代同士が衝突することはそうそうない。いくら「トーナメント」だからといっても、こんな状況では偶然は全て怪しくなる。

でも、まあ、死んだらやばい、というのだけは本当だと思っていいだろう。

それだけは偽る必要がないからな。

「さて、皆、新しい仲間だ」

少女？が俺と近藤を仲間と思われしき人間約50人に紹介する。

自身の保身のために、組織に属するのは必須。

「では、山下、誓いをたてろ」

少女？が仲間（配下？）の一人を呼んで「破れぬ誓い」（＊ハリ
ー・ポッター）をたてさせる。

この誓いを結んでしまえば、破ったら即、死。

ここで誓いを断れば、我が身の安全は保障できない。

少女？と近藤と、右手を握り合う。

お仲間（男）が杖を取り出し、結ばれた両手の上に置く。

「山下、近藤、あなた達は私の配下として私に……」

「俺、山下と近藤は『ジャポン国』を革命させ、『有力者』のため
の王国をつくる」

少女？の言葉を遮って、先に誓いの言葉を並べる。

近藤は驚いたように俺を見て、少女？は「ふっ」と笑って、誓いに賛同する。

眩しい炎が、細い舌のように杖から飛び出し、灼熱の赤い紐のよう
うに三人の手の周りに巻きついた。

「換わりに、俺と近藤の身の安全を確保してくれますか？」

「ええ」

二つ目の炎の舌が杖から噴出し、最初の炎と絡み合い、輝く細い鎖を形作った。

「そして、もし必要になれば、互いに助け合えますか？」

誓いの内容に近藤が頭を捻る。少女？も少し考えていたようだが、すぐに承諾した。

三つ目の細い炎の閃光が、俺達を赤く照りだす。舌のような炎が杖から飛び出し、他の炎と絡み合い、握り合わされた三人の手がっしりと巻きついた。

縄のように、炎の蛇のように。

——さあ、始まりだ。

三章 入隊 / 六話 ゲーム開始（後書き）

ちよつと目先が変わってきました。僕にもちよつと予想外の展開になつていきます。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなに？》

Q 「七つの聖地の掌握」はちゃんとやるのですか？

A ちゃんとそういう話にもっていきます。

↳ その場で思いついただけの設定じゃないよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 やました
宏治 こうじ

レベル 4 4

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃

「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御

「瞬動術」 による移動

備考 主人公

高校二年生

結ぶ
現状況に疑念を抱きながらも、少女？と「破れぬ誓い」を

近藤 こんどう
美紀 みき

レベル 4 2

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

切れ気味体質

少女？と「破れぬ誓い」を結ぶ

少女？ 本名不明

レベル 不明（40以上）

世界観 不明（「無効化能力」に似た力を持つ）

得意技 不明

備考 反政府組織のリーダー

次章予告

誰も保障などできない。

目的を為すのは、己の力のみ。

生きる場所が欲しければ、自らの手で掴み取れ。

次章、「入学の手引き」。

例えどんな手を使っても、少年は前へ進む。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

次から「学園」の話になります。

四章 入学の手引き / 一話 命懸け？（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「現状報告」に出てこなくなった人達は、出番がないということですか？

A そういうことはありません。その章に関係のある人物が載せられます。

くでも、行方不明の三人は暫らく出ないかも？

四章 入学の手引き / 一話 命懸け？

組織名「バッファローズ」（なんちゅう名前や……）。

組員数は総勢50名。何故全員そろってここにいいのかというと、本部を移転させていたらしい。

全員が「有力者」というわけではなく、親族や友人が「有力者」でその敵討ちのために組織に属する「非有力者」もそれなりにいるらしい。

トップが年端もいかない少女？なのは、先の大戦で残った「有力者」はほとんど子供だから。

「バッファローズ」の現在の目標は、自分達の「王国」を造ること。

当初は「ジャポン国」を変革させるつもりだったらしいけど、圧倒的戦力差で断念。

現段階での目標は「トーキュー」を掌握し、「ジャポン」との交渉を行うことらしい。

——まあ、俺はできるとは思ってないけど……。

俺が「バッファローズ」との一員となったのは、自分の居場所を作るため。

この世界には賞金稼ぎが存在して、指名手配犯を探し回っている

らしい。

最初に不祥事を起こしてしまった俺は、どこか匿ってもらえる組織に落ち着く必要がある。

そんなことがあつて、俺と近藤は「トーキュー」の「中枢区」に侵入、その中にある「トーキュー」唯一にして屈指の學術学園（名前は何だったか忘れたが）に入学する、という、一見簡単そうな任務を受け持つことになった。

「そんなに難しいの？ その入学は？」

「『学ぼうとする意思と意欲を持つ者なら、例え死神でも受け入れる』んじゃないかったの？」と近藤が少女^{こんどう}？に聞いた。

「入学するだけなら簡単。さっきも言ったけど、この国には賞金稼ぎがいるの。『トーキュー』で學術学園に入りさえすれば、どんな罪を犯していようとそれを咎められることはない。もちろん、足かせは付くけど」

「つまり、『トーキュー』内の犯罪者は皆入学しようとするから、それを狙って待ち伏せしている賞金稼ぎがいるということ？」

「そう。入学するには、直接向こうに行かないといけないの。あと、狙ってるのは『インフレックス』もよ」

「インフレックス」。確か、「トーキュー」内の独立武装組織だったはず。

「『インフレックス』はただの軍隊じゃないのか？ 警察組織の役

割も持っているのか？」

俺が聞くと、少女？は「ほんと何も知らないな」とため息をついた。

「『トーキュー』にはもともと軍隊なんてなかったのよ。それが、『ジャポン帝国』との交戦で武力所持を余儀なくされたの。その当時『トーキュー』内にあった警察組織をそのまま軍隊に格上げしたというわけ。だから、昔も今も、『トーキュー』内には『インフレックス』しか武装組織はないわ」

「なんせ周囲が周囲だから、外部から攻撃されることなんてほとんどないしね」と、少女？は付け加える。

「あなた達、自分の『レベル』は分かる？」

どうやらこつちの世界でも、「レベル」の概念はそのまま引き継がれているようだ。

「両方とも40代」

「やっぱり高いわね。一応ある程度の予想はしてたけど。あなた達、どこで鍛えたの？　つて、そうか。記憶がないんだっけ？」

いろいろ面倒くさいので、俺と近藤は記憶喪失ということにしてある。転生物語ではよくある設定だ。使わない手はない。

「レベル40なら、『トーキュー』の方もほしがるはずよ。『有力者』ってだけでも研究は捗るのに、それが高レベルとなれば、ね」

「それじゃあ、それをアピールして入学させてもらうわけにはいかないのか？」

「あのねえ、それじゃあ秩序が保てないでしょ」

近藤が「あんた馬鹿？」と視線を投げつける。

「それじゃあつまり、賞金稼ぎの追つてをかわし、『インフレックス』の攻撃を掻い潜って、入学届けを出しに行かなくちゃいけないというわけか？ 命懸けの入学なんて、聞いたことないぞ」

「じゃあ、やらない？」

「やるわよ」

俺の代わりに近藤が答える。

「それじゃあ、ちょっと着いて来なさい」

四章 入学の手引き / 一話 命懸け？（後書き）

なかなか「学園」の話になりません。入学するにはもう少しかかりそうです。

四章 入学の手引き / 二話 骨董店（前書き）

《なぜなに？》

Q 「インフレックス」は強いのですか？

A 技術力は世界でもトップクラスですが、数が些か少ないです。
敷地狭いしね。

四章 入学の手引き / 二話 骨董店

「自然保護区」から出て、「生活区」との境目、俺達が「電子空間」に入った辺りまで来た。

俺達が「バッファローズ」と誓いをたてたのは、「自然保護区」の森の中。「バッファローズ」の新たな基地はこれから作る（？）らしく、現在建設中とのこと。

「バッファローズ」の仲間達と離れて、少女？（まだ名前聞いてない）に連れられて来たわけだが。

「まさか、『今から行け』とかいうんじゃないよな？」

「違うわよ」

少女？は俺達を連れて堂々と「生活区」に入って行く。

「いいのか？ こんな堂々で行って。変装とかそっいうのは？」

辺りを気にしながら聞くと、「やっぱあんた馬鹿でしょ」と近藤こんどうがため息をついた。

「いくら賞金稼ぎに狙われているといっても、『トーキュー』中に賞金稼ぎが蔓延っているわけないでしょ」

「なるほどー」と呟く。

「で、どこに向かっているの？」

「戦うには、準備がいるでしょ」

「生活区」は現実世界の中世ヨーロッパ並の発展しか遂げていない。

「格差社会か……」

町並みを見渡しながら、呟いた。

現実世界でも格差社会真っ只中だが、それは地球の表と裏の距離を置いての話。こんなすぐ近くでの絶大な格差は見たことも聞いたこともない。

この辺りは「生活区」の中でも「自然保護区」に最も近い地域で、「インフレックス」も「賞金稼ぎ」もあまりないらしい。「自然保護区」は人類未踏の地といってもいい。「自然保護区」内に散らばる「海楼石」（*ワンピース）の影響により、「力」に障害をきたし、「自然保護区」内では「力」の類は全般的に使えなくなる。予め防護のために魔法をかけていたとしても、「自然保護区」の中では無意味となってしまう。さながら、「能力無効化」といったところだ。もちろん、軍用兵器全てが「力」の恩恵を受けているわけではなく、物理法則に則っただけの通常兵器も存在するが、「自然保護区」内には屈強な野獣や魔物が生息している。とてもじゃないが「自然保護区」を突破することはできない。そのため、外から中へやってくることは不可能だ。「インフレックス」はもちろん警備

してないし（「中枢区」が護られさへすれば、「トーキュー」にとつては問題ない）、賞金稼ぎもこんなところまで搜索に来ない（こんな所に逃げてくる前に捕まえるし、仮に逃げられたとしても、こんな所に逃げてくる奴は大した指名手配犯ではない）。

「戦いの準備って言ってたけど、武器でも揃えるつもりなの？」

「そうよ」

少女？はそう言って、古びた骨董店に入った。

——まあ、骨董店では何かといい武器が見つかることが決まっているからな。

中に入ると、誰もいなかった。

周りを見渡しても、それらしいものは何も置いていない。壺や何やらがあるだけで、戦力になるようなものは何も見つからない。

近藤と一緒にきよろきよろする。

「何してるの？ こっちよ」

少女？が奥で手招きした。

それは、ピンクの淵で彩られた、場違いのドアだった。

四章 入学の手引き / 二話 骨董店（後書き）

話が全然進みません……

四章 入学の手引き / 三話 布石（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「自然保護区」と「生活区」との境には何もないのですか？

A 何もないです。大抵の人は近づきませんし、近づいてもただ危険なだけで、「自然保護区」が被害を被るわけではないからです。
↳ 「自然保護」というのは名前だけ。

四章 入学の手引き / 三話 布石

「どこでもドア」(*ドラえもん)。その名の通り、どこにでも繋がるドア。

そのドアを開けて、少女？は俺達を手招きする。

「どこでもドア」を潜りながら、俺は少女？に聞いた。

「これ、どこに繋がってるの？ っていうか、これがあつたら、学園内に入るのは余裕じゃん」

「あ、これ、動いてないわよ」

はあ？

「これ、壊れてるの。だから、一箇所にしかな繋がってないの。で、そこがここ」

少女？がそう言って、一礼をする。

「ようこそ、私の骨董店へ」

詳しい事情は教えてくれなかったが、ここは少女？の経営する(？)骨董店らしい。表向きはすでに廃業しているらしいが(店主が

店にいないので」。

「ここにあるものなら、どれでも持って行っていいわよ」

「バッファローズ」の資金源。「どこでもドア」の向こうは、運動場一個分の広さを持つ、巨大な格納庫だった。

収められているのは、「世界観」に相応しい道具の数々。通常兵器や「力」によって鍛えられた兵器ももちろん存在した。

——なるほど。革命軍というだけのことはある。これは意外とい
い仲間？に出会えたようだ。

「これはなかなか……」

近藤こんどうの方を向くと、すでに宝の山に向かって走り出していた……。

俺は近くにあった、「ドラゴンボール」(*ドラゴンボール)を
手に取る。

それを見て、少女？が俺に言った。

「ここにあるのは持っていていいけど、『力』に関わる物は使用者の『力』の波長が合わないと、ちょっと使うだけでかなりの疲労を被るわよ」

「あ、そう……」

丸々二日使って、格納庫内の武器を調べた。

俺の「世界観」に合うものはもちろん、違う物も貰って行くことにする。

少女？によってもたらされた「ご都合主義」的展開。

少女？への不信感が募る。が、敵対する必要性はまだない。

今大事なのは、自分の居場所の確保。

そのためには、この任務を遂行させる必要がある。

多少の不安には目を瞑る。

「ドラゴンボール」は持って行くことにした。七つ集めて復活に使う。

他にも、魔法発動体となる指輪や杖、魔道具やお札など、戦闘に使えるような物は片っ端から「天狗之隠蓑」に詰め込んでいく。

俺のだけでなく、近藤が持ってきた鏡や黒い下着（これは、ボンテージ？）、なども一緒に詰める。

「ドラゴンボール」以外にも復活するための道具がほしいところだな。

「天狗之隠蓑」に詰めた物を確認しながら思う。

「山下！ 何してるの？ さっさと出てきなさい」

「天狗之隠蓑」の外から近藤が呼ぶ。

「今行くから」

作戦実行は明日。

「バッファローズ」の主戦力が「インフレックス」の小隊に陽動をかけている間に、俺と近藤は学園に入学届けを出しに行く。

決行は夜明け前。

脳が一番活動していない時間帯に、事務所に侵入し、入学届けを提出する。

今日は満月らしい。

——やるなら、夜明けまでの数時間しかない、か……。

「バッファローズ」の隊員達は、明日の陽動作戦のため「トーキユー特区」の北部と南部に移動している。俺達は西部からまっすぐ突入する。

今俺と一緒にいるのは、近藤と、少女？、あと、何の力ももたな

い隊員が数名。

——狙うなら、こいつら。

少女？と近藤が何やら話をしているうちに、一人の男子隊員と話を
をする。

満月の月明かりの元で。

円い、円い、大きな満月を見上げる。

まるで吸い込まれるように。

俺は光る天体に見惚れてから。

「『解禁』」

「なっ……」

男子隊員が俺の姿を見て、後ずさりする。

「悪いね、これも、念のためだ」

長く伸びた糸切り歯を光らせながら、俺は笑った。

「準備はできた？」

少女？が俺と近藤に尋ねる。

「愚問ね」

近藤が俺の分まで答える。

「なあ、行く前に、あんたの名前、教えてくれないか？」

「私の名は——」

四章 入学の手引き / 三話 布石（後書き）

少しは本格的に話が進むようになります。

四章 入学の手引き / 四話 VS 賞金嫁せぎ(前書き)

《なぜなに?》

Q 主人公は「解禁」をして何をしたのですか？

A 秘密です。

↓ 考えてみてね。

四章 入学の手引き / 四話 VS 賞金嫁せぎ

「生活区」の中を走り抜ける。

できるだけ「力」は使わない。いつ、どこで探知機に引っかかるか分かったものではないから。

夜明け前の町並みには、早起きな老人もまだ出てきてはいない。

今頃、「バッファローズ」の別個団体が「インフレックス」に奇襲を掛けているはず。

「インフレックス」の警戒が薄れている今、気にすべきは賞金稼ぎの攻撃のみ。

町並みが変わり始める。

目の前に、高層ビル群が見えてくる。

「中枢区」に近い。

内の「バッファローズ」のリーダー曰く、「中枢区」に入ること自体は簡単らしい。

問題は、入ってからだそうだ。

「中枢区」に入った途端、監視センサーに引っかかる。嫌でも「インフレックス」に情報がいき、賞金稼ぎが駆けつける。

「生活区」と「中枢区」の境が近づく。

隣を掛ける近藤^{こんどう}は余裕の表情。

——俺は自動車並の速さで走っているんだけどな（もちろん魔法で肉体強化中）……。

「この調子だと案外簡単にいけそうね」

「そうだな。ちょっと拍子抜けするけど」

風圧で髪がなびく。

近藤の長い髪が俺の顔に当たる。

——おっ、今度は髪が逆立ってる。

——……………。

——ちょっと待て。

——いくらなんでも風圧が強すぎるだろ。

——髪が逆立つつて。

——そこまでのスピードは出してはいないはず。

風が吹き付ける。

「風きついな」

手で目を覆う。

腕がひりひりする。

——はあ？ ひりひり？

目を凝らして風の流れていると、それは旋風となって襲ってきた。

「つちよっ……」

首に巻いている「天狗之隠蓑」をとっさに広げる。

旋風を「天狗之隠蓑」の中にいれることで攻撃を回避。

「ちよっと、何してるのよ！ 中の物がぐちゃぐちゃになるじゃない」

「それどころじゃないだろ！ 襲撃だぞ」

足は止めずに魔力配給を開始する。

敵が何か判らないが、わざわざ立ち止まって戦う必要はない。

俺達の目標はあくまで学園の入学。

「障壁」を三段構えに張る。

風が一瞬弱まる。

——来るっ！

明らかに人の意図が込められた旋風。

エレメンタ・アエリアー・ウァンティ・スビランデー・ネトー・アデウンデーヌ・イニミークスメイスデーフェンダント
「大気の精よ、息づく風よ、疾く来りて我が敵より我を守れ！！」
リーメスアエリアーリス
『風陣結界』！」

さらに、空気を媒体にした障壁を展開。

同時に、殺人旋風が「風陣結界」に衝突する。

「つく……」

通常の風を用いた攻撃より、旋風による一転集中型は堪え難い。

前方に敵を確認する。

所有武器は見たところ、「鉄砕牙」（*犬夜叉）一つ。

——よし。「犬夜叉」なら原作を読んで知識はある。

巨大な牙の形をした「鉄砕牙」を振りかぶる。

「『風の傷』（*犬夜叉）！」

大気を切断する強力な旋風を起こす「鉄砕牙」の初心者用の技。

「やばっ……」

「風陣結界」が破れる。

「風の傷」を障壁で緩和しながら近藤にダメージが及んでいないことを確認する（＊別に気遣ったわけではないよ）。

「つとお！」

襲撃者は飛んで、俺達の頭上で「鉄砕牙」を振り下ろす。

俺は前方に、近藤は後方に、それぞれ「風の傷」を回避。

「ウンデキムビートウス・ルーキス コエ ウンテース サギテンギタミクム
光の精霊11柱、集い来りて敵を射て……」

呪文を詠唱しつつ、体を回転させる。

体の周囲に、光の球体が11個生まれる。

目標を指定。

その間に、近藤の方も攻撃態勢にはいる。

「『二十番機構・斬式大刀態《凌遅の鉈》』（＊シーキューブ）、
禍動」

長大な鉈を構えて「鉄砕牙」と対峙する近藤。

二人で挟み撃ちの体制になる。

「サギタ・
魔法の……」

——殺気っ！

「射手^{マギカ}……」

——背後からの迎撃！

体をひねる。

「連弾^{セリエス}、光^ルの11矢^{キス}！」

爆発音が響く。

数で正体不明の弾丸に対抗する。

——これは、嵌められた。

先ほどの「鉄碎牙」使いは、狙撃手に背中を向かせることが目的だったのか。

相手の位置は掴んだ。

相手の武器は長距離ライフル。

ここから800メートルほど離れたビルに目を向ける。

——この距離はまずい。

——なら。

「『精霊^{デコイ}匣』」

風の中位精霊による囃を瞬時に30体編み出す。

「瞬動術」。

射撃手とは接近戦が定石。

射撃が連続で行われる。

連続なんてレベルじゃない。ほぼ同時に放たれているようなレベルの早撃ち。

「精霊囃」が確実に撃ち抜かれて消される。

その間に150メートルほど進む。

こちらが近づけば近づくほど、相手の狙撃は脅威でなくなる。

ここから上方へ20メートル上がる必要がある。

「メア・ウィルガ杖よ」(★魔法先生ネギま!)」

「天狗之隠蓑」から飛行用の杖を呼び出す。

ジャンプすると同時に杖に跨る。

再度弾丸が飛ぶ。

「サギタ・マギカ魔法の矢、ウナ光の一矢」、ルーキス「開放」、獣化」

射撃手に向けて「光の矢」を放つ。

弾丸の方は「獣化」で耐えればいい。

とつさの考えで、杖を呼んだ意味がなくなっただが、まあいい。

狙撃手にとって一番の弱点は狙撃の後。

——もらった！

「光の矢」が狙撃手を捕らえる。

その前に弾丸が俺の肉体に届いてしまうが、「獣化」中の俺には致命傷にはなりえない。

弾丸が俺の目前まで迫り、開いた。

「しまった……」

これは射撃用の弾丸ではなく、捕縛用の弾丸。

広がっているのは、おそらく「海牢石」で編んだ網、「監獄弾」
（*ONE PEACE）だろう。

これに捕まったら即監獄行き。いやな名前だ。

こちらの攻撃は通用しない。

地面を叩く。

「おりやつ」

割れた地面から取り出した土の塊を投げつける。

「獣化」の力で強化された肩で投げられた土の塊が、「監獄弾」を受け止める。

その間に後ろに跳び、「監獄弾」を回避。

——射撃手はどうなった？

目をビルの屋上に向ける。

「光の矢」は狙撃手には当たらなかったようだ。狙撃手の後ろのコンテナが「光の矢」によって潰れている（「獣化」によって視力が上がっている）。

ここは逃げた方がよさそうだ。

俺は「解禁」を終了して杖に跨る。

「ウエルタートゥルテンベスタエスリス」「プロテクテエザネム」
「逆巻け、春の嵐、我らに風の加護を、フランス・パリエカステンティ・ウエルテンティス」
『風花旋風風障壁』」

竜巻による「風障壁」で俺を見えなくする。

位置が分からなければ狙撃はできない。

いくら「監獄弾」で通過できるといっても、「監獄弾」の大きさと「風障壁」の大きさでは、俺を捕らえることはできない。

「近藤！ 今だ！」

「鉄砕牙」使いと乱闘中のはずの近藤に合図をする。

「了解」

声を聞くと同時に、「風障壁」内に魔方陣が現れ、近藤が召還される。

「転移魔法符」。一枚80万と高価だが（お金の価値は現実世界とだいたい同じ）、仕方がない（自分で買ったわけではないしね）。

「逃げるぞ」

近藤が杖に跨ったのを確認して（背中が温くなる）、杖を飛ばす。

重々しく地面から浮き上がり……。

飛ば……、飛ばない。

「あれっ？ おっかしいな！ 近藤、体重何キロ？ 100キロとか？」

「まだそれをいうか！ 大体、失礼でしょ！」

ポカリと頭を殴られた。

——って、何だこの威力。まじでイテー。石で殴られたみたいにイテー。

「あ、悪い。調子悪かったみたいだから」

すぐに杖は本来の力を発揮し、「風障壁」の天辺に向かって飛ぶ。
竜巻の目であるこの部分だけは移動可能となっているのだ。

「『アクケレレット 加速』（＊魔法先生ネギま！）」

賞金稼ぎ達に見つかる前に、できるだけ高度を上げる。

戦闘離脱を果たして、俺はため息をついた。

暫く空を飛ぶことにする。

もちろん「障壁」類は欠かせない。

「暫くしたら降りようか？」

後ろの近藤に提案する。

ちなみに近藤は俺に抱きついたりはしていない。

杖の周りに力場があるので落ちることがないからだ。

「今すぐ落ちれば？」

そう言って、俺を殴って（今度はそんなに痛くない）杖から叩き
落とそうとする。

力場があるから落ちないけど。

「何だよ？」

「うるさい。黙って殴られてなさい」

四章 入学の手引き / 四話 VS 賞金嫁せぎ（後書き）

久しぶりのバトルでした。

この章で「学園」に入学できるようにしますので、暫くお待ちください。

四章 入学の手引き / 五話 「学園」へ（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 賞金稼ぎのもう一人の「世界観」は何ですか？

A 「ルパン三世」です。使っていたのは次元大輔としての「力」です。

↓ 今後出てくるよ。

四章 入学の手引き / 五話 「学園」へ

上空500メートルを筭で飛行する。

「中枢区」に入ったものの、あれから誰かから攻撃を受けてはいない。

誰かに後をつけられている気配もない。

というか。

「誰もいないわね」

近藤こんどうが言うとおり。

誰もいない。

町に入っ子一人に見当たらないのだ。

「何か怪しくない？」

「そんなこと言ってもなー」

下を見下ろす。

整理された区画。

均一のビル群。

現二十三世紀と同じ町並み。

懐かしさは、まだない。

「ねえ！ 目標って、あれでいいんだよね？」

近藤が遠くに見えてきた巨大な円い塀を指差す。

「トーキュー特区」が世界に誇る学術学園。

名前はない。

その中心に世界最大の円柱型研究施設を備え、周囲にはその小型版八棟が円を描くように

配置されている。中心施設は周囲の施設とそれぞれ通路で結ばれており、その周囲の施設は隣の施設と通路で結ばれている。

その一連の施設意外にも、敷地内には関連施設が複数存在する。

レベルとしては学園都市といえるほどの広さを持つが、敷地内に教育組織は一つしかない。ここは俗に「学園」と言われている。

「ちよっ！ 山下、高度落ちてる！」

「へえ？」

「学園」の塀を目の前にして、意識していないのに高度が下がり始めていた。

「学園」の塀上には強力な侵入者よけの結界が張られてある。

この結界は軍艦の主砲にも耐える強力なもので、また、一部が破れたからといって機能が停止することもない。

侵入の際には、正規の移動口のある地上から行くか、最も結界の密度が薄い最上部を叩くのが定石。中途半端な所に突っ込んだら、即捕縛される。大体、俺達二人の戦力では結界は到底破れないのだが。

上空から急降下して正面玄関から突っ込んでやろうと思っていたのだが、このままではまずい。

体制を立て直す。

箒の先をぐいつと上に向け、加速体制にはいる。

箒が上昇し始める。だが、速度がでない。

「おつかしいな？」

近藤が重いのかと思ったが、さっきまで飛んでいたわけだし。

「山下！ 後ろ！」

近藤が俺の首を無理やり後ろに捻る。

——おいつ、ちょっと待て。人間の首はそこまで曲がらない！

体を捻って後ろを確認する。

「なっ……竜巻?」

「自然保護区」の方からこちらに向かって巨大な竜巻状のものが接近していた。

「なんだこれ?」

風は強くない。

竜巻の通った後の民家は破壊された様子はない。

引き込まれる感じもない。

ただ、「力」の低下が起きているだけ。

「これ『無気嵐』よ」

「バッファローズ」のメンバーに聞いたわ、と近藤が呟く。

「で、どういう効果なんだ?」

「『自然保護区』の『海楼石』等の能力があふれ出して発生した『力』喰らいの嵐よ」

「それまずいじゃん!」

箒の魔力が失われる。

「っげ……」

落ちる。

圧力が突如変わる。

それまで軽減されていた重力の重みが体に掛かる。

「つうげげげ……」

声がつまく出ない。

「無気嵐」が接近する。

こんなに近くまで迫っても、何も感じない。

——まじで「力」だけ吸うのか。

——って、目前に「学園」の施設の繋ぐ廊下の屋根が……！

——くっそ。

「魔法先生ネギま！」の主人公の基礎能力では、魔力がなければ何もできない。

——案外、終わるの早かったな……。

「レベル」も高いし、異世界冒険ファンタジーの乗りでそれなりに楽しんだのに。

——無念……。

こういうとき、擬似感覚入力デバイスが恨めしい。

——屋根に突撃したときの痛みを感じて最期とはな。

「山下^{やました}、しっかり目を開いときなさいよ！」

四章 入学の手引き / 五話 「学園」へ（後書き）

ようやく「学園」にたどり着きました。
長かった……。

四章 入学の手引き / 六話 入校（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「無気嵐」を防ぐ方法はないのですか？

A 「海楼石」の力が元となっているため、「力」の産物に影響を与える類の武器を使えばなんとかなるでしょう。

↓けど、規模が違いすぎるから無理だね。

四章 入学の手引き / 六話 入校

「やました山下、しっかり目を開いときなさいよ！」

そう聞こえた気がした。

が、実際にそれを言うには時間がなさ過ぎるので、幻聴だろう。

目前に屋根が迫る。

と、隣を「ファイア・インキューブ箱形の恐禍」（*シーキューブ）が通り越した。

一辺一メートルほどの黒い立方体の拷問用具が、通路の屋根にぶち当たる。

「シーキューブ」に登場する戦闘者において挙げられる特徴は、能力ではなく、彼ら自身の体の硬さだ（例外もある）。人の負の思念を浴びて負の方向に変質し呪われた道具である彼らは、人外の力を前提としてその身に宿す。「無気嵐」に「能力」を封じられようとも、最初の設定までは封じれない。

上空500メートルからの落下による重力加速が、「箱形の恐禍」の運動エネルギーを増幅させ、通路の屋根との衝突エネルギーへと変換させる。

「箱形の恐禍」が屋根に練りこむ。

「有力者」を前提とした防護を施しているため、単純物理攻撃に弱い。

そもそも、ここ「トキュー特区」内に「能力」なしで突っ込もうとする者はいない。たとえ本人が「有力者」でなくとも、所有物の大抵の物は「能力」の恩恵を受けている。

どうやら「無気嵐」の効果で通常の結界もほとんど働いていない様子。

だが、それだけでは分厚い屋根を突破できない。

「『解禁』、『獣化』！」

落ち着きを取り戻していた思考で、魔力を行使し、超早口で魔獣の力を呼び覚ます。

僅か0.03秒（主観に基づく）で手にした力で、「箱形の恐禍」を通路に押し込んだ。

「……っ、おりゃ！」

屋根を突破する。

今まで俺達の力を受け止めていた物がなくなり、運動エネルギーと位置エネルギーに則って、通路の内部に落下する。

「きゃー！」

瓦礫の中で、同い年くらいの人の悲鳴を聞く。

「げぼっげぼっ」

埃が激しい。

咳き込みながら、辺りを見渡した。

どうやら内部に侵入できたようだ。

おそらくこの通路の中を移動していた人たちが、悲鳴を上げながら俺達から逃げていく。

隣を見る。

「箱形の恐禍」から元の姿に戻った近藤^{こんどう}が、伸びている。

——それもそうか。

俺はとりあえず大事がないことを確認して、自分の体をチェックする。

——よし。幸いなことに、大した怪我はないようだ。

腕に残っている魔獣の力を使い、体の上に乗った瓦礫を押しつける。

「よっし」

改めて周囲を見渡す。

施設を行き来するための通路は、とにかく広がった。

横幅50メートルはゆうに超える巨大な通路の床には、ベルトコンベアの歩行者用の道が脇にあり、中央には移動用の乗り物が通るための道が整備されている。通路というより、道だった。

俺の近くには誰かが乗り捨てて行っただのであろう乗り物や、俺達が侵入した際に壊れた乗り物が散乱している。

本当に幸いなことに、俺達以外の死傷者はいないようだ。

ほっと息をつく。

罪を問われないために入学するのに、その入学する過程でまた人を殺していたら（未だに一回目「コーチさんのやつ」の実感がない）話にならないからな。

「『アデアット』」

「コチノヒオウギ」を呼び出し、近藤の傷の完全治癒を行う。

「いたた……」

目を覚ました近藤が肩を抑えながらぼやいた。

「まったく、押すなら押すで、もっとましな所押しなさいよ」

「知るか。大体、あんな形になってたら、どこがどこに該当するのか分からねえよ」

近藤の無事を確認しながら、俺はため息をつく。

「で、これどうするの?」

周りの惨状を見渡す。

「仕方がないじゃない。でもい、まあ、結果オー来よね。何だかんだいって、『学園』内に入れたんだから」

「これじゃあ、入学じゃなくて侵入だよ」

「もう、いいじゃない。済んだ事は済んだ事で」

だが、事態はまずい方向に向かっていた。

「両手を挙げる! 床に膝を突け! お前らは完全に包囲されている! 抵抗は止めて大人しく投降しろ!」

——もう。どうすんの?

四章 入学の手引き / 六話 入校（後書き）

まだまだバトルで続きます。

四章 入学の手引き / 七話 戦闘開始？（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 「無気嵐」は「力」の全て封じるわけではないのですか？

A 違います。「有力者」のそもそもが持つ「力」までは封じることはできません。できるのは、「力」が外部に与える影響に干渉し、無力化することです。そのため、飛行魔法は使用不可能になります。が、変身など、己の肉体に影響を与えるだけの「力」は使用可能です。

「飛行魔法は自分だけじゃなく、周囲の空間、強いて言うなら空気にも影響を与えているんだよ。」

四章 入学の手引き / 七話 戦闘開始？

パチッ。

パチッ。

「へ？」

電気を感じて振り向く。

超高压電流を肌に感じて、全身の毛が逆立つ。

ドオッ！

俺のすぐ真横を「超電磁砲^{レールガン}」（*とある科学の超電磁砲）が通り抜けた。

「超電磁砲」。メタルゲームのコインを電磁誘導で音速の三倍以上にして打ち出す強力な殺人兵器。

——今のは威嚇か失敗か。

「近藤^{こんどう}！」

「『解禁』！ 『教会区《奈落》』！」

近藤が闇を用いた即席の防護壁を展開させる。

「光の精霊101柱、集い来りて敵を射て、『魔法の射手、連弾、

光の101矢』！」

「光の矢」で「超電磁砲」の発射方向へ威嚇。

「闇夜を切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ……」
ウナース・フル　ゴル　コンキデンス・メクテムイン・メヌー・エンス・イニミ・セグット

「はああああっ！」

「教会区《奈落》」の闇がみだがりきつていない所から、誰かが飛び込んでくる。

目標確認。

詠唱完了。

「『フルグラデル・セカンス　白き雷』（＊魔法先生ネギま！）！！」

本格的な戦闘呪文を、拳に宿らせ、強力な電撃で敵を殺傷に掛かる。

本当は攻撃呪文は「魔法の射手」だけに留めたかったのだが、「超電磁砲」が相手にいるのでは仕方がない。

「おりやつっ！」

雷撃が一直線に飛ぶ。

「無駄」

乱入者は右手で「白き雷」を受け止めた。

否、弾き返した。

「つく……」

戻ってきた「白き雷」を障壁で緩和しながらその身に受け止める。

「……にやろう」

呼び動作なしの無詠唱呪文を使う。

「魔法の射手、連弾、光の17矢」。

「だから、無駄だつて」

体の至る所を狙った攻撃が、またもや跳ね返される。

「げっ！」

——これはまずい。

——さっきの「白き雷」やら今までの戦闘やらで障壁が大分弱まっている。このままだと障壁が、消える……。

「何やってんのよ」

近藤が闇による即席の盾で、「白き雷」を防ぐ。

「仕方がない、一気に潰すわよ」

俺達は今、闇で周囲を完全に覆われている。

この中は、近藤の領域。

中の者を潰すも生かすも、近藤しだい。

闇が乱入者に群がる。

周囲を埋め尽くし、球体の形をとる。

「とりあえず封じたけど、これからどうするの?」

近藤は闇に覆われた乱入者を指差す。

「これで封じた、だと?」

——なにっ!

乱入者を包んだはずの闇が弾け飛ぶ。

「えっ、うそー!」

「っち」

——くそっ。

「『解禁』、『テレポーター空間移動能力者』（*とある科学の超電磁砲）」

——もらった!

相手の「世界観」は「とある科学の超電磁砲」。

頭を開発して超能力を行使できる人たちのお話。

「世界観」が分かればこっちのもんだ。

「やました山下！ 後ろ！」

近藤の声で我に返る。

——やばっ。忘れてた。

——相手は今、「空間移動能力者」だったんだ。

乱入者が俺の背中に手をあてる。

——しまった。零距离……。

「ぐががががつ！」

体中に刺激的な電撃が走った。

——「とある科学の超電磁砲」の主人公の能力は、「エレクトロマスター発電能力者」
(*とある科学の超電磁砲)……。

四章 入学の手引き / 七話 戦闘開始？（後書き）

久しぶりの更新となりました。
これからやっと「学園」の話です。

四章 入学の手引き / 八話 VS「とある科学の超電磁砲」(前書き)

《なぜなに?》

Q 「解禁」から通常状態に戻る場合、何もしなくていいのですか？

A 必要ありません。通常状態のいおける「力」を行使した瞬間、「解禁」が解けます。それまでは「解禁」状態です。
もちろん、「解禁」を解くコマンドもあるよ。

四章 入学の手引き / 八話 VS「とある科学の超電磁砲」

「まったく、なにやってるのよ!」

間一髪、電撃が体の機能を停止させる前に俺と「発電能力者」の間に闇が広がる。

「『解禁』、アクセラレーター『一方通行』(＊とある科学の超電磁砲)」

最強と謳われる能力を身に付け、彼女は俺に向かって突っ込んできた。

「一方通行」。自身の肌に触れたものの熱量、運動量、電気量、空気量など、あらゆるものの「向き」を変換する能力。こちらの攻撃は効かない。そして、触れられたら、終わり。

だが。

勝機がないわけではない。

彼女にとって、「一方通行」は基礎能力ではない。

「解禁」を用いた、制限された能力。

本来なら拡散する運動力を一定方向に統一することで、移動力を倍速して接近してくる彼女を「瞬動」で回避する。

近藤が闇を解いた。

戦闘するのに、触れたものを何でも消失させるこの間は邪魔だ。

背後をとり、拳を握る。

「『解禁』、『魔力無効化能力』^{マジックキャンセル}（＊魔法先生ネギま！）」

まずは試しに一発、背中に拳を叩き込む。

「っと」

避けられた。

そのまま離れて距離をとり、手元にあった通路の屋根の破片を掴んで投擲してくる。

「『風盾』」

「解禁」を解き、「魔力無効化能力」を終了させる。

っと、後ろで瓦礫を踏む音がした。

「『解禁』、『幻想殺し』^{イマジンプレイカー}（＊とある科学の超電磁砲）」

障壁が突破される。

——抜かったっ……！

「幻想殺し」の右腕。

「とある科学の超電磁砲」は「とある魔術の禁書目録」の外伝だ。

同じ能力が出てきても不思議じゃない。

だが。

攻撃自体はただのぐーパンチだ。

——致命傷になるようなことはないはず……………。

「ぶほっ……………」

体が吹っ飛んだ。

たかが拳一発で。

何も能力を使われていないのに。

床に叩きつけられる。

「障壁」はさつき破壊されてしまったので、ダメージは、緩和なく直に体に伝わる。

転がって少しでも衝撃を緩和しているところに、彼女は突っ込んできた。

「解禁」を唱えないということは、攻撃手段は「発電能力」。

「天狗之隠蓑」を彼女の前に広げる。

彼女が発した電気攻撃は全て「天狗之隠蓑」の中に吸収される。

毎度毎度同じ手だが、なかなか使える、この戦法。

「せこい手使っじゃない」

彼女はそう言って「空間移動能力者」に戻る。

俺も「瞬動術」の準備をする。

睨み合う。

しゅっ……。

彼女の体が消えた。

否、瞬間移動した。

俺はそれと同時にさきほどまで彼女がいた場所に「瞬動術」で移動する。

彼女が現れたのはさっきまで俺のいた所の真上。

俺がいないことに気づいた彼女は、頭を回して俺の居場所を特定する。

目標の位置を眼で確認。次に、対象と自身の位置関係を脳内にインプット。

そして、「瞬間移動」。

俺は前に転がり出て、次に彼女が現れるであろう、さっき俺がい

た場所の周囲に体を向ける。

そして、「瞬動術」。

彼女は、俺がいた右横に「瞬間移動」した。

右の拳を握り、腕を横に開く。

「つぐつつ！」

「瞬間移動」は点から点への異空間を通しての転送だ。座標をずらした、といってもいい。それゆえに、その「移動」における運動エネルギーは発生しない。

だが、「瞬動術」は単なる高速移動に過ぎない。それがゆえに、その移動には運動エネルギーが発生する。

高速で接近する棒に腹をぶつけた彼女は、呻き声を上げて後退する。

——よし。いける。

「ふーくかーいちよう！ 結界張れましたよ！」

構えた瞬間、外から声が聞こえてきた。

戦闘に意識を寄せていて気づかなかったが、いつの間にか俺たちの周りが包囲されている。

「本気出しちゃってくださいーい！」

その報告を聞いた途端、彼女はふっと笑って、右腕を俺に向ける。

コインを弾き、宙に浮かせ。

「発電能力」の力で吹っ飛ばす。

——っ！

「超電磁砲」が俺に向けて発せられた。

「クラティス・ステ・アイギス
『最強防護』！」

魔法陣十数枚に及ぶ現状最強の防御陣。

一瞬で破られた。

……。

体が痺れる。文字通り、痺れる。

だが、本当に体に電撃が走ったわけではなく、コンピューターがプログラムした痛覚表現を使用しているだけなので、安全装置もかねて、一定量の痛みしか感じない、はず……（少なくとも今まではそうだった）。

「気合防御」（これのおかげであんまり痛みを感じていないのかもしれない。他にはアドレナリンとか？）でなんとか身体の形状の維持には成功したけど、生命活動は危機的狀態？　というか、HPが残りわずか13。

——レベルが違いすぎる。

彼女は俺から近藤に眼を向ける。

近藤は今度はかりは両手を挙げて降参を示した。

四章 入学の手引き / 八話 V S とある科学の超電磁砲」(後書き)

これで、やっと、やっと入学できます。

四章 入学の手引き / 九話 入学（前書き）

《なぜなに？》

Q 結界を張ってから副会長が「力」を放出していましたが、それはなぜですか？

A 副会長の「力」をセーブする力が掛かっているからです。それを、あの結界で無効化したようです。

「結界の中じゃないと思う存分「力」が使えないみたいだね。

四章 入学の手引き / 九話 入学

その後、生徒会執行部を名乗る生徒達に捕まり、生徒用の反省室に連れて行かれ（分厚い鉄の扉が付いていた）、先生と名乗る人達に詰問され、身体検査を受け、手錠（海楼石でできてる）をされ、牢屋（？）に連れて行かれ、今に至る。

「もう、予定と全然違うじゃない！」

近藤^{こんどう}が壁を蹴って愚痴る。

俺と近藤はそれぞれ別の牢屋に入れられていた。

「山下^{やました}。入学の願書はどうなったの？」

「取り上げられた」

身体検査を受けたときに持ち物は全部没収された。もちろん、「天狗之隠蓑」（この中にほとんどの武器を入れていた）もだ。といっても、「天狗之隠蓑」を勝手に開けることはできないだろうが。

「その可能性にかけるか……」

近藤がはあ、とため息をつく。

經由方法がどうであれ、「入学届け」は学園側に届いたはずだ。問題はそれを受理してくれるかどうかだが。

「……ねむ……」

俺はあくびをもらす。

捕まったせいで逆に緊張が解けて、今までの疲れがどつと沸いた。近藤の方も眠いようで、愚痴を言いながらも、だんだんと静かになつていく。

「はあーあ……」

俺は眠りに落ちた。

——現実って、何なんだろう？

——どうしたんだ？ 突然。

——だって、ここはこんなにも……

眼を覚ましたとき、そこは牢屋ではなかった。

白い壁に覆われた清潔そうな部屋の、白いベッドの上に寝かされていた。

保健室。おそらくそうだろう。

「おっ。目え覚ましたな」

二十歳くらいの女性の声が聞こえてきた。

体を起こす。

周囲を見渡した。

——うん。保健室だ。

だが、近藤の姿が見当たらない。

5つあるベッドには俺ともう1人（布団の中に潜り込んでいて誰か分からない）しかない。

「なんや、いきなり連れの心配かい」

俺の様子を見て保健室の先生（？）がくつくつくと笑う。

「おっと、そんな身構えんでもええで。あんたら2人にはもう何の命令もでてないんやから」

「私、戦闘員とちゃうし」と、手をひらひら振る。

「というか、生徒会の執行部の子に感謝しーや。なんやしらんけど、あの『入学届け』受理するように尽力してくれたらしいで。無事入

学できてよかったやん」

——そうか。入学できたのか。

これで作戦の第一段階は完了した。

——うーん。だけどな……。

「なんや、その疑うような目は。まあ、確かに信じられへんのはよー分かるで。不法侵入罪やし、器物破損やし、暴行罪もあるしなあと、殺人罪もあったつけ。

心配せんでええ。あんたの過去は全てきれいさっぱりクリーニングオフや。首にかかった賞金も0になつとるで」

——クリーニングオフはまずいんじゃない……。

「まあ、とにかく。ようこそ、『学園』へ。ってとこかな。編入生君」

四章 入学の手引き / 九話 入学（後書き）

これで確かに入学しました。

「学園」編はこれからです（しばらく革命の話は、表向きにはなさそう）。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなに？》

Q あの回想は何ですか？

A これからへの布石です。主人公の過去がこれからの展開を狂わします。

〜といつても、最初は少しずつしか出てこないけどね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山^{やました}下^{こうじ} 宏治

レベル 4 4

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法^{サギタ}の射手^{マギカ}」による攻撃

「魔法障壁^{マテリアルシールド}」による防御

「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

内に侵入
反政府組織「バッファローズ」のメンバーとして、「学園」

近^{こんどう}藤^{みき} 美紀

レベル 4 2

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

反政府組織「バッファローズ」のメンバーとして、「学園」内に侵入

生徒会副会長 本名不明

レベル 不明（40以上）

世界観 「とある科学の超電磁砲」
レールガン

得意技 「エレクトロマスター発電能力者」としての電撃攻撃からなる「レールガン超電磁砲」
による攻撃

テレポーター「瞬間移動能力者」としての「テレポート瞬間移動」

備考 本気の「超電磁砲」は山下の「魔法障壁」を紙のように貫く

次章予告

例え好意的に見えても、その真意を確かめる術はない。

裏で何が行われようと、気づかなければ、世は平穏。

しかし、いづれ己に降りかかる。

次章、「監視役と『学園』案内」。

少年は、何も知らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

「生徒会副会長」をいっきに変換すると「生徒回復会長」になるんです。

五章 監視役と「学園」案内 / 一話 監視役（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 学園の話はどのくらいあるのですか？

A 第一部のほとんどを占めます。

↓ 革命の準備は学園内ですますよ。

五章 監視役と「学園」案内 / 一話 監視役

保健室の先生（本名、雨^{あま}休^{やすみ}看。「保健室で働くって運命付けられとったんやね」と笑っていた）の話によると、俺達の「入学届け」は正式に『学園』側に受理され、俺と近^{こん}藤^{どう}はこの生徒となったらしい。

疑りの目で見つめると、休看先生（名前で呼ばれるのがいいらしい）は「はい、これ」と生徒手帳を放り投げてきた。

中を確認して手帳を閉じる。

「お連れのもう1人は、先に『学園』案内されとるで」

「あんたも行きや」と休看先生に保健室を追い出された。

自動ドアを抜けて外に出ると、1人の短髪の女子生徒が待っていた。

「ようこそ、『学園』へ」

淡々と答えて、着いてくるように促す。

「え、えーと。俺の案内役？」

「監視役」

——監視役？

「あんた、何か勘違いしてない？」

くるりと振り返って、人差し指を俺に向ける。

「確かに入学は許可されたけど、それであんたへの警戒が解かれたわけではないのよ。あんなことしておいて、お咎め一つないとも思ってたの？」

「……………」

彼女は前に向き直って、ずんずん進む。

それに俺は続いた。

彼女は御津^{みつみ}見みつつといい、「学園」内の構造を説明した。

「学園」の中央には「メインラボ」のある円柱型の巨大な「センター」が建っており、そこを中心に8つの小型（小型といってもそれは中央の「センター」と比べて）の「センター」が等間隔で円周上に並んでおり、北から時計回りに、第一塔、第二塔と番号が振られている。「中央センター」と「小型センター」との間、そして「小型センター」同士は円周に沿って、通路で結ばれている（俺達が破壊したやつ）。

「学園」内の教育機関は「小型センター」に集中しており、「中央センター」は研究施設がほとんどを占めている。

「中央センター」の直径は約2 km（「中枢区」の直径は約15 km）、高さ500 m、地下は100メートルまである。

隣には「インフレックス」の基地があるが、説明はまた後日。

俺が寝ていた保健室は第5塔の一階部分に位置する。第5塔には主に「学園」内の人間、又、外からのお客の就寝所、初等部の教育施設と実践施設が宛がわれている。

「初等部の実践設備が就寝所と同じ所にあるのは何で？ 危険じゃない？」

「刺激ある日々を送るため」

「……刺激？」

「学園長の方針。学園長、馬鹿だから」

——馬鹿ね。

——設定としてはよくある設定だが。

——そういう学園長に限って、実は凄い切れ者で、何か隠してたりするんだがな。

「ここが中心」

「センター」の中心は吹き抜けになっており、移動用のマットが上下している。

教室や実験施設はその周囲に配備されている。マットの移動区域の周囲には螺旋状に階段があり、一階、二階分の移動は階段の方が早いのでこちらで行われる。

周囲にはこの生徒や研究員が見える。

「あんたの顔を知ってるのは生徒会重役員と教師くらいだから」

騒がれることはないよ、と御津見は言う。

「私達も別に騒ぐつもりはない。あんたが今まで何をしようとして、ここでは関係無い」

「だったら監視はやめてくれないかな」

「この人間を危険に合わせるつもりもない」

御津見と一緒にマットに乗り、一つ目の通路のある10階まで昇る。

通路は各「センター」の10階と20階に設置されている。

俺達が壊したのは20階の、第7塔と「中央センター」を繋ぐ通路らしい。

向かうのは「中央センター」にある職員室。ちゃんと入学の手続きしないかね。

五章 監視役と「学園」案内 / 一話 監視役（後書き）

やっと「学園」の生徒となった主人公。

これから監視役の御津見といろいろありそう。

って、近藤はどこ？ ヒロインでしょーに。

五章 監視役と「学園」案内 / 二話 新展開（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 学園の形には何か意味があるのですか？

A 意味があります。

↓ まだその時じゃないけどね。

五章 監視役と「学園」案内 / 二話 新展開

御津見^{みつみ}によると、俺達が壊したたせいで、第五棟と「中央センター」とを結ぶ上の通路は現在使用不可とのことだった。通常なら高レベルの「有力者」が相手だからといって、「学園」の建物がほいそれと破壊されることはないらしい。やはりあのときは「無気嵐」の影響で「学園」側の防御システムがダウンしていたようだ（通常、「無気嵐」の中を突っ込むような愚か者はいないため、そこまで警戒していなかったらしい）。

破壊されていない下の通路を使って、「中央センター」に向かう。両側に整備された歩行者用の動く歩道に乗る。

「思ったより人が見えないんだけど」

「ああ、今日は休日だから、皆は外」

「休日って、日曜日？」

「他に何曜日があるの？」

「いや、土曜日とか」

「土曜日は実践練習日」

——実践練習なんてやってるのか。

「言っとくけど、私は『有力者』じゃないから」

「ふーん。それでも実践練習とやらにはでてるの?」

「あんたも出るのよ」

暫らく御津見に「学園」の説明を受けながら、通路を移動する。

「そういえば、俺ともう一人いただろ。あいつはどこにいるんだ?」

「とつくに入学手続き済ませて、今頃「学園」生活の準備中でしょ」

「中央センター」に着いた。

各センターと通路の間には扉のような隔たりはない。

俺は一步踏み出そうとして、御津見に止められた。

「こつち」

御津見は「中央センター」すぐ傍の、通路の壁に手を触れる。

「『指紋証、パス、網膜スキャン、パス、学生証、認証』」

「見えないけど、こういうシステムなのよ」

御津見に言われた通りに指紋証と網膜スキャン、それと学生証の確認を終える。

「これを忘れて中に入ったらどうなるの?」

「警報装置が働いて、惨事になるわね」

「惨事って？」

「拘束されて、偽者かどうかの拷問と、事業に支障を来たした分の罰金ってとこかしら」

どこまでが本当かはおいておいて、とにかく、まずいのは分かった。

教員と顔合わせをして、担任教師との挨拶も終えた。学園長は留守らしく、挨拶は後日ということになった。

書類等に目を通してサインして、手続きを終える。

「それでは、これからよろしく」

担任の泉獄先生と握手を交わして、お開きとなる。

「寮を案内するわ」

御津見の後に続いて、第五棟に戻る。

「あなさ」

「何？」

「いつまで監視続くの？　もしかして、一日中とか言わないよね？」

「はあ？　何言ってるの？　何で私があんと一日中一緒にいないといけないわけ？」

—— 然様ですか。

「でも、部屋は隣よ」

学生寮はもちろん、男子寮と女子寮の二つに分かれている。

ただ、建物自体は一緒だ。

部屋は円を描くように配置されており、半分が男子専用、半分が女子専用となっている。

その間には仕切りがあり、これが何故か、男子は通れないが女子は自由に通れるという、作りになっている。

そして、俺の宛がわれた部屋なのだが。

男子用と女子用の接する二組の部屋は、緊急避難用に繋がっていたりする。

つまり、行き来が自由なのだ。

で、何故俺がこの部屋を宛がわれたかというと。

「言つとくけど、勝手に入ってきたら殺すから」

「俺は別に飢えてねえよ」

非常口と書かれたドアから御津見が顔を覗かせて言う。

「とにかく、あんたは監視されているってことを自覚して生活しなさい」

「それって、この部屋がつてことがか？」

「さあね。あと、報告義務があるから、定期的にそっちに行くわよ」

「はあ！？ 何言つて……」

「伝えたからね。私が入れる部屋にしてなさいよ」

御津見は向こう側に戻った。

鍵が掛かる音がする（電子音と錠前の二つ）。

ついでにいうと、こちら側には鍵がない。

——おいおい。

——せめて、監視役は男にしろよ。

ため息をつく。

結局、近藤^{こんどう}には会えなかった。

他にも心配事はある。

生徒会執行部が俺達の入学に尽力してくれたらしいことだ。

——何か裏があるのか？

……。

「分かん」

その場に寝転ぶ。

没収された荷物全部帰ってきている。

「天狗之隠蓑」の中には近藤の荷物も多く入っているので、渡さないといけない（下着とかあったし……………）。

荷物整理でもしようかと（戦闘で「天狗之隠蓑」の中に攻撃を入れまくったから、中が壊滅的になってそう）思った矢先、俺の部屋のドアが外から開けられ、数人の男子生徒^{たぶん}が入って来た。

「転校そうそうすまないが、我々の作戦に協力してもらっ」

一番最初に入ってきたリーダーっぽい雰囲気のが、訳のわからないことを言う。

「共に、この『学園』の男子のために、戦おう！」

——はあ？

五章 監視役と「学園」案内 / 二話 新展開（後書き）

学園生活、いよいよスタートです。
最初は派手にやらかします。

五章 監視役と「学園」案内 / 三話 男女（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 学生証は何か意味があるのですか？

A あります。学生証にはいろいろな安全装置が付けられています。
もちろん、それ以外の機能もね。

五章 監視役と「学園」案内 / 三話 男女

「かつて！ この『学園』は、男女平等を謳う、すーばらしき『学園』だった！

だが、１０年前のあの日、あのくそ学園長のせいで、我々男子は、屈辱を味わい、苦汁を舐めることとなった！

女子寮には各部屋に、空調整備システム、温度調節システム、四段階調節の電球、高級綿を敷き詰めたゴージャスベッド、電気刺激を用いたマッサージチェア、大型冷蔵庫、電子ロック四種整備の各種ドア、個人用バスルーム、モーニングコール、各種ドリンク無料取り寄せサービス……等々、男子寮にはないものが今でも多く配備されている。特に、空調整備システムと温度調節システムの有無は大きい。

我々男子は、この状況に意義を申し立てる！

女尊男卑の腐った体制を取り払い、今こそ、真の平等をこの手に掴むべく、立ち上がるのだ！

確かに、１０年前のあの日、『寮改築の際に余った経費をどちらに費やすか決定戦』で敗北したのは、我々男子の同胞、我々の先輩達だ。これは認めよう。確かにそれは、１０年前の事実だ。

しかーし！

それはあくまで１０年前の話。

これだけの歳月がたった今、我々がこの状況に甘んじる必要はどこにもない。

だが、女子は我々の平和的話し合いにおいて、拒絶を示した。

交渉が決裂した今、我々に残された選択肢はひとつ！

つまり、武力行使により女子寮の制圧、並びに占領だ！」

「「「おおおおおおおおお！」」「」

むさ苦しい男達の声が重なり合う。

「時は来た！　なんと、同志、山下君は緊急避難用の部屋への入室を果たしたのだ！」

「「「おおおおおおおおお！」」「」

「学園」高等部二学年に所属する男子達が俺を感動の眼差しで見つめる。

中には、涙を流している者までいる。

……………。

御津見みつみと分かれてすぐ、俺は部屋に不法侵入してきた男子らにつれられて、風呂に連行された。

150人は収容可能と思われる浴場には、服を着た男達で溢れ返っていたわけだ。

この男達のリーダー、郷馬健ごうばただけしのスピーチに無理やり参加させられた俺。

「学園」の教育機関の振り分けは、現実と同様、初等部、中等部、高等部、大学部の四つに分かれており、俺の所属する高等部二年の男子生徒全員がここに集まっている。

「長く、苦しい生活だった。だが、それもこれで終わりだ。

同志諸君！ 共に、戦おうではないか！」

「「「おおおおおおおお！」」「」

「っおお？」

熱気に押されて、何となく一緒に声を出してみたり……。

要は、女子寮に喧嘩をしかけ、部屋の設備を入替える、ということだろう。

それはいい。

けど。

「ありがとう、君のおかげだ」

何故俺の参加が当たり前に決まっているのだろうか？

「あ、あのー。郷馬君？」

「何だ？」

「どうして俺も参加なの？」

郷馬は、そうか、と言って、一人で頷いた。

「山下同志は転校初日。なら、しかたがない。」

この『学園』の現状を知らされてはいないのであろう。

だが、先ほど自分が言ったとおり、この『学園』は現在、女尊男卑が陰の校訓と言われる有様なのだ。我々は、男子の威厳に掛けて、この体制に反抗しなくてはならない。

まだ、疑っているのか？ まあ、最初は仕方ないだろう。

だが、自分の同志は君意外の全ての男子生徒だ。もし反対すれば、全員を敵に回すことにもなりかねん。下の者の動きまで完全に掌握できているわけではないのでな」

——いや、ちゃんとまとめろよ。

この馬鹿騒ぎに参加することを半ば諦めつつため息をついた。

周りでは、すでに作戦会議が始まっている。

その熱気を破ったのは、女子生徒の声だった。

「生徒会執行部だ！ 寮則違反につき、貴様らを取り締まる。全員

確保！」

「全員、各自退散！ このことは絶対に漏らすな！ 拘束されたら
プランBを実行せよ！ 以上！」

五章 監視役と「学園」案内 / 三話 男女（後書き）

なんか、変な方向へ話が進んでいます……

五章 監視役と「学園」案内 / 四話 危機？（前書き）

《なぜなに？》

Q 「寮改築の際に余った経費をどちらに費やすか決定戦」はいつか描くのですか？

A 今のところ、そのつもりはありません。
↓ 最後におまけで作るかも？

五章 監視役と「学園」案内 / 四話 危機？

浴場から出るには、正面ドアから出るしか方法はない。

したがって、「有力者」が生徒会執行部の気を引き、その間に逃げるのだろう。

一見無謀にも見えるが、生徒会執行部員の数と浴場の男子の数では、その大半が逃げ切ることとなるのだろう。

そうふんで、「瞬動」でも使ってさっさと逃げようと思った矢先、向こう側からドアが開かれた。

と思ったら、すぐに閉められた。

「？」

「催眠ガスだ！」

ドアの近くにいた連中が報告する。

周囲は煙に包まれ始めた。

「催眠ガスって………」

顔を抑えながらつぶやく。

——しかたがない。いっちょやってやるか。

「『ウエンテ
風よ』」

風を起こしてガスを吹き払う。

「あれ？」

風は出たが、せいぜい俺の顔をくすぐるくらいだった。

「そうそう、君には言っていなかったが、『学園』内にいる間は、『力』はほとんど封じられている」

——それを先に言え！

平然と立っている郷馬に向かってつつこむ。

——くそつ、視界が霞み始めた。

「だったらどうするんだ？ 出口は一つ。生徒会執行部が固めてやる。しかも、向こうは武装してるんだろ？」

「按ずるな。こちらとて無策ではない」

誰かがドアを開けた。

「ああ、なるほどね」

ガスが外に出て行くのを確かめる。

ドアを開ければもちろんガスは外に出て行く。

そして、ここが重要で、外の女子達にはこちらの中に入って来れない。

だから向こうは催眠ガスで無力化を狙ったのだろう。

「走れ！」

男子達が一勢にドアに向かう。

そして、外に出た全員が吹っ飛んで帰ってきた。

「やはり駄目か」

郷馬（ごうば）が舌打ちをする。

——いやいや、分かってたんなら、こんな所に集まるなよな。

「生徒会長と生徒会副会長もおらず、非常事態でもない今、これほどまで「力」を発揮できる生徒会執行部員は…… 3人くらいいたかも？」

「……………」

今分かった。

こいつは「抜けてるキャラ」。こういうのは、自分の力じゃなくて他人の力で乗り越えていく、という設定が多い。

そしてもう一つ分かったことがある。

この「学園」では少々荒事をおこしても構わない。

「それじゃあ、脱出するのでしょうか」

郷馬がよつこらしよ、と屈伸をする。

そして、ポケットから携帯銃を取り出した。

「誤解がないように言っておくけど、『学園』内で誰かに怪我を負わせるのはご法度だからね。この銃も、無力化だけに特化した一品」
周りを見渡すと、他の奴らも皆それぞれ手に何かしらの武器を持っている。

「それでは、諸君、健闘を祈る」

そう言つて、郷馬は一番先に飛び出した。

俺の腕を掴んで。

「え？ ちょっと……………」

走りながら郷馬はサングラス（後に変装用と判明、つけると認識
阻害の何らかの力が出る）をかける。

「目を押さえて」

「え？ 目？」

次の瞬間、郷馬の右手から凄まじい閃光と、耳を突き刺すような

音波が発せられた。

「ひえー」

生徒会執行部がひるんだ隙に、傍を走り抜ける。

他の連中もそれに続くが、被害が少なかった執行部の生徒達がそれを阻止しに走る。

郷馬は暫らく走り続け、移動用マットに乗り、男子寮にまで戻ってきた。

「やっと二人つきりになれたね」

突然、意味不明なことを言い出す郷馬。

確かに、周りには誰もいない。

「さてと」

顔を近づけてくる郷馬。

——もしかして、アレか？

——アレなのか!？

冷や汗が垂れる。

——まずい。この体勢はまずい。

壁に押し付けられて両腕を抑えられて、何をされても抵抗できない。

「えーと、何？」

苦笑いで聞く。

「分かってるくせに」

俺の耳元で囁く。

——分かりたくねーよ！

五章 監視役と「学園」案内 / 四話 危機？（後書き）

何か大変なことに・・・・・・・・

五章 監視役と「学園」案内 / 五話 ジム（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 催眠ガスはどこかで仕入れてきたのですか？

A 化学の授業中にこっそり大量に作りました。
少量の物を「力」で増やしたんだよ。

五章 監視役と「学園」案内 / 五話 ジム

「君、『バッファローズ』の一員だろ？」

——！！

「『解禁』、——」

「おっと、ここで『力』を使うのは賢明ではないと思うよ」

「つく……」

「なに、心配する必要はない。僕も『バッファローズ』の一員だ」

——いきなり信じられるか。

「リーダーの性別、年齢は？」

「少女、年は僕らと同じくらい。どう、これで納得した？」

僕は郷馬（ごうば）を睨（にら）むのを止めた。

「もしかして、生徒会執行部員？」

「ああ。君をこの『学園』に入学させるのに一役買わせてもらった
「よ」

郷馬は僕の拘束を解く。

「で、何？」

「潜入役の先輩として言っておくと、暫らくは学園生活をエンジョイした方がいいよ。怪しまれずにすむ」

「分かってるよ、そんなこと」

「君に監視がついてるのは知ってた？」

「御津見とかいう奴^{みづみ}だろ？」

「彼女はあくまで囷。他に五人以上の生徒会メンバーが君を張ってるよ」

——っげ。

——それは気づかなかった。

——本当だったただけど。

「ついでに、全員女子」

——あ、そう。

——って、だから浴場だったわけか。

「で、俺にどうしろと？」

「明日の夜明け、女子寮に奇襲を掛ける。君も、本気で参加してほしい。ついでに、その方が監視は緩くなるだろうし、監視対象から

外れるかもよ」

「そう。分かった」

翌日、朝っぱらから御津見に起こされた。

「今日は外に行くわよ」

「学園」案内は、昨日が中、今日が外となっているらしい。

ちなみに、御津見は俺の部屋の目覚ましを勝手にセットしていた。

御津見について、「センター」の外に出る。

「トーキュー特区」の「中枢区」には「インフレックス」の基地と、「学園」の施設で溢れかえっている。

そのため、買い物等は「生活区」で行うらしい。

「ここで必要なものを買い揃えるの」

御津見の説明を聞きながら、商店街の中を歩く。

「そこで食料は買えるわ。ちょっと高いけど、質は悪くないわよ。おっと、そこは子供が入ってはいけない店よ」

「って、なんでそんな店があるんだ？」

「町だもの。当たり前でしょ」

ちなみに、「中枢区」内にも、というか「学園」の「センター」内にも店は出ている。が、価格が馬鹿高いらしい。

「こうして見ると、実に変だな」

「中枢区」は先端技術を用いているのに対し、この「生活区」は中世ヨーロッパ並みの整備ではない。

「これ、生活環境の違いに文句はでないのか？」

「『学園』は入学届け出せば入れるから、皆子供のころは『学園』の生徒だったのよ。だから、反発はないわ。私達だって、軍に入るか研究職に就くかしない限りは、ここに住むんだから」

「ふーん」

俺は何となく辺りをきよきよ見回す。

前回、俺は「生活区」で「アスラクライン」の力の持ち主と遭遇している。状況から考えるに、彼はおそらく人間だ。NPCではない。となると、この世界に残るか否か、聞く必要がある。

——そういえば、近藤いそではどうするつもりなんだろう？

彼女に聞くのを忘れていた。

「『生活区』はこんな感じ。分かった？」

「ああ」

「じゃあ、私は用事があるから、付き合いなさい」

「はあ？」

「あんたは私の監視対象なの。私の目の届く範囲にいてはいけないのは当たり前でしょ」

——普通は逆だと思いが。

——まあ、他に用事もないことだし。

俺は御津見に付き合うことに決めた。

「分かった。で、どこに行くの？」

「ジムよ」

御津見の言うジムは、どうやら、現実世界のジムと同じようだった。設備レベルは違うが。

「よう、来たか、嬢ちゃん」

御津見が入ると、屈強そうなおじさんが声を掛けてきた。

「ええ」

「そっちの彼は彼氏か？」

「唯の馬鹿よ。ちょうどいいわ。彼も扱いて頂戴」

「いいのか？ 素人にはけっこうきついぜ」

「彼は『有力者』よ。ちょっとやさつと、大丈夫でしょう。たぶん

……」

——おいおい、勝手に話を進めるな。

——しかも何だよ、たぶんって。

——せめて断言してくれ。

「こつ言ってるけどいいのか？」

「別に構いませんよ」

他にすることもないので、軽く了承する。

「よし、そうか。なら、来い」

おじさんに連れられて、俺はジムの奥に向かった。

奥は屋外になっており、上からお日様が覗いていた。

ここは、近接格闘を専門とする、総合格闘技場だ。

そして、何故か戦闘は常に屋外。

隣では、御津見がボクシングの構えをとって、ミットめがけてハイキックをかましている。

——不意打ちの練習か？

「こっちだ、ぼうず」

おじさんが俺を呼ぶ。

「まずはお前さんの力量を見てみることにしようもできんからな。まあ、今日一日だけだし、本格的にやるわけじゃないが、『有力者』となれば話は別だ。お前さん、『学園』の生徒だろ？ だったら、『インフレクス』に入るかもしれないねえってこった。俺はこれでも軍のとある隊長と知り合いでな。せっかくだし、少しくらいなら稽古つけてやるよ」

——なんか、どんどん話が進んでいく……………。

さすがはゲームの世界。

こちらが大して苦勞することなく、修行の場が手に入る。

「まずは俺に一発入れてみる」

ふー、と息を吐く。

「こういう場合、このおじさんはめちゃくちゃ強いのがベタな設定だ。」

——この稽古で俺は屈辱を味わい、弟子入りとかになるのかな？

「それじゃあ、いきますよ」

——だが、やはりゲームはフラグを折ることに意味がある！

——ここは、華麗に勝って、フラグを折る！

それくらいできないようでないと、現実世界には帰れないだろう。

なんせ、俺は、ゲームに囚われたのだから。

「ケントウ本ト・ウーヌス スピーリトホス・ルシキス イニミクサギテント
光の精霊101柱、集い来たりて敵を射て、サギタ・マギカ コンウエル
ゲンティア・ルークム魔法の射手、集束・
光の101矢！！」

101本の「光の矢」を集束させる。

拳に乗せられる「魔法の射手」はこれで限界。

——このおじさんがどうなろうと知ったことが。

一発で岩を砕く攻撃が百一発分。

「桜華崩拳」！

大砲並みの威力を誇る拳を、おじさんに叩きつけた。

五章 監視役と「学園」案内 / 五話 ジム（後書き）

戦闘が戻ってきました。

果たしておじさんに勝てるのか？

ゲームの設定をぶち壊せ、主人公。

五章 監視役と「学園」案内 / 六話 おじさん（前書き）

《なぜなに？》

Q おじさんは御津見とどういう関係なのですか？

A 親戚です。

↓ 結構仲はいいですよ。

五章 監視役と「学園」案内 / 六話 おじさん

突き出した拳に対し、おじさんは俺の腕を下から持ち上げる。

そして、そのまま回り込み、一本背負い。

「つく……」

背中が叩きつけられる瞬間、障壁に魔力を集中させ、衝撃を緩和する。

さらに、体をひねって、強引におじさんに捕まった腕を開放し、距離をとる。

おじさんは涼しい顔で、来いよ、と手招きする。

拳は避けられた。同時に放つはずだった「魔法の射手」はまだ健在。

「にやろっ」

「瞬動」でおじさんの正面に移動する。

腰をかがめ、「桜花崩拳」の準備。

おじさんが拳を繰り出す。

「瞬動」で背後へ。

おじさんが腰を捻って、横からの殴打に変更。

更に「瞬動」でその背後へ。

「のおっ……」

近接戦闘の技術では勝てない。

その理由は簡単。

俺の攻撃は常に、コンピューターで予めシュミレーションされた「業」の組み合わせでしかない。俺自身が攻撃しているのではなく、俺が攻撃コマンドを選んでいるに過ぎない。

ならば、仕方が無い。

「っはあ！」

左肩から前に突っ込む。

右腕を引き、チャンスを待つ。

「おっと」

おじさんは左足を後ろに蹴り上げ、俺との密着状態解く。

そのまま前転し、おじさんは立ち上がった。

「これは意外だな」

おじさんはそう言うが、全然焦った様子はない。

思考をめぐらす。

「桜花崩拳」はもう無理だ。

「魔法の射手」をこれ以上キープしておくことはできない。

「ったあ！」

「魔法の射手」101本をおじさんに乱射する。

近接戦闘のジムでこれはやりたくなかったが、仕方が無い。

勝ち方にこだわりはない。勝利の二文字だけが目当てだ。

「ふー。やっぱりお前さんは『有力者』だな」

懐にぬくもりを感じる。

――！

――しまった。

気づいたときには体が吹っ飛んでいた。

障壁を貫通する一撃。

「『有力者』じゃなくても、戦闘はできるんだぜ、ぼっず」

おじさんの声が聞こえる。

「つく、『解禁』、『獣化』」

肉体を変化させる。

「いいのか？ 遠距離の方が勝ち目あると思っぞ」

——んなことは分かってるよ。

「瞬動」(この状態でも出来る)。

「むっ、来るか」

小細工なしのタックル。

——これならどうだ。

「足元がお留守だよ」

足を引っ掛けられた。

体が浮く。

「ぐはっ……」

膝蹴りをもらっつ。

次に来るのは拳の打ち落としのはず。

これで決めに来るのだろっ。

——ならっ。

「つく……」

——一撃耐えればいい。

決め手として放たれた一撃を耐えればいい。

「はいっ！」

背中に拳の打ち落としがなされる。

不意打ちと、予め予想されていた攻撃とでは、体へのダメージが大幅に違う。

「『ウナ光の一矢』！」

地面に向けて放った。

「魔法の射手」の反動で、おじさんの顔面に背中からタックルを食らわす。

「なっ……」

不意打ちを食らったおじさんは数歩後退。

顔面への攻撃だ。ダメージも大きい。

近接戦闘では勝てない。

下手に遠距離攻撃を放つても避けられる。

ウンデキムピリトゥス・アエリアカビスクルム・ファクティ
「風の精霊11人、縛鎖となりて、イニミクムフテン 敵を捕まえろ」

「瞬動」でおじさんの正面に移動し、右手を翳す。

サギタ・マギカ アエール・カプトウーラエ
「『魔法の射手・戒めの風矢』!!」

「おおっ、これは……」

魔法の縄がおじさんを拘束した。

「俺の勝ちでいいですか？」

「いやー、やられたよ。だけど」

背後に殺気を感じる。

「なっ……」

「まだまだ子供だね」

——どうやって、抜け出したんだ？

あれは基本的な魔法だが、嵌れば暫らくは抜け出せないはずなのに……

「はい、終わり」

首筋に手刀を食らって、俺はその場に倒れた。

五章 監視役と「学園」案内 / 六話 おじさん（後書き）

なんか主人公、負けっぱなしですね

五章 監視役と「学園」案内 / 七話 VS 「アスラクライン」 (前書き)

《なぜなに?》

Q おじさんは一体どうやって、「戒めの風矢」から抜け出したのですか?

A 秘密です。読み進めていけばいずれ分かりますよ。
↳ ヒントは次回の話にあるよ。

「なにぼけつとしてるの！」

御津見^{みつみ}の声で我に返った。

あわてて彼女の後を追う。

——つくそ。

地面をにらみつける。

あのあと、二度三度とおじさんに挑んだのだが、どれもあつけない負けてしまった。

「五時までには帰らないといけないんだから、さっさと着いてきなさい」

「えらく早いな」

そう呟いたが、それについての説明はなかった。

ジムを出た後、御津見のショッピングに付き合い（どうして女っていうのは物を買うのにあんなに時間が掛かるんだ？）、昼食に付き合い（一食ぐらい高カロリーな物を食べても大して変わらないだろうに）、今に至る。

五時に寮に帰ろうと思ったら、三時には「生活区」から発つ準備を始めないといけない。

「中枢区」内にはベルトコンベアを用いた歩道が設置されているのだが、「生活区」にはそれがない。移動は基本徒歩で行わなくてはならず時間が掛かるのだ。

「あっ!？」

後から叫び声が聞こえた。

俺と御津見が振り向くと、大工姿の同い年くらいの少年がいた。

「知り合い？」

少年が俺の方を凝視しているので、御津見が聞いた。

「いや、大工に知り合いはいない」

そう言つて少年の顔を見て、ふと思い出した。

——あっ！

「忘れたとは言わせませんよ。コーチさんの仇はまだ取れてません」

彼は「アスラクライン」の使い手、俺と近藤がこの町で会った始めての「有力者」だ。

「仇？」

御津見が首を捻る。

「あ、そう言えばあんた、殺人の経歴があつたわね」

ぽんつと手を叩いて御津見が納得する。

「なるほど。その相手が彼の言うコーチさんというわけね。いいわ。監視役の私が許す。存分にやちゃっていいわよ」

御津見が俺を少年の方に押し出す。

「つちよつと！俺の罪は問われないんじゃないの？」

「被害者の心の傷までは対象外よ。恨まれることしたあんたが悪い。あ、そうそう、こいつは元犯罪者だから殺しちゃってもせいぜい過剰防衛ってところだから」

——おい！

——ジムでのことといい、お前は俺の監視役じゃなかったのか？

——それに少年の方も。お前は例のコーチさんと面識ないはずだろ！

周りを見渡すと、いつの間にかギャラリーが俺達を取り囲んでいた。

「逃げられないわ。馬鹿ねー」

「お前のせいだろうが」

——ちくしょう。

——なんか、思い通りにいかねえ。

少年の方を見る。

向こうはやるき満々のようだ。

——ええい。

——もう知らん。

——所詮これはゲームなんだ。

むちゃくちゃな人生になろうが、現実世界に生きる俺としてはな
んら関係無い。

「『来い、？鉄』！^{くろがね}」

少年が「機巧魔神^{アスラ・マキナ}」を呼び出した。

「『闇より深き深淵よりい出し、其は、科学の光が落とす影』」

黒い鉄の鎧武者が姿を現す。

俺は「魔法発動体」である指輪に触れる。

「『？鉄』！」

少年の声に反応して、「？鉄」が拳を振り上げる。

瞬時に魔法陣が拳の前に現れ、「？鐵」の魔力を増大させる。

「黒の拳撃」。

「『最大防護』！」

障壁を展開し、「黒の拳撃」を防ぎにかかる。

だが、重力制御能力を有する「？鐵」の前では、障壁など軽く破られてしまう。

だから。

「瞬動術」！

俺は「？鐵」の正面に跳ぶ。

右手をすでに振るってしまった「？鐵」に残されているのは、左手のみ。

「『？鐵』！」

二度目の「黒の拳撃」を「光の矢」の反動で避け、その腕に乗る。

「つな・・・・・・・・」

「？鐵」を蹴って、再度「瞬動術」。

「？鐵」の背後に回りこむ。

そしてそこは、「演操者」^{ハンドラー}の正面でもある。

「光の精霊9柱、集い来たりて敵を射て」

無防備な「演操者」を撃つ。

「『魔法の射手、集束・光の9矢』！」

「同じ手は二度も通用しませんよ。『?鐵』！」

少年の正面に「?鐵」の頭が現れた。

黒兜が「光の矢」を防ぐ。

「そうか。部分召還」

本体の方に目を向けると、首から上がなくなっている。

少年を守った首は持ち上げられ、本体が姿を現す。

それと共に俺の背後の「?鐵」は消えていた。

俺は跳んで、「?鐵」から一端距離をとることにする。

少年が近くの建物に近づいた。

影が曲がって、高くなる。

——しまった……

「『？鐵』！」

「機巧魔神」は「演操者」の影を媒介に出現する。

真横から現れた「？鐵」の本体が、重力に従って俺を潰しに掛かった。

「まったく」

声を聞いたかと思うと、俺の体は誰かの衝突で横に飛ばされた。

御津見だ。

彼女は何かを握った右手を「？鐵」に向かって突き出す。

「なにを……」

御津見は「有力者」じゃないと聞いた。

——彼女に力はないはずだ。無茶だ。

「御津見！」

五章 監視役と「学園」案内 / 七話 VS 「アスラクライン」 (後書き)

忘れている人もいるかもしれない、「アスラクライン」の使い手君の登場でした。

五章 監視役と「学園」案内 / 八話 急展開（前書き）

《なぜなに？》

Q 「機構魔神」の前回のような召還をテレビでは見なかったんですけど？

A あれはオリジナルです。

→ 本は読んだことないから、本には出てかも？

五章 監視役と「学園」案内 / 八話 急展開

御津見の右腕と「？鐵」の右腕が接触する。

「？鐵」の右腕の重力制御によって、御津見^{みつみ}の腕が潰されるはずだった。

「……！！」

「アスラクライン」使いが息を飲む。

御津見と触れた所から、「？鐵」が戻り始めたのだ。

俺は目を丸くしながら、光る御津見の右手を凝視する。

彼女が握っているのは、小さな金属部品。それが光を放っているのだが、あれは一体何なのだろうか？

「有力者」でなくとも、「有力者」の力によって生まれた物は、本人でなくとも使うことができる。

——だとすると、あれは何かのアイテムか？ だが、無効化とはまた様子が違う。俺の把握していない種類の話か？

「つと……」

御津見が地面に足をつく。

そして、「アスラクライン」使いに向かって言った。

「あんた、うちに来なさい」

そして何故か「アスラクライン」使いは「学園」に入学することになった。

正式な入学は数週間後になる予定だが、これで一先ず接触の機会が増えたことになる。

「アスラクライン」使いの名を、みき きょうすけ三木恭介と言い、現実世界の人間と判明した。

御津見が「学園」と連絡を取っている間に彼と接触し、誤解を解くために「神のお告げ」を見せる。

「すみません。てっきりそういう設定なのかと思ひまして」

——どんな設定だよ。

「とにかく、もう一人現実世界の人間も『学園』にいるから、ここは入学しとくに限るぞ。調べたところ、『学園』に入学しといたほうが、いろいろ楽そうだ。それに、学園が目の前にあるのに、そこに入学しない、なんて設定、ありえないだろ？」

「確かに。それにしても、よくそんなに情報が集まりましたね」

「というか、なんで『神のお告げ』知らないんだよ？ 普通、気になって確認くらいするだろ」

「いやー。僕、今週は『パーソナル・リアリティ／自分だけの世界』やり続けるつもりだったんで」

「あ、もしかして『アドベンチャーワールド』の方？」

「はい。そうです」

「じゃあ、ランキング戦には出てなかったのか？」

「ええ」

——大した収穫はなし、か。

——まあ、一人仲間？が増えたことだし、ラッキーとするか。

翌日、俺はトイレで郷馬に捕まった。

「よう、同志。作戦会議だ」

個室に無理やり連れ込まれ、俺は再びむさ苦しい男子共と対面することになった。

男子トイレの個室の一つに「四次元ポケット」（*ドラえもん）

が設置しており、そこが男子の秘密基地になっているらしかった。

「どうやらやる気のない君に言っておくけど、君の部屋には盗聴器と盗撮器が設置されてるから」

——っな……

「それと君が使っている布団だが、あれは半年以上干していない」

——っげ……

「しかもあの部屋は……。やっぱり止めておこう」

「最後まで言え！」

「いやいや、知らぬが仏というやつだよ」

郷馬（ごうま）は俺を哀れむように見てから、「では作戦だが——」と言って男共と話し始める。

「やらやー、いんだろ。やらやー」

俺は彼らの話にはいることにした。

五章 監視役と「学園」案内 / 八話 急展開（後書き）

次からは戦闘のみの章です。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなに？》

Q あの回想は何ですか？

A これからへの布石です。主人公の過去が全体の流れを狂わしていきます。

↓最初は少しずつしか出ないけどね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

やました
山下 宏治 こうじ

レベル 4 4

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」による攻撃
サギタ マギカ

「魔法障壁」による防御
マテリアルシールド
「瞬動術」による移動

備考 主人公

高校二年生

内に入
反政府組織「バッファローズ」のメンバーとして、「学園」

こんどう
近藤 美紀 みき

レベル 4 2

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

備考 ヒロイン

高校二年生

内に入
反政府組織「バッファローズ」のメンバーとして、「学園」

雨 あま
休看 やすみ

レベル 不明

世界観 不明

備考 保健室の先生
けっこういいかげん

御津見 みつみ
みつ

レベル 0（のはず……）

世界観 なし（のはず……）

備考 山下の監視役として派遣されてきた
高校二年生

泉獄せんごく 篝火かがりび

レベル 不明

世界観 不明

備考 山下のクラスの担任

郷馬こうば 健たけし

レベル 不明

世界観 不明

備考 高校二年の男子の実質的リーダー
反政府組織「バッファローズ」の一員

三木みき 恭介きょうすけ

レベル 不明

世界観 「アスラクライン」

得意技 「?鐵」の召還による物理攻撃（鉄の鎧武者の打撃攻撃）

次章予告

欲する物があるのなら、己の力で得るしかない。

欲した物が他者の物なら、奪い取るより他にない。

欲望に駆られたときこそ、人は真の姿を曝け出す。

次章、「女子寮攻略戦争」。

力を得ても、欲望は満たされない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

急に人が増えました。

《なぜなに？》

Q 「アスラクライン」使い、三木君は何をしていたのですか？

A 正体を隠して町で出稼ぎということで働いてました。なぜ正体を隠していたのかというと、別に「力」を使うことがなかったため、尋ねられることがなかったからです。

→どっちかっていうと、正体を隠してたんではなく、正体を知られなかったんだよ。

第六章 女子寮攻略戦争 / 一話 戦闘開始【10:00】

第二次女子寮攻略戦争

勝利条件 男子：女子寮高校二年生用の最深部に一人以上がたどり着く

女子：男子の女子寮高校二年生用の最深部への侵入を防ぐ

景品 男子：女子との寮施設交換

女子：各部屋にメイドor執事（希望の方）配属

注意事項 相手に全治一ヶ月以上の負傷を負わせてはならない

戦闘開始時刻 本日午前10時

戦闘終了時刻 本日午後8時

翌日早朝、各部屋にこのような紙が配られた。

「まじでやんのか……」

通達書を見て呟く。

はつきり言って、全然やる気じゃない。

が、ここで生活していくには仕方がないのだ。

変な注目は受けたくない。

ここは、一般男子達と同じ行動をとるのが一番。

【午前9時50分・男子寮山下部屋内・山下視線】
やました

狭い部屋に大勢の男子が集まっている。

この部屋が今回の戦いでキーになる、らしい。

この部屋の隣からが女子寮だそうだが、その境界にはシールドが張られており、女子意外通ることができないそうだ。

そこで、この部屋の女子寮と繋がる緊急避難用通路を使う。

「でも、ここ盗聴器が仕掛けてあるんだろ？ いいのか？ こんな所で作戦の指揮をして」

「構わない。盗聴器を仕掛けたのは大学部の生徒だ」

郷馬（きょうば）は俺に作戦の続きを説明する。

「とにかく、君には派手にやっってもらおう」

郷馬はそう言って俺の肩を叩いた。

【午前9時55分・男子寮山下部屋外・清畏視線^{きよわな}】

「なんで僕まで……」

清畏聖也^{きよわな せいや} 17歳。高校二年生。

チャームポイントは、気弱な性格。

クラスメイトで高校二年の男子の実質的リーダーの郷馬のせいで、
今僕は無理やり戦わされている。

「だから僕は前線で戦える人間じゃないんだ……」

ため息をつく。

僕も一応は「有力者」の端くれ。そりゃあ、活躍したいけど。僕の「力」は実践用じゃないし。

「ほらっ、やるっきゃねえだろっ」

隣の男子が背中を叩く。

「ほらっ、くるぞ」

【午前9時58分・女子寮側ゲート前・近藤視線】

何だか知らないけど周りに押し切られて戦闘に参加することになった。

話によると、この「学園」の敷地内で「力」を少しでも使えらというのは戦力として貴重らしい。

「学園」入学時に、生徒は「学園」側から「力」の封印処置を施されている。

そのため、「学園」内での「力」の行使は「学園」側から封印の解除がないと基本的に不可能となっている。だが、その封印処置も万能ではなく、レベル40以上になると封印しきれなかった「力」の余波を行使することができる。

私と山下が「学園」に侵入したときに「力」が使えたのは、まだ封印処置が施されていなかったからだ。「力」が使える「有力者」が侵入したからこそ、「学園」の生徒は皆逃げ出したのだ。そしてあ場で全開の私達と張り合えた生徒会副会長の「力」が異常なのだ。

そしてその生徒会副会長、寿緋麻里こいひさまりが私達の頭を務めている（初等部、中等部、高等部、大学部それぞれに生徒会があり、副会長の彼女は高校二年生なのだ）。

ポケットに手をつ突っ込むと、モデルガンを取り出す。

実弾は入っていない。その代わり、当たると全身を神経を麻痺させる毒が塗られたゴム弾が装備されている。

周りの皆もそれぞれ手にモデルガトリングを持っている。

私達の目標は一つ。

全ての男子にこの弾を撃ち込むこと。

ゲートを超えることは戦闘開始まで許されていない。

時計を見る。

残り、8秒……

……。

そして。

鐘の音が鳴り響いた。

『戦闘開始』

寿の声がマイクを通して、私達が着けている通信機（耳にちよこつつけるだけ）から聞こえてきた。

女子寮側ゲート前の突入班、総勢20名がモデルガトリングを構

『突入』

える。

六章 女子寮攻略戦争 / 一話 戦闘開始【10:00】（後書き）

始まりました、戦闘メイン。

《なぜなに？》

Q これから、視線はこころ変わるのですか？

A 変わります。

くといっても乱戦になるときだけだよ

第六章 女子寮攻略戦争 / 二話 ゲート前防衛戦――？ 【10:00】

【午前10時00分・男子寮側ゲート前・清畏視線^{きよわな}】

戦闘開始の合図である鐘の音が鳴り響くと同時に、ゲートの向こう側から20人ほどの女子生徒が乗り込んできた。

「って、ちょっと……」

彼女達は皆その手にガトリングを有していた。

「撃て」

中央にいるリーダー格の女子の一声と同時に、ガトリングが火を噴く。

「うわあああああああ！」

両手で顔を守る。

が、弾丸が当たった様子はない。

「ほらっ、こっちも反撃するぞ」

一緒にゲートを守る仲間のリーダーである神崎拳君^{かんざきけん}が僕の手を顔からはがす。

目の前に広がるのは、神崎君の絶対防御を誇る「方陣障壁^{ヘキサ・ウォール}」（＊黒神）によるシールド。

「方陣障壁」は「サウザンド」（*黒神）という道具を用いて使っているらしいので、「学園」内でも使用可能だそう。細かいところは知らないけど。

——そうだった。僕らは勝ち目があるから戦いに出たのだ。

「オーケー」

——とにかくここは通させない。

この後には山下君とかいう男子の部屋があり、そこには今大勢の精鋭部隊が集っているのだ。

緊急避難口からの進入が開始される前にここを突破されたら、彼らは袋のねずみになってしまう。

上着のサイドポケットから「モンスターボール」（*ポケットモンスター）を大量に取り出す（小さくしてあるので一杯入るのだ）。

「いっけーっ」

【午前10時02分・男子寮山下部屋内・山下視線】

「戦闘が始まったな」

郷馬^{ごうば}が呟く。

「まだなのか？」

俺は緊急用避難口の前で作業する隊員を見ながら聞く。

「分らん」

「分らんって……」

女子寮へ侵入するには、この緊急避難用通路を通らないといけない。

そのため、女子が向こう側からこの扉を封じているのだ。

「まあ、焦るな。いざとなれば正攻法でいく」

女子寮にも「移動絨毯」は通っているので、一回下に降りてから女子寮行きに乗り換えれば女子寮に入ることができる。

「それができたら苦労してないんじゃないか？」

「……、まあ、焦るな」

【午前10時03分・男子寮側ゲート前・近藤^{こみづ}視線】

私達女子は、突如現れた大量のバリケードの前に立ち往生する破目になった。

『寿さん、バリケードと遭遇しました』

無線機を使ってリーダーの寿に、この場の指揮官、寒籐子^{かんとうこ}が状況を伝える。

『オーケー、見えてるわ』

無線機と一緒に小型カメラも装備しており（服の襟についている）、寿は女子寮の一番奥の作戦ルームで指示を出している。

『では、寒さんのグループは引き続きガトリングガンを使って敵戦力の削減を行って。別に深追いする必要はなし。例の作戦実行まではその調子で』

通信が切れる。

「りょーかい」

私達はガトリングを担いで、バリケードの隙間を狙う。

「撃ち方始め！」

【午前10時10分・男子寮側ゲート前・清見視線】

「モンスターボール」から取り出したバリケードと神崎君の「方

障壁」を用いることで、女子が使うガトリングの弾丸から身を守っていた。

「中はまだなのか？」

神崎君が後方の仲間に向かって叫ぶ。

「てこずってるっばい」

それを聞いて神崎が顔をしかめる。

「突入されたら防ぎきれないぞ」

【午前10時11分・女子寮作戦室・寿視線】

「どう？」

後でパソコンを操っている草子そうこに聞く。

「順調。このままいけばあと数分ってところかな」

——よし。予定通りだわ。

「午前中に制圧するわよ」

六章 女子寮攻略戦争 / 二話 ゲート前防衛戦――？

【10:00】

（後

女子の方が先に仕掛けるようです。

「力」封じられてるから戦闘が描きにくい……

《なぜなぜに？》

Q 「モンスターボール」は「ポケットモンスター」の「有力者」
でなくても使えるのですか？

A 武器は「有力者」でなくても使えます。
↳それに、「モンスターボール」は「力」が弱いから一般人で
もなんなく使えるんだよ

第六章 女子寮攻略戦争 / 三話 ゲート前防衛戦――？ 【10:13】

【午前10時13分・男子寮側ゲート前・清畏きよわな視線】

女子の使ってくるゴム弾丸はどうやら神経麻痺毒が塗られているようだ。

バリケードの穴を抜けた弾丸に被弾した仲間の様子から確認した。

「清畏、バリケードを前に！」

かんざき
神埼君が叫ぶ。

手にある「モンスターボール」は三個。

僕はそのうち一つを投げることにする。

空中で一瞬滞空し、「モンスターボール」は口を開けてバリケードを放出。

「それしか能ないの？」

知らない女子の声でした。

「馬鹿っ、全部っ……」

神埼君の声が消えた。

そして、展開しかけたバリケードが破壊される。

「……え？」

展開しているバリケードは、廃棄処分になった「学園」の机を再利用したものだ。本格的に「力」を発動したら何の役にもたたないが、「学園結界」により「力」を封じられているここであらう、十分に障害物となりえる。もちろん、武器による破壊は可能だ。だが、あまり強力な武器を使うと相手を負傷させすぎることにもなりかねないので、その可能性は低いと見込める。

「ぶへっ……」

「方陣障壁」を使ってバリケードの穴をカバーしていた神崎君が隣に吹っ飛んできた。

「か、神崎君！」

うつ伏せに倒れている神崎君のもとにしゃがみ込む。

「う……ぐっ」

苦しそうな神崎君に、外傷は見受けられない。

おそらく、急所への一撃によるもの。

今は苦しんでいるが、何日かすればすぐに回復できる程度の一撃。

「——っく……」

神崎君が破れたことにより「方陣障壁」が消滅、僕の後ではバリ

ケードの穴を抜けた弾丸に仲間が被弾していく。

僕達のチームの目的は精鋭部隊が突入するまでの防御。

武器はほとんど与えられていない。

——どうする？ どうする？ どうする？ どうする？ どうする？
どうする？ どうする？ どうする？……

出来ることなら逃げたい。

——けど。

「あんた、少しは強いのかしら？ もう、手加減するの、飽きたのよね」

例の侵入者の一人、黒髪のロン毛の少女が僕を見下げていた。

【午前10時13分・女子寮作戦室・寿視線^{ことぶき}】

「副会長、近藤^{こんどう}が単独行動をとり始めました。どうしますか？」

生徒会役員の一人、静香^{しずか}静江^{しずえ}が報告する。

「そう……。まあ、いいわ。好きにやらせなさい」

「え……、いいのですか？」

静江が呆けた顔をする。

「ええ。寒^{かん}に伝えておいて」

ゲート前担当の寒に連絡を入れるように手配する。

近藤はレベル40以上の「有力者」であり、危険因子でもある。

——彼女の力を拝見するいい機会だ。

「静江、記録を余分に作っておいて」

「観察用にですか？」

「ええ」

【午前10時14分・男子寮側ゲート前・清毘視線】

——一体どうする？

——今の僕に何ができる？

相手はレベル40代の「有力者」。

侵入の際には、いくら「学園結界」の中でとはいえ、あの寿さんと互角に戦っていた化け物だ。

「つく……」

歯軋りしても情勢は変わらない。

僕の持ち球は「モンスターボール」しかない。

——やるか？

——やれるのか？

ポケットの上から得物を確かめる。

力量差は明白。

だが、男として、「有力者」として、プライドが許さない。

「それじゃあ、やりましょうか」

黒髪の少女は、手にする日本刀を一振りした。

武器による「有力者」同士の戦いです。

《なぜなに？》

Q たかだか机ごときでバリケードになるのですか？

A なります。なぜなら、あの机は改良され、大量の鉄の棘が装着されているからです。

↓ 机自体は勝手に持ち出したんだよ

第六章 女子寮攻略戦争 / 四話 ゲート前防衛戦――？ 【10:14】

【午前10時14分・男子寮側ゲート前・清畏視線^{きよわな}】

「モンスターボール」を前方に投げる。

相手の攻撃方法が全く分からないこの状況で、僕にできることはこのくらい。

空中で一端停止した「モンスターボール」は、バリケードを放出するために、口を開く。

「だから、飽きたって言ってるでしょ」

黒髪女は手にした日本刀投げて、「モンスターボール」に突き刺す。

放出途中に妨害された「モンスターボール」は、そのまま地面に落下する。

開閉スイッチの部分を貫通され、おそらくは使用不可能となった「モンスターボール」は、爆発することなく地面に落ちた。

――まずいつ……

僕はすぐさま次の「モンスターボール」に手を掛ける。

その間に黒髪女は日本刀を回収し、僕に向かって来た。

距離にして約5メートル。

歩数にしてプロなら一步、素人でも四歩。

時間にして一瞬。

「つく……」

「モンスターボール」をその場で放つ。

放出されたバリケードは、向かってくる黒髪女に向かってそのまま飛ぶ。

「ふんっ」

日本刀で一刀両断する黒髪女。

だがその間、前進する動きが止まる。

バックステップを踏みながら更に「モンスターボール」を投げる。

今度は二つ。二つとも一直線に黒髪女に向けて。

黒髪女はなぎ払おうと日本刀を構える。

続けざまに、今度は三個投擲した。

ちょうど、先ほど放った二つの「モンスターボール」を破壊した黒髪女が前に体を傾けた瞬間。

爆発した。

「つく……、目くらましっ！」

怯んだ間に「モンスターボール」を十三個、一気に開ける。

すぐさま十三セットのバリケードが展開され、僕と黒髪女の間
距離が生まれる。

手には次の「モンスターボール」を用意する。

僕の手では、この程度の目くらまししかできない。

「なるほど、そのボールはただの入れ物じゃなくて、間合いを取る
ための道具ね」

煙の中から黒髪女の声が聞こえる。

——いきなりばれてるっ！

って、相手はレベル40代。こうなることは十分承知……

「これで、終わりってことはないよね？」

黒髪女はそう言って、一気に間合いを詰める。

「へ？」

展開していたバリケードを通り抜けて、日本刀と共に僕の目前に
いたっ！！

「……『剣殺交叉』（＊シーキューブ）」

呟きと同時に、バリケードが粉碎する。

——……レベルが違い過ぎる！

——とういか、なんなんだ、あの日本刀！？

——なんか変なオーラとか出てるし。

——あれか？

——あれが妖刀とかいうやつか？

「はあー、やっぱり雑魚じゃ相手にならないわね……」

次の瞬間、僕は意識を無くした……

【午前10時16分・女子寮作戦室・寿視線^{ことびき}】

「副会長、近藤^{こんどう}が一人で出張った結果、ゲート前は完全に制圧できました」

静江^{しずえ}から報告を聞く。

「そう。意外と早かったわね。どうやったの？」

「何やら日本刀、おそらく妖刀の類だと思われませんが、それを用いてバリケードを突破した模様です」

淡々と静江は事務的に答える。

戦闘では、常に冷静でいることが大切だけでも、この子のこれは日常的なものだ。

「どこから持ってきたの？ その日本刀」

「どうやら四次元的空間から取り出したようです。あの様子だと、他にもいろいろ武器となるものを持っていそうですね。彼女の『世界観』は武器に頼るものが主流である可能性もある、かと。まあ、一概には言えませんが」

「ふーん。レベルの方は？」

「武器を使用してでの戦闘だったので、計測不能かと」

「でも、問題なしに振り回してたってことは、あの日本刀は彼女の『世界観』とマッチしたものだということ」

「はい、そうなります」

私は体の向きを変えて、草子そうこの方に移動する。

「どう？ 調子は？」

「守備は順調ってところ。メインはしっかり掴んだかな？ でも、分けるのは難しくて…… まあ、最初予定より早く進んだから、ブラマイゼロ、むしろマイナスってところかな」

「草子……」

私はじつと草子を見つめる。

「……っう、嘘よ、嘘。本当は一割増しぐらいのスピードで進んでるから」

びくっとする草子だが、キーを打つ速度は変わらない。

「でも、最終的には私だけの力じゃ無理だよ」

「分かってる。ちゃんと手配は済ませてあるわ」

意外とあっけない勝負になってしまいました……

《なぜなに？》

Q 「剣殺交叉」の表現が大げさすぎる気がするのですが？

A その通りです。

「技の効果が送れて発動するのはやりすぎたかな？」

第六章 女子寮攻略戦争 / 五話 緊急避難口前攻防戦―？

【10:20】

【午前10時20分・男子寮山下部屋内・山下視線】

「そろそろいけるな」

郷馬こうばが突入の準備をさせる。

「爆薬セットできましたー！」

緊急避難口で作業していた男子が報告する。

女子は入口を反対側からバリケードで固め、入口部分を完全に埋めてしまっていた。

そのため、緊急避難口を抜けたところで待っているのは、大量のバリケードによる足止めと神経麻痺毒塗りの弾丸による迎撃行動。

「よし、点火だ」

次の瞬間、緊急避難口を扉の向こうのバリケードごと破壊するだけの爆発が起こる。

「突入！」

【午前10時20分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

緊急避難口が爆破された。

周りを囲んでいたバリケードも破壊され、周囲に散らばる。

周囲に煙が広がる。

「落ち着いて！」

私は周囲に呼びかける。

幸い、こうなることは予め予想していた。

大した混乱にはならない。

バリケードを突破されたところで、それがすぐに敗北に繋がるわけではない。

「撃って！」

指示を飛ばす。

相手がわざわざ出てくるのを待つ必要はない。

ガトリングが火を噴く。

このガトリングは三年の先輩に提供してもらったものだ。

——反則かどうか知らないけど。

ついでに弾丸の方は自作。

——変ね……

突入してくる気配がない。

——っな、まさか……

「気をつけ——」

忠告は最後まで言い切れなかった。

二度目の爆破が起こる。

それを合図に、男子寮と女子寮の境目である壁が次々に爆発し始めた。

「つく……」

周りから悲鳴が聞こえる。

完全にパニック状態に陥った仲間に目を向けた。

——駄目だ。

——これじゃあ指揮系統がむちゃくちゃになる。

境目となっていた壁が全て破壊される。

「おおおおおおお」

男子共が突っ込んでくる。

——っち、そういうことか。

腕時計を確認する。

予定より少し早い。

が。

『しゅんぱん寿、予定変更！』

無線機に叫ぶと同時に、「力」に集中する。

「『封絶』（*灼眼のシャナ）！」

【午前10時21分・女子寮御津見部屋内・山下視線】

突然、足元に火線が現れ、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成される。

「っな……」

空気が変わる。

爆発音とガトリングの発射音、女子の悲鳴も男子の雄たけびも消えた。

男子を見渡す。

動いているのは、俺と郷馬、それと「有力者」の仲間一人。

とにかくよく分からないけれど。

この結界の中で動けるのは、「有力者」だけってか。

この結界を張ったということは、向こうは「有力者」同士の戦いに持ち込むつもりなのか。

「おい、郷馬！」

「防御しながら強行突破。我々の目的は女子寮最深部に一人でもたどり着くこと。この結界でこれだけの女子が足止め食らうならそれでよし。無理に結界を解く必要はない。突破するのみ」

「オーケー」

使える魔力は「学園結界」のせいではほとんどない。

——なら、武器を用いるしかない。

「『アデアット』！」

「ハマノツルギ」を呼び出す。

「はあああああっ」

「ハマノツルギ」を構えて一番槍を努める。

「『炎弾』（*灼眼のシャナ）！」

炎の塊が吹き飛んでくる。

「ハマノツルギ」を盾に、無効化する。

相手は怯んだ様子もなく、次々に炎の弾を撃ち込んできた。

「ここは俺がやる。あんたらは先に行け」

俺はそう言って、強引に進む。

——俺ってかっこいい！

「ハマノツルギ」を盾にするだけにして、攻撃はしない。

部屋の中に完全に入って、相手を確認する。

相手は一人。

長い、赤い髪の少女。

俺は彼女と対峙する。

それを確認してあとの二人は俺の隣を駆け抜ける。

少女はそれを止めなかった。

「いいのか、止めなくて」

「いい」

少女はそう言って、脇腹の辺りから、大太刀を取り出した。

「さあ、やりましょうか」

六章 女子寮攻略戦争 / 五話 緊急避難口前攻防戦――？

【10:20】

V S 「灼眼のシャナ」となります。

《なぜなに？》

Q 爆弾で壁を破壊してしまっているんですか？

A 反則行為に当たると明記はされていませんが、さすがにまずいでしょう。

→それでも、反則じゃないけど……

【午前10時22分・女子寮御津見部屋内・山下視線^{やました}】

「『炎弾』！」

赤髪少女が炎の玉を飛ばす。

「……………」

俺は「ハマノツルギ」を盾にして無効化した。

この攻撃自体は脅威ではない。

問題は、この「学園結界」の中でこれだけの威力を発揮させている、ということだ。

俺が以前、風魔法を使用したときその効果は通常の一割にも満たさなかった。

つまり、この火炎球は通常ならば今の十倍以上の威力は持っているということだ。

——できれば遠距離攻撃で様子をみたいのだが……

——どうやらそうもいかないみたいだ。

赤髪少女は、先ほど黒のマントの中から取り出した大太刀を構えた。

目頭を叩いて端末を繋ぐ。

俺にしか見えないキーボードと画面が浮かび上がり、俺を仮想現実から現実へと繋ぐ。

キーワードは「炎弾」。

だが、キーボードを叩いている暇はない。

「つく……」

大太刀による振り下ろしの一撃を「ハマノツルギ」で受け止めた。

「ちっ」

受け止めたときの反動を利用して、後に飛ぶ。

「ハマノツルギ」は相手が召喚されたものなら一撃で送り返し、異能の力によって作られたものなら問答無用で一撃破壊を行う。それは、「学園結界」の中でも変わらない。

赤髪少女の大太刀を確認。

破壊された様子はない。

ということは、あれは鍛えられたものだということだ。

「『アデアット』、『^{シーク}ヒ首・十六串呂^{シクシロ}』（*魔法先生ネギま!）」

一口ふりの匕首。

「い・ろ・は・三刀」

三口を出現させ、飛来させる。

「！」

赤髪少女は驚いた顔をしながらも、正面に飛んで来た「い」の一口を大太刀で叩き落す。

そのすきに「瞬動術」で背後の周り、両サイドからの「ろ」・「は」の二口の飛来より少しずらした時間差攻撃を食らわせばいい。

一度重心を落とし、両足に魔力を集中させる。

——……いや、駄目だ。

「ろ」・「は」の二口を予定通り赤髪少女に飛ばして時間を稼ぐ。

「学園結界」の中で「瞬動術」はおそらく使えない。

「瞬動術」を用いるには一時的に魔力を集中、発散させる必要がある、この中ではその発散においてうまく機能しないだろう。

頼れるのは武器だけ。

——はっ。

——いいじゃねえか！

久しぶりの好敵手に全身が震える。

「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」で高レベルになってから、骨のある対戦相手がいなかった。

けど、今は違う。

「『アダット』、ホー・ヘーローネ・メダゾソーパーン『千の顔を持つ英雄』（＊魔法先生ネギま！）」

ありとあらゆる武具に変幻自在の「無敵無類」と呼ばれる至高の宝具。

「に・ほ・て・と・ち・り・ぬ・七刀」

七首を七口。

赤髪少女に飛ばす。

それを見るなり赤髪少女は、手持ちの大太刀を炎で纏わせる。

「はあああ!」

一振りと同時に発せられた炎の尾が、七首を受け止める。

その間に俺は、「千の顔を持つ英雄」でサブマシンガンを形作った。

「おりゃあああっ」

銃口が火を噴く。

「浅はか」

そう言つて赤髪少女は飛び上がった。

肩から生やした炎の翼をはためかせて、空中から一気に攻める。

炎の翼から発せられる炎のバリアがサブマシンガンの弾丸を弾く。

「そんなただの弾丸で、この『にえとこのしやな贄殿遮那』（*灼眼のシャナ）が敗れるわけがない」

「強者の余裕つてか？」

自分の「世界観」を相手に知らせるようなことはするだけ自分が不利になる。

赤髪少女はそれには答えず、「贄殿遮那」を振り下ろす動作をして、炎の尾の攻撃を繰り出した。

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

「ハマノツルギ」で炎の攻撃を無効化しながら赤髪少女に言う。

「我、汝の真名を問う！」

六章 女子寮攻略戦争 / 六話 緊急避難口前攻防戦――？

【10:22】

パワーバランスが頭の中でぐちゃぐちゃになっています……

《なぜなに？》

Q 山下は狂戦士なのですか？

A いいえ、違います。

「ただ、過去のいきさつからトラウマはあるけどね。」

【午前10時23分・女子寮御津見部屋内・山下視線】

相手の「名前」を見破る魔法具、「鬼神の童謡」コンフティーズエモニア（＊魔法先生ネギマ！）。

右手の人差し指に填めたそれが、空中に赤髪少女の「名前」を描き出す。

華焰香奈かえん かな。

「『火炎かな』？」

暴き出した赤髪少女の名前を呟く。

「華焰香奈だ！ 変な発音するな！」

華焰が火焰を纏った「贄殿遮那」を振り下ろす。

が、その動きが止まる。

「お前、何故私の名を知っている？」

一瞬の動揺。

それは、格上に抱くような恐怖ではなく、知らないとすっきりしなくて、未知への恐怖とも違う、合点のいかないことに対する苛立ちにも似た、動揺。

その間に俺は「アーティファクト」の一つ、「いどのえにつき」
（＊魔法先生ネギま！）を呼び出した。

この日記は、対象となる人物の名前を呼んでから開くと、その人物の表層意識を読むことができる。

そして、俺は文字を読み上げる魔法具、「読み上げ耳」^{アウリス・レキタンス}（＊魔法先生ネギま！）を懐から取り出す（「鬼神の童謡」と「読み上げ耳」は予め用意してあった）。

『上から叩く！』

「読み上げ耳」が「いどのえにつき」から読み上げた華焰の表面意識を俺に伝える。

「はああああ！」

炎の羽を持つ彼女は、上空から降下して俺に接近した。

「おりやつ」

「ハマノツルギ」を盾に、彼女の「贗殿遮那」を受けとめた。

途端に、彼女の周りを覆っていた炎のバリアが消え去り、炎の羽も劣化していく。

「なっ、これは……」

驚く華焰を余所に、俺は追撃せず後退する。

相手の「世界観」が分からないときは、下手に攻撃するのはよくない。

「世界観」によつてはこちらの攻撃に対して一撃で耐性を持ったリ、自分のダメージの相手のダメージに変換してしまうものもいるからだ。

『これは何らかの無効化能力？』

華焰の思考が俺に流れてくる。

『なら、実体剣であるこいつしか使えない……。だが、反撃に出ないところを見ると、奴の火力は低いのか？ とにかく様子を見よう』

華焰が再び「贄殿遮那」を持ち上げる。

『まずは「炎弾」で両サイドを潰し、正面から叩く』

「『炎弾』！」

華焰が「炎弾」を俺の右側に投げる。

左に避けずに「ハマノツルギ」で無効化し、左に投げられた「炎弾」をやり過ごす。

『なっ！ 悟られた！？』

一発目の炎弾を避けなかったことで二発目の炎弾を避けた俺を見て、華焰に動揺が走る。

そのため、俺に接近する速度が落ちた。

「おりゃっ!」

俺は左手で得物を支える。

『なっ! あの剣じゃない!?!』

足元に置いていた「千の顔を持つ英雄」を超極長の槍に変化させることで、「贄殿遮那」を振り上げて突っ込んできた華焰を突き飛ばした。

『そうだ、バリアを……』

「つぐ……」

咄嗟に炎によるバリアを展開し直したらしく、超極長槍が破壊される。

だが、これで距離はとれた。

——今がチャンス!

俺は自分にしか見えないキーボードを叩く。

キーワードは「炎弾」と「贄殿遮那」。

——出た。

検索結果が俺の前に展開しているスクリーン上に表示されると

同時に、距離を縮めた華焰が「贄殿遮那」で炎の尾を作り出す。

『暫撃のうえに、タツクルを喰らわす!』

——該当作品：「灼眼のシャナ」——

「こっのー」

華焰が「贄殿遮那」を横に振るう。

それを俺は「ハマノツルギ」で受け止めた。

「ハマノツルギ」に触れたところから華焰を覆う炎のバリアが無効化されていく。

『っち、また炎のバリアが……。それでも、直接攻撃ならっ』

華焰が右肩を前に突き出して突進してきた。

予め分かっていた俺はしゃがみ込み、火焰より小さくなる。

『え?』

標的を見失った華焰の体は、俺の体に躓いて俺の後方に吹っ飛ぶ。

『羽、羽っ』

炎の羽を作り出して地面との衝突を免れた華焰に、俺は「ハマノツルギ」を投擲した。

咄嗟に羽を広げて防御しようとする華焰。

『しまっ……』

「ハマノツルギ」は華焰の羽を貫き、その瞬間から彼女の羽は崩壊し、彼女地面に落下する。

「つくはあっ」

背中を強打し、体を反転して、声を漏らす華焰。

「い・ろ・二刀」

「ヒ首・十六串呂」で事実上華焰を拘束した。

「勝負ありだな」

「つく……」

悔しそうに顔を歪める華焰。

『くっそ……。やっぱり40代の高レベル「有力者」には勝てないか……』

「ん？ お前、レベル低いのか？」

「つくそ」

華焰が俯いたまま呟く。

「まあ、いいか。情報がほしいところだったし、いろいろ聞いちゃおっか」

俺はにやりと笑う。

「つく……。私はしゃべらんぞ」

「別に構わないよ。それじゃあまず、初恋はいつだった？」

『は？ 初恋？ そんなこと聞いてどうする。だいたい誰にそんなこと言えるか。志保^{しほ}にも言ってないんだぞ。というか知られたら私のイメージが終わる。初恋相手がマスコットキャラクターだなんて――』

「マスコットキャラクター？ え？ まじで？」

「なっとなっとなっ……、何故貴様がそれを知っている！」

華焰が顔を上げて俺を睨んだ。

『お、終わった。私の学園生活が今終わった。くそっ、こんな奴にどこの馬の骨とも分らん奴に私の学園生活を碎かれるとは……』

「そ、そんなに恥ずかしいなら誰にも言わないでやるから……」

「当たり前だ！ 誰が言わせるか！ って、お前まさか、読心術師か！」

『なるほど、だから私の攻撃をあんなにも飄々と往なしていたわけか。ってことは、私の心が読まれているということか？ まずい、

作戦を知られたらまずいわよ。いや、でも待つて。こいつはさつき初恋がどうか聞いてきた。ということはただの変態？ 作戦内容には興味がない？ ふー、一応助かった。って、全然助かってないじゃない！ 変わりに私の秘密が暴かれるなんて御免よ！ だつたら喜んで作戦内容差し出すわ！ あ、でもあとで寿にばれたらぶっ飛ばさせる…… ああ、もう！ どうすればいいのよ！ いっそこで気を失う？ 駄目駄目。見ず知らずの男の前でそんなことできるわけないじゃない！ 考えただけでもぞつとする。くっそ、解決策が見当たらない。それに、この状況を打破できたとしても、こいつは私の秘密を知ったまじじゃないつ。やっぱりこは私の命を絶つか、それともこいつの命を絶つか？ ああ、駄目。こんな高レベルの相手に、暗殺を行える自信がない。いっそあいつらに頼んでみるか？ でも暗殺なんて引き受けてくれると思えないし。つく、こは私が死ぬしかないのか？ そんなの駄目よ。楽しい学園生活を守るために死ぬなんて。それじゃあ秘密を守っても意味ないじゃない。それに、私が死んでもこいつの口が塞がるわけじゃない。ということは、やっぱりこいつを殺すしか私には幸せがないということ！？ そんな！？ 人並みの幸せを手に入れるためにその身を血に染める……、そ、そうだわ。別に直接手を汚さなくてもいいのよ。こいつが口を開く前に「学園」にいれなくしてしまえば私の勝ち。ようは退学にしてしまえばいいんだわ。だいたいこいつ不法侵入者だし、事件を起こすように背後からいろいろやればいけるはずっ』

その後、華焰の独り言？は数分間続いた。

まだ一対一の戦いが基本ですが、そのうち多数による戦いもあります。

《なぜなに？》

Q 華焰は性格を偽っているのですか？

A はい、その通りです。

〜といってもキャラ作り程度だよ。

第六章 女子寮攻略戦争 / 八話 男子残党一掃戦――？ 【10:29】

【午前10時29分・女子寮御津見部屋内・華焰視線^{かえん}】

痛みに慣れてきたので体を起こそうとして、動きを止めた。

さっきまでうつ伏せに倒れていたので忘れていたが、今の私は得体の知れない謎の小刀（浮遊している）を突きつけられているのだ。

「攻撃しない限り大丈夫だよ」

私の動きを見てか、はたまた心を読んでか、あの憎たらしい編入生が口を開く。

私は体を起こし（その際、例の小刀は私の動きに合わせて移動した）、私がこの「学園」生活において敵だと認めた憎き編入生（以後、略して憎編）と対面する。

「センス酷くないか？ 憎編って」

「黙れ。貴様なんか、肉片でも十分だ」

口調も元に戻ってきた。

私のイメージ維持のため、すぐに消えるだろう憎編相手にも、「学園」での私のイメージを定着させておく。

きつ、と憎編を睨んでから、私は口を開いた。

「貴様、どこまで心を読んだ？」

「ん？ どこまでって言われてもなあ。言っちゃっていいのか？」

「言わんでいい」

詳しいわけではないが、読心術には二つある。

一つは相手の表層意識を探る、つまり、今相手が何を考えているかを探るもの。

もう一つは、相手の深層意識に忍び込み、自分のほしい情報を取り出すもの。

こいつのそれがどちらか定かではない。

私は腕時計に視線を落として時刻を確認する。

例え知っていたとしても、最早手遅れだな。

「封絶」発動からもうすぐ十分が経つ。

——あいつなら、そろそろだろう。

自然と笑みが浮かぶ。

「ん？ 何がおかしい？」

怪訝そうな憎編に私は言う。

「貴様に言っておこう。勝負に勝つことと、勝利を掴むことは別物なのだよ」

——決まった！

——今私、カッコいいこと言った！

【午前10時30分・女子寮作戦室・寿視線^{ことぶき}】

「よしっ、いったわよ！」

キーボードを操作していた草子^{くさこ}が叫んだ。

私は予め用意していた「カーテナ＝セカンド」（*とある魔術の禁書目録）を左手に握る。

「静江^{しずえ}、通信は？」

「準備完了」

マイクを右手で握る。

「作戦開始！」

【午前10時30分・女子寮御津見部屋内・山下視線^{やました}】

華焰が決め台詞を放った直後、今まで固まっていた奴らが動き始めた。

但し、それは女子のみ。

「なっ、この空間で動けるのは『有力者』だけじゃないのかよ！」

俺は包囲される前に華焰のそばから離れ、距離をとる。

「その通り。私達は今、全員『有力者』」

「なに！？」

華焰はふふふつと笑みを浮かべる。

「貴様の負けだ。憎編は大人しく肉片にでもなれ」

【午前10時30分・男子寮側ゲート前・近藤視線^{こんどう}】

倒した男子の顔を確認して、名簿に記録する。

そうすることで、残りの男子の戦力を割り出していくのだ。

まだ同級生の顔と名前を覚えていない私は、倒した男子に念のためもう一度麻酔を打つ係り。

山下の部屋の入口はすぐそこだが、今はまだ突入せず、作戦開始を待つ。

『作戦開始！』

無線機から寿の声が聞こえてきた。

それと同時に、体に力が沸き起こるのを感じる。

作戦が始まったのだ。

「残党を一気に狩りつくすわよ！」

寒^{かん}の号令で、私達は走り出した。

六章 女子寮攻略戦争 / 八話 男子残党一掃戦——？ 【10:29】（後

ようやく女子側の作戦が始まりました

《なぜなぜに？》

Q 「カーテナ」セカンド」が使えるのは、基本、イギリス国内だけではなかったのですか？

A ここ、「パーソナル・リアリティ／自分だけの現実」の中では、使用者所属国家内での使用が可能、という設定になっています。

「他にもこんな感じの設定は出てくるよ。

第六章 女子寮攻略戦争 / 九話 男子残党一掃戦——？ 【10:32】

【午前10時32分・女子寮御津見部屋内・山下視線】

「つく……」

「千の顔を持つ英雄」で盾を全方位に展開して、女子の攻撃を耐える。

男子の仲間を助けている余裕はない。

華焰^{かえん}を始めとする十数名の女子から一斉攻撃を受けているのだ。

「おもしろくなってきたな」

華焰が思ったよりあっけなかったので、この展開は嬉しい。

——けど、どうなってるんだ？

「ふっふっふっ」

盾の向こうで笑う華焰の声が聞こえる。

「所詮貴様は一人。いくらレベル差があるといえども、『学園結界』と数の力で押し通してくれるわ！」

華焰意外の女子は手からエネルギー弾を作って飛ばしてくる。

それを「千の顔を持つ英雄」の即席盾で防いでいるが、完全に

包囲されてしまってもいる。

本来なら風系魔法で吹き飛ばせばいいのだが、「学園結界」のせいで俺の「力」は制限されてしまっている。

そう。「学園結界」が有効なのだ。ここの生徒である限りは。

先ほどの戦い、華焰は確かに「有力者」としての力を振るっていた。「世界観」も判明している。「灼眼のシャナ」だ。

しかし。

ほんの少し前までは、彼女らは確かにただの人間だったのだ。

「い・ろ・は・三刀」

盾の外に「ヒ首・十六串呂」を呼び出し（華焰の拘束に使っていた「に・ほ・へ・と・ち・り・ぬ」の七刀は華焰の体が突然光りだして、その余波？で吹き飛んだ）、牽制として、華焰に向けて放っておく。

「分っかんねーな」

即席の盾にガタがきたので、新たに即席の盾を即席で作る。

今度は三重に作って、余裕を持てるように。

「さてと」

現状を分析する。

敵は華焰含め女子13名。

全員が「有力者」としての能力を「学園結界」内におけながら、何らかの方法で行使している模様。

但し、「世界観」が判明しているのはこの場のリーダーと思われる華焰の「灼眼のシャナ」のみ。

対して、こちらは「学園結界」の制約に阻まれ、十分に「有力者」としての力が使えず、手駒は「アーティファクト」を用いた武器のみ。

一見不利そうに見える。

が。

「本気出せばちょちよいのちょいつ、なんだけどな……」

【午前10時35分・女子寮作戦室・寿視線^{ことぶき}】

「調子はどう?」

さっきまでとは打って変わって、肩を揉みながらモニターを眺めている草子^{くさこ}に尋ねる。

彼女の主な仕事はすでに終わっている。

「順調、順調。力の配分はだいたい均等に行き届いているわ。『学園結界』の方も問題なし」

「男子はあとどれくらい残ってる？」

私は「カーテナ」セカンド」を手の中で遊ぶ。

「それがねー。『有力者』が一筋縄ではいかないことは最初から分かってたから、まあ、いいんだけど。問題はそれ以外なのよねー」

楽しそうにモニターを眺める草子。

「何かあったの？」

「非『有力者』がね、足りないのよ」

「足りない？」

「うん。攻めるはずの男子が、ね。奥に潜んでる可能性もあるけど」

——人数がねー。

「11時までには大して情報が入らなかったら、男子をここに連れてきて。頭の中を覗くわ」

六章 女子寮攻略戦争 / 九話 男子残党一掃戦――？ 【10:32】（後

話がなかなか進みません……

《なぜなぜに？》

Q 山下が「本気だせばちよいのちよい」と言っただけで済んだが、「学園」に侵入したときは本気ではなかったのですか？
「学園結界」で「力」を抑えられた寿に負けていましたが。

A 「力」は本気でしたよ。ただ、「力」を最大出力で放つのと、「本気」は違います。それと、いくら山下が本気を出したとしても、現状では寿には及ばないでしょう。

「このとき、山下は自分の力の限界を意識していなかったみたいだね。」

第六章 女子寮攻略戦争 / 十話 男子残党一掃戦――？ 【10:35】

【午前10時35分・女子寮御津見部屋内・山下視線】

華焰^{かえん}が低レベルの「有力者」なのは間違いない。

さきほどの戦闘において、彼女は炎を繰り出す刀（「贄殿遮那」だっけ？）と、「炎弾」とかいふ炎のエネルギー弾を投げてくるだけだった。

低レベルの「有力者」は自身の扱う「世界観」の幅が狭く、使用能力の種類が限られてくる。「パーソナル・リアリティ/自分だけの現実」内での常識はここでも通じる。もちろん、戦闘経験も。

「パーソナル・リアリティ/自分だけの現実」内での一般的なレベルは20代だ。その中でレベル40代に位置しているということとはどういうことか。

「戦闘経験が違っんだよ」

――そう、かけた時間が違う。

――閉じこもった時間が違う。

――そう……。

「違う、違う」

危うくスリップしそうになって、思考にストップをかける。

——終わったことは、終わったことなんだ。

「ふうー」

精神安定剤はこの場には存在しないので、激情に少し身を任せることにした。

【午前10時36分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

突然、防御中心だった憎編が攻撃にまわった。

憎編の防壁が一気に崩れ、新たな形を形作る。

「っな……」

巨人の武器サイズの超巨大な剣が、憎編の手の中に生まれようとしていた。

「『斬艦剣』（*魔法先生ネギま！）！」

その名に恥じぬ、おそらく飛行船でも叩き斬れそうな巨大な剣が、憎編の手元からこちらに向かって伸びてくる。

「きゃあああー！」

憎編を囲んでいた女子達から悲鳴が上がる。

「斬艦剣」は一直線に彼女達に突き刺さる。

「まずっ」

彼女達の防御力がいくら上がっているとはいえ、もとはただの非「有力者」。

とつさの判断は素人同然。

「炎弾」を調整。

今までのものは、籠める威力を小さくし、打ち出す回数を重視したものの。

今度のは、あの大剣を破壊するための威力を籠めた一撃。

だが、こちらが「炎弾」を放つ前に、彼女達の悲鳴が消えた。

手の中の「炎弾」を構えながら様子を確認する。

例の大剣は、彼女達と接触する部分だけ二股に分かれていた。

つまり、人のいる所だけ剣が避けているのだ。

あの「千の顔を持つ英雄」とかいう変な武器、変化自在のようだ。

「つて、あ……」

気づいたら、私意外の面子は全員謎の大剣に拘束されていた。

——なんて武器持つてるのよ、こいつ。

——あの変な剣（「炎弾」を受け止めたやつ）とか、あの変な小刀とか、今のこれとか。

——もう一度、今度こそあの憎編に、ぎゃふん、と言わせてやる。

【午前10時36分・女子寮作戦室・寿視線^{ことばき}】

「カーテナ」セカンド」を発動させてから五分以上が経ち、現状、女子側の勢力が男子側を遥かに凌駕している。

この戦いのキーを担うのは、「有力者」の存在だ。

「カーテナ」セカンド」は私の「力」で、高校二年の女子全員に「有力者」としての「力」を振り撒いている。振り撒いているその「力」自体は、レベル10から20程度のものだが、それでも非「有力者」に対しては十分脅威になる。

だが、「学園結界」に「力」を制御されてしまったため、「カーテナ」セカンド」をそのまま使うことはできない。また、仮に行使できたとしても、「学園結界」によってせっかく得た「有力者」としての「力」は封じられてしまう。

どうしても、「学園結界」を落とす必要があったのだ。

幸い、「学園結界」には電子ネットワークからの侵入が可能であり、また、それを可能とする、腕利きの草子がいた。

だが、確実に「学園結界」を掌握するには、草子の「力」を使う必要がある。

だから、そのための、華焰の「封絶」だった。

彼女の「封絶」は外界との干渉を断つその特異性のため、その内部において「学園結界」の干渉下に入らない。

ネットワークへの端末を「封絶」内にいれることで、一時的な「学園結界」の無効化を図り、草子の「力」を解放させることで、「学園結界」に封じられることなく「学園結界」を掌握することができたのだ。

だが、これは表の作戦に過ぎない。

本当の狙いは別にあるのだが。

今のところ、それが生かされる様子はなさそうである。

「草子、調子はどう？」

「カーテナ―セカンド」を掲げる。

「うーん、そうねー。私ってあまり『力』を使うことないからさ、あんまり変化とか分かんないわ」

そう答えながら、草子の指がキーボードを軽く叩いている（叩いているのは右手だけで、左手は髪を梳いていた）。

戦況が一気に変わってから入ってきた情報を、整理しているのだろう。

「あ、華焰が例の侵入者君とまた戦うようよ。」

「分かった。静江^{しずえ}、華焰に『封絶』はもう必要ない、と伝えて」

一人でこっさりクツキーを口にしていた静江は、一瞬驚いた顔をしながらも、

「ふあい。分かりました」

と、残りを飲み込んで、答えた。

六章 女子寮攻略戦争 / 十話 男子残党一掃戦――？

【10・35】

（後

そろそろ男子の方が反撃してもいい頃合かも？

《なぜなに？》

Q 草子の「世界観」は何ですか？

A ネット系です。

↳ 他に何もできないよ。

第六章 女子寮攻略戦争 / 十二話 男子残党一掃戦——？ 【10:37】

【午前10時37分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

—— やばい やばい やばい やばい やばい やばい やばい
 やばい やばい やばい やばい やばい やばい やばい
 やばい やばい やばい やばい やばい やばい やばい
 やばい

【午前10時37分・男子寮廊下・近藤視線】こんどう

作戦が発動し力を得た私達は、残存する男子を探しては神経麻痺の弾丸を撃ち込んでいた。

「うーん……」

後でこの場の指揮官である寒^{かん}が首を捻っている。

「どうしたの？」

「有力者」達がガトリングを構えて搜索＆排除に奔走している中、「有力者」である私と指揮官である寒はこの場に留まっていた。

「思ったよりも、残っている男子が少ない」

さきほどの私の独断による戦闘については、何も言われいなかった。

それに私が今、戦えば、周りの人間を巻き込んでしまうだろう。

「ふーん」

編入直後の私にはよく分からないので、生返事になる。

——まあ、確認作業の方もまっただったし。

「で、どうするの？」

私が興味のあるのは、今後の行動。

「じゆうぎの指令を待つ間は、現状維持。あなたの出番はない」

「有力者」である私の実力を披露してからは、ガトリングは邪魔だろう、ということと、私は手ぶらだった。もちろん、探索にも出かけていない。男子を倒したところで、それが誰か確認できないため、二度手間になるからだ。

と、そのとき、背後で派手な爆発音が上がった。

「えっ……」

同時に強い揺れが私達を襲う。

私と寒は顔を見合わせる。

爆発音の発信元は、御津見という山下についている監視役の部屋だ。

そこは今回の戦いにおける、一つの拠点と聞いている。

男子が唯一女子寮へ侵入可能な通路だそうだ。

そこへの侵入さへ完全に防ぎできれば、おそらくこの戦いに勝利することができるだろう、ということらしい。

だが、おそらくそれだけでは駄目だろうということ。

その気になれば、男子達はかべを破壊して侵入してくる、と生徒会副会長である寿が言っていた。

事実、十数分前に一度、男子側が壁を爆破したと聞いている。

だが、作戦発動と同時に鎮圧されているはずだ。

あの場には「有力者」である華焰がいたはずだ。レベルは20代だが、作戦開始と同時にその「力」を思う存分震えるはず。心配などいらないはずなのだ。

—— だけど、もし今の爆発が男子のものだったら？

少数の侵入だけなら、作戦が実行された今、大した脅威ではない。個人個人の能力は格段に上がっているし、予め設置されている四つのバリケードも健在なのだ。

たとえば大人数の侵入を許したとしても、食い止める自身はある。

それに、問題の女子寮の最深部には、寿がいる。

彼女を倒さなければ、男子達は勝てない。

「きゃあああああああああああああああああああああ
あああ！」

私は悲鳴の元に走り出した。

六章 女子寮攻略戦争 / 十一話 男子残党一掃戦―？【10:37】

いかん。

本編に早く戻らなくては……

《なぜなに？》

Q 女子のバリエードはどうやって作っているのですか？

A 基本は人です（笑）

ゝ男子と違って机は使っていません。

第六章 女子寮攻略戦争 / 十二話 男子残党一掃戦―？ 【10:38】

【午前10時38分・女子寮御津見部屋内・華焰視線】

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

体に力が入らない。

周りを見渡す。

嵐の後、というのはこんな感じなのだろう。

室内の物は全て強引に捻じ曲げられていて、無事な物は見当たらない。

人的被害も大きかった。

仲間の女子はまだいい。

全員、作戦のおかげで「力」を得ているので身を守る、という行為を行うことができる（それが成功しているか、というのはまた別の話）。

だが、「封絶」によって動きが止められている男子の方には、大きな被害が出ていた。

ほぼ全員が体の一部を骨折しており、中には腕が吹き飛ばされている者もいた。

だが、ここは「封絶」の中である。

怪我をしたからといって、血が流れるわけではない。

ここでの怪我は、ほぼ完全に治すことができる。

だから、あいつの行為はルール違反ではない。

だが。

——あいつはそれを知っていたのか？

「学園結界」は「力」を完全に封じているわけではなく、「力」の発現を小さくしているだけであって、「学園結界」内でも「力」自体は発動している。「封絶」は「外界との関係を断ち切る」というその性質上、一度発動させると、「学園結界」の影響下でも、小さいながらその影響を受けない地帯を作り出すことが出来る。後はそれを媒介に、「封絶」を大きくしていくのだ。

「学園結界」内であり、私自身は低レベルの「有力者」であるのに関わらず、「力」を使っていたことから、推測した可能性もありえなくもないが、ありえないだろう。

としたら、あいつはこの惨状を起こすことに対して、厭わなかったということだ。

「何なのよ、あいつ……」

【午前10時38分・女子寮作戦室・寿視線^{ことびき}】

「状況は？」

「不明。今、近藤^{こんどう}が向かつてる」

草子^{そうこ}は高速でキーボードを叩きながら答えた。

女子寮の御津見の部屋にいたメンバーからの映像が途切れたのは一分前。

例の男子との交戦中に、突如無線機と共に機能しなくなったのだ。

いや、兆候^{しやうこう}はあった。

機能しなくなる寸前、例の男子の姿が揺らいだように見えた。

「副会長」

「ん？ どうしたの？ 静江^{しやうえ}」

「第一ゲートに、郷馬^{きょうば}がいます」

【午前10時38分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

女子両側の廊下には、合計4つのバリケードが設置されている。

男子が女子寮最深部に侵入するには、必ずこのバリケードを突破する必要があるのだ。

「で、あんたら二人だけ？」

第一ゲートの前まで来れたのは、男子側の大將である郷馬とその友人、さいとう かずき齊藤一樹の二人だけ。

——余裕ね。

第六章 女子寮攻略戦争 / 十二話 男子残党一掃戦——？ 【10:38】

山下の本性が見え隠れ？

《なぜなに？》

Q 山下は何故「学園結界」の中であれほどの惨状を引き起こすことができたのですか？

A 華焰の「封絶」内で山下への「学園結界」も無効化されていたからです。

↓ 山下自身はそのつもりじゃなかったけど。

第六章 女子寮攻略戦争 / 十三話 男子残党一掃戦―？ 【10:39】

【午前10時39分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

ここ、第一バリケードには約二十人の女子が配置されているが、残念ながら「有力者」は配置されていない。

だが、作戦が発動した今、女子全員が「有力者」としての力を有しているのと同じである。

「悪いけど、あんたの首、捕らせてもらうよ」

「我々男子を、少々甘く見てはいないか？ この戦いにかける我々の意気込みを舐めるなよ」

郷馬は齊藤の前に出る。

「一人で十分ってこと？」

「そうだ」

郷馬は当たり前と言わんばかりに頷いた。

「舐めてるのはそっちの方よ。あんた、現状分かってんの？ あ、それとも知らない？ それなら、教えてあげるわよ！」

会話中、右手に集めていた「力」を解放する。

凝縮されたエネルギーの塊が郷馬に向かって飛び、それが戦闘の

合図となった。

寿いづはなの持つ「カーテナ」セカンド」によって私達女子は「有力者」としての力を得たわけだが、「世界観」を得たわけではない。

「カーテナ」セカンド」から受け渡された力は、いわゆる「気」のようなもの。纏って防壁としたり、集めて投げたりはできても、炎を出したり、地面を割ったりはできない。

だが。

ここは「学園」内であり、郷馬は「学園結界」の影響を受ける身。

「力」の制限された今なら、対等に渡り合えるはずだ。

何よりこの人数差。

私達は一斉に郷馬に集中砲火を始めた。

【午前10時40分・女子寮作戦室・寿視線】

第一バリケード前での戦闘を、画面で確認する。

郷馬の「力」特徴は、驚異的な回復能力。

そして、彼の戦いは主に肉弾戦。

両手の甲からそれぞれ、不壊の超金属でできた三本の爪を出して戦う。

どんなダメージもすぐ回復してしまう代わりに、圧倒的な攻撃力は持っていない。

なら、御津見達で足止めは可能であろう。

「案外、早く出てきましたね」

静江しずえの声が後から聞こえた。

「そう？ 私はそうは思わないけど」

振り返って、画面に背を向ける。

と、静江は無線機を渡してきた。

今回私達が使用しているものではない、生徒会内でのみ使われているタイプのものだ。

「ふき路会長からです」

【午前10時40分・女子寮御津見部屋内・近藤視線こんどう】

室内は荒れ果てていた。

「まるで台風のとね」

部屋は変なドーム状の結界？に覆われていたが、なんの抵抗もなく（そう思ってるだけかもしれないが）入り、華焔^{かえん}の姿を確認して近寄った。

「うわっ……」

ぐったりそておた華焔に、まず治療を施す。

髪（私の髪）を伸ばして傷口に当て、そこから精気を流し込む。これにより、自然治癒力を高めるのだ。

「派手にやられたわね。でもこれって、ルール違反じゃないの？」

「……『封絶』の中であるゆえ、そうはならない」

意味は分からなかったが適当に相槌をうつて、寿に連絡する。

『こちら近藤、華焔を発見。惨敗の模様。男子も現場にいることから、山下は逃走した模様』

——うわー。それにしても、派手にやったわね、あいつ。

『りょーかい。じゃあ、例の彼を追って』

何故か、寿じゃなくて天応草子^{てんのう そうし}が答えた。

——別にどうでもいいけど。

どんどんキャラが増えています（インフレ中）

「状況報告？」は大変そう……

《なぜなに？》

Q 落会長とは誰ですか？

A 次の話で分かります。

↓ 今回の話に直接関わってくるわけではないよ。

【午前10時45分・女子寮第一バリケード前・御津見視線 みつみ】

戦況は芳しくない。

――さすがは、高二男子「有力者」のトップに立つ男といったところ。

「常に距離をとって！」

周りの仲間に声をかけて、私は打開策を考える。

現状、こちらに被害はない。

だが、郷馬 いっばに致命打を与えてもいない。

向こうは高二男子の頂点であるのに対し、こちらは俄か素人の寄せ集め。

向こうは純粋な「有力者」であるのに対し、こちらはただ「力」を与えられただけの偽「有力者」。

だが、それ以上に。

――あきらかにおかしい。

郷馬の動きを観察する。

彼はこちらの遠距離攻撃（気弾放出）に対し、鋼の爪で正面を切り開き、ステップを駆使して交わしている。

問題は、そのステップの速度だった。

郷馬は高レベルの「有力者」だ。

人間では通常不可能と思われる運動能力を発揮したところで別段驚かない。

但し、そこが「学園」内でなければ。

「どうした？ もう五分は優に過ぎたぞ。この自分を捕らえるのではなかったのか？」

周りの女子達からも徐々に焦りが見え始めている。

今回の戦い。

非「有力者」の者が圧倒的戦力差がある「有力者」と張り合おうという意気込みがあるのは、「力」の分配により、「有力者」と互角の勝負が出来る、という点があつてのことだ。

それが、同じ「有力者」としての「力」を持ちながら、「学園結界」によってその大半の「力」を封じられている人間一人を、「有力者」としての「力」を与えらた約二十人の力を持ってしても倒せないとなると、戦いへの意気込みが大幅に低下する。

所詮、自分達は「有力者」じゃない。

俄か「力」を得ても、ただの偽者なんだ、と。

——なるほど。確かに、そういう意味では男子と女子で意気込みは違うわね。

悲惨な設備で暮らしてきた男子と。

優雅な設備で暮らしてきた女子。

寮施設入替えに実感が沸くのはいうまでもなく男子。

だからこそ、頑張れる。

一方、女子のほうは寮施設入替えについての実感があまりない。

ただ、悪くなるのは嫌だから戦う。

——そろそろ手を打たないと、やばいわね……

【午前10時46分・女子寮御津見部屋内・近藤視線】

回復した華焰^{かえん}は、ドーム状の結界内の破損（物質的、肉体的、問はず）を修復して見せた。

「すいっ」

「どこでもできるわけではない。この『封絶』内だけだ」

華焔は復活した仲間達に、転がっている男子（何故か固まっている）に麻酔入りのゴム弾を打ち込んでおくように指示した後、私の方を向き直った。

「そういえば、奴と一緒に転入してきたのだったな。何者だ？ あいつは？」

男勝りな口調の華焔。

私は例の記憶喪失という設定を思い出す。

「えっと、あれ？　なんか思い出せない？　こう、靄がかかった感じというか、あと少しで届きそうなんだけど……」

「……………」

見つめる華焔の目が痛かった……

——覚えてなさいよ……

なかなか終わらない「女子寮攻略戦争」。

このまま横道にすれたままではたしていいのか！？

本編に戻るのはいつになることやら……

《なぜなぜに?》

Q 郷馬と寿、どっちの方が強いのですか?

A 「力」の質、パワー、共に寿に利がありますが、郷馬は回復能力だけを特化させていますので、五分五分です。
　　ゝ寿だって回復能力はそれなりのものだよ。

【午前10時47分・女子寮第一バリケード前・御津見視線 みつみ】

「つく……」

「力」で覆った左腕で、郷馬 こうば の鉄爪を受け止める。

受け止めた鉄爪は右手の物。

まだ、左手がくる。

「うち……」

「力」の付与により強化された跳躍力を生かし、後方へ逃れた。

——こういう戦い方は私の主義じゃない。

郷馬はその場に踏みとどまった。

状況は非常に悪かった。

郷馬を今だ捕らえられないからではない。

指揮官である私が攻撃されているのが問題なのだ。

集団で攻撃していたにも関わらず、郷馬はすでにその体制を崩してしまっている。

包囲網は崩れ去り、ここのバリケードはもはや意味を持たない。

そしてなにより、奴の仲間である斉藤はまだ何もしていないのだ。

廊下の端にたたずむ斉藤に目をやる。

——ただ傍観なんてはずがない。

——必ず何かしてくるはず。

——だけど。今の状態じゃ何もできない。

仲間達はすでに意気消沈しかけている。

『こちら、御津見。応援を……』

【午前10時47分・女子寮作戦室・寿視線】

「くそっ！」

生徒会専用無線機を放り投げる。

「どうしました？」

「——やられた」

その一言で事態を把握した静江^{しずえ}は、予め決めてあった通りに後処理を始める。

「草子^{そうじ}」

「分かつてる。機密ランクB以上への『学園結界』を復帰させるわ」

——やはり早まったか……

【午前10時48分・大学部生徒会室・路視線^{ふき}】

「これで、あいつらも少しは大人になるんじゃない？」

「そう？ 僕はそうは思わないけど。これはあくまで現状維持にしかないよ」

ソファアに座って牛乳を飲んでいる麗華^{れいか}の言葉に、僕は反論した。

「まあ、それはおいおい解決するでしょう。今の僕は、別のことに興味がいつてるのだね」

「ん？ どうしたの？」

「どうやら、『バッファローズ』が動き出しているらしい」

【午前10時48分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

「もう遅い」

応援を呼ぼうとした私に、郷馬がそう告げた。

「……遅いつて、どういうこと？」

「もう準備は整ったということだ」

そう言つて、郷馬は斉藤のそばに飛躍する。

斉藤の手には、いつの間にか銃口がたくさんついた大砲のような物が握られていた。

すでに二章分くらいの分量になっている第六章。

本当はキャラ紹介にちょうどいいかな？って感じで作ったのに、こんなに長くなるなんて……

次は男子の反撃です。

《なぜなに？》

Q 機密ランクB以上への「学園結界」の復帰、とはどういうことですか？

A 「学園結界」によって保護されている、機密情報、その他もろもろの施設等への「学園結界」を復活させるということです。

―まあ、本陣は別にあるでしょーけど(笑)。

第六章 女子寮攻略戦争 / 十六話 男子反撃戦――？ 【10:49】

【午前10時49分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】
みつみ

斉藤は手にしたバズーカー（？）を構えて、こちらに向けた。
さいとう

「させない！」

私は腕の周囲を覆う「力」を球状にして、斉藤に投擲する。

「手遅れだよ。御津見さん」

斉藤はそう言って、私に向けて、いや、正確には女子寮最深部の方へ向けて、そのバズーカーを放った。

【午前10時49分・女子寮作戦室・寿視線】
ことぶき

「これからどうします？ 副会長」

静江と草子が私を見つめる。
しずえ
くさこ

——どうしようか？

当初の計画は破綻した。

これ以上無理をするわけにはいかない。

「ちょっと出てくるわ」

——風にでも当たって頭を冷やすでしょう。

【午前10時50分・女子寮第二バリケード前・一般女子視線】

「やっぱ、突破してここまでくるのかな？」

「たぶんそうなんじゃない？　そのために四つもバリケード作ってるんでしょ？」

「そうよねー。でもさー、できることなら——ん？」

何かが横切った。

「どうしたの？」

「え、いや、何か飛んで来たような……」

【午前10時50分・女子寮第三バリケード前・一般女子視線】

「で、どうなったの？ 第一バリケードの方は？」

「今連絡をとつてるところです。少しはお黙りなさいな！」

「遅いよー。そんなんじゃ——って、あれ？」

——一瞬、丸い物が見えたような……

【午前10時50分・女子寮第四バリケード前・一般女子視線】

「本当にここまで来るのでしょうか？ 私、ちと信じられません」

「来るんじゃない？ でもまあ、そんな気負うことはないでしょ」

「そうでっすか」

「ってかさー。前から思ってたんだけど、それってワザとなの？」

「ワザと、と言い——おや？」

「どつしたの？」

「いや、何かが……」

【午前10時50分・女子寮作戦室前・寿視線】

作戦室の外には私以外誰もいない。

他の女子生徒はそれぞれの持ち場についている。

「はあー」

ため息一つ。

——こんなことなら、「封絶」を使った作戦は取っておくべきだったかも。

バリケードの方へ目をやる。

「！」

向こうから、何かが飛んで来た。

【午前10時50分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

バズーカーは火を噴いた。

だけど、ダメージは感じられない。

防御のために翳した手を除けて、斉藤を見る。

「――何をしたの？」

「それはこれから分かりますよ。御津見さん」

ふと視線を移す。

この辺り一体に黒い、卵くらいの大きさの物が散らばっていた。

その数五個。

「反撃、開始！」

郷馬ごうばがかっこつけて、両手を顔の前でクロスした。

遂に男子が反撃に移りました。

でも今はまだ10時50分。

まだまだ続きます。

《なぜなに？》

Q 女子寮第四バリケード前にいた女の子はまた出てくるのですか？

A たぶん、出てきます。

いや、たぶん……

【午前10時51分・女子寮第一バリケード前・御津見視線―みつみ】

卵型の物体は、カチリ、と音を出して真つ二つに割れた。

いや、割れたのではない。開いたのだ。

そのことに気づいたときには、すでに私の周りは黒い鎧に囲まれていた。

「――！ な、何？」

五つの弾から飛び出てきた、五人の鎧を着込んだ者達。

「『バードスーツ駆動鎧』（*とある魔術の禁書目録）というんだが、知らないようだな」

郷馬ごうばが指を鳴らしたのを合図に、その「駆動鎧」とやらを着込んだ男達が私を押さえつけた。

――力が強化されている！

床に押さえつけられた私を見ながら郷馬が口を開いた。

「もう分かつてると思うが、こいつは着用者の筋力を極端に上げる物だ。そちらが『力』を付与したのと同じようなものだな。」

だがお前らとは違い、こちらの動力は電力。これが致命的な違い

だ。

いくらあいつといえども、何時間も『力』の分配に集中できるわけではないだろう？」

「つく……」

——まるでこちらの作戦を予め知っていたような作戦……

——どこかで情報が漏洩したか？

「——だけど、それだけじゃあ、うちの大将には勝てないんじゃないの？」

いくら力を得たところで、所詮素人の真似事でしょ？」

私の言葉を聴いて、郷馬はふつと笑った。

「今回の目的を忘れてはいないか？」

別に我々はあいつを倒す必要はない。

女子寮最深部に侵入さえすればいいのだ。

そのための手段は用意した」

【午前10時51分・女子寮作戦室前・寿視線】

「ちいつ」

鎧男達が最終防衛ラインを突破しないように、床を融解し、高い壁に形を変える。

「『ブラックスコート
表層融解（*とある科学の超電磁砲）』」

「解禁」を用いての「力」の使用。

本来なら「解禁」を用いずとも、純粋な「発電能力」による電磁波で、床の素材に含まれる鉄分を媒介に同様なことができる。

しかし。

それほどの巨大な「力」を使えば、作戦室にある機材にまで影響を与えかねない。

——あそこにある物を壊すわけにはいかない。

「っなら」

できるだけ使いたくはなかったのだが、作戦を直接攻撃に切り替える。

前髪から飛ばす電撃の攻撃。

だが。

「――な……」

――掻き消された？

電撃は鎧に触れた瞬間、「力」を失って霧散した。

「……………」

無言で突っ込んでくる鎧達。

その動きは人間にしては以上に速く、しかし重く押し掛かるよう。

――それなら。

頭髮に「力」を集めて発射。

廊下の緊急防壁のスイッチを作動させた。

【午前10時52分・女子寮作戦室・天応^{てんのう}視線】

「で、あれは一体何なのですか？」

静香^{しずか}の質問に、あたしは記録した映像を一時停止させて説明する。

「『モンスターボール』よ。」

小型化して改造バズーカの弾丸にして、吹っ飛ばしたようね。

黒かったのは煤じゃないの？」

「『モンスターボール』ですか」

静香が考え込むように俯く。

「ん？ どうしたん？」

「いえ。」

ただ、妙だと思いませんか？

『モンスターボール』にしろ、今出てきているあの鎧にしろ、あれだけの数をどこで仕入れたのか？」

「まあー、確かに言われてみればそうやけど」

「これは――」

「――これは？」

「郷馬さん、実はかなりの大金持ちと思われます」

真面目な顔で手をぐーにする静香。

「それはボケ？」

「――ボケ？、ですか。」

なら、そういつとにしておいてください

どうせ私は少し抜けてます」

女子側の大將がもう動き出してしまいました。

このまま一気に終わるのか？
それともまだまだ続くのか？

次回で確認して下さい

《なぜなに？》

Q 何故一つのバス―カーの一撃だけで、「モンスターボール」を
いろんな所に飛ばせるのですか？

A それが、斉藤の「力」だからです。
―どんな武器でも自在に使いこなすよ。

【午前10時52分・女子寮作戦室前・寿視線^{じゆうせん}】

緊急防壁が下りる。

三段構えの緊急防壁。

一つ目は彼らの後。

二つ目は彼らの真上。

三つ目は私の目の前。

それらは同時に下りる、はずなのだが……。

「――ふん！」

鎧男達は緊急防壁を受け止めた。

――馬鹿な……

二人が両端で受け止め、残りの三人が潜り抜けてくる。

――けど、もう遅いわ。

私の目の前の緊急防壁は下りきった。

――正直、びびったわね。

額にうつすら浮いた汗を手で拭う。

だが。

「――！」

緊急防壁がへっこんだ。

そして。

最終防衛ライン直前の「とっておき」は破られ、私は自分に課した掟を破るか否かの選択を迫られた。

【午前10時53分・女子寮第一バリケード前・御津^{みつみ}視線】

「つく……」

両腕を押さえつける男子を振りほどこうとするが、びくともしない。

分厚い鎧のせいで、男子達は女子に対する遠慮というものを感じていないのかもしれない。

「あきらめろ。『駆動鎧』は女の力でどうにかできるようなものではない」

あがく私に、郷馬が口を開く。

「——えらく余裕そうじゃない。あんたは出なくていいの？」

「構わん。余剰戦力だとも思えばいい」

——なめられたものね。

【午前10時53分・女子寮御津見部屋内・近藤視線】

「で、どうするの？」

回復作業も終えて、男子達は眠らした。

することはもうないように思える。

「あの編入生も記憶喪失なのか？」

華焔かえんがふと思いついたように聞いてきた。

「ええ。そうだけど」

「そうか……」

——ん？

脈絡がよく分らないが、まあ、別に気にすることじゃない。

「――よし。とりあえず、仕事をしよう。」

まずは、もういちど、男子が隠れていないか調べよう」

【午前10時53分・大学部生徒会室・落視線^{ふき}】

「ええ、そうです。」

戦いはまだ続きそうなので、そうされるのがよいかと。

では、また」

受話器を置いて、僕を見つめる麗華^{れいか}の方を振り向く。

麗華は牛乳パックを持ちながら口を開いた。

「どういうことなの?」

「一応、浄化しておこうと思ってね」

僕の言葉に麗華が首を捻る。

「浄化?」

「うん。そうだよ。」

寿は『カーテナ＝セカンド』の力を使って強化をしているようだからね。

他にも何かしているようなら危険因子を増やすことになる。

まあ、そんなことはないと思うけど……ね」

そう言って、ちらっとスクリーンに目をやる。

そこには噂の編入生、やました こうじ山下宏治の姿があつた。

【午前10時53分・女子寮作戦室前・寿視線じゆうしん】

——掟は破らない。

「発電能力」を足に込める。

そして、一踏み。

床の成分に含まれる鉄分が、私を軸に吹き荒れ始めた。

最近ご無沙汰していた主人公、山下が少しだけ顔を出しました。
まだ出番は来ないかもしれないです。

《なぜなに？》

Q 寿が自分に課している掟とは何ですか？ 「力」の暴走とかです
か？

A 似たようなものです。

「掟の話は今後暫らくは出てこないかも。」

第六章 女子寮攻略戦争 / 十九話 男子反撃戦―？ 【10:54】

【午前10時54分・女子寮第一バリケード前・御津見視線―みつみ】

突如、私を押さえつける力が弱くなった。

否。

私を覆う「力」が強くなったのだ。

――いける！

私は懇親の力を込めて男子達を振りほどくと、お腹に一発ずつお見舞いした。

「つぐ……」

「――なに！」

――ここは一先ず撤退をしたほうがいいかも……

私は郷馬と身構えた。

【午前10時54分・女子寮作戦室前・寿視線―じゅせん】

「力」を解放する。

「学園結界」の縛りは受けない。現在、「学園結界」は私達女子には無効化されているのだ。

制限はない。

「つぐ……」

吹き荒れる砂鉄の嵐に、鎧男達は動きを止める。

「焦るな。こちらには、『海楼石』がある」

——なるほど。だから電撃がかき消されたのね。

——だけど。

砂鉄を磁力でコントロールし、鎧男達に向かわせる。

「無駄だ。『有力者』の『力』は効かねえ」

先頭の男子が宣告した。

砂鉄の槍が鎧男達に襲い掛かる。

砂鉄は磁力により強化され、槍は鉄を貫く強度を得ている。

「だから、意味ねえんだよ」

無数の砂鉄の塊が鎧男達を覆った。

砂鉄の槍が鎧に触れた瞬間、その動きが止まる。

「力」はかき消され、砂鉄は殺傷能力を失った。

「ほら」

鎧男は自慢げに告げる。

「お前の負けだ」

打つ手がなくなった私を拘束するため、鎧男達は動こうとした。
が。

「——なっ……」

その関節は動かない。

大量の砂鉄が関節部分に詰まっているからだ。

「『有力者』を舐めないでよね」

動かなくなった鎧男達に告げる。

——あ、パソコン壊れたかも……

【午前10時55分・女子寮第一バリケード前・御津見視線】

『御津見さん、聞こえますか？』

無線機から静香しずかの声が聞こえた。

郷馬の様子を伺いながら無線に答える。

『何？』

『戦況が思わしくありません。一時、第二バリケードまで撤退してください』

『そうしたいところだけど、鎧達はどうするの？』

『大丈夫です。副会長が『力』の放出量上げたので、我々を覆う『力』は男子の『駆動鎧』の力に劣りません。それに、第二バリケードまでの男子はすでに殲滅しました』

『了解』

無線を切ると同時に、郷馬の後から巨大な車輪と、その後続く女子の集団が現れた。

「なっ……」

——処刑用車輪！？

車輪の周囲は炎で覆われ、男子を牽制している。

「退け！」

集団の先頭をいく華焰かえんが傍にいた男子を炎の剣の一振りで押しつけた。

【午前11時00分・女子寮第一バリケード前・郷馬視線】

「どうする？ 女子は要塞作っちゃってるけど……」

仲間の男子がその要塞を指差す。

寿が合流した女子達は、ものの五分で鉄壁の要塞を作り上げてしまった。

要塞は廊下一杯に広がり、侵入者を足止めしている。

「まずは同志を全員集めて、戦力を確認。考えるのはそれからだ」

これで第六章は終了です。

ちよっとマンネリ化し始めていたので、ここで戦いの趣旨を変えます。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなに？》

Q 「海楼石」は簡単に手に入るのですか？

A 実習で取りに行ったことがあります。そのときに、こっそり大量に取ってきました。

↓ 本当なら取った「海楼石」は回収されるんだよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

《男子軍》

郷馬 こうば たけし
健

レベル 不明

世界観 「X-MEN」

得意技 手の甲から生み出すブレードによる攻撃

驚異的な回復力

階級 男子軍隊長 敵戦力撃破・敵本部侵入担当

配置場所 男子寮山下部屋 以後、女子寮侵入

戦闘成績 女子寮第一バリケード前での戦闘（主に御津見との戦闘）において

さいとう かずき
斉藤一樹

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

階級 男子軍副隊長 敵戦力撃破・敵本部侵入担当

配置場所 男子寮山下部屋 以後、女子寮侵入

戦闘成績 なし

山下 やました 宏治 こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃
「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御

「瞬動術」による移動

階級 新入り 敵戦力誘導・撃破担当

配置場所 男子寮山下部屋

戦闘成績 女子寮御津見部屋内での戦闘（主に華焰との戦闘）に
おいて勝利

神崎 かんざき
拳 けん

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「ヘキサ・ウォール方陣障壁」による防御

階級 ゲート前防衛部隊隊長

配置場所 男子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に近藤との戦闘）において敗北

清畏 きよわな
聖也 せいや

レベル 不明

世界観 不明

得意技 「モンスターボール」の投擲による間合いの調整

階級 ゲート前防衛部隊隊員

配置場所 男子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に近藤との戦闘）にお

いて敗北

《女子軍》

寿 ことぶき ひまり
緋麻里

レベル 不明

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 「超電磁砲」 レールガン による攻撃

階級 女子軍隊長 最終防衛ライン担当 作戦指揮担当

配置場所 女子寮作戦室前

戦闘成績 女子寮作戦室前の戦闘において勝利

御津見 みつみ
みつつ

レベル 0 (のはず……)

世界観 なし (のはず……)

得意技 不明

階級 第一バリケード守護隊隊長

配置場所 女子寮第一バリケード前

戦闘成績 女子寮第一バリケード前の戦闘（主に郷馬との戦闘）
において敗北

静香 しずか 静江 しずえ

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

階級 女子軍副隊長 各部連絡係

配置場所 女子寮作戦室

戦闘成績 なし

天応草子 てんのう そうこ

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明（パソコン関係？）

階級 女子軍情報司令官

配置場所 女子寮作戦室

戦闘成績 なし

寒^{かん}
籐子^{とうこ}

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

階級 ゲート突破部隊隊長

配置場所 女子寮側ゲート前

戦闘成績 なし

華焰^{かえん}
香奈^{かな}

レベル 22

世界観 「灼眼のシャナ」

得意技 「贄殿遮那」による一斬

階級 緊急避難通路防衛隊隊長

配置場所 女子寮御津見部屋

戦闘成績 女子寮御津見部屋内での戦闘（主に山下との戦闘）に
おいて敗北

近藤 美紀 こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

階級 新入り ゲート突破部隊隊員

配置場所 女子寮側ゲート前

戦闘成績 男子寮側ゲート前での戦闘（主に神崎と清毘との戦闘）
において勝利

次章予告

例えば自分がいなくても、世界は正常に機能する。

例えば自分が死んだとしても、世界は今日もあり続ける。

己の知らぬ処で、世界は常に動いている。

次章、「食料調達戦争」。

少年は世界にとって小さすぎる。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

キャラがインフレして大変なことになってます……

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ（前書き）

《なぜなに？》

Q 女子が数分で要塞を築いていましたが、どうやったのですか？

A 寿の「力」の「表層融解」と、華焰の「力」の「封絶」のコンボです。

「いやー、それにしても凄い早業だね。」

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ

「菊^{きく}さん！ 今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン・パート？』ちょうだい」

「はいよ」

「菊さん！ こっちにも、今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン・パート？』を！」

「はいよ」

「おばちゃん！ 俺にも今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン・パート？』くれ」

「だーれがおばちゃんだつてー？！ お姉さんとお呼び！」

「は、はい！ すいません！」

「言い直しな！」

「お姉さん！ 俺にも今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン121ろきゅっ……舌嚙んだ」

「小型センター」の食堂では、今日の「今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン・パート？」を求める学生達で溢れかえっていた。

「あの中に入るのか……」

「はあ……」

清きよ閑と一緒きよわなに俺（ここからは山下視線に戻ります）はため息をつく。

「今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニューアルバ
ージョンパート？」とは、「学園」が提供する学生食堂のメニュー
の一つである「日替わりどんぶり」の1216種類目をリニューアル
してさらにリニューアルした、「学園」の技術という技術を結集
した、世界中の美食家達の舌をうならすと噂される（あくまで噂）
究極の牛丼のこと、だそうだ。

何故俺がこんな所にいるかというと……

「え？」

「だから、一端中止してほしんだよ。郷馬君、寿君」

大学部生徒会会長の路ふきが寿に向かって微笑む。

ここは大学部の生徒会室。

現在ここに、高二の「有力者」が集められていた。

「君達が今日の戦いで壊した『学園』の設備、全部でいくらすと

思っ？

寿君にいたっては、『学園』のシステムにハッキングするし、プログラムは書き換えるし、緊急時の障壁は破壊するし。

いくら学園長の許可が下りてるといっても、これはやり過ぎだと思っよ。

郷場君も、あの『駆動鎧』、どこで仕入れてきたの？ 駄目だよ、外から勝手に持ち込んだら」

落会長が郷馬にちらりと目を向ける。

「しかしですね、会長。自分達はこの戦いを止めるわけには……」

「だからね、郷場君。

一時的に物理戦闘をやめて欲しいだけなんだ。

いいかい。今からいうことは絶対だよ。すでに、学園長の許可も取ってある」

落会長は間を取ってから、言葉を続けた。

「これより、第二次女子寮攻略戦争の内容を変更させてもらっよ。

内容は、学食の今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1にゆっ……舌嚙んだ……」

七章 食料調達戦争 / 一話 学生食堂へ（後書き）

久しぶりの更新となりました。

第二次女子寮攻略戦争はまだまだ続きます。

七章 食料調達戦争 / 二話 ルール変更（前書き）

《なぜなに？》

Q 寿や郷馬達は本当に罰則を受けないのですか？

A 受けません。今回の修理費は全て学園長のポケットマネーから支払われます。

↳ そのポケットマネーがどこから出てるのかは秘密。

七章 食料調達戦争 / 二話 ルール変更

「まず、君達には今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン?』を食べてもらう。」

制限時間は一時間。その間に、空になったどんぶりを持って、ここ、大学部生徒会室にまできてほしい」

「それ、何の意味があるんですか？」

「枷の軽減だよ、寿君。」

もし、制限時間内にどんぶりを持って来れなかったら、『学園結界』を強化して君達の行動を抑えさせてもらうよ。

与えられる枷の軽減のために、どんぶりを持って走る。

これが、変更されたルールだよ」

「じき、一時だ。準備をしろ」

郷馬ごうまの声が後から聞こえてきた。

清畏きよわなと一緒に振り返る。

「で、でも郷馬君。あの中に入るのはちょっと……」

清毘が食堂の中を指差す。

食堂は初等部から大学の先生までたくさんの人で溢れかえっている。

そのほとんどが今日の『今日の日替わりどんぶり・パターン1216・リニョーアルバージョン?』を求めているのだ。

日替わりどんぶりの総メニュー数は1461。四年で一周する。そして、四年に一度、学食の料理長である白神菊しろかみきく自身が食材を握る日がある。

いつ白神料理長が出てくるのか、それはいつも分からない。

ただ、彼女が作る日替わりどんぶりの番号はいつでも決まっている。

1216。

ちなみに、彼女の誕生日は12月16日らしい。

「相変わらずだなー清毘。そんなだから負けんだよ」

神崎かんだきが清毘の背中をばんばんと叩いた。

「全員揃ったか?」

郷馬が確認をとる。

一度に学食に入れる人数は予め制限されている。各陣、10人までだ。

但し、高二意外の人間はいつも通りに学食を利用できる。

「よし、では作戦の確認だ」

郷馬が全員を集める。

「いいか。まず、我が敵を間違えるな。敵は女子。他の生徒は関係無い。ごたごたに巻き込まれてはいかん。いいな？」

では確認だ。

まず、先行隊が食券を確保。

その間に別働隊が列に並ぶ。

座席の確保も忘れるな。

食べ終わったら外にいる別働隊にどんぶりを輸送。

どんぶりを得た部隊は『有力者』を連れて大学部生徒会へ直行」

「表向きは、だろ？」

神埼が郷馬にウインクする。

「口を慎め。やつらが盗聴している可能性も——」

「裏があることは向こうだって考えてるって」

食券を買いに向かうメンバーは三名。それぞれ、東口、南口、西口、の三方向から侵入。後に三方向に散らばる券売機にそれぞれ向かい、食券を確保する。但し、その際女子側からの妨害を考慮して、護衛をそれぞれに一人ずつ配置。

列にならぶメンバーはタイミングをずらす。

残った一人と食券を確保し渡し終わった者は、二人分の食事スペースの確保。

外の部隊はそれぞれ、食堂前と、中継用の廊下、そして大学部生徒会室前の三箇所に分散。

「そろそろだ」

時計を確認する。

開始時間は一時。

制限時間は一時間。

このミッションに失敗すれば、午後からの戦いで「力」を封じられることになる。

「この戦いで負ければ、我々は負けたも同然だ。
心して掛かれ！」

七章 食料調達戦争 / 二話 ルール変更（後書き）

ちよつと最近話が薄くなってますね……

なんとかします。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口（前書き）

《なぜなに？》

Q 白神料理長の年齢はいくつですか？

A 還暦を越えています。

→ それでも本人曰く、ぴっちぴちの17歳。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口

郷馬の掛け声と共に、「学園」内に鐘が鳴り響く。

大学部生徒会の用意した、開始の合図だ。

走り出そうとした瞬間、足元に火線が現れ、炎を混ぜたドーム上の陽炎の壁が形成された。

「こいつは……」

周囲の喧騒が止む。

展開された「封絶」は食堂全てを飲み込むほどの巨大なもの。

——でかすぎだろ。

「封絶」の見上げながら思う。

「封絶」の影響で、現在動けるのは「有力者」のみ。

だが、女子達は小細工で全員動けるはず。

なら。

「『アデアット』」

「ハマノツルギ」を取り出して、構える。

郷馬の話によると、この「封絶」内では「学園結界」が働かないらしい。

ならば、使えるはず。

「『解禁』、^{トメー・アルゲースカイ・アルナキアース}『無極而太極斬』（＊魔法先生ネギま！）」

「ハマノツルギ」を大きく振るう、「力」を断ち切る剣撃。

正確には「魔力」と「気」を分かつ技なのだが、ここでは「力」を分かつ技として作動する。

「おりゃあああ！」

最も「力」の弱そうな「封絶」の頂点（ドーム状の）に向かって放たれた斬撃は、「封絶」を一瞬で破った。

途端に喧騒が吹き返す。

時間にしてわずか数秒足らず。

だが、その間に女子達は数メートルも先に進んでしまっている。

「えっ…… 何で女子があんな所に？」

隣で走る清畏^{きよわな}が驚嘆の声を上げる。

——こいつは非「有力者」か。

「んなことはどうでもいい。いくぞ」

清毘ともう一人の男子（名前はまだ覚えていない）に発破を掛けて、俺達は食堂の南口に向かう。

『目標、距離20。最優先ターゲットは確認できず。オーバー』

『了解。攻撃せず、中に入ったら拘束してくれ』

思念を使つて斉藤さいとうと交信する。

目の前を走る女子はおそらく非「有力者」。

この二人はこのまま南口から食堂に入るのか、それとも陽動か。

まあ、どちらでもやることは変わらないが。

今回のルールである、食堂に一度に入っている人数は、各陣10人までというのは、実は大変扱いが難しい。

同時に10人以上入ってはいけないだけで、入れ違いで何人も入ってよいからだ。

つまりは、力のない者10人を相手側から見繕つて食堂内で身動きを取れなくしてしまえば、相手は何もできなくなるのだ。

もちろん、これはこちら側にもいえることだが。

と、前の二人が振り向いた。

「おおっ」

二人は構え、「力」で体を覆い始める。

——陽動か？ それとも待ちぐせか？ だとしたら、ここはすでに別働隊に囲まれている可能性も。

「ええい、面倒くさい。突っ込んじまえ！」

右手の「ハマノツルギ」を前方に投げ飛ばしながら、隣を走る二人に叫んだ。

「え、ええーっ」

驚く清畠ともう一人（やっぱり名前を思い出せない）を余所に、「ハマノツルギ」は二人の女子の間を通過する。

「えっ……」

無意味な投擲に驚く女子二人。

——今だ、「瞬動」で……

足に「力」を込めて、放出する。
が。

「しまった……」

前にぼてり、とこけただけ。

「何してるの？」

——そうだった。「学園結界」……

「はああああ！」

俺がこけたのをチャンスとばかりに襲い掛かってくる女子二人。

それに対し、清毘が空の「モンスターボール」を投げた。

「！」

空の「モンスターボール」は二人のうち、右の方に当たると、口を開いて「キャプチャーネット」を放出して、「モンスターボール」内に取り込もうとする。

「ナイスアシスト！」

俺は起き上がって、もう一人の女子の一撃を受け止めた。

そのまま引き寄せるようにして、投げ飛ばす。

「ふんっ」

だが、「力」によって強化された体を持つ女子は、難なく着地を決めて見せた。

もう一人の方も「キャプチャーネット」を破り終える。

だが、位置は先ほどとは逆転、俺たちの方が食堂に近い（女子が

「キャプチャーネット」に絡まっている間に隣を走りぬけた。

「悪いが、相手してる暇ないんで」

格好つけて、南口へと一歩進む。

と、足元が爆発した。

七章 食料調達戦争 / 三話 南口（後書き）

久しぶりの更新となりました。

ざっと今までの話を見返してみたのですが、最終話まで書き上げるのにどれだけかかるのかを考えて、ちょっと呆然としてしまいました。

執筆速度上げないとまずいですね（笑）

いや、ほんと。

七章 食料調達戦争 / 四話 ピンチはいつも突然に（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 清畠は「有力者」なのですか？ それとも非「有力者」なのですか？ どちらの表現も出てきたので分かりません。

A 「有力者」ではありますが、「力」の発動に条件があります。
↓
だから、「力」が発動していまいときは非「有力者」。

七章 食料調達戦争 / 四話 ピンチはいつも突然に

「うわあああつ！」

—— なっ、爆弾！？

突然の爆発で、最も弱い足元の障壁（常に簡易の障壁を身に纏っている）が破られた（ただでさえ弱い障壁は「学園結界」によって紙切れ同然になっていたわけだが）。

「あー、軍事研の……」

吹き飛ばされた俺の傍にいた女子（食堂と反対側に飛ばされた）が呟いた。

うつ伏せのままダメージを確認する。

—— 大丈夫。怪我はない。

体が痺れているが、すぐに治るだろう。

「あ、動かない方がいいよ。たぶん、神経毒盛られてる」

—— は？

みるみる意識が遠のいていく。

「あー、こりゃ駄目ね」

「そっかー、そりゃ大変やったなー」

休看^{やすみ}先生が豪快に笑って俺を叩いた。

「――」

叩くな、と訴える俺。

「まあ、でもラッキーやったで。骨折も何もしてへん。」

「――」

だから叩くな、と訴える俺。

「まあ、残念なことに倒れてから30分は経ってるから、いろいろとまずいんとちゃう?」

「――」

――だ、か、ら、叩くなって言っただよ!

心の中で叫ぶ。

「ん? どうしたん? 何か言いたいん?」

神経麻痺で動きの取れない俺は、目で訴えかける。

「そんじゃ、まあ、治療しますか」

休看先生は白衣のポケットから怪しげなカプセルを取り出した。

「――」

「ん？ あー、これ？」

俺の視線を感じて、カプセルを俺の目の前に持ってくる休看先生。

「これは、『インフレックス』の技術と『学園』のサンプルから作り出した秘薬でな、回復形の『有力者』の肉体の一部からできんのだ。ご利益あるでー」

――ねーよ！

ぐひひひひ、と涎を垂らしそうになりながら笑う休看先生に、恐怖を覚える。

「いやー、なかなか飲んでくれる生徒がいなくてさー。せつかく保健室の先生になって合法的に実験するつもりやったのに、最初に失敗して以来、誰も来ーへんかったからなー。こんなチャンス滅多にないし、逃すつもりはあらへんでー」

――マ、マッドサイエンティスト！？

「ほな、さっそく飲んでもらおうか。って、あんた、動けへんのやっとな」

休看先生は思案するように顎の下に手を持つていく。

「そやつ、口移しで飲ましたるわ」

とんでもないことを言い出した休看先生に、俺の目が点になる。

「えーと、コップコップ……」

——いやいやいや、ちょっと待て。おかしいだろ。どう考えても一体どんな思考回路になつてんだよ。口移しなんてしなくても、他に方法はいくらでもあるだろ。つーか、大体、そんな怪しげな薬を使おうとする前提が間違つてる。それに俺、その、それは初めてつてゆーか……

抵抗したいが動けない体に悶々しながら、俺はせめて「無詠唱呪文」を行使しようとする。が、ここは「学園結界」の影響下。

「——あつたあつた。よし。そんじゃあー、山下君」

人体実験がそんなに嬉しいのか、満面の笑みで微笑む休看先生。

「覚悟はえーなー？　なくてもやるけど、あつた方がえーで」

——お、俺の貞操がー！

今まさに、休看先生が薬を飲もうとした時に、第三者の声が聞こえてきた。

「待つて下さい。できれば変わって欲しいのですが」

そう言っ て現れたのは、なんと、大学部生徒会長（名前忘れた）！

—— え、ちょっと、何で……

突然の展開に眩暈を覚える。

とにかく一つ言える事は。

—— 俺、汚れちまった……

七章 食料調達戦争 / 四話 ピンチはいつも突然に（後書き）

話がおかしな方向へ……

ガチバトルを望んでいた人は、ごめんなさい。

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろピンチ（前書き）

《なぜなぜに？》

Q 軍事研という単語が出てきましたが、これは、今後のストーリーで部活や研究会、同好会などが出てくるということですか？

A はい、その通りです。

所属する活動団体と「有力者」の「世界観」は一応合わせるつもり。

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろピンチ

「きたきたきたー、ガチ、BL!」

先ほどまでとは違う輝きを目から放ちながら、休看先生は^{やすみ}歡喜の声を上げた。

「ささっ、ぶちゅーと、むちゅーと、やっちゃって」

休看先生は^{ふき}落会長（名札を付けていたので、名前を確認）にコッ
プと例の丸薬を手渡す。

その、休看先生のキス真似の唇を見ながら、^{タコみたい}落会長は両手を前に
差し出した。

「あー、すいません。初めてなんでそのー……」

顔を赤らめて俯きかけの落会長。

「オーケー、オーケー。そりゃそーだもんねー。なーに、私も野暮
なことは言わないよ。」

お姉さんは外で待ってるから、後は若いのでごゆっくりー」

休看先生は、やつぽーと叫びながら、ステップで保健室を出て、
こつちを振り向いた。

「一応、ひに——」

落会長が扉を閉めた。

その顔には気のせいか、疲れが見える。

改めて見ると、落会長はかつこよかった。

ハンサムでもイメンでもなく、筋肉でもなくインテリでもなく、ただ、かつこよかった。

——って、そんなこと考えてる場合じゃねえ！

近寄ってくる落会長を目で牽制する。

そんな様子の俺を見て、落会長は「ああ」と頷いた。

「もしかして君って、初めては好きな子じゃないと駄目なタイプ？」

——ほっとけ！

更に陰しさを増す俺の視線をお構いなしに、落会長は俺の傍まで来た。

——やばいやばいやばい！　いろいろとやばい！　身体的にも精神的にも！

慌てる（体は麻痺している）俺に微笑みかけると、落会長は口を開いた。

「さて、始めようか。」

——吸血鬼君」

——！！

吸血鬼。

その一言で、保健室の空気は一変した。

落会長はにこりと笑う。

「まあ、聞いてよ。独り言だと思って。

生徒会の活動にね、校内の治安維持があるのは知ってる？

それでね、生徒会は生徒に秘密に監視カメラを設置してるんだよ。
あ、カメラの権限があるのは大学部こどもだけね。寿君こひみきのところは勝手に
やってるようだけど、あれ、校則違反だから。

——早く用件を言えって顔だね。

まあ、そう焦らずに。急いだって事実是不変ふへんらないんだから」

いやらしい言い方をしてくる落会長。

「君達の戦いも見させてもらったよ。下手に備品壊されると困るからね。いくら学園長のポケットマネーがあるといっても、調達その

ものは僕らがやることになるのだし。

閑話休題。

本日午前10時20分、女子寮の御津見みつつ君の部屋の周りの監視カメラ、正確には女子寮と男子寮の境に設置していたカメラが一斉に途切れたんだ。

時間にして17分。カメラが復活した後、送られてきた映像には退廃した寮室が映っていたんだ。

これ自体はさして重要なことじゃない。うちの学生ならこれくらい珍しくないからね。

問題はその後。

実はね、そのカメラ。『力』の分析機能がついててね、『学園』のデータベースから誰が『力』を使ったか分かるようになってるんだよ。

で、まあ、何があったのかというところ――」

そこで一端区切る路会長。

俺の反応を楽しむようにこちらを向く。

だが、俺は神経麻痺状態なので心境が表情に出ることはない。

「君の『力』が、華焰香奈君かえん かなの中から確認されたんだよ」

七章 食料調達戦争 / 五話 貞操意外もいろいろピンチ（後書き）

ちゃんと話は元に戻りましたよ（笑）

おふざけを期待していた人は、ごめんなさい。

《なぜなに》

Q 監視カメラの「力」の分析機能」は元からついていたのですか？

A はい。姿を消す「力」の持ち主もいますので。

「まあ、申請したときよりも強力に改造されてるのは間違いないけどね。」

「——さて、ここで何か言うことはないかい？って聞きたいんだけど、麻痺ってるようだから、僕は勝手に続けるよ。」

『力』はね、『有力者』の存在そのものに宿ってるんだ。

だから、ちよつと血が混ざったりするだけでは、『力』が相手の体内に入ることはない。

『力』を相手の体内に入れようとするには、どうしても意図的にするしかないんだよ。

ずばり、相手に自分の存在を植え付ける、とかね。隷属化に置くってのもあるね。

まあ、別にそういうのはどうでもいいんだ。この『学園』にはそういうやる口で仲間を作っている奴もいるから。

問題はね、やました山下君。

君がどこの派閥にも属していない、ということなんだよ」

「——」

——派閥？ 話が見えねえ。

ふき路会長の話の本筋がどこにあるのか分からず、俺は困惑する。

もちろん、顔には表れていない。

「相手を支配下に置く『力』はそれなりに存在する。

けどね、それはどれも不安定で、使いにくいものばかりなんだ。

純粋な支配だけに特化した『力』、そう、例えば、吸血鬼のような着属化能力はね、とても珍しく、そして、とても強力だ」

「――」

「話を元に戻そうか。
どう

この『学園』にはいくつかの派閥が存在する。

『生徒会』、『委員会』、そして『帰宅部』。主にこの三つが『学園』の三大勢力で、もちろん僕は『生徒会』に所属しているわけだけだ。

『学園』の生徒はね、ほとんどがどこかの派閥に所属する暗黙のルールがあってね。

まあ、高等部の間はそこまで関係ないんだけど、大学部に入ると、将来、組織の中で生きる者としての訓練として、どこかの派閥につかないといけないんだよ。

まあ、つまりは、予約ってところかな。

大学部に来た暁には、うちの『生徒会』に入ってくれるっていう約束をしてほしいんだ」

落会長は右手で俺の額をとん、と叩いた。

途端に、体中の痺れが取れていくのが分かる。

「これで痺れはとれたはずだよ。

どう？　うちに来ない？

もし来てくれるなら、そう言ってほしんだけど」

——どうする、どうする？

俺は落会長を見つめる。

——一応俺は『バッファローズ』の人間として『学園』に侵入している身だ。なんか一番でかそうな『生徒会』の中に組み込んでもらえるなら断らない手はない。だが、罠の可能性は？　大体、普通の生徒ならここでどう答える？　やっぱ、考えさせてくださいか？　だが、俺はすでに『学園』の中でも異質な存在として見られている気がする。となると、逆にノーマリティーは狙っているようにも捕らえられる可能性が。ええい、面倒くさい！

「断ります。まだ編入してきたばかりの身なので」

その答えを予め予想していたように、うんうん、と頷いて聞き取る落会長。

「やっぱりそう言うと思ってたよ。でも、君の『力』が余所に取られるとこちらは大損害だ。」

それに、やっぱり君には格の違い、レベルの差っていうのは知ってもらった方がいいと思うんだよね」

「――」

不穏な言葉にさっと身構える。

だが。

「まあ、そういうわけだから、その吸血鬼の『力』は消させてもらうよ。『解禁』、『吸血殺し《デープブラッド》』（*とある魔術の禁書目録）」

時すでに遅し。

吸血鬼を灰にする『力』が、俺に向かって放たれた。

七章 食料調達戦争 / 六話 主人公の知らないところで、物語はちゃんと進

今回のこの流れ、失敗したわけではありませんので、あしからず。

七章 食料調達戦争 / 七話 で、結局は……（前書き）

《なぜなに？》

Q 今更ですが、午前中に倒されたキャラが復活しているんですが……

A 「なんでもなおし」（*ポケットモンスター）で「麻痺」状態を直しました。

ゝ使えたのは数人だけ。

七章 食料調達戦争 / 七話 で、結局は……

「吸血殺し」。

食虫植物のごとく、吸血鬼をおびき出し、自らの血を吸わせることでその者を灰にする力。

たとえ「解禁」によって現れる吸血鬼の能力であるため、普段は吸血鬼でないとしても、「吸血殺し」の前では意味をなさない。

「吸血殺し」に誘われ、「解禁」の「力」が勝手に表に現れる。

だから、落会長の「力」に当てられた俺は、否応なしに吸血鬼の力を引き出されるはずだった。

しかし。

「何ですか？」

落会長に俺は告げる。

落会長の腕は、まさに噛んで下さい、とでも言った風に俺の口元に差し出されている。

だが、俺に吸血衝動は現れない。

「な、なぜだ……」

驚きを隠せない落会長。

けれども、すぐに踵を返し、腕を引っ込める。

「なるほど。そういう風にしておくれよ」

落会長は悔しそうな、嬉しそうな顔をして、保健室を出て行った。

「――」

暫らく緊張を解けない俺。

「――危なかった……」

俺はベッドに倒れこんだ。

俺の吸血鬼としての力がバレばかったのには理由がある。

この吸血鬼の力。

原作（魔法先生ネギま！）では持ち主が力を封じられている設定なのだ。

学園結界と原作の力の制限、そして、「解禁」状態でしか使えないという条件が重なって、何とか「吸血殺し」に耐えることができたのだ。

だけど。

「あー、血が足りない……」

吸血鬼としての欲望が渦巻いていた。

時刻は午後1時55分。

食料調達戦争終了まで後五分。

保健室での一件の後、吸血衝動が治まるまで保健室で休むことにした俺は、結局、食料調達戦争に出ることはほとんどなかった。

もちろん、勝敗がどうなったのかも知らない。

「ん？ 出ていくん？」

休看^{やすみ}先生が、立ち上がった俺に声を掛けた。

「はい。体の痺れも取れましたので」

「ちえっ、治っちゃったか。まあ、ええで。次来たときにはちゃんと薬飲んでな」

手をふらふらと振って俺を見送る休看^{やすみ}先生。

「あー、そうそう。この話知ってる？」

休看先生がこちらを向かずに言った。

「一昨日の明朝に、女子寮に侵入者があつたらしいんよ」

「へえー、そうですか」

「うん、そんでなー。その侵入者、二人組みやつたらしいんやけど、
なんでも監視カメラに映つたらんかったんよ。でもな、逃げる途中
で見つかつてな、片方が股の辺りに攻撃受けたんやつて。攻撃した
子が言うに、絶対傷になつとるとか」

「――で？」

こちらを振り返つた休看先生は、俺をじつと見つめる。

「股、見せてくれへん」

「お断りします」

目を鈍く光らせて請う休看先生に、俺は諮会長から預かつた丸薬
（休看先生が俺に飲まそうとしたやつ）を投げ返して、保健室を出
た。

七章 食料調達戦争 / 七話 で、結局は……（後書き）

今章は「刀語」の第4話をモチーフにしています。

気づいてる人も多いですね？

現状報告？ & 次章予告（前書き）

《なぜなぜに》

Q 結局、落は山下を吸血鬼だと信じているのですか？

A それはおいおい分かります。

ゝあと、何故吸血鬼を欲したのかも。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 やました
こうじ 宏治

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃
「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御
「瞬動術」 による移動

備考 反政府組織「インフレックス」所属

露 ふぎ 当麻 とうま

レベル 不明

世界観 「とある魔術の禁書目録」

得意技 不明

備考 「生徒会」派所属、大学部生徒会生徒会長

雨 あま 休看 やすみ

レベル 不明

世界観 不明

得意技 不明

備考 保健室の先生

次章予告

一度勝てたからといって、次も勝てる保障はない。

一度勝てたからといって、それが正しい結果である保証はない。

間違っているのは、大概は自分であるのだ。

次章、「後半戦」。

力敗れたとき、積み上げた物は価値を無くす。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

さて、やっとこさ第二次女子寮攻略戦争の終わりが見えてきました。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼（前書き）

《なぜなぜに？》

Q この女子寮攻略戦争が終わったら、話はどのような流れに進むのですか？ まだ学園生活も始まっていませんし、聖地を探す話もまだですし、建国の話においては、全然先が見えないのですが。

A 今の話が終われば、次は部活紹介にいききたいと思っています。
それが終われば、晴れて学園生活突入です！

つまりはまだまだまだまだ終わらないということだよ。話の構成はできているからそこは安心してね。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼

【午後2時40分・大学部生徒会室・ふき落視線】

「で、結局どうだったの？」

麗華^{れいか}がコーヒー牛乳を手^かに聞いてきた。

「どう、とは？」

「吸血鬼ボーイのことよ。当たり前だったの？」

数週間前、「生活区」で吸血騒ぎがあり、生徒会大学部にその解決依頼が来ていたのだ。

今回彼と接触した真の理由は、彼の吸血鬼としての「力」と被害にあった方達に残された「力」を鑑定するためだったのだが。

「それが、消えちゃったんだよね」

「消えた？」

「うん。『吸血殺し』で『力』を無理やり引きずり出そうと思ったんだけど、何故か『力』が出てこなかったんだよ。『吸血殺し』に関しては、『限定解除』の許可はとってあったから、不備はないはずなんだけど」

今回のために、「学園結界」の一部無効化、つまり保健室内での無効化処置を施していた。

「学園」内の「有力者」はその「力」において秘匿権利があり、直接調べるしかないからだ。

「ふーん。当麻でも無理なことってあるのね。『神淨の討魔』（*とある魔術の禁書目録）なの？」

「麗華——」

「——うう、分かってるわよ。もう言わない」

僕の声に麗華がびくつと肩を震わす。

「——それで、どうするの、当麻？ 結果が出ないと上はうるさいんじゃない？」

「まあ、なんとかするよ」

【午後2時50分・女子寮作戦室・寿視線^{ことぶき}】

「先ほどの戦いの結果、我が軍の戦力は80パーセントダウンしました。しかし、相手側もかなりの損害を被った模様です。そういう点では五分五分でしょうが——」

「やっぱ『カーテナ』セカンド^{ひまり}使えんのは痛いなー。向こうの鎧は『力』に頼ってないし。それに緋麻里^{ひまり}が動けないからなー」

「それは決して関係ありません。副会長はたとえ『力』が使えなくても、副会長ですから。戦力としては申し分ないかと」

「そりゃあーそうよね。なんたって、副会長は副会長なんだし」

……。

——この二人は高等部生徒会副会長に何の幻想を描いているのだから？

私は後ろで話している静江しずえと草子そうこを振り返った。

「いや、あの二人とも。私にどんなイメージを……」

——正直、困る。過度な期待は。

——私は、自分が決して無敵ではないことを知っている。

——期待されてやっていけるのは、無敵の王者だけ。そう、あいつレベルでないと……

「——二人とも、私は戦力外よ」

「またまたー、謙遜しちゃって。『力』無くたって、腕っ節があるじゃない」

「そうです、副会長の腕力は人の域を超えています」

「——それって、私がゴリラ女ってこと？」

【午後2時55分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

吸血鬼としての「力」が最も発揮されるのはもちろん深夜。

だが、深夜は「力」が強くなりすぎるために逆に発見されやすい。
だから。

狙うは黄昏時。

それまで、ターゲットを選んでおく必要がある。

八章 後半戦 / 一話 吸血鬼（後書き）

今章で女子寮攻略戦争を終えます。

最初はキャラ紹介のつもりだったのに、そんなにキャラ出てないし、半年もやってるし、とほほほ……

八章 後半戦 / 二話 一騎打ちへ（前書き）

なぜなぜに？

Q 前回「神淨の討魔」の名が出てきましたが、原作ではその真意は今だ明らかにされておりません。どのように使ったつもりですか？

A 一応、作者独自の見解の元で使用しましたが、本編の話と関わりを持たせるのはだいぶ先になると思うので、そのときまでに原作での説明がなされるのを期待しています。もし間に合わなかった場合は、独自の見解のもと使用します。

＼戦闘能力以外の原作知識が必要になるのは、最後の辺りかな？

八章 後半戦 / 二話 一騎打ちへ

【午後3時03分・男子寮山下部屋内・山下視線】
やました

郷馬はつり曰く、昼の「食料調達戦争」において、俺達は戦力の80パーセントを失ったらしい。具体的に言うと、男子のほとんどが保健室送りになり、また、「有力者」は男女問わずその全員が枷を強いられた、ということらしい（その詳しい経緯についてはまた後日）。

「女子寮攻略戦争」の決着方法は依然として変わらず、俺達は女子寮最深部を目指すらしいが、男女互いに兵力を大幅に失った今、戦いは泥沼化していた。

数少ない男子の力では、女子が「力」で既に築き上げた防壁を突破することはできず、また、数少ない女子の力では、「機動鎧」で逃げる男子を捕らえることはできない。

「で、どうすんの？」

何故か俺の部屋に集まっている郷馬達に俺は聞いた（保健室を出て他の奴を探して歩いていたら、郷馬にここに連れてこられた）。

「奴らと一騎打ちでもするしかないだろう」

郷馬は然もありなん、といった顔で俺に答える。

「後は、平和的解決であるな」

【午後3時10分・女子寮作戦室・寿視線^{しゅふせん}】

「会長、生徒会専用無線機より、通信です」

静江^{しずえ}がそう言っで、一度私が投げ捨てたそれを私に渡した。

——この状況で連絡してくるのは、大学部生徒会会長である路^{ふき}の野郎か、もしくは……。

「——まさか、まだ持ってたなんてね。郷馬」

【午後3時12分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

昼過ぎに感じた、何とも言えない魅惑的な匂いを感じる。

昼過ぎに感じた匂いはすぐに消えてしまったが、今度のは消えずに漂い続けている。

だが、誘われることなかれ。

おそらくこれは罠。

甘い、甘い、死への罠。

私は騙されない。私は惑わされない。

目的を達するのみ。

「ふうっ」

獲物を探すために開放していた「力」を封じる。

まだ奴と対峙するわけにはいかない。

力が、血が、全然足りないのだから。

「——つけられては、いない」

周囲に目をやる。

ここは「生活区」。

真昼間から「有力者」のいるような所じゃない。

もし他の「有力者」が接近すれば、「力」が干渉を起こすはず。

今のところはその様子はない。

「ああ、それにして」

足を止める。

「お腹減った」

お腹を鳴らしながら空を仰いだ。

私自身は完全な吸血鬼ではない。

吸血鬼としての私は、あくまで、「力」の副産物としての存在なのだ。

それ故に、私は人であり、吸血鬼でもある。

つまり何が言いたいのかというと。

「おい、嬢ちゃん、大丈夫か？」

血をいくら飲んだところで、お腹は減るのだ。

ここ最近吸血活動に勤しむあまり、人間としての食料摂取を等閑にしていたわけで。

「何か、食べ物……」

私は今、空腹で路上に倒れていた。

【午後3時15分・男子寮山下部屋内・山下視線】

『ああ、その通りだ。場所はそこで。開始時刻は、そうだな。30分でいいだろ』

郷馬が無線機で寿と一騎打ちの話をつけたらしく、寿と無線で話しながら俺達に親指を上げた。

郷馬の提案と寿の妥協により、この「女子寮攻略戦争」（まともにやってたのって、最初の一時間だけ？）は最終局面を迎えることになるそうだ。

『こちら側から教職員にはその旨を伝えておく。もちろん、落会長にもだ』

郷馬が無線機に向かって話しているのを聞きながら、俺は斉藤^{さいとう}に質問する。

「郷馬って、生徒会役員だったのか？」

「ええ、そうです。といっても、すぐに辞めましたが」

「何で？」

「さあ？ 分かりません。何かあったんでしょう」

八章 後半戦 / 二話 一騎打ちへ（後書き）

更新が遅れました。

話も飛び飛びですいません。

一応、この後一騎打ちをしてこの話は終わらせるつもりです。

八章 後半戦 / 三話 戦闘開始（前書き）

なぜなぜに？

Q 噂の吸血鬼さんは「吸血殺し」の力、つまりは「とある魔術の禁書目録」を知っているから「吸血殺し」に気づいたのですか？

A いいえ、違います。彼女は完全な吸血鬼ではないので、「吸血殺し」に誘われても残った半分の人間としての力で、理性を保つことができます。畏だと思ったのは唯の勘です。

↓彼女がCPUなのか否かは、まだ秘密。

八章 後半戦 / 三話 戦闘開始

【午後3時30分・第3塔屋上競技場・山下視線^{やました}】

気づいたら皆でここに集まっていた。それはもう、予め練習していたんじゃないかってくらいスムーズに。

いささか気になることはあるにはあるけど、今はどうでもいいので置いておく。

で、何でか知らないけど、この「女子寮攻略戦争」は五対五の殴り合い（？）で決着をつけることになっていた。

出場するのは、男子は郷馬^{ごうば}、斉藤^{さいとう}、神崎^{かんなぎ}、清畏^{きよわな}、俺の五人。全員「有力者」である。

女子の方は寿^{ことぶき}、静香^{しずか}、寒^{かん}、華焰^{かえん}、近藤^{こんどう}の五人。こちらも全員「有力者」らしい。

「有力者」以外でここにいるのは男女共に数名しかない。

一体先の戦いで何があつたのかは後日聞くことにする。

——今日の戦いって、もしかしてここにいる奴らの私情じゃないだろうな？

なんとなくそんなことを思う。

——それにしても、無茶苦茶だな。

例の「枷」については、この戦いにおいて取り外されるらしい。

じゃあ昼のアレは何だったのか、と抗議したいところだが、開始早々リタイアした俺にはおそらく口を挟む権利はないだろう。

で、この競技場についてだが。

何でも、「学園」内で唯一「学園結界」を気にせず「力」を使える競技場らしい。

改めて思うが、この「学園」は戦闘という行為について日常会話と同レベルで捕らえているのではないだろうか？ 普通、こんな風に学生を戦わせたりしないはず。まあ、おそらくそれが「インフレックス」の強さ、強いては「トーキョー特区」の強さとなるのだろうが、今一現実味がないというか、納得がいかないというか。とにかく、おかしいと思う。

話を元に戻す。

現在俺は他の男子達と共に、競技場の西側の選手控え室にいる。女子は東側の控え室にいるらしい。

で、一回戦は俺と華焰^{かえん}の戦い。

はっきり言って、一度手合わせしているので余裕だと自負している。

郷馬の声援を受けて、俺は競技場上がる。

競技場は小型センターの屋上一杯一杯に造つてあるので、半径500メートルという巨大なものとなっている。

移動用マットに乗って、俺と華焰はそれぞれ競技場の中央に下りた。

武器の使用、「力」の使用に制限なし。

タイムアップなし。

ギブアップあり。

両者共に体に取り付けられた「逝かしません君」が発動した時点で敗北（着用者の体力が限界に近づくと発動し、治療のために保健室に強制的にワープされる。ここにいる人間は教師学生問わず皆これをつけている）。

華焰と対面する。

つい数時間前にコテンパンに倒したというのに、華焰は笑みを浮かべている。

——何か策でもあるのか？ それとも……

ブザーが鳴り響いて、試合開始を告げた。

【午後3時30分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

今私は、人の温もりというものを感じている。

「そんなにあわてて食べなくても、誰も取ったりしないよ」

どんぶりを掻きこむ私に、命の恩人、三木恭介君^{みききょうすけ}が笑いかけた。

ああ、なんとすばらしいものなのだろう。人情というものは。

私達が人であるおかげで、今こうして食料を恵んでもらえる。

もし私達がただの獣であつたらならば、通りかかった三木君もこうして助けてはくれなかつただらう。

これぞ人が人であるが所以。

己を捨て、他者のために生きる、全生命体唯一の奉仕生物。

私は今、人に生まれたことを神に感謝する。

「いや、そこまでのことじゃないと思うけど……」

思考を口にしていたのか、三木君が苦笑いを浮かべていた。

八章 後半戦 / 三話 戦闘開始（後書き）

何だかご都合主義ということすら生ぬるい超ご都合主義的展開かも
しれませんが、裏でいろいろとあったんです。

次回からは戦闘に移ります。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギま！」VS「灼眼のシャナ」

なぜなに？

Q 「逝かしません君」の発動基準の明確な情報がほしいです。

A 蘇生系の「力」を解析して作られた物なので、説明できません
(笑)

ゝごめんね。本当はそこまで考えてなかったんだよ。いつか作るからそれで勘弁(泣)。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギま！」VS「灼眼のシャナ」

【午後3時31分・第3塔屋上競技場・山下視線^{やました}】

華焰^{かえん}との距離は約5メートル。

この配置は近距離戦闘が圧倒的に有利。

確かに、俺の「力」には近距離戦闘を行うだけの力はある。

だが、近距離戦闘は何かと危険が付きまとう。

この華焰の余裕。恐らく何かがあると踏んで間違いないだろう。

——前回俺は近距離で戦った。それに対して對抗策を用意してきたとなると……

「『瞬動』」

戦闘開始と同時に、それまで足に溜めていた「力」を解放する。「力」の解放と同時に「魔力」が満ちる。

瞬。

「贗殿遮那」を構えた華焰の姿が遠くなる。

十数回「瞬動」を繰り返して、後方に500メートルほど離れた。

その様子を見て、華焰は何かを確信したような強者の笑みを浮か

べる。

——真意が分からない。いっそのこと「いどの絵につき」でも使ってみるか？　だが、それが狙いだったら面倒だし……。

ウヘニアント・スピリトゥスアエリ　アールス・
「来たれ、雷精、風の精！」

直線的に放出される、雷と風の融合呪文を詠唱する。

「レベル」の差がかけ離れているのは先の戦いで確認済み。

なら、有無を言わせぬ力技で押し切ってしまえばいい。

クム・フルゲラティオレット・
「雷を纏いて吹きすさべ、南洋の嵐！」
テンベスターヌウストリーナヨウイス

華焔は動く気配はない。

唯じつと、こっちを見ているだけ。

呪文詠唱が終わったところで、華焔が炎の翼を作り出した。

——こちらの威力に気づいて回避にでたか。

「もう遅い！　『エウイステンベスタース・フルゲリエンス雷の暴風』（＊魔法先生ネギま！）……！」

強力な旋風を発生させ俺の周囲を覆う。竜巻の要領で中心の推進力を上げ、その中央を強力な雷が一気に駆け抜ける。一般的な決め技の雷と風バージョン。「雷の暴風」。

その力は直線的に放出されるが、初見の場合、最初に発生した旋

風のため、広域呪文と勘違いし、対処を誤ることとなる。

かくして華焰は。

予め決めていたように、直線状に放出された雷だけを華麗に避けてみせた。

華焰は雷の周囲を回るように避け、そのままこちらへと接近する。

「くっ……」

「雷の暴風」をものの綺麗に避けられたことに驚くが、「瞬動」で後方に移動しながら、次の詠唱へと即座に移る。

「光の精霊199柱、集い来たりて敵を射て」

華焰の目的は接敵。

なら、こちらの攻撃に対して耐えるのではなくかわしてくるはず。

「ものみな焼き尽くす浄化の炎」
オムネ・フランマンズ フランマ プルガートウス

華焰が残り100メートルにまで近づいた。

「『魔法の射手、光の199本』！」

199本の光の矢をあらゆる方向から華焰に発射する。

予想通り華麗に旋回する華焰。

見ると、「贅殿遮那」には何やら炎が取り巻いているが、防御に使う気配は一切ない。

ドミネー・エクステインク・主ドオシグヌ敗ダネラティオーニスイン・メヌヌー・エンヌミニー奴奴ット
「破壊の主にして再生の徴よ、わが手に宿りて敵を喰らえ！」

光の矢をかわして油断しているであろう華焰が十分近づいたところで、広域呪文である回避不能な爆炎を放つ。

フラグルルゼガアス
「『紅き焰』（＊魔法先生ネギま！）！」

少々詠唱が長いが、威力は申し分ない一撃。

案の定、華焰は回避を諦め、「贅殿遮那」で相殺した模様。

だが、ここで「レベル」の差が顕著に現れる。

おそらく華焰が溜めていた一撃は彼女の中でも大きいやつだったのだろう。だがそれは俺の中程程度の一撃と同等の威力。疲労度も違う。そして何より、消費した「力」の、個人の総合絶対量に対する割合が違う。

「『解禁』、『アデアット』、『ヒ首・十六串呂』！」

16首全部使って華焰を16方向から襲わせる。

「くっ……」

華焰は守りの要であると思われる炎の翼を広げるだろう。

そうすることで翼の局部の錬度が落ちる。

「『解禁』、『虎砲』（＊魔法先生ネギま！）」

「虎砲」と叫ぶ声と共に、口から高密度エネルギーを放出する。本来はエネルギー波であるそれを、口の形を調整することで、一転集中型へと変更させた一撃。

詠唱不要の不意打ち砲。

密度の落ちた華焰の守りを突き破る一撃。

のはずだったが。

「どうやらこの勝負、私の勝ちだな」

「虎砲」を旋回して避けた華焰が告げた。

「ん な っ ……」

華焰の体にはいくつもの傷がある。

おそらく「ヒ首・十六串呂」の攻撃を防ぎもせず、避けもしずに突っ込んできたのだろう。

だがそれは、こちらがその後放つ一撃を予想していないと出来ない芸当。

なぜなら、あの段階で高「レベル」である俺が「ヒ首・十六串呂」つまり武器を使うということは、技による攻撃が不可能だと証明することになるからだ。武器は技とは違い、「レベル」によって威力

を変化させない。だから、俺の「ヒ首・十六串呂」は逃げの手でと捉えられるはずなのだ。

——それとも、それすら見越していたというのか？

「つち、『風……」

そこは闇。

永き時により静止した世界。

唯あるのは。

光のない紅蓮の炎。

「もらった！」

「贄殿遮那」の一撃をもろに貰う。

「つつぐ……」

常時展開しているはずの障壁も、さっき展開しようとした障壁も、俺の全ての「力」が静止した。

だが、そんなことより何より。

頭が痛い。

先の一太刀のせいではない。

その前に頭に流れ込んできたイメージ。

あの、静かな紅蓮の炎。

意識を戦闘に戻そうとするが、あの炎のイメージがこびり付いて離れない。

落下していく中で、華焰の声が聞こえる。

「確かに憎編、貴様の『力』は純粹に強い。それは認める。だが、『有力者』としてはあまりにも稚拙過ぎるな」

地面に落ちる寸前、試合終了のブザーがなり、俺の「逝かしません君」が発動した。

八章 後半戦 / 四話 一回戦 「魔法先生ネギま！」VS「灼眼のシャナ」

今回は戦いの途中で次話に持ち越し、などという野暮な真似は回避しました。

本当は何故山下が敗れたのか、華焰から説明してもらったつもりだったのですが、そんなことする間もなく、華焰が山下を倒してしまいました。

よっぽど恨んでたんですね？（笑）

八章 後半戦 / 五話 二回戦 「黒神」VS「喰霊」(前書き)

なぜなに？

Q 前話での勝敗の要因がよく分からないのですが。

A 今話で分かります。

ゝもしかしたら、御津見の力も分かるかも？

八章 後半戦 / 五話 二回戦 「黒神」VS「喰霊」

【午後3時45分・第3塔屋上競技場・寒視線^{かんざきせん}】

第二試合、私の相手は神崎拳君^{かんざきけん}。

正直、私は彼の「世界観」を見たことがない。

彼が訓練で使うのは、主に「方陣障壁」という盾と、「超新星儀^{ノヴァスフィア}」（*黒神）という指輪型の射撃武器だけだ。構えから近接戦闘でも齧^かっているようだが、実際に使用したところを見たことがない。

「方陣障壁」で攻撃に耐え、「超新星儀」で遠距離から攻撃する。接近してきた敵は「方陣障壁」でバリアを複数発生させて、敵を四方向から挟み込んで肉迫。その間に距離をとり、再び「超新星儀」による遠距離攻撃。これが彼の攻撃パターン。

もしかしたら「有力者」じゃないのかもと思ったが、「世界観」の干渉の際を見る限り、彼にも彼自身の「世界観」が構築されていることは分かっている。

そのとき視えたのは。

自分と同じ顔を持つ同一の存在。

おそらく、それが彼の「世界観」の根源。

それが何を意味するのは分からないが……。

試合開始のブザーが鳴った。

彼が指に「超新星儀」を填めた右手の人差し指を私に向けるのを確認しながら、私は自分の「世界観」を描いた。

その力は己を喰らい。

その身は慟哭を纏い。

愛する者に手を下す。

「『喰霊解放』（*喰霊）」

印を組み、霊獣「白叡」（*喰霊）を呼び出す。

「ぐぐがうぐぐがうがうが……」

白い毛並みで狗の頭に龍のような長い首を持ち、私をはるかに凌駕する大きさを持つ霊獣「白叡」。その身体の至る所が鎖で巻かれ、その鎖は全て私の下へと繋がっている。

「はあああああ！」

十分な距離を得るために後退しながら、神崎君が「超新星儀」で無数のエネルギー弾を放出し始めた。

「『白叡』！」

鎖を引き、「白叡」を従わせる。

「ぐがうつぐらつぶがうつが……」

「白叡」はその巨体を神崎に向けた。

「白叡」は確かに大きいが、一体だけでは無数に飛来するエネルギー弾を防ぐことはできない。

だから。

「突っ込みなさい、『白叡』！」

「ぐぐぐあうつがうつぐあがうつが！」

接近させて、神崎君のエネルギー弾の攻撃範囲を狭める。

漏れたエネルギー弾は、余裕のある鎖を使って弾いた。

神崎君との距離はすぐに縮まり、「白叡」はその巨体で突撃する。

「『方陣障壁』！」

神崎君が四枚の「方陣障壁」を重ねて、「白叡」の前に展開した。

「ぐがうつぐがうつがうつ……」

「白叡」の動きが止まる。

だが、それも一瞬のこと。

「学園」内有数の強度を誇る神崎君の「方陣障壁」を突き破り、
「白叡」は神崎君に突撃した。

「ぐふっ……」

肺の中の空気を吐いて、吹き飛ぶ神崎君。

「白叡」が神崎君に襲い掛かる前に、「逝かせません君」が発動
して神崎は戦闘を脱出した。

「——ふう……」

呆気ない決着。

だが、それも仕方がないこと。

私の「レベル」自体はそこまで高くない。

だが、私が「力」を持って呼び出す「白叡」は別格だった。

「有力者」が「力」を用いて呼び出す武器、生物等の力は、「レベル」に左右されることなく一定である。故に、私の「白叡」は私の「レベル」を遥かに超えた力を有しているのだ。

もちろん、低「レベル」の私には「白叡」を制御下に置くことができるではない（）。だが、それであっても十分戦力となるのだ。

そして、私達「有力者」は戦う際にそれぞれ独自の「世界観」を構築する。

独自の解釈を持って構築した「世界観」を展開することによって、「有力者」は「力」を行使することができるのだ。

故に、異なる複数の「世界観」が同時に展開された場合、干渉が起こる。

相手の「世界観」の「解釈」が自分のものと相容れない場合、より「解釈」の強い方が相手の「世界観」を飲み込むこととなる。逆に互いに許容できるもの同士なら「力」の錬度は相乗効果で跳ね上がる。

つまり何を言いたいのかというと、何故だか知らないけれど「世界観」を展開できない（しない？）神崎君には、私の「白薔」を止める術はないということ。

ふと、香奈^{かな}が言っていたことを思い出した。

『あの憎編、いや、編入生はおそらく『世界観』の『干渉』に関して素人だと思う。だから、『力』の使用技術で負けることはない』

——確かに、一回戦は香奈の圧勝だったわね。

——ん？ だとしたら近藤^{こんどう}さんは大丈夫かしら？

八章 後半戦 / 五話 二回戦 「黒神」VS「喰霊」(後書き)

「世界観」の設定が少し顔を出しました。

「世界観」の設定は最終的に物語の中心になってきます。

《なぜなぜに?》

Q 「世界観」を構築して初めて「力」を使うのなら、山下達は何故「力」を使えたのですか? 又、「有力者」は「世界観」を構築していない間は普通の人と同じなのですか?

A 「世界観」の構築は、常に無意識で行っています。但し、意図的にそれを行うことで、より「力」を純粋なものにすることで強力にし、相手の「世界観」への影響力を増すことができます。山下が今まで「世界観」の構築による干渉で「力」を使えなくなったことがなかったのは、相手に「世界観」を構築する時間的余裕がなかったからです。又、「有力者」は通常時でも「有力者」で、その場合は「補正効果」を受けています。

↳ 「補正効果」については「世界観一覧」を見てね。

八章 後半戦 / 五話 三回戦 「ゼロの使い魔」VS「シーキューブ」

【午後4時00分・第3塔屋上競技場・齊藤視線】

ここで僕が負ければ、僕達は負けが決定する。

それだけはなんとしてもさけないといけない。

そして、最後の砦である郷馬君に引き継ぐために、次の清毘君にも勝ってもら……

——うん、無理だね。

清毘君には悪いけど、彼が他の「有力者」に勝てることはないと思う。

となると、ここでいくら自分が奮闘したところで無意味な気もするけど、だからといって仕掛けた側が最後まで全力で戦わないなんていうのは、僕の意味に反する。

だから。

「『八番機構・碎式円環態』《フランク王国の車輪刑》」！」

手に持つルービックキューブを巨大な車輪に変形させてこちらに向かってくる近藤さんには申し訳ないけど。

「っと」

本来掴める筈のない巨大車輪を器用に掴み、車輪の後から現れた近藤さんが振り下ろした剣を人差し指と中指で止める。

「えっ……」

近藤さんは驚くも、すぐにその剣から手を離し、離れたその手から闇を噴出してきた。

だけど、それすらも僕にとっては驚きではなく、使い慣れた武器のように難なく闇の支配権を奪う。

そして、あくまで常人のその速さで近藤さんの背後に回り、両手を拘束する。

「っな……」

掴まれた瞬間、驚きを浮かべる近藤さん。

その瞬間から、彼女の攻撃は一切止み、大車輪も元のルービックキューブに戻る。

「僕の勝ちでいいよね？」

戸惑う近藤さんに僕はそう問うた。

近藤さんはまだ手を多く残しているはずなのに、反撃をしない。

否。

反撃ができない。

どれほど「力」を使おうとも。

その「力」が「世界観」を通して構築される瞬間から、その支配権は現在僕のものとなっていく。

別におかしなことではない。

勝負は、始まる前から決っていたのだから。

「世界観」そのものが道具に依存し、攻撃手段が常に似武器の延長と思われる彼女と。

「神の左手・ガンダールヴ」（*ゼロの使い魔）の証のルーンが刻まれた左手を持ち、あらゆる武器や兵器を自在に操る能力を持つ僕。

レベルを無視した、圧倒的な相性。

それが彼女が負けた原因。

そして、僕は予め彼女についての情報を持っていたこと。

それが僕が勝った原因。

試合終了のブザーが鳴るのを聞きながら、僕は近藤さんの腕を放した。

その途端、僕の右足の親指にありえないほどの重みが掛かったのは何故だろうか。

近藤さんはこちらに顔を向けずに去って行った。

八章 後半戦 / 五話 三回戦 「ゼロの使い魔」VS「シーキューブ」(後

短いです。はい。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかくし」VS「神様ドルズ」

《なぜなぜに?》

Q 「ゼロの使い魔」の力を持つ斉藤^{さいとう}は魔法は使えないのですか？

A 基本は「伝説の使い魔」の力です。

「もちろん強くなれば使えるよ。」「虚無」とかの方が割と早いよ。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかくし」VS「神様ドルズ」

【午後4時15分・第3塔屋上競技場・清きよ民視線】

はつきり言おう。

僕が勝てるはずがない。

だけど、僕が負ければその時点で男子の負けが決定する。

だから戦うのだけど。

「『玖吼理くくり』（*神様ドルズ）！」

試合開始と同時に、静香しずかさんが相棒の名を呼ぶ。

「玖吼理」。

それはでっかいコケシのような巨大人形で、静香さんの、たぶん唯一無二の武器。他にもいるのか知らないけど。

頭部からツインテールのように腕が生えていて、右腕のナイフで攻撃してくる。ぶっちゃけ、本体で突進してくる。

だから、僕にできるのは、その突進を避けて自滅してもらうことだけ。

僕の唯一の武器である「モンスターボール」を複数取り出し、向かってくる「玖吼理」に向かって投げつけた。

「それっ」

刺激臭を含む煙幕が周囲を覆い、僕の姿を隠す。

その間に、僕は一応、走って自分の位置を変える。

だけど。

煙が晴れて正面に現れるのは、何故か僕の位置を把握している「玖吼理」で、もちろんそのまま吹き飛ばされるのは僕。

そして気まずそう顔をしている静香さん。

どうして僕の位置がバレたのか？

そして、どうして静香さんが気まずそうなのか？

分かりきってはいるが、それでも自分の不運に飽き飽きする。

他の「有力者」曰く、僕がどこに隠れようが、逃げようが、なんとなく分かるらしい。

——なんだよ、なんとなくって。

これが熟練の「有力者」ならまだしも、今までまともに「力」を使ったことのない幼稚園児の「有力者」ですらそう答えるのだ。

——まあ、それでも僕は「有力者」だから。

突っ込んでくる「玖吼理」の突進を横に転がって回避。これは僕の位置がどうせばれるだろうと踏んでいたが故に成功したわけだが。勢い余って行き過ぎた「玖吼理」が僕の方へ戻ってくる前に。

この世界に不思議などなく。

この世界に神秘などなく。

この世界に動く巨大コケシなどいない。

「つく……」

静香さんの「世界観」を否定するように「世界観」を「力」で描く。

僕の「世界観」を引き出すのではなく、あくまで、静香さんの「世界観」が相容れないものだということを強調して。

途端に静香さんが頭を抑え、自身の「世界観」の安定のために「力」を使い始める。

だが、その間彼女の注意は薄れる。

僕も「世界観」を展開してはいるが、彼女と違い僕は「世界観」を用いて攻撃するわけではないから、綿密な「世界観」を描く必要

はない。あくまで、静香さんと合い異なるということだけを意識すればいいのだ。

だからその間に彼女のと距離を詰め、肉弾戦で決着を。

着けるはずもなく。

多少制御を失いながらもこちらに向かって来た「玖吼理」が僕の周りで無茶苦茶に飛び回り、それが当たって吹き飛ばされた。

八章 後半戦 / 六話 四回戦 「おおかみかくし」VS「神様ドルズ」

次でやっとこの戦いを終われるかも。

もう決着は付いてますが……。

《なぜなぜに?》

Q 清貴は何故「おおかみかくし」の「力」が使えないのですか？
少なくとも、狼の力ぐらいいは使えそうだと思うのですが？

A 「レベル」が低いのもその理由の一つですが、一番の理由は、「おおかみかくし」の主人公だった一般人君の「力」が主な「力」だからです。

↳「蜜」だけは常に発動しているみたいだね。詳しくは「世界観一覽」か、「技一覽」へGO！

【午後4時30分・第3塔屋上競技場・寿視線^{しゅいせん}】

すでにこの茶番は終了している。

結局、これだけの騒ぎを起こしておいて、本命の方はあの憎き大
学部生徒会長によって防がれてしまった。

——やっぱり、もっと大きな騒ぎを起こすべきだったか？ いや、
そうしたら危険視されて消される可能性も……

とにかく、一度作戦を考え直す必要があることは確かであるので、
私は郷馬^{ごうば}にそのことを伝えなくてはならない。

接近してきた郷馬の額に手当てて、電気情報に変換したメッセー
ジを郷馬の脳内に直接送り込む。

テレパシーとかでもいいのだが、途中で傍受されるのを防ぐため
にこの方法を採用のだ。

瞬時に状況を把握した郷馬は、私から離れて構える。

それを見た私も構えた。

そもそもこの乱騒ぎは、私達が業と起こしたものだっただ。

騒ぎに乗じて、「学園結界」を無効化し、その隙に草子^{そうし}の「力」
で「学園」のサーバーに侵入するつもりだったのだ。そのための香^か
な

奈の「封絶」、目的カモフラージュのための「カーテナ」セカンド」。

他にもいろいろ計画はあったが、全ておじゃんになってしまった。

あの大学部生徒会長は、私達のことを上には伝えていないらしいが、だからといって下手な真似はできない。暫らくは静かにしていなくてはならない。

——あの二人のことも気になるけど……

編入してきた「有力者」二人の方に暫らくは関わろうと思う。

高位の「有力者」でありながら、「力」の制御がまったくできていなかった辺り、興味深い。

なんにせよ、現在私にできることはこの騒ぎをさっさと終わらせてしまうことだけ。

もうこれ以上続ける必要はないから（事実、決着もついている）。

電流を迸らせながら、私は郷馬に電撃を放った。

【午後4時44分・「生活区」・噂の吸血鬼視線】

「くっ……」

右腕を押さえながら、走る。

確かに私を捕らえるための動きがあるということは聞いていた。

それもそうだ。

度重なる吸血行為。目もつけられない方がおかしい。

だけど。

「いくらなんでも早すぎる……」

こちらもプロ。

痕跡を残すような真似はしていない。

つまりは。

「これが、『学園』の力……」

いや、「トーキュー特区」の力とでも言うべきか。

数多くの「有力者」を抱え込む「ジャポナカデミー」のもう一つの顔。

「復古の乱」以降、表向きは「有力者」の安全と「力」の制御向上のため、裏は「有力者」の独占と脅威の排除のため、「有力者」を世界各地から集めてきた組織。

一種の独立国家と見られているが、上層部は「ジャポン」との繋がりが深く、実質「ジャポン」である。

「君は知らないようだから教えてあげると、君の存在は侵入したときから分かってたんだ」

私を捕らえるための刺客が、声を掛ける。

だが、そんなものに構っている暇はない。

私の命はもう無理だが、先ほど世話になった少年にまで被害が及ぶことがないように、少年のいた場所とは正反対の方向へ少しでも移動する。

「泳がしてれば仲間が出てくるかな、と思ってたけど、少々おいたが過ぎたね。まあ、実質君自身も純粋な『有力者』じゃないみたいだし、完全に捨て駒だったようだけど。うん、まあ、あれだ」

刺客が「力」を纏う。

「その幻想を抱いて死ぬんだね」

かつて私吸血鬼へと変えられたときの傷跡、吸血の後に触れられ、「力」が抜ける。

元の肉体へと戻った私は、夢が覚めて現実へと堕とされる。

私が唯一持った感情を奪われ、虚となった私にはもうどうでもいいことだが。

「——なんて、甘い死に方させないよ。所詮君は作り物なんだから、感情なんていらないでしょ。検体番号199324号」

八章 後半戦 / 七話 五回戦 「X・MEN」VS「とある科学の超電磁砲」

検体番号の桁数がおかしいって？

これでいいんです。

なぜなぜに？

Q 郷馬と寿が裏で繋がっていたということは、寿、ひいては生徒会は「バッファローズ」の一員なのですか？

A 違います。「バッファローズ」の一員であるのは郷馬だけです。
「郷馬が生徒会を辞めた理由と関係していたり、してなかったり。」

【午後4時48分・「生活区」・^{ふき}落視線】

目の前の倒れた少女の体を担ぎ上げ、「学園」に戻る準備をする。

——それにしても、検体番号が20万近いということは、少なくとも50万くらいは覚悟した方がいいのかもしれないね。

「^{レディオノイズ}欠陥電気」（*とある科学の超電磁砲）。

^{ことぶきまり}寿緋麻里がまだ「トーキュー」に来る以前、何者かに採取されたDNAマップから創られたクローン達の総称である。

「高位の『有力者』は量産可能か？」という命題に基づき始まった、かつて「トーキュー」が行っていた「量産型有力者計画」を元に外部組織が始めた「有力者」のクローン製作の成果が、「欠陥電気」である。

すでに「トーキュー」ではクローンでは「有力者」を作ることとは不可能と判明し、計画は永久凍結となっている。

そもそも計画は当初から失敗を予想されていた。「有力者」の「力」とは想像力が源であり、クローンがオリジナルと同じ想像力を持つことはありえないからだ。

そのため事が大きくなる前に計画は凍結し、その存在は闇に葬り去られたはずだったのだが。

「復古の乱」の騒ぎの中で情報が漏れ、それを手にしたある組織が寿緋麻里のDNAマップを入手、計画に着手したと思われる。

そして彼らは、どうやったかは謎だが、「有力者」のクローン生成に成功した。

しかし、オリジナル程の「力」を得ることはできなかったようである。レベルは10にも満たないと分かっている。

「zzzz……」

肩の上で、「欠陥電気」の少女が寝息を立てている。

これから彼女は「インフレックス」の研究所に運ばれ、体の隅から隅まで弄くられることになるだろう。

——でも、もう「力」は使えないみたいだし、それも無意味に終わるかな。

「欠陥電気」の少女に与えられていた、吸血鬼としての「力」を「幻想殺し」で破壊してからは、彼女から「力」を感じなくなった。

これまでに捕らえた「欠陥電気」の少女達も、同様に吸血鬼としての「力」を保持していたようだが、捕らえると同時にその「力」を失っていた。

そして結局、あの少年達については何も分からなかった。

つい最近、「学園」に編入してきた二人の「有力者」。

「学園」侵入時に裏で糸を引いている者がいることは分かっているのだが、どうも精神系の「力」を使ったらしく、候補が有り過ぎているのが現状だ。

——「バッファローズ」の手の者と考えられるけど、証拠は少ないし。

「欠陥電気」の少女の頭を覗いてみても、分かったのは彼女の検体番号が199324だということだけ。どうやら完全に頭の中を弄くつてあるらしく、それ以外は何も読めない。

——下手に事を大きくしても、寿に感ずかれるのは面倒だし……。

寿は自身のクローンの事は知らない。

知っていたら今のような方法ではなく、もっと積極的に「学園」を探ろうとしているだろう。

——さっきは何でも分かっているみたく言っただけど、実際のところほとんど嘘だし……。

「欠陥電気」の少女を見つけたのは偶々だ。

まあ確かに、上は最初から知っていたと思われるので、強ち嘘というわけでもないんだが。

「やっぱ様子見かな？」

僕は思考の海に浸かりながら呟いた。

八章 後半戦 / 八話 エキシビジョンマッチ 「とある魔術の禁書目録」Ⅴ

「とある魔術の禁書目録」の「量産型能力者計画」が登場です。

こついう関連で「世界観」の事件？が出てくることがあります。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

なぜなげに？

Q 「欠陥電気」の「世界観」は「とある科学の超電磁砲」のことですが、「[、]」ということは「とある科学の超電磁砲」とは違う部分があるということですか？

A その通りです。

くその最たる例として、「解禁」が使えないってのがあるね。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

一回戦 山下VS華焰

山下 やました
宏治 こうじ

レベル 44

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃

「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御

「瞬動術」による移動

華焰 かえん
香奈 かな

レベル 22

世界観 「灼眼のシャナ」

得意技 「贄殿遮那」による一斬

二回戦 神埼VS寒

神埼 拳かんざき けん

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「方陣障壁」ヘキサ・ウォールによる防御

寒 藤子かん とっこ

レベル 13

世界観 「喰霊」

得意技 「白叢」の使役による攻撃

三回戦 斉藤VS近藤

斉藤一樹さいとう かずき

レベル 28

世界観 「ゼロの使い魔」

得意技 「神の左手・ガンダールヴ」による武器の精密操作による戦略的攻撃

近藤 美紀
こんどう みき

レベル 42

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

四回戦 清冴VS静香

清冴 聖也
きよわな せいや

レベル 20

世界観 「おおかみかくし」

得意技 「モンスターボール」の投擲による間合いの調整

静香 しずか 静江 しずえ

レベル 29

世界観 「神様ドルズ」

得意技 「玖吼理」の使役による攻撃

五回戦 郷馬VS寿

郷馬 こうま 健 たけし

レベル 不明

世界観 「X-MEN」

得意技 手の甲から生み出すブレードによる攻撃
驚異的な回復力

寿 ことぶき 緋麻里 ひまり

レベル 不明

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 「超電磁砲」レールガンによる攻撃

エキシビジョンマッチ 落VS検体番号199324号

落^{ふき}当^て麻^ま

レベル 不明

世界観 「とある魔術の禁書目録」

得意技 不明

検体番号199324号

レベル 5

世界観 「とある科学の超電磁砲」

得意技 不明

次章予告

日常があるから、その逸脱の形として非日常があり。

非日常があるから、その基盤としての日常を認識する。

故に、日常のない非日常は存在し得ない。

次章、「山下な日々」

日常が日常とは限らない。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

これで、ようやく「編入編」（上から読んでも下から読んでも、漢字で書けば編入編……なんちゃって）が終了です。

長かった。

本当に長かった。

まさかこれだけに一年かかるとは思っていませんでした。

おまりにも更新速度と進行速度が遅く、その上で話の内容も薄いというのに、諦めずにここまで読んで下さって、ありがとうございます。

ということ。

これからもゆつくりまったり続けていくので（別にほのぼのライフを描くわけではありませんよ）、今後とも、なにとぞ、よろしくお願いします。

九章 山下な日々 / 一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました（前書き）

なぜなに？

Q 「現地点での各キャラの状態」に「欠陥電気」の検体番号19324号がいましたが、今後出てくるのでしょうか？

A 分かりません。

「インフレックス」が彼女をどう扱うかによります。
意見があれば再登場するかも？

九章 山下な日々 / 一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました

「パーソナル・リアリティ」における一般的なレベルは、最大レベル100に対して、20代とされている。

そのため、高レベルとは通常、レベル40以上を指す。

そして、高レベル保持者の証として、レベル40になった段階でプレイヤーは「解禁」を与えられる。

つまり、何が言いたいのかというと。

44というレベルは伊達や酔狂で取れるものではないのだ。

そのことが俺にとっての支えだったし、何より、そのために費やした時間は他ならぬ自分が知っている。

このレベルこそが、今の俺を外界と繋ぐツール。

このレベルこそが、あの事に唯一意味を持たせることのできる結果。

だというのに。

負けた。

たかだか20代のそこらへんの女子に負けた。

確かに、ここは「パーソナル・リアリティ」の世界で、俺のやつ

ていた「パーソナル・リアリティ」とは違う。

「力」とか「世界観」とか知らない設定があるようだし、ゲームと生身では違うというのは世の常識。

それでも。

高レベルというのは、それすらも覆す絶対的な力の象徴だったのだ。

それが俺の存在する証拠であり、俺という存在の許容の形だったというのに。

こんな風に負けるなんて。

それならまるで。

あれは。

あいつは。

俺は。

■■■■■■■■■■……。

「なんて、鬱モード終了」

布団から起き上がって、うんつと伸びをする。

「でもまずいかもな。こつ何度も何度もなっていると、そのうち戻れ

なくなるかも」

——幸い、薬はまだ効いているはずだから、大事には至らないと思うが……

思考を放棄する。

「まあ、大丈夫だろ。もうガキじゃないんだ——ぐうえ……」

腰掛けていた扉が内側に強引に開かれ、吹き飛ばされた。

「——あら。目を覚ましたの？ あのまま意識がない方が私も楽だったのに」

目の前には冷えた目で俺を見下ろす監視役が一人。

「まあ、いいわ。とりあえず、服を着ることね」

そう言って、彼女、御津^{みつみ}見みつつは自分の部屋に戻った。

下着姿で布団の上に倒れている俺を残して。

女子寮攻略戦争（戦争なのか？）から数日が経ち、俺はようやく「学園」での生活を送り始めていた。

よく考えれば、「パーソナル・リアリティ」の中に着てからまと

もな日常を送っていなかったし、それは「学園」に着てからもそうだった。

やっぱり日常は大切だ。

異世界トリップといえばやはり、非日常な日常。

それこそが異世界トリップの魅力だと俺は思っている。

ので。

今日は俺の一日を紹介しようと思う。

九章 山下な日々 / 一話 やつと女子寮攻略戦争が終わりました（後書き）

ということ、今章は我らが主人公、山下宏治君の一日にカメラを当ててみました。

九章 山下な日々 / 二話 起床から朝食まで（前書き）

なぜなぜに？

Q 、異世界トリップ、と言っていました、違いますよね？

A はい、違います。山下が勝手にそう思っているだけです。
　　これからどんどんそう思い込むよ。

九章 山下な日々 / 二話 起床から朝食まで

俺こと、やました こうじ山下宏治の朝は別に早くない。

起床時間は午前6時。

本当ならもつと寝ていられるのだが、隣の監視役が俺の部屋に来るので、それまでに片付けておかなければならないからこの時間である。

監視役こと御津見みつみみつつが俺の部屋に顔を出すのは、6時30分ごろ。

それまでに、布団を片付けて（汗臭いと言われた）、着替えて（女の御津見が着替えてきているのに、男の俺が着替えていないのはどうかと思った）、歯を磨き（寝ている間に菌が増殖し、臭いが酷くなるらしい）、寝癖を直し（エチケツトだと思う）、女に見せるわけにはいかない男の秘蔵を隠し（今は持っていないが、そのうちそうなると予測）、埃等のゴミの掃除を済ませる（事前に注文された）。

起床から30分後、俺と御津見の部屋を繋ぐ緊急避難口を開けて、御津見が現れる。

「——今日も生きてるようね。ついでに、おはよう」

先日の女子寮攻略戦争の後半戦の一騎打ちでの敗北後の鬱状態後、御津見は毎朝これを口癖としている。その度に心の傷が疼く。

——でも、挨拶は絶対してくれるんだよな。

いつものように俺の部屋を見渡して、生活チェック（？）をする御津見。

それが終わったのか、御津見は俺の方を向いて口を開いた。

「今日はサンドイッチをお願い。具は任せるわ。但し、気に入らなければ作り直させるから」

女子寮攻略戦争において決められていた勝利者への景品。

男子は女子との寮施設交換、女子は各部屋にメイドor執事（希望の方）配属。

で、先の戦いは女子が勝ったため、高等部二年生の女子は全員メイドor執事を手に入れる権利を得た。

だが、突如何百人も人を雇うわけにはいかない。

そこで学園長は（おそらく最初からそのつもりだったのだろうが）先の戦いで敗北した高等部二年生の男子の中からメイドor執事を敗北のペナルティーとして選ばれることとなった。その際、相手を指名できるが、期限は一週間、という条件の下で。

もちろん、気に入る相手がない場合は、選ばなくていい。その

代わり、景品は何もないらしいが（女子はもともとこの戦い（？）にそこまで興味があつたわけではないらしく、これといった反発もなく受け入れられたらしい）。

そして、一部の男子が女子に指名されて（清麗きよわなとか結構人気がある）、現在執事の真似事をやらされている（実際は体のいいお手伝い、というか舎弟？）。

つまり、何が言いたいのかと言うと。

俺は御津見に指名されたのだ。

……。

いやいや、別に期待してるとかありませんよ。

フラグが建つた！とか喜んだりしてませんよ。

御津見は俺の監視役。俺が他の誰かに指名された場合、監視がし辛くなる。

かといって事情を話すわけにもいかない。俺の存在（こういうとちよつと大袈裟感が否めない）は秘密であるから。

そこまで気にして監視するなら、一緒に二人で暮らしたり、そんな夢（別に御津見と一緒にがいいという訳ではないが）のような生活があつてもいいんじゃないか、と思った時期が俺にもありました。

恐らく御津見は形だけの表の監視役で、実際には裏の監視として俺の見えない所に何人かいるんでしょう、はい。

だとしたら、もし何かしら動こうとしたときに面倒だなんて思ったりもしたけど、今はその件については保留。

何故なら、あの日以来、「力」が使えなくなってしまったからだ。

話を元に戻して、現在食堂。

「小型センター」第6塔は完全な寮施設となっており、中等部から高等部、大学部までの学生が全員住んでいる。

下の階から中等部、高等部、大学部となっており、それぞれの宿泊施設の一番下に位置する階には食堂が設けられている。

つまり俺は今、高等部の食堂に来ている。

食堂の食事は基本、バイキング形式。費用は学費に含まれているらしい。

ちなみに俺の学費については、一体全体どうなっているのか全く持って、不明である。

閑話休題。

食堂の料理は申告すればお持ち帰り用にしてくれる。故に、自分の部屋で食事を取る生徒も少なくはない。

——サンドイッチの具って、何がいいんだ？ トマトか？ チーズか？ それともあるもん全部入れとくか？

サンドイッチのコーナー（既にできているタイプと、自分で作るタイプに分かれている）で具を眺めていると、後から声が掛かった。

「あら、山下じゃない」

長い黒髪が特徴の、俺の仲間（？）、「シーキューブ」の「世界観」を持つ近藤^{こんどう}が、手にご飯と味噌汁の乗ったお盆を持ってそこにいた。

「おう。なんだかんだで久しぶりだな」

「学園」に侵入してから音沙汰なし、女子寮攻略戦争の後半戦の一騎打ちでも互いに相手の存在を確認しただけ。なので、近藤の道具がまだ俺の「天狗之隠蓑」の中に残っていたりする（下着とか……）。

「ねえ、今日の放課後暇？ 時間あつたら預けてる物とか返してもらいたいんだけど」

「ああ。いいぞ」

そうして、打ち合わせのあと、俺は作ったサンドイッチを持って御津見の部屋に向かった。

九章 山下な日々 / 二話 起床から朝食まで（後書き）

六章のような感じで分単位になりそうだったので、変更しました。

九章 山下な日々 / 三話 授業（前書き）

なぜなに？

Q 近藤にも監視役が付いているのですか？

A はい、います。

→ 出てくるかどうかはまだ未定。

九章 山下な日々 / 三話 授業

——目覚めると、そこは学び舎であつた。

聞けば、自分はそこの学徒だという。

聞けば、そこは不変の時が流れるという。

聞けば、死者の為の癒しの提供という。

いつまでも終わることのない学生生活。

何をしても終わることのない時間。

だが目的を忘れた者にとっては、永遠に終わることのない無限地獄でしかなかった——

——「新世界の御伽噺 改訂版 エンド

レススチューデント」より抜粋——

御津見^{みつみ}の部屋にサンドイッチを届け、その後自分の部屋に追い返された俺は、依然御津見に渡された童話集を読んでいた。

御津見曰く、この「新世界の御伽噺」は何故か世界各地に広まっております（誰がいつ書いたものなのか、分かっておらず、日夜研究されているらしい）、皆が知っている常識なのだそうだ。但し、この「新世界の御伽噺」、かなりの量があるらしく、全てを知っている人は少なく（少ないといっても知っている人は普通に知っている）、「学園」では道德の時間で使うため（教育制度の問題？）、必読となっているらしい。

暫らくして、朝食を終えた御津見の呼び出しに答え、食器を取りに彼女の部屋に入った。

食器を回収し、それを食堂に運ぶ。

その後、御津見は所謂外出の準備をするため、部屋に入ろうものなら護身用ナイフが飛んでくる（そもそも鍵が掛かっている入れないが）。

食堂から戻ってきた俺も自室に入り、今日一日の授業の準備を確認する。

「学園」の授業は70分×5で午前3コマ、午後2コマとなっている。授業終了時刻は午後4時ジャストだ。

ついでに今日の授業は、「物理」、「数学」、「国語」、「体育」、「開発」の5つ。

割と普通である。

当初は「異世界だし『魔法学』とか『神学』とかあるのかな？」

と思っていたりしていたが、考えれば当たり前のことである。

ここはあくまで学校。普通の勉強するのは当たり前。「開発」というおかしな授業が一つあるが。

朝食後、俺と御津見は別行動し、最終的に自分のクラスへ向かう。

監視役の御津見が俺に付いて来るのは外出したときだけ。「学園」内では朝と夜の点呼を取るしかしてこない。

まあ、クラスは同じだったが……

ついでに言うと、奔洞は隣のクラス。

同じ転生者の仲間が傍にいないのはちょっと心細かったりする。

これが原作介入できる世界とかだったら、別に仲間なんていなくてもよかったんだけど。

「さて、突然だが、編入生を紹介しよう」

うちのクラスの担任、せんごくかがりび泉獄篝火先生が、ホームルーム開始早々、そう言つて、男子を一人教室に入れた。

「みぎきょうすけ三木恭介です。これからよろしくお願いします」

——あ。忘れてた。

三木の傍に浮遊霊がいるのを見て、彼が「アスラクライン」の「力」を持つ、故郷を同じにする仲間だったということを、俺は久しぶりに思い出した（ちなみに名前言われても、顔見ても分からなかった）。

一限目、物理。

特筆することはない。

ただの物理の授業である。

三木を盗み見て、彼が当初の俺同様驚いているのを確認する。

——そうだろ、そうだろ。ここの授業は「普通」の授業だ。そして……

三木の手が止まる。

気のせいかな、冷や汗が出ているように見える。

案外、気のせいじゃないかもしれないが。

「ん？ どうした、三木？」

顔色の悪い三木を心配して物理教師が聞く。

「……いえ、なんでもありません」

三木の返答を聞いて、「そうか」とさして気にする様子もなく授業を再開する物理教師。

その後、三木の手はなかなか動かない。

なぜならここ、「学園」の授業では、特に理数系において、見たことも聞いたこともない公式が溢れかえっているからだ。

もちろん俺も授業が分からない。

九章 山下な日々 / 三話 授業（後書き）

「開発」はパクリです。

九章 山下な日々 / 四話 授業、続（前書き）

なぜなに？

Q 三木にも監視はついているのですか？

A 少しだけついています。

↳ 「有力者」には基本全員監視がついているよ。

九章 山下な日々 / 四話 授業、続

—— 死神を視た。

現世に残った僅かな想いまでも刈り取り、輪廻転生の輪へと
連行する執行者。

それが死神。

より抜粋——

——「新世界の御伽噺 改訂版 死神」

「学園」の授業が難しいのは、考えれば分かることだ。

「世界観」で起こす現象はある程度解析できているような世界だ。
おまけにワイプ装置なんかも付いている。元居た世界の科学力を遙
かに凌駕しているのは当然と言えるだろう。

だから、授業が意味不明でも俺は悪くない。悪くないはず。

まあ、実際のところは、基礎は同じなので知らない公式や原理を
覚えるだけで何とかなるとは思っている。ただ、ちよつとその数が
多いだけ。

それに、国語の授業なんかは問題ない。

なら、文系科目はなんとかなるかもしれない。

歴史と地理は意味不だけど……。

授業が終わり、10分休みに入る。

編入生の三木^{みき}は例のごとくクラスメイトの質問攻めにあっていた。

そんな中、ふと御津見^{みつみ}に目を向けてみる。

彼女は三木の所には行かず、一人淡々と次の授業の準備をしている。

この「学園」に編入してから一週間近く経つが、御津見が誰かと一緒に話している所はほとんど見たことがない。

いや、「有力者」の女子とは話しているのを見たことはあったが。

午前の授業が終了し、昼休みに入った。

昼食は朝食同様食堂で食べる。そのため、第4塔に戻らないといけない。

といっても、すぐ隣の塔なので、近いと言えば近いが。

「今日は人が多いね」

きよわな
清畚が食堂の中を覗いて言った。

余談だが、昼食は事前に頼めば弁当という形で朝に支給してもらうこともできる。

話を元に戻す。

あの女子寮攻略戦争以来、男子の「有力者」との関わりが出来た俺は、いつの間にか清畚と神埼かんさきの三人で行動するようになっていた。

「なあ、神埼」

昼食をとりながら俺は聞いた。

「御津見って、いつも一人なのか？」

「ん？ 御津見？ ああ、あれね。」

御津見は『対世界観力』が強すぎるんだよ。

だから、『力』の覚醒の邪魔にならないように、過度な接触を禁じられているんだ」

「『対世界観力』？」

「『世界観』を否定する『力』のことだよ」

俺の疑問に清毘が答える。

「ふーん」

思い出すのは、三木と戦った「生活区」での事。

あの時、御津見は三木の「？鐵」を無理やり送り返していた。

あれは、三木の「アスラクライン」の「世界観」を否定したということなのだろう。

5 限目は「開発」だった。

「開発」は、「有力者」として覚醒させるための授業だ。

「有力者」には二種類いるらしい。

生まれつき「世界観」を持つ者と、後天的に「世界観」を生み出す者。

「学園」では後天的に「有力者」を生み出す研究が行われている。

といつても、実際に「有力者」になれるのは雀の涙ほどの人数らしいが。

ただ、「対世界観力」だけは鍛えることができるらしく、「開発」の主な内容は「対世界観力」の訓練になっていたりする。

「対世界観力」を得ることは、己の「世界観」を得る為の道になるらしいが、詳しい理由はよく知らない。

「開発」は全クラス同時に行われる。

「対世界観力」を得るには、「世界観」を展開できる「有力者」との訓練が必要不可欠らしく、授業中、「有力者」達は「世界観」を展開しなくてはならない。そしてこれは、「有力者」自身の訓練にもなる、らしい。

「世界観」の展開など、意味不明だが。

九章 山下な日々 / 四話 授業、続（後書き）

一気に放課後まで飛びます。

九章 山下な日々 / 五話 一日終了（前書き）

なぜなぜに？

Q 「対世界観力」は所謂無効化能力と考えていいのですか？

A 概ね間違いありません。

「相手の「世界観」そのものを否定するんだよ。

九章 山下な日々 / 五話 一日終了

——今の為に未来を捨てるか。

未来の為に今を捨てるか。

今があるから未来があるのか。

未来があるから今があるのか。

選択は二つに一つに。

——「新世界の御伽噺 改訂版 未来の

価値」より抜粋——

放課後は近藤^{こんどう}と約束があつたので、清冴^{きよわな}達と別れて先に自室へ戻つた。

「天狗之隠蓑」を取り出し、待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせをしたのは、図書館。図書室ではなく図書館なのは、規模が半端じゃないから。

待っていた近藤に会い、「天狗之隠蓑」を渡す。

一体どこに何を直したのかを知っているのは近藤だけなので、彼女に任せるしかないのだ。

「天狗之隠蓑」を受け取った近藤は、ふと俺に聞いてきた。

「ねえ、あんた、今『力』使える？」

「ん？ 『力』か？ いや、何でか使えない」

「そう、やっぱりあんたも……」

「これはやっぱり……」と一人で納得したように考え始める近藤。

「つて、おい。一人で納得してないで、どういふことなのか教えてくれ。」

どう考えても今の状況って、やばいだろ。

『有力者』じゃなくなったらどうやってこの世界で生きてくんだけ？」

「この世界って……まあいいわ」

そう言っただけ俺の方を向き直る近藤。

改めて見ると整ったその顔に見つめられて、気恥ずかしくなる。
が、それを知られるわけにはいかない。何となく、負けた気がする
から。

「私達は『パーソナル・リアリティ／自分だけの現実』で、『世界
観』の技を使うとき、本当にその技を使っていたわけじゃない。

あくまでコマンドを入力して、予め決められた通りに体が動いて
いただけ。

確かに、その行動プログラムを少し変更したりはできたけど、基
本はプログラム任せ」

「——つまり？」

「つまり、今ここでは、そのプログラムが使えないってこと。

コマンド入力は出来ない。

『世界観』の技は、自分で全てやるしかないのよ」

「——言ってることは分かったけど、どうやんの？」

俺の力、魔法とかだけど、精霊の感じ方とか分からねえぞ」

「まあ、何とかなるんじゃない？」

それだったら、私達以外のここに送り込まれた人も皆すぐにやら
れちゃうでしょ。

それだつたら、ゲームにならない」

「——ん？ でも待てよ」

一つ疑問が浮かぶ。

「お前の考えだと、俺達が最初、技が使えた理由が分からねえぞ」

「それもたぶん推測だけど、『世界観』の設定を知るか、触れるかすると同時に、設定が変更されてコマンドが無効になるんだと思う。じゃないと、突然使えなくなったらどうしようもないから」

御津見と別れて自室に戻った俺は、御津見に言われたことを整理しながら、宿題を片付け、明日の準備をした。

その後、御津見^{みつみ}の夕飯を届けに行ったり、清毘達に誘われて風呂に入ったりして、寝た。

九章 山下な日々 / 五話 一日終了（後書き）

ぐだぐだになりそうだったので、強制的に終わらせました。

次章は過去編になります。

現状報告？ & 次章予告（前書き）

なぜなに？

Q 三木はまだコマンドで技が使えるのですか？

A いいえ、もう使えません。

↳ 「生活区」で教えてもらったようだよ。

現状報告？ & 次章予告

現時点での各キャラの状態

山下 やました
宏治 こうじ

レベル 4 4

世界観 「魔法先生ネギま！」

得意技 「魔法の射手」 サギタ マギカ による攻撃

「魔法障壁」 マテリアルシールド による防御

「瞬動術」 による移動

備考 反政府組織「インフレックス」所属

近藤 こんどう
美紀 みき

レベル 4 2

世界観 「C3（シーキューブ）」

得意技 「教会区《奈落》」の噴出による攻撃、防御、移動

御津見 みつみ
みつ

レベル 0

世界観 なし

備考 山下の監視役として派遣されてきた
高校二年生

清きよ閑わな
聖せい也や

レベル 20

世界観 「おおかみかくし」

得意技 「モンスターボール」の投擲による間合いの調整

神かん崎さき
拳けん

レベル 28

世界観 「黒神」

得意技 「ヘキサ・ウォール方陣障壁」による防御

三木 恭介 みき きょうすけ

レベル 不明

世界観 「アスラクライン」

得意技 「? 鐵」の召還による物理攻撃（鉄の鎧武者の打撃攻撃）

次章予告

話し合いなど最早不要。

全力を持って排除するだけ。

勝利者だけが、正義を語れるのだから。

次章、「復古の乱」。

歴史とは、戦いの奇跡。

現状報告？ & 次章予告（後書き）

これで一区切り、かな？

プロフィール？ 山下浩二

作者にすら名前を忘れられし男

やました
山下 浩二

男

17歳

高校二年生

身長 162

体重 55

容姿 黒髪。スポーツ刈りより少し眺めの髪。偶に跳ねている。
普通の日本人男子。痩せ気味。

本作の主人公。だが、名前は適当。故に、作者ですら名前を忘れる。

苗字で呼ばれることがほとんどで、名前で呼ばれることはあまりない。本人は、名前で呼ばれることを良しとしていない。曰く、名前を呼ばれる仲になった覚えは無いそうだ。

「レベル」は高レベル保持者だが、それは引き籠もり経験が成せる業。何故引き籠もったかは今だ不明。後に明かされる模様。

引き籠もり時代の後遺症で、精神が不安定になることがしばしば。所謂暴走状態に。一応自覚はしている。

両親は健在。従兄弟も鳩子も兄弟もいない、一人っ子。

「ネギま!」との出会いは学校のパソコンの授業中。若さの至りで「エッチ」関係を調べていたところ、学校のパソコンのフィルターに引つかからずにヒットしたのが「ネギま!」だった。

戦闘は基本、適当。高レベルなのでそれで勝てる。わざわざ派手な技を使いたがる傾向もある。

プロフィール？ 近藤美紀

出番のないヒロイン

近藤 美紀 こんどう みき

身長 160

体重 53（但し、「箱型の恐禍」状態では80近くなる）

スリーサイズ 77 - 61 - 78

容姿 黒髪を腰の位置まで長く伸ばしている。

本作のヒロイン。のはず。何故か出番が少ない。苗字は今後重要になったりする。

始めて出てきた女性キャラ。だが、「学園」編入後、山下と別行動を取ることにより、出番が消えた。山下との恋人フラグでも建たせようと思っていたのに、何だか無理そう。

ウエストがどうしても60を切らないのが最近の悩み。貧乳なのも悩み。髪には自信を持っている。否、髪にしか自信が持てない。

「世界観」の選択には意味があるらしいが、今のところ一切不明。

プロフィール？ 御津見みつ

ヒロインを喰う準ヒロイン

御津見 みつみ みつつ

身長 158

体重 52

スリーサイズ 79 - 58 - 79

容姿 茶髪をうなじよりも長く伸ばしている。

ヒロインよりも出番の多い気がする準ヒロイン。体型が似ていたり、性格が似ていたり、色々な意味でヒロインを喰っている。

名前の由来は「いつも見てる」。ストーカーではなく監視役として「いつも見てる」。

当初、監視役として四六時中監視させようと思っていたが、全然監視しておらず、名前だけの役職になっていたので、監視役としては形骸化してしまった。

監視役としては、かなり上から派遣されており、生徒会とは関係無い。

成績はトップクラス。運動もかなりできる。
が、友人が少ない。

理由は、「世界観」を否定する「力」、「対世界観力」の力が強すぎるため、学生の「世界観」習得を妨げるという理由で、交友を制限されているから。そのため、「有力者」にしか友人がいない。本人がそのことを気にしているかは不明。

「生活区」の「ジム」に通っている。そのため、肉弾戦を得意とするのか？

十章 復古の乱 / 一話 鹿児島消滅（前書き）

今章は三人称視点になります。

十章 復古の乱 / 一話 鹿児島消滅

——
外が嫌いだった。

他人が嫌いだった。

世界が嫌いだった。

自分が嫌いだった。

全てが嫌いだった。

だから。

「嫌い」を許容できる「身体」を創った。

より抜粋——

——「新世界の御伽噺 改訂版 悪魔」

ジャポン暦2260年。

さすがの「ジャポン」も世界の流れには逆らえず、帝国主義を辞

め、民主主義化した。

だが、それをよしとしない者が軍内部を中心に大量に発生。

各地で反乱が起こるも、幸い大規模な物はなく、何らく鎮圧に成功。

「民主主義国家ジャポン」は安定したものと思われていた。

だが、反乱軍はずっと地下で力を蓄えていた。

そして、「ジャポン」が安定し、油断したところで。

真っ向から敵対すべく、反乱軍が侵略を開始した。

それは、「ジャポン」平定後、20年後のことだった。

きっかけは、台風だった。

赤道付近で発生した台風は、真っ直ぐに「ジャポン」に向かって
いた。

別段気にする必要もなく、「ジャポン」はその日も平和に過ごして
いた。

だが、突如としてそれは崩れ去る。

台風が「キューシュ」（九州のこと）に上陸したその日、桜島を中心とする鹿児島県のほぼ全土が吹っ飛んだ。

「キューシュ」が吹き飛んだ15分後に反乱軍から声明が送られ、その15分後には「ジャポン」から「トーキュー特区」に戦闘要請が下った。

「トーキュー特区」は形だけとは言え、「ジャポン」の一部であり、特区の上層部は「ジャポン」の上層部との関係も深く、互いが互いを飲み込もうとしたため、最早一体化してしまっていた。そのため、非常事態においては「トーキュー特区」が戦闘の指揮を執ることが暗黙のうちに決定していた。

そのため、この異例事態においてマニュアル通りに「ジャポン」は最も安全だと思われる「トーキュー特区」内に作戦司令部を置くことを即座に決定。

「インフレックス」が約1000年振りに表舞台に出ようとしていた。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「状況は？」

作戦指揮官（女・三十路）はオペレーター三人組に確認をとらせた。

「『キューシュ』鹿児島県は、桜島を中心に完全に消滅しています」

オペレーターA（男・ロン毛）の言葉に、

「例の台風は依然、『キューシュ』上空に停滞したままです」

オペレーターB（女・百合）が続け、

「『キューシュ』には次々に反乱軍が終結してますね」

オペレーターC（男・めがね）が締めくくる。

「そう」

指揮官は考える。

敵の最終目標は恐らく「ジャポン」の帝国主義化。

そのための方法は二つ。

国会で承認させるか、実質的に「ジャポン」を支配してしまうか。

敵はわざわざ「キューシュ」に本陣を置き始めている。

ならば、後者の方が高いか。

そのとき、背後の扉が開いて、司令（男・めがね兼ヒゲ）と副指令（男・白髪）が入ってきた。

「第零種戦闘配置」

司令の言葉に、オペレーターAが尋ねる。

「零種ですか？ 一種じゃなく」

「ああ、これがさつき届いた映像だ」

副指令がその問いに答え、メインスクリーンに映像を映し出す。

それは、思念系の「力」を使える「有力者」に例の台風の中を念写させた物だった。

「こ、これは……」

誰もが息を飲む。

そこには伝説とされ、かつて世界を恐怖のどん底に叩き落したと言われる、恐るべき空中要塞都市が浮遊していた。

「——天空の城、『ラピユタ』（*天空の城・ラピユタ）……」

誰かが呟いた。

十章 復古の乱 / 一話 鹿児島消滅（後書き）

これでやっと、ロボとか飛行船とかを用いた大スペクタルな話が書けそうです。

本当は過去編なんてするつもりはなかったけど、話が全然進まないで、思い切ってやっちゃいました。

むらむらしてやった。でも、後悔はしていない。

つか、ラピユタとか無敵でしょ（笑）。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器（前書き）

なぜなに？

Q 「ラピュタ」を包んでいた台風は何なのですか？

A 「龍の巣」です。

「龍の巣」は巨大低気圧の渦だったよね。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器

——世界に不満を持つ少年がいました。

ですが、力のない彼には何もできませんでした。

力のない世界では何もできませんでした。

そんなある日、彼は力を得ました。

人に許されざる、神の力を得ました。

だから彼は。

新世界の神となることを決めました。

より抜粋——

——「新世界の御伽噺 改訂版 裁き」

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「『キューシュ』在住の陸軍、及び空軍は大分基地まで後退。熊本、宮城の両基地は廃棄します」

作戦指揮官（女・三十路）は「ラピユタ」の危険性を考慮して、被害を抑えるべく撤退を指示。

ちょうどその時、オープンチャネルで敵の指揮官と思われる男から通信が入った。

「どうします？」

「出て」

オペレーターB（女・百合）にそう言って、指揮官はモニターを見つめた。

『私は、『ジャポン帝国』作戦指揮官の——』

『御託はいいわ。用件は何？』

『つむ、いいだろう。我々の用件は一つ。降伏してもら——』

『却下ね。じゃあ、そういうことで』

『おいつ、ちよつとは話を聞——』

強引に通信を遮断する指揮官に、オペレーターA（男・ロン毛）

が苦笑いを浮かべる。

「よかってんですか？」

「構わん」

指揮官の代わりに司令（男・めがね兼ヒゲ）が答えた。

「反乱軍と相容れる訳にはいかないからな」

副指令（男・白髪）が補足する。

そんなことをしている間に、オペレーターC（男・めがね）から報告が上がった。

「『ダモクレス』（*コードギアス）機動しました」

その言葉に、司令部に新たな緊張だ走る。

「ダモクレス」は新型核兵器「フレイヤ」（*コードギアス）を搭載する天空要塞であり、第零種戦闘配置時にのみ使用可能な封印指定兵器である。

「ダモクレス」自身は高度な防御力を誇るが、問題はそこではない。

「ダモクレス」が封印指定を受ける理由、それは、搭載されている「フレイヤ」にあった。

確かに、核兵器であるため、使用が忌避されるのは当然と言える。

だが、「フレイヤ」は爆発、熱反応、放射能などは全く発生させない。

なら、なぜ忌避されるのか？

それは、「フレイヤ」の効果範囲にある。

「フレイヤ」はリミッターを解除すれば最大半径100kmを消滅させることが可能なのだ。

一度使用すれば「キューシュ」のほぼ全土を消滅させることができる。

故に、封印指定。

「第零種戦闘配置」は、最悪の場合、「キューシュ」ごと「ラピユタ」を葬るということを意味する。

故に、今まで発令されたことはなかった。

だが、それをさせるほどの脅威なのだ。

「ラピユタ」という存在は。

「『ラピユタ』付近で、巨大な生命反応を確認。何だっ！ この大きさは！」

オペレーターAの報告を聞くと同時に、指揮官は命令を下した。

「宇宙軍に強力を要請。『IS』（*IS インフィニット・ストラトス）を可能な限り応援に回させて。」

『MS』（*機動戦士ガンダムSEED）部隊は第一から第二十部隊まで出動。」

『シコーク』、『チューゴク』の『KMF』（*コードギアス）部隊は全機出動準備。『G-1ベース』（*コードギアス）に積めるだけ積んどきなさい」

「機動兵器ばかりですが……」

「ええ」

オペレーターBの疑問に指揮官は答える。

「映像、撮れました」

そう言つて、オペレーターAが先ほど確認した生命反応の持ち主をメインスクリーンに映し出す。

そこには、生物としては有り得ないほどの巨体を持った人型生命体が映っていた。

優に50mは超えるであろう身体。

その姿を見て、司令部の誰もが啞然とする。

「ラピュタ」に続く伝説の大量破壊兵器。

「巨神兵」
（*風の谷のナウシカ）が「ラピュタ」を送り出した
先陣だった。

十章 復古の乱 / 二話 大量破壊兵器（後書き）

ということで、「ラピュタ」に引き続き、「ナウシカ」でした。

過剰戦力ですね。

十章 復古の乱 / 三話 勇者部隊（前書き）

なぜなぜに？

Q 「巨神兵」はどつやつて操っているのですか？

A とある「有力者」の力です。

く説明になってないけど、ごめんね。ネタバレにもなっちゃうから……

十章 復古の乱 / 三話 勇者部隊

―――を犠牲に十を救う。

それは正義と言えるのか？

零を徹して十を救う。

それは可能と言えるのか？

正義とは。

犠牲が伴うが故に。

正義と為せる業なり。

―――「新世界の御伽噺 改訂版 正義の
鎖」より抜粋―――

鹿児島消滅から一週間。

戦線は混乱していた。

「巨神兵」による攻撃により展開していた航空部隊はほぼ全滅。

ただ幸いなことに、展開していた部隊は全体の数パーセントでしかなかったため、被害は軽傷と言える。

防衛ラインはかろうじて維持してはいるが、このままではホンシユーへの撤退も考えられている。

「IS」、「MS」部隊は反乱軍の展開した機動兵器「ロボット」（*天空の城・ラピュタ）と交戦の後、両軍撤退。その後、「インフレックス」は「ラピュタ」殲滅に向けての準備を、反乱軍は「キューシュ」での地盤作りを行っていた。

反乱軍は「キューシュ」の7割を掌握、その後衛星をジャック、「ジャポン帝国」の復活を宣言した。但し、この放送はすぐに止められたが。

もちろん、「ダモクレス」による「フレイヤ」投下の準備も進められていた。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「『勇者部隊』を出勤させる」

司令（男・めがね兼ヒゲ）がそう命令を下した。

「遂に『勇者部隊』まで出動ですか……」

オペレーターA（ロン毛）が呟く。

「勇者部隊」。

それは「インフレックス」に所属する最強の部隊で、少人数で構成される精鋭部隊である。

隊員全てが高レベルの「有力者」で構成されており、一人一人が一騎当千の力を持っている、まさに勇者を思わせる猛者達の集まり。

故に、「勇者部隊」。

「指令、『勇者部隊』の出動と同時に、『電腦コイル』（*電腦コイル）を作動させようと思うのですが」

作戦指揮官（女・三十路）が指令に提案をする。

「『勇者部隊』の出動と同時に、『IS』、『MS』部隊も出動。物量作戦と思わせながら、『勇者部隊』に『電腦コイル』を作動させるための『力』を展開させます。」

『電腦コイル』作動後は、敵『ロボット』を通して敵のネットワークに侵入。

最初に『巨神兵』とのネットワークを切断、コントロールを失ったところを威力を抑えた『フレイヤ』で破壊。その後、航空部隊を出動させ、上空からの『ラピユタ』への物理的侵入。

その間、侵入した敵ネットワーク内からの『ラピュタ』への侵入も同時に進行させ、敵を無力化します。

『巨神兵』と『ロボット』の制圧終了後、『KMF』部隊を出動、地上基地の奪還と制圧を行います」

指揮官はオペレーターB（女・百合）と共にスクリーンを使いなから作戦を説明した。

「いいだろう。やりたまえ」

十章 復古の乱 / 二話 勇者部隊（後書き）

久しぶりです。

十章 復古の乱 / 四話 決戦前（前書き）

なぜなぜに？

Q 「ダモクレス」投下したら勝てるんだから、この戦い、「インフレックス」には負けはないんじゃないんですか？

A 「ラピユタ」は無事な可能性もありますし、そんなことをすればただでさえ狭い国土が更に狭くなってしまうので投下を懸念、なんてしている間に奇襲でやられたりするかもしれませんよ。

「それは言っちゃ駄目（笑）」 あ、でも対策とか考えとこっかな？

十章 復古の乱 / 四話 決戦前

――世代が変われば時代が変わり。

時代が変われば正義は変わる。

その動乱の世に繰り出す者達を人は。

海賊と呼んだ。

――「新世界の御伽噺 改訂版 海賊伝」
より抜粋――

反乱軍は「ロボット」を鹿児島を中心とする円周上に展開。

その真下では、反乱軍の地上軍による統治が着々と行われていた。

反乱軍の旗艦である「ラピュタ」は奇襲に備え、その周囲全てを球体状に「ロボット」で覆い、その防壁の中で次々に「ロボット」を増設。増えた「ロボット」のほとんどがそのまま前線へと運ばれ、戦力の強化となる。

「巨神兵」は逆Vの形で配置され、航空部隊の牽制を行っていた。最も、「インフレックス」が最初から航空部隊を然程送り込んで

いなかった。ほとんど攻撃はしていないが。

反乱軍であるが故の兵力の少なさを、「ラピュタ」内での「ロボット」建造という形で補い、時期に訪れる戦いの準備を進めていた。

もちろん、それは「インフレックス」も同様。

「IS」部隊は宇宙軍から引き寄せ、「ラピュタ」上空（といっても大気圏外）に待機。「MS」部隊は前線上空にて待機。両軍、いつでも突入できるようにしてある。

高い機動力と防御力を誇る「IS」部隊が「ラピュタ」に直接侵入し、数の多い「MS」部隊が「ロボット」と交戦する。

「KMF」部隊は、その間に地上の民間人及び軍人を確保、避難させ、最後の手段である「ダモクレス」による被害縮小のために動く。市街戦を前提に作られた「KMF」では残念ながら一部の特殊機体を除き飛行が不可能なため、空を飛ぶ「ロボット」相手では歯が立たないからだ。

そして、反乱軍のアキレス腱と言ってもいい超巨大人型生命兵器「巨神兵」については、「勇者部隊」の本陣が対応に当たる。して、「勇者部隊」の別働隊には、「IS」部隊と共に「ラピュタ」に侵入し、反乱軍と直接戦ってもらう。

仮に「ラピュタ」を攻略したとしても、一個人が戦略的価値を持つこの世界では、本人を直接取り押さえなければ意味がないのだ。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「まるで世界の終わりっすね」

オペレーターA（ロン毛）がサブスクリーンに映る光景を目にしながら言った（メインスクリーンには互いの位置情報が表示されている）。

「事実、世界の終わりよ」

作戦指揮官（女・三十路）が親指の爪を噛みながらぼやく。

「全世界で最も戦力と技術を保有する『ジャポン』がこのまま内戦、なんてことになったら、各国は我先に平和の免罪符を掲げて軍を覇権してくるわ。世界のパワーバランスは崩れ、人々は互いによりよ
ー」

「なーにうじうじ陰気臭い事言ってるのよ！ ようは勝てばいいんでしょ、勝てば」

突然通信が入り、作戦指揮官の呟きは途中で遮られた。

画面に映し出されたまだあどけなさが残る勝気な少女は、「勇者部隊」の一人、赤色が好きで全身真っ赤なコスチュームの、通称、「赤き少女」だった（そのままやないかい！）。

「勇者部隊」の隊員にはそれぞれ二つ名がついている（隊員それぞれが自身の二つ名命名権を持っていて、自分で付ける人もいれば、

二つ名を募集する人もいる。ちなみにこの少女の場合は自身命名、勇者に二つ名がつくことはよくあることだから、らしい。

「オーケー。そこまで言うんなら、期待してるわよ」

十章 復古の乱 / 四話 決戦前（後書き）

次回から戦闘に入ります。たぶん……

十章 復古の乱 / 五話 出陣（前書き）

なぜなに？

Q 「MS」は何ですか？

A 「ジン」や「ザク」です。

「やっぱ「ガンダム」出したいな。

十章 復古の乱 / 五話 出陣

――人は、非凡を嫌う。

人は、人外を恐れる。

人は、超越者を排除する。

ならば、非凡なる人外の超越者が採る道は二つ。

自らの存在を捨て人となるか、彼ら自身を同類にしてしまうか。

――「新世界の御伽噺 改訂版 人とヒト」より抜粋――

「勇者部隊」は少数精鋭であるため、その人数は他の部隊に比べて極めて少ない。

「有力者」である、という条件で当てはめるなら、該当する軍人は他にもいる。だが、戦力として使おうとすれば、最低でも「レベル」は50を越えていなくてはいけない。それ以下なら、現存兵器で対応ができてしまうからだ。

故に、ここ「勇者部隊」に在籍する「有力者」達はまさに「有力者」のトップ、勇者並の力を持つ、個人レベルでの戦略兵器、否、決戦兵器なのである。

そんな「人間兵器」なる猛者達は、現在「勇者部隊」に12人在籍している。

実はこの12という数字、遡るとそれなりの意味がある。

この部隊、「勇者部隊」という名は「ジャポン」が民主主義国家になった時に付けられたもので、「ジャポン帝国」時代、彼らは「ナイトオブラウンズ」と呼ばれ、ジャポン帝国皇帝の直属の騎士だった。この当時、「ラウンズ」の数は12人と決まっており、その伝統が今の「勇者部隊」にも残っているというわけだ。まあ、そう簡単に新しい隊員が見つからない、というのもあるのだが。

そんな「勇者部隊」の中で最も年齢の低い隊員が、「赤き少女」である。

「世界観」というものがある。

この世界とは違う法則によって成り立つ異次元の世界。

その世界を己の中に取り込む時、その概念となるのが「世界観」である。

何故「世界観」なるものが存在するのか、詳しいことは分かっていない。

現在判明しているのは、「世界観」の習得は外部からの影響によるもの、つまりは異次元からの干渉によるものだということ。

だがその干渉は、何も人だけではない。

時には自然に、時には社会に、それは影響を及ぼす。

そして、「世界観」の影響を受けた産物が生み出される。

通常、「世界観」と縁の物は、「普通の人」でも仕様することができる。

だが、その影響が強すぎる物については、その物が受けた「世界観」と縁のある「世界観」の保持者である「有力者」でないと使用できない。

彼女、「赤き少女」が若干十代にして「勇者部隊」に名を連ねるのはその為である。

「汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン」（＊新世紀エヴァンゲリオン）。

それが彼女の乗る、彼女だけが使用できる、彼女の存在意義である。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「各部隊、配置に着きました」

オペレーターA（ロン毛）の報告に、作戦指揮官（女・三十路）は組んでいた腕を解く。

「これより、作戦行動を開始します！」

彼女の合図と共に、モニターには各部隊の状況が各所から報告される。

「『IS』部隊、大気圏より突入を開始。進路上に無数の敵『ロボット』を確認。各機迎撃行動に入ります」

「『MS』部隊、敵『ロボット』による防衛ラインに到着。各部隊は作戦通り鶴翼陣形を中心に、その周囲に方円陣形を形成。第一次突破部隊が防衛ラインと衝突します。」

「『KMF』部隊、『キューシュ』への上陸を開始。第一次部隊に続き、第二次、第三次部隊も出撃します」

「『勇者部隊』、出撃を確認。『MS』部隊と同時に敵『ロボット』防衛ラインに到着」

「敵『巨神兵』体内に超高密度エネルギーの収束を確認。来ます！」

「各部隊に通達。『カウンター』を準備せよ」

十章 復古の乱 / 五話 出陣（後書き）

うーん。

十章 復古の乱 / 六話 陽子収束砲（前書き）

なぜなぜに？

Q 「I S」は他の国にも配備されているのですか？

A はい。配備されています。「世界観」縁の兵器は「ジャポン」以外にも存在します。

→ 外国との戦いとか描けるのは一体いつになることやら

十章 復古の乱 / 六話 陽子収束砲

――時は来た。

参加する飲食者は複数人。

彼らオーナーは二つの種類に分かれたアキカンを使役し。

たった一つの生存権を廻って殺しあう。

それが。

缶取戦争。

――「新世界の御伽噺 改訂版 缶」よ

り抜粋――

「『カウンター』を準備せよ」。

その命令と共に、防衛ラインの「インフレックス」達は全員マントを取り出した。

それは闘牛士の使うマントの如く、真っ赤に染まっている。

そのマントに迫るのは、「巨神兵」最強にして最悪のビーム攻撃「プロトンビーム」（*風の谷のナウシカ）。陽子を収束して飛ばすそれは、一撃で国を壊滅させるほどの威力を誇る。たった七日間で世界を滅ぼした伝説の兵器。

直撃すれば、「インフレックス」は深刻な損害を受ける。

だが、それは直撃すればの話。

「プロトンビーム」は「インフレックス」直撃寸前で四方に分散し、弾け散った。

同時に、大量のマントが燃え尽きる。

「ひらりマント」（*ドラえもん）。それは、敵の攻撃を跳ね返すことのできる高性能なマント。だが、元々その大きさは個人用であるため、今回のような使い方をすれば一回で使用できなくなる。

それに、こうして一度に大量に使ってしまったため、同じ手はもう使えない。

そして、いくら「巨神兵」の「プロトンビーム」がそのエネルギー充填に時間がかかるとはいえ、まだ「巨神兵」自体は二体残っているわけだし、先ほど攻撃してきた「巨神兵」もすぐにエネルギーを充填するだろう。

だが、この一瞬、確かに反乱軍には隙が生じた。

そこを、「勇者部隊」が逃す訳もなく。

「世界観」の干渉が始まった。

【トーキュー特区・インフレックス内・作戦司令部】

「やりましたね」

「巨神兵」の「プルトンビーム」を「ひらりマント」で無効化した映像を見て、オペレーターC（男・眼鏡）が呟いた。

「そうね……」

それに対して作戦指揮官（女・三十路）の反応は薄い。

確かに作戦通りに敵の手札を一つ無効化できた。

だが、いくらなんでも呆気なさ過ぎる。

いくら常識を覆す「世界観」縁の代物による成功だとしても。

故に、彼女は不安を拭い切れなかった。

だが、そんなことを気にしても始まらない。

そもそもこの作戦を立案したのは自分だし、現にそれは今上手く
いっているのだ。

ここで自分が弱きになつては全体の士気にも関わる。

故に、そのまま作戦を続ける。

「『勇者部隊』はそのまま『世界観』を展開。『電腦コイル』に備えて。

『MS』部隊は『巨神兵』の『プルトンビーム』に注意しつつ『ロボット』と交戦。『プルンビーム』の方は今のでタイムラグは分かったからそれで対処して。

『IS』部隊はどうなってるの?」

「先頭集団は『ロボット』の追撃を振りきり、大気圏を突破。現在、『ラピユタ』上空に到達したようですが、大量の『ロボット』の壁に苦戦しているようです」

「大気圏突破時に部隊の半分を置いていかれたのは痛いわね」

「はい。ですが、残された『IS』部隊の被害は大したないようで、すぐに追いつけるとのことです」

「そう。なら急がせなさい」

十章 復古の乱 / 六話 陽子収束砲（後書き）

遅くなりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6064j/>

パーソナル・リアリティ/自分だけの現実

2011年11月18日05時28分発行